
気がつけば異世界

ブドウの村

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気がつけば異世界

【Nコード】

N0934Q

【作者名】

ブドウの村

【あらすじ】

この物語は駄文、ご都合主義、テンプレ、主人公最強、不定期更新、キャラ崩壊要素を含みます。
そういったものが嫌いな方は読まないほうがいいです。
吐き気を催します。

白と穴（前書き）

二次は始めてです。

白と穴

目が覚めると真っ白い空間にいた。
ただ白く、何もなかった。

そして今俺は立っているのか、座っているのか、浮かんでいるのか
解らなかった。

そんな状態のなか、徐々に意識が覚醒してきた。

「・・・何これ？」

状況がさっぱり理解出来ない。

昨日はテストの結果に絶望して学校から帰ってすぐに眠ったはずだが・・・

ん？昨日？

昨日であつて・・・よな？

なんか時間の感覚もおかしくなってきたな。

（目が覚めたか、青年よ）

「!？」

あれ？

誰もいないのに声が聞こえるぞ？

（青年よ、落ち着いて聞いてほしい。私は神だ）

モンスター○エンジン？

（今は新しい世界を創ったのだが、その世界の核になってほしい）

「いや、あの・・・意味がさっぱりわからないんですけど・・・」

いきなり世界だの核だの言われても理解出来るはずがない。

（とにかく・・・あああ！？！！死んだ（泣）妖夢が倒せねー）

・・・もしかしてこの神（仮）ゲームやってる？
しかも東方？

「ゲームやってます？てか東方ですよね？」

（そうだよ悪いか！！）

逆ギレ！？

話し方も変わってるし。

（そういつことだからさっさと行ってこい）

なんか適当になってるし？！

「そういうことってどういうことだよ？そして何故俺？」

（サイコロで出たから）

？神がサイコロ投げたー！！

（とりあえず異世界行つて適当に暮らせてことだ）

「いやいや、やだよ！いきなりなんだかよくわからないまま違う世界行くのー！」

（お前に拒否権などない！！）

「あんた本当に神か？」

（そんな嫌がるお前には能力をやるう。『限界をなくす程度の能力』をな。これで折れてくれるか？）

「いや、折れるも何も状況を説明しろー！」

いまだに状況がわからない俺。

（えーい、うるさい！！俺は早く八雲一家全員に会うために妖々夢をやりたいんだよ！！！！）

「じゃあゲームしながら世界なんて創るなよ!!!!」

俺が迷惑だ。

(言語道断!!あ、間違えた。問答無用!!)

奴がそういつと、俺の真下に穴が出来た。

「神が四文字熟語間違えてるんじゃないやねえよおおお!!!!!!!!」

俺はなすすべなく落ちていった。

森と恐竜

「あああああああああ！！！！！！！！！」

どうも、現在俺落下中です。とある神のせいだ。

あの穴はどうかの空に通じていたらしく、今は白い空間ではなくな
った。

まあそのほうが怖いけどね！

・・・この高さなら死ぬな。

ガサガサ

ベキバキ

ドンッ

「オウツ！？」

・・・木のおかげで助かりました。
実はそんな高くなかったんだな。

でも背中痛くて動けません。死ぬほど痛いです。

まあ死なずにすんだし儲けだな。

ポジティブに考えていかないとな、うん。

とりあえず寝転がったまま現状確認しよう。

周りにあるのは木。

ここ森だな。でも図鑑で見たことない種類が多数。

地面はわりと柔らかいな。おかげで助かった。

あとなんか空気が澄んでる。異常なくらいに。

・・・やっぱり違う世界なんだよな、ここは。
あんなドッキリあるとは思えないし。

だとしたら東方に類似した世界の確率が高い。
あの神、妖々夢やってたし、俺にくれた『限界をなくす程度の能力』
だったか？
あれももろ東方っぽいし。

だとしたらここは幻想郷なんだろうか？

「・・・まだ決めつけるのは早いな」

声を出して自ら確認してみる。

次は持ち物チェックだな。

痛む身体を無理にお越ししながらポケットの中などを確認する。

あ、ちなみに今の俺はジーパンにTシャツ一枚。普段部屋でくつろぐのと変わらない格好だ。

・・・そういえばこの格好でも寒くないな。

まあそんな話しは置いて俺の今の持ち物はナイフ一本。

え、なんでこんなもん持つてるかって？

俺が聞きたいよ、そんなもん。

でも多分神がいれたんだろうな。

・・・よく見ると持つ部分に神ってほってあるな。
見えてムカつく。

とりあえずここが何処だか確認しないとな。

てか人いるかな？

サバイバルはやだよ？

もしそうなら三日で死ぬる。俺には自信がある。

そう思い後ろを向くと恐竜がいた。

あれだよ？太古の昔に絶滅したやつだよ？

種類はわからないが明らかに『肉食です！！』って顔してる。俺見てよだれたらしてるし。

なんかこういつときは動いちゃ駄目って映画で・・・

ガアアアア！！

無理です♪

気がつけば足が勝手に動き出していた。

「イヤアアアアア！！！」

絶叫しながら逃げ出す俺。

後ろから奴が追って来るが・・・でかさによらず早い！？

チキショー！

あの巨体の何処にこんな素早さが！？

そう思いながら走っていると、前方に別の恐竜が現れた。

あ、今度は草食っぽい。

『自分草食っす』って顔してるもん。

とりあえず直進するとぶつかるので右に曲がる。

すると肉食っぽいやつは俺ではなく草食っぽいやつに向かって行っ

た。

まああっちのほうでカイクネ。

そして俺はそのすきに逃げた。

これが弱肉強食か・・・

とりあえずあの後は肉食っぽいやつらに出会うことはなかった。
そして日が暮れた。

1 日中ほつき歩いてわかったこと。

1 ・まずここは地球みたいな場所

2 ・恐竜がいるから多分ジュラ紀みたいな感じ

3 ・だから人もいないっぽい。猿はいた

4 ・能力が何となくわかった

2と3がヤバイよ。

めっちゃヤバイよ。

でも能力について少しわかったのはよかった。
歩き回って気付いたんだが疲れにくくなっていた。
多分体力の『限界』と関わりがあるのだろう。

今思うと、最初肉食つばいやつに追われているときも運動がダメな俺が追いつけなかったのは速さの『限界』がなくなっていたのかもしれない。

つまるところ身体能力などの『限界値』をなくす能力だと俺は思った。

つてことは鍛えたら確実に実になるってことだな。
そしてどんなものでも不可能ではないということだとも思う。

なんせそいつたものに『限界』がないのだから。

よし、じゃあ明日から頑張ろう!!!!

今夜何処で寝よう・
・
・

修業と名前（前書き）

原作キャラ次にはだせるかな

修業と名前

俺がこの世界に落とされてから100年が経った・・・

急すぎるしなんで100年も生きてるのかだつて？

それは順を追って説明しよう。

まず100年も生きたのは俺の『限界をなくす程度 of 能力』が原因だ。

この能力のせいで寿命に『限界』がないらしい。

でも殺されれば死ぬよ？

蓬莱人みたいな芸当はできない。

それからこの能力について詳しくわかってきた。

まずこの能力は俺にしか効果が無い。

その効果は俺の筋力やら体力の限界値をなくすものだがこれがまた凄い。

ほんの少しでも鍛えると、確実に効果がある。

最初は腕立てが50回しか出来なかったのが次の日には51回出来るようになっていたのだ。そんなのが100年も続けばぜがひでも強くなる。

まあ1番上がった能力は体力と速力たげどね。
つまるところ逃げ足！

ともかく何か力を使うとその力の最大値が上がるというものだ。
怪我をしても生命力と回復力が上がるくらいだ。

最初の10年は本当に何度も死にかけたし、前までの生活を思い出したりして何度も泣いた。

でもこの能力のおかげでなんとか生き残れたし、住めば都とはよく言ったものでもうだいぶ馴れた。

とりあえず今の目標は人間が生まれるまでは生きる！
・・・こんな目標持つとか俺人間ぼくなくなってきたな。

と、いうわけ今日から霊力的なものを鍛えていきたいと思います。
ふと昨日気がついたが、もし此処が東方の世界だと仮定すると霊力とかが有るはずだ。

原作キャラに会えるかな・・・

よし！！

じゃあ頑張るぞ！！

10年後

く、霊力め・・・

まず認識出来るようにこんな時間がかかるとは・・・

まあとりあえず確認出来たから、次は弾幕出したり飛んだり出来るようにするぞ！！

5年後

やっと弾幕撃てるようになったぞ！

まだデコピンくらいしか威力がないけど・・・

ちなみに空も飛べるようになった。

10センチただけけど。

30年後

やっと弾幕の威力が弾幕らしくなってきた。
空もいい感じで飛べるようになったし。

ふははは！！

自由自在だ！！

10秒後

ヤベ、翼竜・・・あああああ！！！！！！

100年後

とりあえず霊力はほぼ自分のものにできた。
飛行も翼竜に負けないようになった。

そして俺はここで大変な問題に気がついた。

俺、自分の名前忘れてる！！！！

こんな他に人がいない状況で名前なんて使わないけどやっぱりないと気分が悪い。

一応東方のこととか修業の時のイメージのためにちよくちよく思い出してたから覚えているんだけどな。

ちなみに他には砲撃をぶちかまして O H N A S H I する白い魔王がでるアニメの魔法を参考にしたり、ゴム人間が海賊王を目指す漫画の体技を真似た。それは置いといてまず名前だな。

どうするかな・・・

どうせならカッコイイのがいいな。

3年後

うゝん・・・どうするかな？

ハッ！

気付いたら数年たってたな。

どんだけ悩んでるんだよ、俺。

でもこの能力のせいで時間の感覚狂いまくりだな。

1年後

とりあえず名前決まりました。

神道しんどう
仁じん

これからこれでいきます。

理由は何となく。

4年考えた結果がこれだ。

フツ、笑うなら笑えよ。

それから・・・軽く数億年

やったぜ！！！！

人が生まれたぜ！！！！

長かった・・・本当に長かった・・・

まだ石器時代な感じだけど、生まれたことに凄く感激だ。

でも何故かまだ恐竜いるんだよな。絶滅してないんだよな。

そうそう、それから妖怪も生まれたよ。

妖怪って人の恐怖心がもとになってるから人がいなきゃ生まれないんだね。

まだ恐竜をモチーフにしたやつが多いけど。

そのうち隙間とかフラワーマスターとか生まれるんだろうか？

あれ？

もしかして俺ゆかりんより年上？

マジカヨ・・・ババアをこすとか・・・

てかゆかりんが生まれてないような時から生きてるんだよな、俺。

うわ、ジジイだ俺・・・

知りたくなかった新事実を知ってしまった俺は人間達が作った村に向かう。

さすがにまだ喋りかけたりはしてない。

何故か会話は通じそうだが格好が違うので怪しまれるかもしれないしな。

ちなみにまだ人間達は生まれたままの格好で一生を過ごす。

それで俺は手作りとはいえ、ちゃんと服を着ている。

裸で話し掛ければいいんだか・・・それは、ねえ・・・

そんなこと考えながら俺は森を眼下に空を飛んでいる。

人の営みを空から眺めるのはなかなかおもしろい。

神になったばい感じで。

ずっと暇してた俺にはいい暇つぶしになる。

おっと、もうそろそろ着くな。

そう思いスピードを緩める。

上空から見・・・あ、あれ？

な、なんか弥生時代くらいまで進んでるよ？

米・・・いや、小麦か？

なんかよくわからないがとにかく時間が跳んでる。

どういうこと？

いくらなんでも来てない3日の内で・・・

仁と天才（前書き）

テンプレまるだしですがあの人登場です。

仁と天才

とりあえず人間の急な進歩の理由を調べるため、地面に降り森の中を歩いて向かう。

さっきみた感じだと服も、もう有るようなので怪しまれることはないだろう。

ちょうど正午くらいなので木々の間から木漏れ日がもれている。
・・・今、春くらいかな。

ん？

なんか違和感が・・・
なんだろう？

違和感の正体がわからないまま、俺は歩を進めた。

村に着いた。
念のため、自分の気配を周りに溶け込ませ、他人には見えないようにする。

これには何度助けられたか・・・

ひとまず歩き回って他人の会話から情報を集めることにする。

とりあえずわかったことをまとめると、時間の流れを操る能力者がいて、一日の流れを引き延ばしているらしい。

さつき感じた違和感はこの能力の発動領域に入ったからだろう。

それから、天才的な子が生まれ、次々と発明しているそうだ。

どうやらその子の存在がこの進歩を引き起こしたらしい。

スゲーな。

どんだけ天才なんだよ。

時間を引き延ばす能力者は一日を約400倍、つまり1年に引き延ばしている。

俺が村の様子を最後にみたのは3日前、つまり3年でここまですぐ変えたということになる。

そんな天才は一目見ておきたいというわけで、その天才の家に行ってみることにしました。それで着いたがこれまたびっくり。

なんと周りの家が竪穴式住居みたいな感じなのにこの家は明らかに江戸時代みたいな造りだ。

周りは塀で囲まれ屋根には瓦みだいがある。

それで離れと母屋があり中庭らしきところには池まである。

・・・見えないからって人の家散策するのは駄目だよね？

ともかくお目当ての天才はこの家の離れにいるようだ。
離れから気配を感じる。

とりあえず襖らしきものをそつと開け・・・

ガラッ

・・・られた？この少女に？

てか凄い格好だなこの子。体の真ん中で色が左右に赤と青に分けられた服を着ている。

髪は白・・・いや銀髪か？

それをみつあみにして、背はそれほど高くないが地面に着くぐらい伸ばしている。

見た目的には12、3歳か？

ともかくそういった少女がじつとこちらを見ている。
俺見えてないよね？

「貴方、何者？ここまで完璧に気配を消せるなんて凄いわ・・・」

はい。見えてますね。

「お前こそ凄い。初見でこれを見破るなんてな」

めっちゃショックです。

ここまで気配を消すのに、300年くらいかったのに・・・

「とりあえず、それを止めて喋ってもらえるかしら？見えないものに喋っているのは、はたから見えて気持ちわるいわ」

この子一体何歳ですか？

絶対見た目ど通りの歳じゃないよ。

「・・・お前一体歳いくつだ？見た目どつりではないだろ？」

気配を表し、今疑問に思ったことを聞く。

「あら？貴方は名前も知らない女性の歳を聞くの？」

ニヤニヤしながら言ってきやがった。

コノヤロウ、絶対Sだ。

「じゃあ名前を・・・俺は神道仁だ。お前の名は？」

どうせここで名前を聞いても、人に名前を尋ねるときはまず自分から、みたいなことを言うだろうから先に言っただけだ。

「・・・からかいが無いわね」

「いいから名前を言え」

明らかに不満そうな口調でいう。

どんだけからかえば気が済むんだよ・・・

てか久々の人との会話がこれって・・・

「はあ・・・わかったわよ。私は八意永琳。歳は最低でも貴方ほどではないわ」

何故お前がため息をつく・・・

って永琳？

何だとおおおおおおおお！！！！↑心の中の絶叫。

これが永琳？

ちっさ！！

なんかもうちょい背が高かった気が・・・

あ、それは幻想郷が出来てからの話しか。

でも確かにこんな変な服着てた気がするな。

それに永琳なら3年でここまで変えることも可能だろう。月の頭脳って言われてたくらいだし。

身長のせいでわからなかったな。「何で急に黙ったのかわからないけど、貴方の質問に答えたんだから次は私の質問に答えてほしいものね。それで貴方は何者なの？」

「普通の人間」

「嘘ね」

即答！？

「この村は人間達の中でそんな芸当出来る人なんていないわ。そして妖怪でもこんなことは不可能。よって貴方は特殊な人間か妖怪でもない化け物ね」

「・・・・・・・・」

泣いていいですか？

何が悲しくて久しぶりの人の会話で人外認定受けなきゃいけないんだよ……

「……普通では無いにしてもいちお人間だ」

「そう、いちお、ね。それで貴方は一体何をしに此处にきたのかしら？」

いちおを強調してきやがった、コンチクショー！！

それで何と答えるか……

『一目お前に会いたかった』って正直に言ったらキモいよな。
じゃあオブラートに包んで

「お前に興味があつた？」

「興味？」

あ、なんかくいついた。

「ああ。人間達をたった3年で変えた者がどんな者か気になった」

「……やっぱり貴方はこの村の者じゃないのね」

ヤベ、墓穴掘つた。

「それで貴方が興味を持った私に実際に会ってどうだったかしら？」

どう……ねえ？

まあ永琳て事には驚いたが……

「予測通り、あまり人間ぽく感じなかったよ」

「人間ぽくない？」

「ああ、お前は完璧すぎる。欠点があるのが人間だが、お前には欠点が見られないからな」

「今の一瞬で分かるの？」

「問答だけで十分にわかる」

あ、あれ？

なんか説教臭いぞ？

「・・・貴方一体何年生きてるの？」

「さあ？数なんて数えていない」

「・・・」

黙りこんじゃったな。

怒らせたか？

だとしたら三十六計逃げるにしかず！！

「俺はここらへんでおいとましよう」

そう言つて俺は後ろを向き、飛ぼつとする。

「待つて」

呼び止められた。

しかも腕捕まれた。

「貴方住む家とかないんだったら私の家に住まない？」

ハアア！？！！

流れが全然掴めないんですけど。
唐突すぎるでしょ。

「何故だ？」

当たり前理由が気になる。

「私は今まで天才やら神童やらいろいろ言われてきたけど、貴方みたいな事を言われたのは初めて」

でしょうね。

「だから私は貴方に興味がある。私の知らない事を知っている貴方に」

・・・なるほどね。

俺にとってもそれは有り難い話だったりするが・・・

「駄目？」

上目使いするなよ。

「……………」

（ジーーーーー）

「……………」

（ジーーーーー）

「……………」

（ウルウル……………）↑涙目

「はああ。わかったからそんな目で見るな……………」

「あら、本当？」

嘘泣き！？

何処で覚えたんだそんなテク……………」

そんなこんなで俺は永琳の家にやつかいになった。

仁と天才（後書き）

永琳は絶対にDSだと思う。

弾幕と星（前書き）

なんてこった。

間違えて消しちゃった。

短いですがどうぞ

弾幕と星

永琳の所に世話になって一週間くらいの時間がたった。

でも初めてあった時からまだ日が落ちていない。
時間が早められているからだ。

でも腹も減らず眠くもならない。

どうやら体内時計は外と変わらないらしい。

めっちゃ便利な能力だよな。

俺も欲しいな。

そういえば永琳は事あるごとに新しい発明の設計図を俺にみせてくる。

中には自動車やら飛行機みたいな乗り物などもあって驚いた。

こう言った話しを通じる相手ができてうれしい、と言っていた。

・・・まあ通じる相手なんているわけないしな。

そんでもって今何をしているのかと言うと、

「ゼエ、ゼエ・・・」

「なんだ、もうへばったのか」

「貴方の体力が異常なのよ・・・」

「そうか？」

「そうよ・・・」

現在永琳の修業中です。

永琳にはまだ霊力の概念がなかったそうなので、今教えている。

教えたら、即行で空飛べるようになるし、弹幕もばんばん撃てるようになっていました。

おかしいな？

俺ここまで出来るようになるのにどれくらい時間掛かったけ？

さっき隅の方で泣きました。

それは置いといて、今その弹幕使って、弹幕ごっこもどきをやっている。

それでさっきから永琳をピチュリまくっている。
いくらなんでも覚えたてではきつかったらしい。

・・・べ、別に八つ当たりじゃないよ？
ホントダヨ？

「じゃあ休むか」

さすがに見てていたたまれなくなってきたので、休憩の提案をする。

「そうね・・・。それに庭も直さなきゃいけないし・・・」

「あ」

庭で結界とか何にも対策せずに、弾幕ごっこもどきやってたから庭が酷い惨状になっている。

ところどころ穴ぼこが出来ているし、池も水がなくなり、植木もなぎたおされている。

まるで台風が通った後みたいだ。

「じゃあ補修をお願いするわ」

「俺一人でこれを直すのか？」

これを一人で直そうとするととてもなく大変だ。

「あら？貴方は疲労困憊な少女に手伝わせるの？」

「俺だって疲れてる」

このペースなら後100年くらい続けられるけど。

「だいち、ここまで破壊したのは貴方じゃない」

・・・そう言われると弱い。

たしかに壊したのがほとんど俺だが、手伝って優しさがあってもいいんじゃないか？

「酒だすわよ」

「よしきた」

この前永琳に酒を飲ましてもらってからハマった。

前の世界では未成年だったので飲んだ事なかったが、あれはうまい。本気でうまい。

とりあえず酒目指して頑張るぞ〜
♪

あれ？

俺いいように使われてる？

やっと夜になった。

夜になるまでには数ヶ月かった。

ここまでの間でも永琳はガンガン発明して、時代は平成くらいになった。
った。

発明のペースがなんかものすごく上がっている。

ちなみに永琳の家は変わっていない。
でも家のギミックは平成時代でも驚きのものになった。

そうそう、それからこの前鏡を見ると今まで気にしたことがなかったが俺の瞳の色が紫色になっていることに気がついた。

でも黒色にすることも出来たのでたいしたことはない。

そして俺は今屋根の上、一人で酒を飲んでいる。

なんかたまにこうやってぼーっとしたくなる。

「星でも見てるの？」

永琳がやってきた。

「別に何もしてない。ただぼうけているだけだ」

「そう」そう言って永琳は横に座った。

どちらも何も喋らなかった。

「・・・」

「・・・」

ただ沈黙が支配していた。

「ねえ」

「ん？」

沈黙を破ったのは永琳だった。

「私ね、今思うと寂しかったんだって思うの」

「誰が」

「私が」

その日の数ヶ月ぶりの星空はやけに綺麗に見えた。

数ヶ月前、永琳に出会う前には毎日見ていたはずだったが、とても綺麗だった。

「貴方に出会う前は、私は周りからかなり浮いてて、みんな近寄りがたい感じだったわ」

「まあ、そんな服着てればな」

「そういう問題じゃないわ。ともかく、いろいろと不安だったわ」

「・・・」

俺は何も喋らなかった。

「なんだか不安で恐ろしかったわ」

「でも貴方に会ってそんなものはまとめて吹き飛んじったわ」

永琳は笑いながら言う。

「悠久を生きる貴方にとって、私やそんなものはちっぽけなものよね」

「そうか・・・」

俺は静かに言った。

「私は確実に貴方より先に逝ってしまうのよね……………」

俺は永琳のその言葉を聞こえないふりをした。

戦闘と恐怖（前書き）

オリキャラが出ます。

後半自分で何がしたいのかよくわかりません。

ともかく超駄文です。

戦闘と恐怖

ある日起きると外が騒がしかった。
よくわからないがやけにあわてふためいているようだ。

とりあえず布団から出て、襖を開け、縁側に出る。
そこから見えるのはいつも通りの庭と塀だが、その向こう側が騒がしい。

「あ、仁起きたの？」

永琳がやってきた。
最初に会った時より背が伸びたし、顔からかわいらしさが少しぬけ、美しさが出てきた。
年で16歳くらいだろうか？

「それでこれは何の騒ぎなんだよ。この数百年で初めてだな」

こんな騒がしいのは本当に初めてだ。
いつもはみんな大人し過ぎるくらいなのに。

「実はね……」

簡単にまとめると、時間の流れを操る能力を持ったやつが死んだらしく、時間が普通になったそうだ。

だがそれより問題なのは、そいつが死んだため、そいつが能力で張っていた結界が解けたことだ。

今までこの都市は結界で守られていたため妖怪などの外敵が入って来なかったが、これでは入られてしまう。

しかも今まで守られていたために、ほとんどのやつが戦いなんて出来ない。

「それで今あんなに恐怖で騒いでいると」

「そういうことね」

まったく、面倒なことになったな。
それにしても・・・

「一体どうするだ？今のままじゃ無駄に怪我人が増えるぞ？」

こんな状態で妖怪なんかきたら確実にパニックになる。

「計画を早めるわ」

だが永琳はもう策を考えていた。

ちなみに計画とは近々氷河期に入ると予測されたのでその前に月に移動しようというものだった。

氷河期を堪えるより、避けたほうが効率的だそうだ。

「とりあえず明日までに3便まで出すわ」

もう既にロケットは用意されているし、月に住む準備もされているのでちょうどよかったかもしれない。

翌日

「なんかこんなに早く夜が明けるなんて不思議なものね」

「これが普通だ」

今、永琳がロケットに乗ろうとしている。

朝日で彼女の顔が照らされている。

「……本当に最後のロケットに乗るの？」

「ああ。ほかの奴らを守るためには俺が最後まで残ってたほうがいい」

妖怪とともに戦えるのは俺と永琳くらいしかない。

永琳はできるだけ早く月に行き準備する必要があるので、必然的に俺が残るしかない。

「・・・大丈夫よね？」

「心配性だな。俺がそんなやわだと思うか？」

「そうね。じゃあ明日ね」

そう言って彼女は微笑みながらロケットに乗った。

「よかつたんですか？一緒に行かなくて？」

警備隊の隊長が声をかけてきた。

こいつもいちお戦えるがあまり強くない。
多分？より弱い。

「いいんだよ。どうせすぐ会える。それより妖怪が近づいて来てる

ぞ」

「えっ？」

「ほら早く防衛線張ってこい。俺があらかた片すが、少しもれるかもしれない」

「は、はい！」

そう言つて隊長は走り去つて行つた。

さて、俺も働きますか。

俺は今都市の門の前にいる。
都市は周りが壁で囲まれていて、出入口はここしかない。したがつて妖怪達も必ずここを通る。

壁を破壊してくるような奴は俺の力に気づき、近寄つては来ないはずだ。

だから俺はここで雑魚の相手をすればいいわけだ。

壁の周りには草原が広がっていて、さらにそれを囲むように森が広がっている。

森が開発されなかった理由はみんなが俺のことを気にしてくれたからだ。

気づかぬ内に結構都市の上の立場にいたし、なんだかんだで好かれていた。

そんなことを考えているうちに森から妖怪の大群が現れた。

そのほとんどは恐竜をモチーフにしたもので、三つの首を持つティラノサウルスっぽいやつや、全身から刺が生えているやつもいる。

それら全てに共通しと言えることはみな理性がなく、獣と同じだということ。

そしてみな腹を空かせているということだ。

目算でも軽く300体はいるだろう。

これに一人で挑むことは普通なら無謀。

そう、普通なら。

痺れを切らしたのか一体が襲ってきた。

体のいろいろなところに口がある、小型の奴だった。

俺はそいつの突進を避け、すれ違い様に神から貰ったナイフで切り裂く。

ただそれは一撃ではなく、何撃もくらわす。

そいつが倒れるとほかの妖怪達も襲い掛かってきた。全て突進で。

まったく学習力がない・・・

お前達の仲間が今どうなっか見ていただろうに。

俺は先程変わらず切り裂いていく。
避けては切り、避けては切り裂いていく。
ただ数が多く、面倒になってきた。

「一気にかたずけるか・・・」

そう呟いて俺は上空に飛び上がる。

どうやら全体飛べないようで、地面で悔しそうに呻いている。
それに構わず俺は地面にナイフを投げる。

それからあのナイフいくら斬っても切れ味は落ちない上、俺の霊力を流しやすいようで、技の媒体にもってこいだった。

・・・さすがは神製。

「アースバインド」

ナイフが地面に刺さると同時に紫色の魔力でできた縄が地面から突き出してきて、妖怪達を次々と縛っていく。

「溢れ出す欲望」

この技はかなりの広範囲を攻撃出来る技だ。

まず、俺を中心に霊力弾が七つはなたれる。

そしてその弾は膨張し、限界まで達すると弾から砲撃がはなたれる。

その数各弾から百発。

つまり全て合わせて七百発。

身動きがとれない妖怪達はなすすべなく、砲撃をくらっていく。

砲撃が止む頃には妖怪達は一体たりとも残ってたいなかった。

「お疲れ様です」

地面に降りてくると、隊長がやって来た。

今隊長は銀色のジャケットみたいな防護服を着ている。

「そつちに何体が行ったか？」

多分あれだけ吹き飛ばしたので平気だろうが念のため、聞いてみる。

「一体たりとも来てません。だいちあんな状態で来れる奴なんていませんよ」

「そうか。それから移住の具合はどうだ？」

ナイフを回収しながら聞く。

「それなら夕方までには全ての便が飛び立つ予定ですが、ただ・・・」

「その時爆発音がした。」

爆発音がした方を見ると、壁の一部から煙りが上がっていた。

「仁さん、もしかして壁が・・・って、あれ？」

隊長がそう言ったときには既に俺は爆発があつた場所に向かつていた。

爆発があつた場所に着くと、一人の少女がいた。

その少女は黒髪で着物みたいな服を着ていて、何より幼かった。小学生の低学年くらいだ。

「あなたはだあれ？」

幼さが喋り方に残っていた。

だが人間でないことはすぐにわかった。雰囲気人間と違う。

「俺は神道仁。人間だ。そういうお前は？」

こいつは強い。

今は永琳程ではないが鍛えれば確実に永琳クラスになる。

「じん？わたしは・・・だれだろう？」

「自分のことなのにわからないのか？」

「うん・・・」

・・・もしかしてこいつは生まれたばかりの妖怪なのかもしれないな。

昨日今日で都市中の人間が恐怖に震えてたから有り得ない話じゃない。

「・・・怖い・・・じぶんが怖い・・・まわりが怖い・・・すべてが怖い・・・」

だとすると、こいつは『恐怖』を司る妖怪だ。

都市はなんだかよくわからない漠然とした恐怖が渦巻いてたからな。

「なくなっちゃえ・・・・・・なくなっちゃえなくなっちゃえなくなっちゃえ！！！！！！」

しかも暴走している。

妖力がとめどなく溢れている。

「怖いものはなくなっちゃえ！！！！！！」

周りの建物が耐え切れず崩れていく。

さて、このまま放っておくのはまずいし、かといつてもし倒してもあいつの中の恐怖がばらまかれてもつとまずいかもしれないしな。

説得してみるか・・・

「なあ」

「・・・・・・・・」

無反応か。

「お前はさっき自分や周りが怖いと言ったな。それはわからないからだ」

「・・・・・・・・」

「どんな生き物でもわからないものは怖い。だからこそ、それを知り恐怖をなくそうとする」

「・・・・・・・・」

「だから知っていないか？お前のことも世界のこと。それでまずお前の名前を決めてお前のことを知っていないか？」

「・・・・・・・・おなまえ？」

よし、くらいついた！！

「それでお前がよければ明^{みん}でどうだ」

「みんな？」

徐々に目に光が灯り始める。

「恐怖掻き消す明かりって意味だ」

「恐怖を掻き消す明かり……」

その目には完全に明かりが灯っていた。

「……私もいろいろなことを知ってみる……！」

「そうしてみる」

もう暴走は止まっていた。

このでの暴走は生まれたばかりの妖怪はよくする。
自身の意義に吞まれるからだ。

だからちよつとしたことですぐにおさまる。

「私は今日から神道明……！」

あれ？

その苗字俺のだぞ？

「仁さん・・・早いですよ・・・」

隊長が息をきらしながらやって来た。

「あれ？その子は？」

隊長が俺の後ろに隠れている明を指差している。

「実はかくしかじか・・・」

とりあえず理由を説明する。

「じゃあ害は無いんですよ？」

隊長が念を押すように聞いてくる。

「それは大丈夫だ。どうやら人の恐怖を食べているようだし、問題ない」

たぶん・・・

「はじめまして、神道明です。あなたは？」

「〇〇〇〇〇〇です」

「ヴィ、ヴィラ？」

「発音しずらかったら隊長でいいぞ」

隊長の本名は発音しずらい。
だから俺は隊長と呼んでいる。

「ちょ、仁さん？」

「わかりました。隊長さん」

「明ちゃんまで!？」

なんかこんな感じで俺らは10分くらい騒いでいた。

氷と別れ

「って、こんな和んでる場合じゃありませんよ!」

おおっ!!

びっくりした。

隊長がきた状態のまま雑談していると隊長がいきなり叫んだ。

「で、どうしたの?」

「実は先程大型の低気圧が発生したらしく・・・」

「ていきあつ?」

「雨を降らす元だ」

さつきから明は疑問に思ったことは直ぐに聞いてくる。
いい傾向だ。

「で、その低気圧がどうしたんだ?」

ただの低気圧だったら多少大型でもロケットの発進に問題はないは

ずだ。

「それが・・・異常なまでの冷気を纏っているらしく・・・」

「どのくらいの冷気だ？」

「測定不能ですが、地表を凍り尽くすには十分の冷気をもっています。しかも直撃です」

・・・まずいな。

そんな来たら確実に全滅する。

「何時くらいに来る？」

「夕方・・・最後のロケットが飛び立つ前に来ます」

「やり過ごすことは？」

「測定用のサーチャーも凍ったのでおそらく無理かと・・・」

「・・・」

本格的にヤバイ。
間に合うか？

「既に出発作業を急がせていますがそれでも間に合うかわかりません」

「とりあえずやるべきことをやるしかないな」

もし、間に合わなかったら最悪・・・
まあ最終手段だな。

あ、明喋らないと思ったたら話しが分からずショートしてた。

夕方が近くなった。
とりあえず当初の予定より早くなったが、例の低気圧も目で見える範囲にやってきた。

・・・おそろく、これでは間に合わないな。

「仁、だいしょうぶなの？」

とりあえず明にはあの雲がやって来たらヤバイと説明した。

「あまり良くない」

「そつか・・・」

「それでな、もしかすると俺は明達と一緒に行けないかもしれない」

「え？」

ほかの人達に明のことを説明し、明も月に行くことになった。
どうやら他人の恐怖を抑えることが出来るようなので、とくに反論もなかった。

みんな、「神道さんがいうなら大丈夫」とも言っていた。
ありがたいことだ。

そんな明は俺の言葉に豆鉄砲をくらったような顔をしている。

今俺らは壁の上に立っているんで、俺は低気圧を指差しながら言う。

「もしものは俺がああ雲を抑える。だから・・・」

「だ、だめだよ！・・・！」

明が声を張り上げる。

「仁がそうするなら私もつたうよ！・・・！」

明は今にも泣きそうだった。

そして雪が降り始めた。

どうやら低気圧の影響が出始めたようだ。

「それこそ駄目だ。明ではああ冷気に耐えられない」

おそらく何も出来ずに凍りついてしまう。

「でも・・・」

「明」

なおくらしいつこうとした明の言葉を遮る。

「俺絶対に死なない。大丈夫だ」

「・・・ホント？」

「ああ。もちろんだ」

まだ涙目で、完全に納得していないが、なんとかわかってくれたようだ。

「わかった・・・」

今度はしゅんとしてしまった。
う、罪悪感が・・・

「とりあえず、月に行ったら八意永琳って人を頼れ」

「えーりん？」

「ああ。よくしてくれるはずだ」

多分な。

「うん！」

お、元気出てきたな。

「とりあえず、永久に説明頼むぞ。隊長」

「うっ、やっぱりばれてましたか」

「あれ？隊長がいないのに声がきこえるよ？」

明は顔をキョロキョロとさせ周りをうかがっている。
ヤベ、かわいい。

「はあ、永琳さんに何言われるかわかったもんじゃないですよ」

そう言って隊長は俺達の前に現れた。

「うわー、何で隊長きえたの？」

「色が変わる服を着てるからだ」

隊長が着ているジャケットは防護力だけでなく周り景色に溶け込む能力がある。

「へー」

納得してくれたようだ。

「とにかく頼むぞ。それにそろそろ時間だしな」

もう低気圧が目の前に来ている。

「絶対死なないでくださいよ？」

「当たり前だ」

「また・・・あえるよね？」

「もちろんだとも」

二人はロケットの発射地点に向かって行った。

二人が行った後、俺は一人酒を飲みながら、空を眺めていた。

まだ発射していないロケットは三機。

絶対に踏ん張らないといけない。

「さて、」

俺は酒瓶を投げ捨てながら、立ち上がる。

「やるか」

俺は手を前に突き出し、霊力でデカイ腕を創り出す。

「オオオオオ!!」

そのままその腕で雲を止める。

体積の差が、赤ん坊と大人くらいあるが問題ない。

俺はその場で踏ん張る。

予想以上にしんどい・・・
もつか？

そんなことを考えていると、ロケットの発射音が聞こえた。

どうやら一機打ち上がったようだ。

後二機か……

今、二機目も上がったようだ。

……手のいたる所から血が噴き出している。

それに徐々に押され始めた。

どうやら霊力がきれてきたようだ……
霊力の腕も小さくなっている。

……意識ももつろつとしてきた。
限界か……

限界？

俺に？

すっかり忘れていた。

俺にそんなものは存在しないんだ。

『限界をなくす程度の能力』

これが俺の能力なんだから。

「又オラアアアアアアアアア！……！！……！！」

今一度踏ん張る。

『限界』なんて言ってる場合じゃいな。

そんな中、最後のロケットが打ち上がったようだ。音が聞こえる。

俺はロケットが飛び立ったのを確認すると、霊力を止めた。

そして雲が迫り、周りが凍ってきた。

「・・・・・・・・悪いな」

俺は誰にと言うわけではなく呟いた。
そして俺の意識は失われた。

その日、月で一人の女性の泣き声がこだました。
それは何日間も続いた。

まるで『限界』が無いように。

氷河の終わりと妖怪（前書き）

ここでもさかのあいつが登場

・そんなことより感想が欲しい

ごめんなさい調子になりました。

氷河の終わりと妖怪

「寒っ！！！」

うわ、寒！！

なんだこれ？

なんか起きたら俺の周りが雪景色。
どんな状況だよ・・・

・・・そうだ。
俺は一人、地上に残ったんだな。
あいつら無事かな？

とりあえず寒いな・・・
どうやら完全に氷河期に入っただけだな。
そういえば俺はどのくらい眠ってたんだ？

周りを探索してみるか。
人間はいるかな？

うん。人間はいない。
それから恐竜も当たり前にいない。
そして妖怪も見当たらない。

生物減ったな。
でも猿人みたいのはいたから人間はまた生まれそうだ。

・・・暇だ。

10万年後

おお！！

駄目元でやったら転位魔法が使えた。一度行った場所にしか使えないけどね。
なんか魔力も最近上がってきたな。

魔力も使いこなせるようにするか。

また10万年後

暇。

魔力ももう完璧に使えるようになったし暇になったな。

またまた10万年後

大発見！！

俺の体に妖力が流れてるのを見つけました。

どうやら人にも少なからず妖力が流れているようだ。

え、俺は人の分類に入るのかって？

失敬な。

俺は正真証明人間ですよ？

まあ何年生きてるか覚えてないけどね！！

300万年後くらい？

は？。

妖力上げるの大変だ。

元が少ないから、なかなか上がらない。

そういえば人間がちょっと進化したよ。

火を使うようになりました！

イエー！！

早く、もっと進化しないかな・・・

100万ね(略)

スゲー・・・

人間の進化のスピードがガンガン上がってる。
腰に布巻くようになったし、石器もなんか剥片石器だっけ？ともかくそんなになった。

この先が楽しみだな

数万年後

人間がとうとう人間らしくなった（泣）

ヤベ、涙出てきた。

槍やら銚やらちゃんとした道具っぱいのも生まれたし。

それから妖怪も生まれた。

やっぱり生き物をモチーフにしたものが多い。

でも人間みたいな奴も生まれた。

明みたいに、人の感情や見えないものに対して生まれた妖怪だと思う。

「きゅっっ……」

今日の前で目を回しているこいつみたいに。

身長は明くらいで金髪。

黒い服とスカートを着ていて、袖からはシャツが見えている。

明らかに今の時代の服装ではない。

・・・どっかで見たことが？

とりあえず状況がわからない人に説明すると、

道を歩いている↓なんか襲われる↓返り討ちにする

というわけだ。

なんか見たことがあるんだよな、うん。

「ハッ!!」

あ、目を醒ました。

「・・・誰？」

「いや、お前が襲ってきたんだろうが」

緩いな。

自分の襲った相手くらい覚えとけよ。

お、思い出したか？

なんか顔が青ざめていくけど。

「いやー！ー！ー！ー！ー！食べないでー！ー！ー！ー！」

「食わねえよ」

まったくそんなことしないってのに・・・

てか、手で頭抱えてうずくまって震えている姿かわいいな。

・・・俺はロリコンじゃないよ？
ホントだよ？

「ホント？」

「妖怪なんて人間は食べるか」

なんか今変な流れが・・・

「え、あなた人間なの？」

うわ、失礼な奴だな。

いちお人間なんだがな。

「ああ。他に何に見える？」

「人間ばく見えるけど、こんな強い人間見たことも聞いたこともないもん」

そりゃ・・・ねえ？

「まあただの人間じゃないしな」

「じゃあ異常な人間？」

「それ以外だな」

コノヤロウ、かわいい顔して遠慮なくいつてくるな。

「そういえばお前、何で俺を襲った？食うためか」

「ううん。実は・・・」

まとめると、ここらへんで強い妖怪がでると聞いて、そいつを倒して名を上げようとした。

で、探したがなかなか見つからず、そんな中に俺が現れ、変わった格好をしているためその妖怪だと思い、襲った。
まあそんな感じだ。

「お前も頑張るな。まだ若いのに名を上げようとか」

感心、感心。

「……見た目で判断しないでね。それでも百年近く生きてるんだから」

「それでも俺にしたら全然若い」

俺にとって百年はあつという間だ。

「……あなた何歳？」

「最低でもお前より年上だ」

「……」

なんか疑いの目でみてるな。
当たり前だけどな。

「じゃあ私より年上なのに何で有名じゃないの？確かに強いけど」

「俺と戦った相手は基本八つ裂きになるからだ」

あ、また怯えだした。

「お前にはしないがな」

そう言うとはつと胸を撫で下ろした。

「ただ俺がお前に修業をつけてやるう」

「ええー！！！一体なんで！？」

「暇だから」

「そんな理由で？！」

実際のところこの時期の人型の妖怪は、人間の恐怖などで出来てるのでいなくなると困ったりする。

だから弱いと困るので強くしようというわけだ。

「……きよ、拒否権は？」

「ない」

「うう・・・」

「そういえばお前の名前は？」

呼び方がわからないといろいろ不便だ。

「・・・ルーミア」

「へー、そーなのかー」

ん？

どこかで聞き覚えが・・・

「そーなのかー？」

「そーなのかー」

「そーなのかー！ー！」

「そーなのかー！ー！ー！ー！」

なんか異常にくらいついたな。

「気に入ったのか？」

「うん！ー！」

テンションもめっちゃ上がってるな。

・・・ルーミア+そーなのかー!!・・・? ↑仁の頭の中

・・・思い出した。

確か闇を操る奴だ。

リボンをとるとEX化すると言われていた。

そつえば今リボンつけてないな。

てかここまで昔から生きているとは思わなかったな。

「それで、あなたの名前は？」

あれこれ考えていると、ルーミアが話し掛けてきた。

「神道仁だ」

「そーなのかー」

おおー！！

ルーミアっばい。

氷河の終わりと妖怪（後書き）

そーなのかー

もはや代名詞

弟子と宵闇（前書き）

言ってみるものですね。

感想を三件もいただきました。

感想、指摘ありがとうございましたm——m

今回主人公以外の視点が出ます。
上手く書けたかな？

弟子と宵闇

真夜中の森。

普通の生物は寝静まり、妖怪達が活動する時間。

そんな森の一角が、弾幕により照らされる。

「デイマーケーション!!」

ルーミアが弾幕を放つ。

俺はそれを空を飛ぶのではなく、空を駆けて避ける。

そのままルーミアの真ん前に行き、

「拳砲」

「キャアアア……」

零距离砲撃を放つ。

「また負けた・・・」

「簡単に勝たれてたまるか」

あれからルーミアを鍛えている。
鍛えると言っても、俺は妖力をあまり使えないので戦闘方法を教えている。

でもルーミアに妖力を見せたら、「なんで人間がそんなに妖力持ってるの・・・」とへこんでいた。

そんなに多いか？

霊力や魔力に比べれば全然少ないと思うけどな。

「で、今回の質問」

戦った後に質問を聞き、戦闘の改善を行っている。

「どうやったらあんなに速く飛べるの？」

「あれは飛んでるんじゃないくて空を走ってるんだ」

「走る？」

ワンピースの『月歩』を改良したかんじだ。
『天駆け』と俺は呼んでいる。

こっちのほうか空を飛ぶより瞬間的な速さが速く、戦闘に使える。

「・・・そーなのかー」

「とりあえずそーなのかーって言うのをやめろ」

そーなのかーって凄いよ？
言ってみるとどんな会話でも成立するんだよ？

「それでお前の本質はわかったか？」

妖怪が強くなるためには己の本質を知ることが一番だ。
己が何の恐怖からできているか。
それが出来ればおのずと能力が使えるようになる。

そしてルーミアは己の恐怖をわかっていない。
だからまだ能力を使えていない。

「全然わからない♪」

「そんな陽気に言っな」

「そーなのかー？」

・・・今ここで拳砲を使っても俺悪くないよね？

まあ、ルーミアが自分の本質を知るのはまだ先だろう。

「とりあえず飯にするか」

「わはー♪」

・・・かわいいな。うん。

永琳は初めて会った時にはこういう行動はもうしなかったし、明とはあまり一緒に行動しなかったし。

・・・なんか俺オヤジ臭くなってる？
気のせいだ。気のせい。

「今日は蒸し鍋だ」

「お肉入ってる？」

「ああ」

「わはー」

そう言ってくる回る姿はほほえましい。
・・・やっぱりオヤジになってるのかな？

「「」ごちそうさまでした」

飯を食い終わると、自由時間になる。
そうなるとルーミアはそこら辺をフラフラすることが多い。

「ちょっと行って来るねー」

今夜もどっかに行くようだ。
ふわふわと飛んで行く。

・・・あいつ気付いてるかな？

私はルーミア。
能力はまだない。

数日前から仁ていう人間（？）にいろいろ教えて貰っている。

最初は半場無理矢理だったけど今はとても感謝してる。
自分でも分かるくらいに、強くなってるのが分かる。

妖力自体はあんまり変わっていないけど、戦闘方法に関しては格段に上昇した。

それにいい言葉を教えて貰った。

そーなのかーってなんか言ってて気持ちがいい。

・・・ここらへんでいいかな？

「・・・そこにいるのはわかってるよ」

私は地面に向かって空から話し掛ける。

「ほう、気付いていたか」

地面から赤い触手みたいなのが生えてくる。
なんだろう・・・触手に白くて丸い何かが付いてる。

頭つてゆうか、本体みたいなのも生えてくるけどそれも赤くて丸い。
おまけに口も変わっていて、変に突き出している。

見てて気持ち悪い・・・

「あなたがここらへんで有名な妖怪ね」

私が探していたやつだ。

地面の中にいたんじゃ、いくら探しても見つからないよね。

「いかにもそうだ。まったく・・・変な男のせいで襲う機会がなかったがそつちから来てくれて助かったわい」

そう言つて赤い妖怪は私の全身をなめるように見る。

・・・なんか背中がゾクゾクする。

一秒でも早くこの妖怪を消し飛ばしたい衝動にかられる。

「あの男も馬鹿だな。俺様の存在に気付かず、こんな上玉の獲物を一人にするんだからな」

「・・・・・・・・」

多分、それは違う。

私ごときがこいつの存在をわかったんだから、仁はとっくに気付いていたはずだ。

だいち、気配の探り方も仁に教わったんだし。

ともかく、これは仁が試したんだと思う。

こいつの気配を探り当てられ、なおかつ倒せるかどうか。

「だんまりか……。いいだろう。喰らえー!」

赤い触手が私に襲い掛かる。

8本の触手の内5本が襲い掛かってくるが、動きが単調過ぎる。仁と比べれば雲泥の差がある。

だから私は触手をやすやすと避け、

「ヤッ!」

レーザー型の弾幕を撃つ。

この弾は速く、奇襲やカウンターに使えると仁が言っていた。

「又ウ!？」

やはりその通りのようであい妖怪はもろにくらう。

「やってくれたな……」

でもダメージは少ないみたいだ。

「これならどうだ!」

すると赤い妖怪は口から黒い煙幕を出す。

しまった・・・

視界をふうじられた。

「キャッ!！」

そう考えていると、右側から変な液体をかぶってしまう。

溶解液かな？

でもこの程度なら服が溶けるだけで体は溶けない。

「クク・・・少しずつ剥いてやる」

・・・ホントにこいつ気持ち悪い。
もうだめだ、一気にキメよう。

「ダークサイドオブムーン」

全方向に大、中、小の様々な弾幕を放つ。

「ハハハ、やけになっても当たらんぞ」

だろうね。
それが狙いだもの。

「ミッドナイトバード……！」

今度は逆に三カ所に弾を集中させる。
そこに逃げ場がないように。

「なっ、グワアアア……！」

最初のダークサイドオブムーンはわざと逃げ場所を三カ所ほど作っておいた。
そうすれば確実にその三カ所の内の何処かにいるはずだ。

仁にはこれでよく嵌められた……

？
静かになった？
倒したかな？

そう思い、まだ煙幕で周りが見えないなか一歩踏み出した。

そのとき、

「!??」

地面からまた赤い触手が現れ、私の両腕と両足に絡み付き、空中に大の字で浮かばせられた。

まずい、地中にいたんだ。

「もうゆるさんぞ・・・小娘え」

何も見えないなか声だけが聞こえる。

ゾクッ!!

私はその声に今日一番の恐怖を感じた。

動けないこともあるけど、何より視界が真っ暗なのも大きい。

まるで暗闇の中にいるみたいで・・・

暗闇？

なんで私は暗闇を怖がるんだろう？

生まれたばかりの頃はずっと暗闇の中にいたのに。

暗闇の中で世界と私の境目が無くなるのがとても心地よかったのに。

その考えが私の頭の中を過ぎったとき、私の中で何かが生まれた。
いや、蘇った。

私を中心に黒い球体が生まれる。

その球体は瞬くまに大きくなり、私と赤い妖怪を覆う。

球体の中は真っ暗闇だ。

「な、なんだこれは?!」

それが私、『宵闇の妖怪』の本質だ。

今俺の目の前には黒い球体がある。

・・・ルーミアがいたと言ったほうが正解だな。

どうやら無事能力を発動させ、タコみたいな妖怪を倒したようだ。

暗闇がはれ始めた。

暗闇が完全にはれると、中からルーミアが出てきた。

服は直っている。

どうやら妖力で直したようだ。

「本質がわかったか？」

「うん！私は『宵闇の妖怪』」

もう大丈夫そうだな。

「じゃあもう俺が教える必要はないな」

「………そーなのかー」

そんな寂しそうな顔しないでくれよ……

「もっといっぱい教えて貰いたかったのにな……」

「またどこかで会ったら教えてやるよ」

そっついながら俺は浮かび始める。

妖怪の寿命は長いからまたどこかで会うだろう。
最悪、幻想郷が出来たらきつと会える。

「お別れ？」

「ああ」

「そーなのかー………またね!!」

ルーミアは笑顔で送ってくれた。
・・・いい弟子を持ったもんだ。

「さらばだ」

俺は気配を消し飛び立った。
多分ルーミアには消えたように見えただろう。

さて、次は未来の日本でも行ってみるか。

日本と鬼（前書き）

アクセスが一万越えました。
びっくりです。

日本と鬼

いやーやって来ました、日本！！

まあ今は国にすらなっていないけどね。
いまだに石器時代です。

ちなみに今俺は上空から日本を見てます。
何処に降りようかなー

とりあえず未来の京都辺りに行ってみますか。

着地！！

とうとう日本上陸です。

現在地は京都近辺の山の頂上。

周りを見ると森。

まあこの時代何処に行っても森しかないけどね。

今は夏みたいで、木々は青々としている。

ん？

妖怪か？

妖力が近づいて来る。

大きさは・・・結構でかいな。
ルーミアより強いみたいだな？

て、ことは将来大妖怪になるような奴だな。

「おい、貴様！！私の山で何をしている！！！」

後ろから怒鳴りつけられた。
来るのはわかってたけどね。

「それは悪かった。俺は今この土地に来たばかりでな」

振り返ると・・・

鬼がいた。

額から鬼の証である角が生え、見事なカーブをえがいている。
身長は150くらいで、上半身は胸にサラシを巻いただけで、下半身は青いズボンという、なんともワイルドな格好だ。

髪は金髪で、ショートカット。

燃えるような赤い目をしていて、その目は俺に対して敵意を丸だしにしている。

「だとしたら貴様何物だ!!」

「俺は人間だ」

「嘘をつくな!こんな強い力を持った人間がいてたまるか!!」

なんで俺は人外のやつから人扱いされないんだろ。

てかこいつ顔が赤くなってない?
半端なく怒ってる?

「もしかして、怒ってる?」

「当たり前だ!!私は嘘が嫌いなんだ」

そういえばそんな話があったような・・・

それよか俺の話は嘘って決まってるのかよ。

「まあ、とりあえず落ち……」

「問答無用おお!!」

って、普通いきなり殴りかかってくるか!?

俺は鬼の拳を避け、ひとまず距離をとるため飛ばつとするが、

「!?!? 飛べない!?!」

どうなってる?

何故いきなり飛べなくなった!!

よく見ると、鬼の口元がつりあがっている。

……まさか

「……能力か」

そうとしか考えられない。

「そうさ！！あたしの能力は『正々堂々と闘わせる程度の能力』だ！！！！」

「・・・つまり、俺はお前と同じ条件で戦わなければならないということか？」

「そうだ！」

じゃあ俺が飛べなかったのはあいつが飛んで戦闘しなかったからってことか。

しかもあいつはまだ打撃しかしてない。
だから俺は弾幕を撃つこともナイフを使うことも出来ないはずだ。

・・・恐ろしい能力だな。
相手の戦闘スタイルに関係なく、自分の得意な肉弾戦に持ち込ませる。つまり鬼に対して殴り合いで戦わなければならないのか・・・

「どうした！考えてたってあたしの能力は破れないぞ！！」

そっいいながら再び殴りかかってくる。

動きは単調で、攻撃もただの殴るだけなのに、有り得ない破壊力を持っている。

殴る、蹴るといった単純な攻撃が必殺技レベルだ。

そんな鬼に対して肉弾戦を挑むのは愚の骨頂。

「!?!」

あくまで、普通だったら。

俺は鬼の拳を素手で受け止める。
そしてそのまま掴み、離さない。

「な、あんた一体・・・」

掴まれた本人は信じられないって顔をしている。

まあそりゃそうだろう。

俺が人間じゃないにしても、鬼の打撃を素手で止めるなんて思わなかっただろう。

「お前が正々堂々と闘うのが望みなら・・・」

俺は掴んだ腕と反対の腕を振り上げる。

「やってやろうじゃねえええか！！！」

渾身の力で鬼を殴り飛ばす。

「グウウウ・・・」

それでもなんとかガードする。
だがダメージはくらったようだ。

俺と鬼の距離があく。

「まさかあたしと殴り合える奴がいるなんてね。あんた一体何の妖怪だい？」

「だから人間だ」

「・・・本当なのかい？」

「ああ」

「たく、自分の種族説明するだけでなんでこんな疲れるんだ？」

「まあ、あたしにとってあんたが人間だろうがなんだろうがどうだ
つていいんだ」

俺はあんまりよくない。

「あんたがあたしと殺り合える。それだけで十分だ」

とても楽しそうに笑っている。
心底楽しそうだ。

「楽しそうだな」

「もちろんだ。あんたみたいに強い奴と闘うのは初めてだから、血
が湧き上がってしょうがない」

「そっいえば鬼って戦闘狂だったけ？」

「そうだ、あたしの名前は楓っていうんだ。あんたの名前は？」

笑いながら聞いてくる。

「どれだけ楽しんでるんだよ・・・」

「神道仁だ」

「仁か。いい名前だね」

この状況でそんなこと言われても嬉しくないがな。

「じゃあ・・・」

今まで以上に強大な妖力を放ってくる。

「行くよ？」

楓は一気に距離を詰めてくる。

俺も前進して殴りかかる。

お互いの拳がぶつかる。

だが直ぐに楓が吹き飛ばされる。

俺はそのまま吹き飛んだ所に行き、追撃の蹴りをいれる。

しかし楓は既に態勢を整えていて、俺の蹴りを伏せて避ける。避けられた蹴りが衝撃波を生み、周りの木を薙ぎ倒していく。

楓はそこからアッパーをくらわす。

「!？」

だがそれは俺ではなく、俺が高速で動いて作った虚像。

俺自身は既に飛び上がっていた。

「メテオストライク」上空から天駆け＋重力＋腕力の力で拳を叩き込む。

「ガハッ!！」

だがさすがは鬼。

当たる直前で拳の軌道を若干変えられた。

そのため直撃は避けたが、おそらく戦闘継続は不可能だろう。

俺はそこで追撃を止める。

「負けたよ……」

気も失ってないのか。

「さっさと止めを刺しな。そして出来ればあたしの子達を……」

「ちょっと待て。なんで俺がお前を殺す話しになってるんだ？」

「え？だってあんたはこの山を狙ってきたんじゃない……」

「俺が何時そんなこと言った」

俺はただ一方的に襲われたただけだ。

「……そうえばそうだね」

今更気付いたのか。

「じゃあ全部あたしの勘違い？」

「そうだ」

まったくとんだ災難だ。

「まあいいか！あんたと闘えたしね！！」

「少しは反省しろ」

「・・・悪いけどちょっと頼まれてくれるかい？」

「？」

「あつ、そこ左ね」

「・・・」

俺は今楓を背負って歩いている。

ダメージが大きく、歩けないため俺が家まで運ぶことになった。

・・・背中になんか弾力を感じる。
き、気のせいだ。気のせい。

余計なことを考えるな。

「いや、仁の背中って意外と広いね」

「余計なこと言ってるのと落とすぞ？」

「お、照れてるのかい？」

「・・・」

「ちょ、わかったから黙らないでくれよ・・・」

引き受けるんじゃないかな・・・

てかさつきから森の中歩いてるが一向に着かない。
多分一時間くらい経ってるがな。

「お、着いたよ」

そう言われて着いたのはある洞窟。

中から気配が・・・

「母様」

出てきたな。

出てきたのは小さい鬼。

見た目は幼稚園ぐらいだが立派な星のマークが着いた角をしている。

「おつ、勇儀」

・
・
・
・
・
・
勇儀?????

宴会と隙間（前書き）

勇儀の喋り方が定まらない・・・

宴会と隙間

まさか勇儀が幼女とは・・・
確かにまだ紀元前だが。

ってことは楓は鬼子母神にあたるのか？

全ての鬼の母であり、安産の神だったはずだ。
自分の子になんかされて改心したんだったか？

じゃあ勇儀になんかおこるのか？
いや、でも幻想郷が出来たときは普通にいたしな・・・

「父様？どうかした？」

「ああ。なんでもな・・・って父様？」

勇儀に話しかけられたと思ったら、父様って呼ばれた。

「なんで父様？」

「あたしより、強くて年上だから」

「本当のところは？」

「母様がそう呼べって言った」

楓の奴何がしたいんだよ・・・

ちなみに俺はまだ楓の山にいる。

楓が怪我で動けないため、その間山を護ってくれと頼まれたからだ。

なんでも紫って妖怪がこの山を狙っているらしい。

だから俺を最初見た時も目が紫なのでその妖怪だと思い襲ってきた
そうだ。

てか紫って・・・

ハイ、隙間ですね。

わかります。

それはともかく俺は楓のところに文句を言いに行く。父様って・・・
なんか変な感じになるじゃないか。

「いいじゃないか、そんなくらい。しばらく仁がこの山護ってくれるんだから父様になるだろ」

「いや、意味わからん」

俺はまだ結婚もしていない。

そっいえば永琳とはどうなるんだ？

長い間同棲してたけどな・・・

ん？

今考えると俺結構凄いことしてたな。

「まあいいじゃん」

そう言つて楓は徳利から酒を飲む。

「な！なんでお前が酒をもってるんだ！？」

まだ人間は酒はおろか、米も作ってないはずだ。

「このことかい？これは酒虫つてのがいてそいつが・・・」

「一匹譲ってくれ」

「あ、ああ。もちろんいいよ」

楓に詰め寄ると、快く譲ってくれた。

俺は小さくガッツポーズをする。

「仁は酒が好きなのかい？」

「大が付くほど好きだ」

人間がまた作るまで飲めないと諦めていたがなんとこんなところで飲めるようになるとは。

「じゃあ宴会でもするかい？」

「「もちろん!!」」

つて勇儀がいつの間にか俺の隣にいる。

「宴会と聞いたら黙っていられないよ」

・・・その見た目でか？

「いや、まさか酒もこんなに強いなんて、仁って本当は鬼なんじゃないか？」

「そんなわけあるか」

現在宴会の真っ最中です。

薄暗い洞窟の中は酒の臭いで充満していた。

多分酒に耐性がない人は近づくこともできないだろう。

ちなみに勇儀は既に酔い潰れている。

いくら鬼といえど、この歳ではそんな量は飲めないだろう。

まあそれでも一般の人間が飲める量は軽く越えていたが。

「そういえば怪我は大丈夫なのか？」

ガンガン酒を飲んでるが平気なんだろうか？

「あゝそれは酒飲んだら治った」

「どついう理屈だ」

楓は喋りながら酒を飲み続ける。

酒飲んで治るって・・・どこの医学だ。

「細かいことは気にするなって!!!!」

笑いながら背中をバンバン叩いてくる。

めんどくせえ・・・

次の日

「え、兄様もう行っちゃうの？」

勇儀にはあれから父様を止めてくれと言ったら兄様になった。
いちお俺もそこで妥協した。

「ああ。楓の怪我治ってるしな」

「えゝあたし兄様と闘いたかったのにな」

「また今度な」

・・・出来れば会いたくないな。

「なんだよ。もっとゆっくりしていけばいいのに」

「俺はまだまだふらついていたい歳なんだ」

「いや仁の年齢って・・・あいた!!」

楓がいらんこといいそうだったので頭をはたいておく。

「じゃあまた何時かな」

「それじゃあねゝ」

「今度は負けないよゝ」

俺はその声を背中に受け、飛んで行つた。

行っちゃったな・・・

まあ再戦のときまでにあたしは強くなっておきますか!!

・・・妖力？

「勇儀、先に洞窟に戻っておきな」

「え、うん」

とりあえず勇儀を洞窟に帰す。

「どうやら気付かれたようですわね」

勇儀が見えなくなると声が聞こえてきた。

「よく言うよ。仁がいなくなった後にわざと妖力をもらしたろ」

そうでなければあたしがこいつの妖力を感知できるわけがない。
あたしはそういったことが苦手だしね。

「ええ。この山に着いたと思ったたらちょうど別れの場面でしたから、最後のお別れくらい穏便にすまさせてあげたかったものですから」

「大層な自信だねえ・・・とりあえず姿を見せたらどうだい？」

でもその自信を裏付けするくらいでかい妖力を感じる。
それになんだか靈力っぽいのも感じる。

「そうですわね」

あたしの目の前にリボンが二つ縦に現れる。
そしてその二つのリボンの間の空間が裂けた。

裂けた空間には無数の目がありこちらを見ている。

そしてその空間からあたしと同じくらいの女が出て来る。

長い金髪で手には細長い何かを持っていて、その何かは女の上で広が
り日の光を遮っている。

服は全身紫色のものを着ていて、白くて長い靴下を履いている。

それで胸元や髪には赤いリボンが着いている。

胸は・・・チキショーあたしよりでかい。
なんかムカムカしてきた。

そして何より不気味なのが容姿。
顔立ちは整っていて美人のはずなのに、浮かべている胡散臭い笑みが台なしにしている。

「お初にお目にかかります」

そう言ってそいつは地面に降り立ち、

「八雲紫ですわ」

より一層怪しげな笑みを浮かべ名を名乗った。

宴会と隙間（後書き）

ゆかりんと楓の戦闘は省く予定です。

月見と賢者（前書き）

短めですがどうぞ

月見と賢者

楓達と別れて数ヶ月が経った。

あれから日本のいろんなところを回ったがこれといった奴に会わなかった。

てか人間が縄文時代だと面白みがない。

出来れば有名な戦いとかを見てみたいな。

そんなこんなで俺は今浜辺で月見酒をしている。

砂浜にある岩の上に座り、波の音をききながら一人で月を眺めている。

酒はもちろん楓に譲って貰った酒虫が作った酒だ。

定期的に水を入れれば無限に酒が出るというすぐれものだ。

月を見てるとあいつら思い出すな・・・

永琳は何やってんのかな。

またとんでもない発明してそうだな。

明は大きくなったのかな？

今思うとあいつが妖怪の中で一番年上だな。

後誰か一人いたような・・・
まあそのうち思い出すか。

「人が感傷に浸っているのをいつまでのぞき見しているつもりだ？」

俺は月を眺めながら言う。

「・・・何時から気付いていて？」

さっきまで一人分の影しかなかった岩の上にもう一人分の影ができる。

「三日前からだ。お前ずっと俺のことを見てたろ」

俺は月から視線を外さずに言う。

「じゃあ初めから気付かれていたわけね・・・」

そこで、フウとため息をついた。

自分の能力が破られて落ち込んでいるんだろう。

「で、俺に何の用で三日も人の私生活を見ていた」

俺はここで初めて後ろを向く。

そこには八雲紫が立っていた。

ただ、胡散臭い笑みを浮かべていない。
なんか疲れてる感じだ。

「……ただ興味があっただけじゃ駄目かしら？」

「自分が勝てなかった奴に勝った人間にか？」

「!?!」

そこで紫は目を見開く。

凶星だな。

「大方楓に俺のことを聞いたんだろ？自分を倒した人間がいるって」

「……………」

黙るのは正解の証拠だ。

楓と別れる時、こいつの気配がしたからきつとあの後戦ったんだろ
う。

んで、勝敗は聞かずとも楓の勝利だと分かる。

楓に対しては能力は使えないし、弾幕を張ることはおろか、空を飛
ぶことも出来ない。

あいつの能力を破るにはあいつ以上の妖力で弾くしかないが、そん
な妖力持つてる奴はまずいない。

事実俺も破れなかったしな。

そして肉弾戦では紫は楓の足元にも及ばない。
そうなれば勝敗は分かる。

「……貴方は一体何年生きてらっしゃるの？」

長い沈黙の末、紫が言った言葉はこれだった。

「さあ？確かなのはお前がこの世に生まれるずっと前から生きてる
ってことだな」

「・・・」

また沈黙する。

沈黙が多いな、オイ。

「一つ聞いてよろしくて？」

「ああ」

今回は短かったな。

「貴方ほどの力があれば妖怪を10年とかからず全て殲滅できるはず。
なのにそれをしないのは何故？」

「・・・お前は妖怪がなんで生まれたか考えたことはあるか？」

「え？」

目を丸くして、そんなこと言われるとは思いもしなかったって顔を

してる。

ゆかりんのこんなあほづら写真に撮っておきたいな。

「妖怪は元々人の恐怖から生まれた。」

例えば暗闇に対してとかな。

「だから人間は恐怖に対抗するために結束する。だか妖怪がいなくなれば人間達は恐怖を忘れ、自ずと滅びるだろう」

「・・・・」

紫は何も喋らない。

「つまり人間には妖怪が必要だ。逆に妖怪も人間が必要だ。妖怪は人間の恐怖を糧に生きるからな」

実際氷河期で人間が一時的にいなくなったとき、人間より頑丈だった妖怪達もいなくなっていた。

「つまり人間と妖怪はお互いに依存している？」

「そういうことになるな。そのうち人間や妖怪達がみんなそのことに気づき、共存してほしいものだ」

「！……………」

紫は今の俺の言葉に何か感じ取ったようだ。

「今日は話を聞けて楽しかったわ」

「口調はそっちが素か」

「あ……………」

ゆかりんにそんな口調で話されるとむず痒いから俺はそっちのほうがいいんだけどね。

「ま、口調が柔らかいほうが俺は楽でいいがな」

「……………」

お、胡散臭い笑みが出てきた。

紫はスキマを空け、移動しようとする。

「そついえば名前言ってなかったわね」

・・・そついやそつだったな。

危な、名前呼ばなくてよかったな。

もし呼んでたら絶対怪しまれてたな。

「私は八雲紫よ。人間さん」

「俺は神道仁だ。妖怪さん」

俺もいちお名乗っておこう。

「それでは、ごきげんよう」

そう言って紫はスキマの中に消えていった。

稲作とケロちゃん（前書き）

昨日投稿しようとしたらついレッドクリフ見てしまった。

あの陣形とか戦いつてなんだか見てて笑ってしまう。

・・・これ俺だけかな？

稲作とケロちゃん

人間がやつと稲作を始めたよ。

時代的には今弥生か？

ともかく人間が集団で生活を始めている。

まだ国ではなく村と呼ぶのが正解だろう。

でも俺はすることが無くて暇だ。

と、思っていたら、なんと神が生まれたみたいだ。

あっちゃこつちの村で今まで感じたことがない力が生まれたのを感じた。

多分これが神力だろう。

てか神ってすごいな。

生まれたばかりなのにそこいらの妖怪を軽く捻り潰せる力持ってたんだから。

そして、生まれた神を寄り所にして人が集まりさらに神力が強くなっている。

神力は人間の信仰により強くなる。

だから人口が多ければ多いほど神は強くなっていく。

まあ神つてのには興味があるので近くの神がいる場所に行ってみることにする。

というわけで空飛んで移動してるけど真下には田が広がっている。

すげえ広え。

田の中心に人の集落が見えるが、そこも賑わっている。

神が生まれるといろいろと違うな。

ちなみに俺は今気配を消して見えないようにしている。

この時代まだ空飛ぶ人間なんていないから見つかると面倒だ。

永琳にはばれたが多分大丈夫だろう。

そんなこと考えながら飛んでいると村に着いた。
まだ戦なんてないから村には堀や柵などなくどこからでも入れる。

ちょうど秋だから至る所で脱穀をしている。
一つ一つ手作業でやっているので大変そうだ。

住居はまだ竪穴式だ。

どうやら家が進歩するのはまだ先のようだ。

そんなこと考えていると木造建築を発見した。
どうやらここに神がいるようだ。

建物もそうだが、収穫した稲をここに運んでるし、
なにより強い力を感じられる。

早速中に入ってみますか。

この建物は一階建てで部屋は一つしかなく、奥のほうに少し段が高
くなっている場所がある。

おそらく今はいないがあそこに神が座るのだろう。

そして段の前には料理が並べられている。

料理が用意されてるってことはもうすぐ出て来るだろう。

お、どうやら出て来るようだ。

人間達が列をなして、ひざまずき、頭を下げている。

俺は一番後ろの壁に寄り掛かっている。

段との距離はだいたい10メートルくらいだ。

一番前の壁が開いた。

日の光により照らされながら神は部屋に入ってきた。

神は青いワンピースを着て、その下に白いＴシャツ？を着ている。

神は金色で顔の左右で赤いリボンを使い結んでいる。

なにより特徴的なのは帽子だ。黄土色っぽい色でまるつば。

そこまでは普通だが帽子に目が二つほど付いてる。

ハイ、洩矢諏訪子ですね。幻想郷にいたるときと変わらぬファッションです。

・・・あの帽子実際に見ると怖いな。
気持ち俺を見てる気がする。

「それでは諏訪子様。来年もよろしくお願いいたします」

「うむ」

どうやら終わったみたいだ。
長つばいのが挨拶をした後人間達が次々とでていく。

さて、俺もそろそろ・・・

「それで、貴様は一体何物だ？」

という訳にもいかなくなっていました。
バッチリこちらを向いていらっしやいます。

「たく、永琳といいなんでこれをすぐに見破るんだか」

結構シヨックです。

しかも今回は永琳の時より上手く隠れたと思ったんだけどな……

「とりあえず姿を見せろ」

俺は気配を出し、姿を見えるようにする。

「……お前人間か？」

「正真正銘人間だ」

まさか神にまでそう言われるとは……

「まさか私より強い人間がいるとはな。それで何をしにきた？信仰でもしに来たか？」

「ただ神つてのを一目見ておきたくてね。たった数十年でここまで強くなっただけ興味も沸いてくる」

暇だったしね。

「人間にとって数十年はたったか？」

そこにくいついて来たか。
いらんこと言っちゃまったな。

「俺にとってはたった」

「どれだけ生きてる？」

「ほかの人間が猿だった時にはもう生きてた」

そう考えてみるとやっぱり俺って人間じゃあない？

・・・いやいや俺はただほかの人間より少し長く生きた人間だ。
うん。

「プッ、アッハハハハハハハハハハ！！！！！！」

な、なんだ！？
急に笑い始めた？

「……何か俺変なこと言ったか？」

「いや、違うよ。なんだか人間とこんな話ししてると思ったらかしくなっちゃって。ハハハハハ！！！」

たしかに普通の人間の会話ではないがな。
でもそんなツボるところか？

目尻に涙まで浮かべてるし。

「あんた面白いね。気に入ったよ。しばらくこの村にいてみない？
どうせフラフラしてるだけでしょ？」

諏訪子は涙をぬぐいながら言う。
てかフラフラしてるのはなんでわかった？

「それならそうさせてもらおうか。ただなんでフラフラしてるのがわかった？」

「あんたぐらい生きてると、一定の場所には留まらないかなー、て
思ってたね」

たしかにそうだ。

「それより話し相手になってよ。これから冬だから基本的に暇だしさ」

「……口調変わってない？」

「あ、口調はこっちが素だから気にしないでいいよ。いや、神だからって口調に気をつけるのは面倒だよ」

「……神も大変なんだな」

「まったくだよ。この前なんか……」

結局こんな感じで愚痴を次の日の朝まで言われ続けた。

「……どれだけストレス溜まってるんだよ。」

神と生活（前書き）

水曜に漢字と古典の文法のテスト。
木曜には英単語のテスト。

なんだこのイジメ？

神と生活

朝がきた。

俺は日の出とともに起きる。

そこで俺は部屋の襖を開け、今だに寝ている諏訪子を起こす。

「……今更ながらこの家って布団はあるし、床が畳だし時代がおかしくね？」

まあとりあえず諏訪子を起こすか。

「ほら起きろ」

諏訪子を揺らす。

そうすると諏訪子は布団に潜り込んでしまった。

「あーっ……あと86400秒」

「それ一日経つぞ」

なんか最近諏訪子に変感じのことを言う。

甘えてるのか？

「今日はなんか儀式があるんだろ」

「あ、忘れてた！！」

お、飛び起きた。

「危ない危ない。神が寝坊して儀式に遅れるなんて間抜けだもんね」

「さつき24時間寝ようとしてたの何処のどいつだ・・・」

「そんな前のことはもういいじゃん」

鏡を見てくせつ毛を直しながら言う。

「ほんの数秒前のことだぞ？ばけたか？」

「あゝう・・・」

そんな感じの会話をしながら、俺は朝飯を取りに行く。
諏訪子は儀式のときに出るのでいらなはずだ。

ちなみに今いるのは最初に諏訪子に会った建物の離れた。
基本的に諏訪子はいつもここにいる。

「おお、ミシャグジおはよう」

離れを出て、長の家には飯を貰いに行つてるとミシャグジに会つた。
まあ蛇だけだね。

諏訪子はいつらと話せるが俺は話せない。

いちおこいつらも神だから話せそうだけどな。
まあ祟り神だけだね。

そんなこんなで長の上に着いた。

「あ、仁様だ。おはようございます」

今挨拶してくれたのは長の娘だ。
ちなみに様を付けているのは俺が諏訪子の客人だからだ。

でもそのせいか若干だが神力が使えるようになった。

・・・もしかして俺のことを神と勘違いしてる奴がいる？
長い年月が経ったし生まれた時にはもう既に俺がここにいたってやつもいるだろうしな。

「ああ、おはよう」

俺も挨拶を返す。

「はい。お食事です」

そう言つて飯が乗ったお盆を差し出してくれる。
ちなみにメニューはご飯と漬け物だけ。

俺はできるだけ質素な物にしてもらつてる。

「いつも悪いな」

「いえ、当然のことですから」

いつもと同じ会話をしながら、俺は離れに戻る。

「あれ？私の御飯は？」

「お前は儀式のときに出るだろ？」

「あ、そうだった」

「ぼけたか？」

「あゝうゝ」

今度はちよつと怒ったようだ。
ほっぺを膨らましてる。

「そんな睨むなよ」

「ふゝんだ」

拗ねちゃったな。

「仁のほうが悪けているくせに」

「お前みたいにもの忘れはないから平気だ。それより早く着替えろ。
遅れるぞ？」

「今から着替えるもん」

「……なんかかわいらしいな。
見てて和やかな気持ちになる。」

・・・前もこんなこと言った気がするな。

「覗くなよ？」

「当たり前だ」

そう言つて諏訪子は襖を閉めた。

さて、飯食つか。

「じゃあ行つてくるね」

「ああ」

諏訪子は儀式に向かつて行つた。

帰ってくるまで暇なので散歩する。

と、言っても転移魔法で帰って来れるから結構遠くまで行ったりもする。

でも今日は歩きたい気分だから歩くことにする。

「仁様こんにちはわ！」

「こんにちはわ」

「仁様！どうです調子は？」

「上々だ」

「仁兄ちゃんどこ行くの？」

「そこらへんだ」

なんか会う人会う人に話しかけられるな。
まあ、ありがたい事だけだな。

「行くところないなら仁兄ちゃんのお話してよ！！みんな楽しみにしてるんだから」

さっきの男の子がまた話しかけてきた。

「別にいいぞ。暇だしな」

「やった！！じゃあ広場にみんなあつめてるね！」

元気だな、おい。

走って行っちゃったよ。

じゃあ俺も広場に行きますか。

広場に行くと子供達がたくさん集まっていた。
よく見ると長の娘をいる。

「さて、じゃあ何の話するか」

俺は広場の腰掛けに座りながら言う。

「僕鬼の話が聞きたい！！」

「じゃあ鬼の話をしよう。いいか？ここから西の方に行った山にはな……」

「……と、言っ感じで俺は楓からこの徳利を貰ったわけだ」

やっと終わった。

みんな静かに聞いてくれて助かる。

「じゃあ解散」

『はい!!』

みんな帰って行く。

そろそろ儀式も終わったかな？

「儀式なんて面倒さいよ……」

「それ神が言う言葉か？」

この神はとんでもないこと言うな。
信者が聞いたら泣いて卒倒しそうだ。

「とりあえず疲れたから肩もんでよ」

「俺は雑用か」

「いいじゃんか。暇そうだし」

「俺は月見酒の用意してんだ」

「あ、私もしたい」

「じゃあ手伝え」

「はい」

離れの近くの原っぱに寝転びながら二人で月を眺めていた。

「仁って月見好きだけどなんで？」

諏訪子が寝転びながら聞いてきた。

「そんなに俺してるか？」

「だって満月の日は毎回してるよ？」

「・・・そんなしてんのか。」

無意識に会いたがってるのかな？

「ただ昔を思い出してるんだよ」

「昔？」

「ああ」

「ふん・・・」

諏訪子はそれ以上質問しなかった。

そして夜は更けていった。

神と生活（後書き）

前書きの理由で毎日更新出来ないかもしれません。

漢と恋姫（前書き）

作者の思いつきで東方以外の作品を出すシリーズ
？恋姫夢想

恋姫の話は少し続きます。

漢と恋姫

諏訪子の所に来てから二百年くらいがたった。

そして俺の記憶がただしければ今中国では三国志状態のはずだ。

俺は三国志が結構好きだ。

細かく覚えているわけではないが、赤壁の戦いとかは見ておきたい。

「と、いうわけで今から隣の国行ってくる」

「いや、どんな訳？」

現在その旨を諏訪子に伝えている。

「そんな戦いが見たいだけで行かないですよ。戦いが見たいならここでも起こさせるからさ」

いや、何言っただこの神は！？

サラっととんでもないこと言ってやがる。

「そうじゃなくて間違いなく歴史に残るような戦いを見ておきたいんだ」

後の世で自慢話にするためにな。

「あ〜う〜・・・」

うなだれちゃったよ・・・
だがしょうがない！！

ここは強行突破だ！！

「それではさらば！！」

「あつ・・・」

俺は離れから文字通り飛び出て、そのまま飛び立って行った。

さて、中国はどこかな？

とりあえず着いたぜ！

所用時間約30分。
しかも道に迷つてだ。

・・・人間離れが否めねえよ。

まあともかく人探すか。

ちなみに俺が今いる場所は砂浜だ。

上空から見たので中国であることには間違いないが、今の時期を確
認しておきたい。

俺は人を探すため砂浜を陸側に歩いて行く。

飛ばないのは飛ぶと怪しまれるからだ。

どんな人いるかな？

とりあえず歩いて来たけど人っこ一人見つからない。

街までは飛んで行ったほうがよかったかな？

今は荒野を歩いている。

目に入るもの全て荒野だ。

さすがは中国！！
規模がでかいよ！！

おっ、あれ馬車か？
ひとまず行ってみるか。

ん？

馬車が人に取り囲まれてる？
しかも全員武装してやがる。

・・・もしかして追いはぎみたいな連中か？
だとしたら馬車の人達が危ないな。
急がないと。

俺は走るスピードを上げた。

お、馬車の中にいたあの銀髪の女の人強いな。
斧使って追いはぎの連中をぶった切ってるよ。

相手は30人ぐらい今けどこの分なら加勢は必要ないか？

あ、でも馬車にいたほかの男の人が人質にとられたな。
やっぱ加勢いるな。

あれじゃ身動きとれないだろうし。

まだ50メートルくらいあるがナイフを人質をとっている奴目掛けて投げる。

そして当たったのを確認したら、スピードを最高速に近くして一気に目の前まで移動する。

『は？』

強い女の人も追いはぎの連中も人質にとられてた男も合わせたように声を上げる。

まあ人がいきなり現れたらビビるよね。

でも俺はそれに構わず近くにいた追いはぎを蹴りとばす。
蹴りとばされた奴に当たり数人が吹き飛ぶ。

それを見て呆然としていた女の人が人質が解放されているのに気付

き周りの追いはぎを薙ぎ倒していく。

さすがに追いはぎ達も正気に戻り、俺らに襲い掛かってくる。
でも霊力もない普通の人間じゃ俺に傷一つつけられない。

結局、かなり加減してせいぜい死ぬ程度の打撃で全員のしてしまった。

「危ないところを助かった。礼を言う」

全員倒したところで女の人が頭を下げてきた。

・・・てか日本語？

まあとりあえず今はそれは置いて。

「そんな礼を言われるようなことはしていない。それより名前は？」

この人わりと強かったし、有名な人かもしれない。
でも女で強いと言ったら孫尚香ぐらいしか知らないな。

ちなみにこの人の容姿はさつきも言ったように銀髪で、やけに露出の高い格好をしている。

上は胸当てと、両腕の小手みたいなやつぐらいしかつけてない。へそが見えてる。

下も薄そうなズボンだけだ。

歳は20代だと思う。

確実に楓より年上に見える。

でもなにより目が赤い。
何処の国の人ですか？

まあ目が紫色の俺が言えたことじゃないけどね。

・・・でもどっかで見たことあるな。
東方のキャラでこんな人いたかな？

「これはすまなかった。私は華雄だ。お主の名は？」

はれ？

華雄って男じゃなかったけ？
しかも直ぐさま死んだような・・・

「俺は神道仁だ」

とりあえず名前を名乗っておこう。

「変わった名前だな。神が性で、名が道、字が仁か？」

あ、そうか。

名前の感じが日本と違うんだったな。

この時代は性と名と字が人に付けられる。

有名な関羽だと性は関、名は羽、字は……たしか雲長だったか？
ともかくこんな感じになる。

「性が神道で名が仁だ。まあ隣の国からやって来たからな。神道か
仁、呼びやすい方呼んでくれ」

「それでは仁と呼ばせてもらおう。それにしても天の御遣いと名前の
感じが似てるな」

……天の御遣い？

どうかで聞いたことがあるな？

「その天の御遣いってやつの名前は？」

「たしか・・・北郷一刀だ」

思い出した！！！！

恋姫夢想だ！！！！

説明しよう！

恋姫夢想とは主人公の北郷一刀君が未来からタイムスリップしてしまい、三国志の時代に来てしまうというものだ。

しかしそこにいる武将はみんな女性。

そして一刀君はいろんな女性を落としていくといゲームだ。

三国志の武将が女体化つてのがおもしろくて覚えている。

・・・まさかこんなゲームまで混じった世界だったとは。

漢と恋姫（後書き）

どうしよう・・・明日テストなのに

仁と御遣い（前書き）

毎日更新がとうとう途切れてしまった。
ごめんなさい。

それから恋姫の話は需要がなさそうなので今回で終わりにしました。

でもあの人はこれからも出ます。

仁と御遣い

現在華雄と会って数ヶ月がたった。

今は成都に向かっている。

一刀君に会ったためだ。

ちなみに今の時間軸的には赤壁の戦いが終わり、三国に別れて中国を治めているところだ。

・・・赤壁・・・見たかった。

んで、華雄の話を詳しく聞くとこれはショクルートのようだ。
つまり一刀君は劉備やら関羽やらと一緒に成都にいる。

それで赤壁は見れなかったけどせめて天の御遣いぐらい見ておこう
と思い、成都に向かっている。

「どうかしたか？なにやら上の空だが」

「大丈夫だ。少し考え事をしていてな」

それから俺は今華雄と共に行動している。

華雄は行方不明の自分の主君を捜し大陸中を放浪しているらしい。

ちなみにその主君とは董卓だ。

恋姫の董卓は正史と違い、いい王だったはずだ。

だから華雄の忠誠心も高いのだろう。

それでまだ成都の方には行っていないという事で一緒に向かっている。
それから成都は山の方にあるので今森を進んでいる。

「そうか。そういえば路銀はあとのくらいある？」

「俺はあまりないな。お前は？」

「もうない」

・・・は？

「お前この前の馬車を護衛したときの金はどうした？」

俺らが会った時のやつだ。

「この前の村で全部使ってしまった」

「酒の飲み過ぎだ」

「……仁だって飲んでたじゃないか」

「俺は体にも金にも計画的に飲んでいる」

ま、俺は酒の飲み過ぎで体壊すことはないけどね。
それから酒虫の徳利は見せてない。

なんか面倒な事になりそうだからな。

「まあ、もう成都に着くから大丈夫だ。仕事くらいすぐに見つかる」

「なんだその楽観的な考えは……」

「あんまり深く考えると早死にするぞ？」

「……お前は長生きしそうだな」

「褒められても困る」

「・・・・・・」

華雄は若干・・・いや、わりと？だ。

「お、着いたぞ」

森を抜けると城壁がみえた。

この時代の中国の街は全部が城壁に囲まれている。

それだけ争いが多いという証拠だ。

「残念だが仁ともここでお別れだな」

俺達は今城門のところにいる。

華雄とは成都での目的が違うため、ここでお別れだ。

「そうだな。この国の話をいろいろしてくれて助かった」

時間軸とか知れたし。

「なに。こつちもお前の話しはなかなか面白かったぞ」

暇なので結構いろんな話しをした。

ルーミアとか諏訪子とかな。

「まったく・・・真名がないのはこういう時に不便だな。仁には真名を渡してもいいぐらいなんだがな」

真名とはこの世界の中国の人々が持つている神聖な名前のことだ。

許可なく呼べば切り捨てられてもしょうがないぐらいのものらしい。

普通は信頼の証などで真名を明かすらしいが、華雄はその真名を持つていないらしい。

「まあ無いものはしょうがないだろ。じゃあな。主君、見つかりいな」

たしか董卓は一刀君の侍女として生きているはずなので、運がよければこの成都で見つかるだろう。

「そちらも御遣いを見れるといいな」

「ああ」

そんな感じで、俺らは別れていった。

「御遣い様を見てみたい？それなら街で待つてな。警邏をしている時に見れるかもしれないよ」

食堂のおばちゃんにそんなことを聞いたので俺は街をうろつく事にした。

城に気配を消して忍び込んで会うこともできたが、待つ事にした。いきなり現れたんじゃ警戒して話を聞いてくれないだろうからな。

それで街の子供でよく一刀君に遊んでもらうという子供に次会った。手紙を渡してもらうように頼んだ。

多分手紙を読んだら俺のことを探すはずだ。

三日後

一刀君が関羽と共に警邏に出たと話を聞き、俺はある飲茶の店に入った。

ここは外から見えやすい店で、多分俺の目の色にも気づくだろう。

一刀君が来た。

俺の目の色を確認した後に来たため間違いないだろう。

ちなみに一刀君の容姿はイケメンだ。
でも格好は庶民の感じのする物を着ている。

きつと気付かれにくくするためだろう。

「……あなたが神道仁で会ってる？」

怖ず怖ずと聞いてくる。

もっと堂々としてればいいのに。

「そうだ。まさか本当に捜してくれるとはな」

「捜すに決まってるだろ？こんな手紙渡されたら」

そう言つて俺が書いた手紙を突き出す。

その手紙は日本語で書かれている。

内容をまとめると、

『会つて話しがしたい。電話やメールではすまない話しをある』
というものだ。

それから差出人の名前と俺が紫色の目の色をしているということが
かいてある。

「あなたは俺と同じところから来たの？」

同じとは未来の事を言ってるんだろう。

「だいたいそんなとこだ。まあ俺は少々特殊だな」

「特殊？」

「それはどうでもいいことだ。それから五湖に気をつけておけ。奴
らは大きな戦の準備をしている」

「な！？」

驚いてるね。

でもこれは中国来る前に迷ってキョウドに行ったときに実際に見たので間違いない。

「・・・本当だって証拠は？」

「別に信じないなら信じなくてもかまわん。だが対策をとるなら三国でしたほうがいいぞ。五湖は全てまとまっているようだからな」

「・・・」

黙り込んでしまったな。

ま、いきなりこんな話しされるば誰だって驚くがな。

「それが本当だとして、何故そんな事を言ってくれるんだ？俺はあなたと面識がないはずだけど」

「・・・見てみたいからだ」

「何を？」

「お前達がつくる国をだ」

実際こんな長い時間を生きてると暇だ。

だから俺が知らない物語を見てみたい。

三国状態がしばらく続くだけで間違いなく歴史が変わる。
下手をすれば千年くらいもつかもしれない。

何せ国内に王が三人もいて、お互いが諫めあうんだから悪政もしかないはずだ。

「……わかった。あなたの言葉を信じてみる」

どうやら俺の事を信じてもらえたようだ。

「それであなたは……」

「御主人様っ！！！！こんなところにいらっしやったんですか！！！！」

「あ、愛紗！？」

関羽登場だ。

ちなみに愛紗とは関羽の真名だ。

さて、見つかると面倒なのでさっさとおいとまするか。

俺は転移魔法を使い、日本に帰った。
しばらくしたらまた来るか。

余談だが後日、急遽五湖が攻めてきたが三国は慌てる事なく撃退した。

それから一刀君が俺の事を歴史書に書き残させたいらしい。
さすがに名前はのってなかったが、目が紫色の仙人と書かれていた。

・・・中国では絶対に目が紫の状態で歩かないようにしよう。

仁と御遣い（後書き）

わりと質問があったので、ここで楓の能力について説明しておきます。

まず、楓の『正々堂々と闘わせる能力』には妖力以外の力で無効にできません。

理由は楓が妖力だけで能力を発動させているため、それ以外の力が『正々堂々ではない』に分類され、能力に対して干渉できません。

これは無効にしている訳ではないので、霊力の量は関係ありません。例え神であってもこの能力には干渉できません。

これではよくわからない、ここがおかしいぞって人は質問をください。

一個ずつ答えます。

土着神と軍神（前書き）

気付いたらアクセスが5万を軽く越えていた。
本当にびっくりです。

土着神と軍神

ひとまず中国から戻って来た。

さて、楓のところにも行こうかな。

ん？

諏訪子の辺りに神力が集まってる？

しかも未来の滋賀県の辺りにも神力が集まってるな。

もしかして諏訪大戦か？

諏訪大戦ってのはたしか諏訪子のところに大和の神、八坂神奈子が信仰を奪いに来た戦いのはずだ。

でもこの神力の感じから諏訪子と神奈子の個人の戦いではなく、総力戦のようだ。

土着神VS大和神

どうやらこんな感じの戦いの構図のようだ。

こりゃ行かなきゃだめだな。
赤壁も見れなかったし。

・・・こんなに早く諏訪子のところに戻るなんてな。

よし、転移完了。

諏訪子の村の近くに転移した。

・・・どうやら諏訪子達は近くの草原にいるようだ。
多分俺の霊力を出していけば諏訪子が俺だとわかるだろう。

そう思い、霊力を諏訪子がわかるように出す。

「じ〜〜ん〜〜〜!~!~!」

「うおっ!~!~!」

そしたら諏訪子が一気に移動して抱き着いてきた。

早過ぎだろ……

どうやって移動してきたんだよ。

「馬鹿！！あんなふうに行っちゃうなんて……」

諏訪子は涙目だ。

うつ、そんな目で見るなよ……

てか、どうやって帽子も涙目にしてるんだよ。

帽子の目が涙でにじんでるよ。

「それは悪かった。でも今はそれより大切な事があるんじゃないか？」

ほかの神が攻めてきてるんだったらこんな事やってる場合じゃないはずだ。

まずほかの土着神の奴らはいきなりトップが消えて大丈夫何だろうか？

「そうだった！仁、また会えてうれしいけど早くここから離れたほうがいいよ。これから神々の戦いがあるから」

「いやだ」

「えええっ！！？」

そんな叫び声上げてそんなに予想外だったか？

いちお俺は諏訪子を手助けするために来たんだかな。

このまま戦ったら負けるとわかっている戦いに友だけを行かせるな
ど俺はしない。

下手すりゃ歴史が変わってしまうが、そんなものは関係ない。

「俺はお前を手助けするために来たんだ。俺にも若干の神力が流れてるから、戦いに参加する自体には問題無いだろう？」

「で、でも……危ないよ？」

だが諏訪子は折れない。

俺が諏訪子のことを心配しているように、諏訪子も俺の事が心配なのだろう。

でもそれは俺も同じ事だ。

「俺が神ごときに遅れをとるとでも？」

諏訪子はこの言葉に面食らったような表情をするがすぐに元に戻った。

それから思い出したように笑い始めた。

「アツハハハハハハ！！そうだった仁は私なんかの常識じゃ量れないんだったね」

・・・それって遠回しにけなしてない？

「わかったけど・・・死なないでよ？いろいろとおかしいけど、いちお仁は人間なんだから死んだら元に戻らないんだから」

いろいろとおかしいってなんだよ・・・
まあ、あんまり否定出来ないけどね。

ちなみに神は死んでも信仰が有る限り復活するらしい。
逆に信仰が無くなると、どんなに元気でも消滅してしまうらしい。

「だから大丈夫だ。それよりほかの奴らのところに行くぞ？」

「あ、待ってよ〜」

こうやって見ると絶景だな。

俺は今神達が戦場に使おうとしている草原が見渡せるくらい高く飛んでいる。

あのあと、俺の事を説明すると、すんなり受け入れられた。

どうやら諏訪子が以前他の神に俺の事を言ったようで、ほとんどの奴が俺の事を知っていた。

そして俺は真上に配置された。

理由は上から広範囲攻撃を仕掛けるためだ。

そのため現在上空にいるんだが、凄い光景だ。

たくさん神や神兵が集まる状況なんて他にはないだろう。

ちなみに神兵とは大和の神の下級の神の事だ。

ぶつちゃけ、大和の神が作り出した兵隊みたいな感じだ。
一体一体はさほど強くないがいかんせん数が多い。

だから土着神達は数でも神としての能力も負けている。
唯一信仰の量は勝っているが、それだけではこの戦況は覆せないだろう。

だが俺という要素が入る事で戦況は大分変わるだろう。
多分。

お、諏訪子と大和の神の方から一人出て来たな。

あれは……八坂神奈子か？

遠目だがしめ縄してるし、おばちゃんみたいな髪してるし間違いないだろう。

赤い服に鏡みたいの付けてるし。

どうやら舌戦をするようだ。

「洩矢諏訪子、及び土着神の神々よ……！今日はお前達の信仰を頂
きに来た……！早々に降伏せよ……！！！」

神奈子がたからかに宣言する。

「嘗めるなよ！！八坂神奈子に大和の神達！！我が祟りを受けてもそんなことが言えるか！！！！！」

諏訪子も負けじと叫ぶ。

そしてとうとう開戦の時が来る。

「全軍……………」

諏訪子と神奈子が同時に言う。

「突撃——！！！！！！！！！！」

二人の声に両軍の神達が動き出す。

諏訪子と神奈子は中央で戦っている。

ここに、神々の戦いが始まった。

「溢れ出す欲望」

俺は早速、広範囲攻撃を繰り出す。

大和の神達はまさか上から攻撃が来るとは思わなかったのか、次々と被弾していく。

だが、さすがは神。

神兵はともかく、一撃では落ちなかった。

そしてこちらに反撃してくる。

神力で出来た砲撃を放ってきた。

そこいらの妖怪にはこれで十分だろうが、俺には全然足りない。

俺は腕一本で砲撃を止める。

それを見て大和の神達は驚愕の表情をつくり、土着神達は歓喜の声を上げる。

さらに俺は一気に砲撃を放った大和の神の懐に入り、

「拳砲」

砲撃を放つ。

この距離ではなすすがなかった大和の神は地面に落ちていった。

土着神の方ではさらに大きな歓声が上がる。

大和の神はそれを見て俺を警戒し始めたのか俺の周りを囲み始めた。

「螺旋の渦」

俺は全方位に砲撃を放つ。各砲撃が弧を描きながら進む。砲撃と砲撃の間が若干空いているが、とっさにそこから避けること

は難しいだろう。

結局大半が喰らった。

だがまだ殆どの奴は落ちない。

「神妖の槍」

俺は追撃をかける。

妖力で創った槍の先端に神力で創った弾幕を付けて放つ。

そして神力の弾幕は大和の神達の目の前で槍から離れ、一気に四散する。

突然の動きに神達は弾幕を喰らっていく。

その隙に、俺は高度を下げ神達を見上げる体制になる。

「逆転する運命」

極太の魔力で出来た砲撃を放つ。

神妖の槍で体制を崩していた神達は次々と喰らっていき、どんどん

落ちていった。

砲撃を撃ち終わったら後方から砲撃がきた。

なかなか威力が有りそうだったので、受け止めずに避ける。

砲撃が来た方を見ると、三本足で、黒い翼が生えた神がいた。

土着神と軍神（後書き）

最後に出た奴みんなわかるかな？

いちお東方と関わりがあるやつです。

八咫鳥と終戦（前書き）

八咫鳥って漢字が普通に変換できない・・・
パソコンで投稿したいな。

八咫鳥と終戦

なかなか変わった姿をした神だな。
普通は二本しかない足が三本ある。

足は鳥っぽい感じで右足の付け根からもう一本足が生えている。
羽は真っ黒で本体よりも羽のほうが大きい。
ちなみに性別は男だ。

「貴殿は何物だ？ たったそれだけの神力であれだけの神を落とすとは・・・」

「そういうあんたもただ者じゃなさそうだな。見た目も、神力もな」

こいつは相当強い。

多分神奈子と遜色はないはずだ。

「我は八咫鳥^{ヤタガラス}。太陽の化身にして天照大神様の使いだ」

太陽の化身・・・なるほどね。

「八咫鳥って本名？」

種族名つばいけどな。

「真名は有るが、それは我が主以外に教えるつもりはない」

そりゃそうだな。

でも八咫鳥って言いにくいんだよな。

「私の事を言っただから次はお前の事を説明してもらおうか」

「俺は神道仁。人間だ」

「なるほど・・・相当鍛えているんだな」

・・・人間を否定されなかった！？

俺の中で八咫鳥さんの好感度がめっちゃ上がってる。

そんな事考えていると、

「うおっ！」

「！？」

急に地面が槍の形を造り、突き出してきた。

俺と八咫鳥は何の問題も無く避けていくが中には喰らっていく神達もいた。

槍が突き出した中心を見ると、諏訪子が目を閉じて手の平を合わせていた。

どうやら諏訪子が『坤を創造する程度の能力』で創り出したようだ。ちなみに坤とは『大地』という意味がある。

・・・てか周りのこと考えて能力使えよな。

すると今度は神奈子が目を閉じ、両手を合わせる。

うおっ!?!!!

空が降ってきてる!?

空が槍の形を創りだす。

そしてそれが降ってきて諏訪子の坤の槍を砕く。

上手く言えないが、空の一部が突き出している感じだ。

これは多分神奈子が『乾を創造する程度有能力』を使っているんだろ。

ちなみに乾とは『天』という意味がある。

・・・すげえ状況だ。

天と大地が戦ってやがる。

さすがは神々の闘い。

スケールが違う。

だが状況は諏訪子が若干不利だ。
援護に行ったほうがいいな。

「よそ見とは余裕だな！！」

おっと、八咫鳥の事を忘れてたな。
今度はさっきよりも太い砲撃を放ってきた。

威力は先程と大して変わらないが、威力の密度が薄いため太くなっている。

どうやら威力ではなく、当てる事に重点をおいたようだ。

だがこれでは避ける以前に簡単に止められる。

俺は魔力で障壁を張り防ぐ。

砲撃が止んだ時にはもう次の砲撃が来ていた。
今度のは最初のより細く、密度もかなり高い。

当たればわりとダメージを喰らうだろう。

なるほど……

太い砲撃はブラフで俺に防がせて俺の動きを止めて、この細い砲撃を確実に当てるのが目的だったんだな。

たしかにこの距離では避ける事は出来ないだろう。

俺以外なら。

俺は天駆けの最高速度で避け、八咫鳥の後ろまで一気に駆ける。

八咫鳥には俺が消えたように見えるだろう。

「拳砲」

「!?!」

後ろから攻撃を仕掛けるが、さすがは太陽の化身。不意をついたにも関わらず、腕を掴まれ防がれた。

だが八咫鳥は両腕を使い、必死の形相だ。対して俺は腕一本でまだまだ余裕がある。

どちらが優勢かはどんな？でもわかる。

「まさか……我が人間ごときにここまで追い込まれるとは……」

「俺も、まさか神ごときに拳砲が止められるとは思わなかった」

「クッ……」

「お前は十分に闘った。ゆっくり休め」

俺は掴まれた腕を無理矢理引き離す。

「拳砲・連」

拳砲を両腕を使い、連続して放つ。

「クツ・・・グワアアアア！！！」

八咫鳥は最初の数撃は防げたが、それ以上は無理だった。

次々と八咫鳥に拳砲が当たっていく。

「・・・何故止める？」

後一撃入れば八咫鳥が落ちるといったところで、俺は右腕を八咫鳥の顔の目の前で止める。

「戦いは終りだ。あれを试着みる」

そう言つて、俺は戦場の中央を指差す。

そこでは大和の神達が円を組んで勝どきを上げている。

その中心では神奈子が満身創痍で立っていて、諏訪子は地に伏していた。

どうやら諏訪子が負けたようだ。

諏訪子が負けたということは土着神が負けたのと同じ事だ。つまり、俺が大和の神達と戦う理由はなくなる。

「……以外と律義なのだな」

「以外とは余計だ」

こちらが負けたとならば律義とか以前の問題だ。

俺の拳砲のダメージが大きくもう余り飛べない八咫鳥に肩を貸す。

「さっきまで敵だったのに・・・不思議な奴だ」

「戦いが終われば敵味方は関係ない。あるのは生者と負傷者と死者だけだ」

「・・・やはり不思議な奴だ」

そう言いながらも八咫鳥は俺に応じて肩に手をまわした。
そして俺達は神奈子と諏訪子の所に向かった。

こうして諏訪大戦は大和の神方の勝利で終わった。

戦後と後処理（前書き）

急いで書いたからいろいろと無理矢理だと思う。

戦後と後処理

「あ~~~~う~~~~。負けちゃったよ~~~~」

「ほらほら。泣くんじゃない。神様だろ」

八咫鳥を連れて諏訪子と神奈子のところに行くと、目を覚ました諏訪子に泣きつかれた。

神奈子も八咫鳥もそれを見て呆然としている。
そりゃそうだろう。

さっきまで神の威厳たっぷりだったのに、今は人間の腕の中で泣き、あやされているんだから。

「うう……でも信仰が……」

たしかに負けた事で信仰は全て神奈子達に持ってかれてしまった。
なぜなら人間達はより強い神に守られていたほうが安全だからだ。
だから強い神の方を信仰するのが当たり前だ。

だが、

「信仰については大丈夫だと思うぞ。今のままでは大和の神に信仰はいかない」

「!？ 何だと!？」

「どういつ事だい？」

俺の言葉に八咫鳥と神奈子が反応した。

「・・・まさか貴殿が信仰に細工したのか？」

「信仰に細工なんて出来るか」

八咫鳥よ・・・

いくらなんでもそんなことはできんぞ。

「仁だつたら出来そうだけどな・・・」

諏訪子よ、お前もか。

「じゃあ一体何でだい？」

「いきなり現れた神を信仰しろなんて言って人間が信仰すると思うか？」

きつと困惑するだろう。

無理矢理信仰させてもきつと信仰は薄いだろう。

「だが強いとわかれば・・・」

「例えば八咫鳥」

「？」

「お前の主の天照大神が他の神に敗れたからってそれまでの主を捨て、敗った神に従うか？」

こういう時は本人に置き換えるとわかりやすい。

「・・・なるほどそういうことか」

納得してくれたようだ。

それに諏訪子が直々に従えているミシャグジは祟り神だ。その恐怖もあつて信仰をいきなり変えるのは無理だろう。

「これは困ったね・・・」

「勝ち損になるのはまずいな・・・」

大和の神二柱は思案顔になった。
どうにかできないか考えているんだろう。

「私に考えがある」

「え？」

「な！！」

そう言ったのは諏訪子だった。

これには神奈子も八咫鳥も驚いている。

実際のところ俺も驚いている。

このままでいけば諏訪子の信仰は奪われずに済むのに、諏訪子は信仰を渡す策を出すというのだ。

「それで・・・その考えてのは？」

この何とも言えない空気を破り、俺は話しかける。

「ようは無理に対象が変えられないんでしょう？じゃあ対象をすり替えればいいんだよ」

「すり替える？」

これに疑問を唱えたのは神奈子だ。

「そう。表面状は私を信仰していて、その信仰が神奈子に流れるようにすればいいんじゃない」

「なるほど」

「・・・・・・・・」

八咫鳥は呟き、神奈子は何も言わずに思案顔のままだ。

「仁はどう思う?」

諏訪子は俺に疑問を投げかける。

「それならたしかに諏訪子を信仰しながらも大和の方にも信仰が流れるな。方法は考えているのか?」

口で言うのは簡単だが、なかなか難しいことだ。

「全然うかばない」

「樂觀的に言うな」

何も考えてないのかよ・・・

「名前を変えるのはどうだい？大和の神にその名前の神をでっちあげれば大丈夫だろう」

少しして考えていた神奈子が話し始めた。

「下手に名前を変えて信仰は大丈夫なのか？」

「それなら字だけを変えれば大丈夫だ。例えば洩を守に変えるだけで十分だ」

これぐらいなら信仰に問題はないだろう。

「その程度だと逆に私だとほかの国に分からない？」

「それなら国外ではまた別の名前で呼ばせればいい」

「……ややこしいな」

なんか八咫鳥は話しがよくわかっていないがこれでいけるはずだ。

「信仰の方はこれでいいとして一つ質問していいかい？」

神奈子が諏訪子を見ながら尋ねる。

「うん。いいよ」

「さっきのままだったら信仰は全部あんなのもんだった。なのになんであんたは考えを出してくれたんだい？」

それは俺も気になっていた。

諏訪子の性格だったら例え簡単に信仰を渡すことが出来ても渡さないくらいだと思ったんだがな。

「簡単さ。私があんたに負けたからさ」

「確かにそうだが……」

それだけではいろいろと納得できないだろう。

「ただ、私の師ともいえる奴が律義な奴のだったからさ」

どうやら俺の弟子は気付かぬ内に一人増えていたようだ。

携帯と旅立ち（前書き）

ば、馬鹿な・・・PV10万だと・・・

信じられん、まだ上がっている！

10万記念とかやったほうがいいですかね？

携帯と旅立ち

「……仁、もう動けないよ」

「なんだ。そっちから誘ってきたのに」

「あゝうゝ……だってこんな激しいなんて思わなかったんだもん……」

「ほら、もう一発いくぞ」

「ちよつ、話……いやああああ!?!」

現在諏訪子と弾幕ごっこみたいのをしている。
で、今諏訪子が俺の神妖の槍に当たり気を失った。

何故こんなことをしているのかという暇だからだ。

信仰の対象をすり替える案は成功し、対外的に大和の神の勝利を示すため神奈子は諏訪子の村にいる事になった。

それで今まで諏訪子がやっていた仕事を全て神奈子がやっているため、諏訪子が暇になった。

それで、暇だと駄々をこねたので相手をしてやっていたわけだ。

「仁も容赦がないね」

「あれ？神奈子？仕事は終わったのか？」

木の陰から神奈子がでてきた。

ちなみに俺達は村の近くの森の空き地で弾幕ごっこみたいのをやっていた。

今回はちゃんと結界を張ったので周りに被害はない。

それにしても神奈子が来るなんて珍しいな。

いつもこの時間はいろいろな仕事に追われているはずなのに。

「いや仕事は終わってないんだが……実は、変なものが空から落ちてきてね」

「変なもの？」

「そう。これなんだけどさ……」

神奈子が見せてきたのは携帯電話だった。
なにゆえこんな物が？

今の時代はだいたい古墳時代の初期だ。
携帯はおるか、電気製品すらないはずだ。

「確かに変わってるね。あつ、パカパカできる」

……諏訪子よ、お前いつの間に復活した？

なんか諏訪子はパカパカする感じが気に入ったようで、ずっと携帯を開いたり閉じたりしている。
ちなみに電源はついていない。

「変わってるだろ？大和にいる八咫鳥達にも聞こうと……」

ピリリリリリリ！！

急に携帯が鳴り始めた。

「「うわっ！！！！」」

「よつと」

いきなりの音に二人は驚く。

諏訪子なんかは携帯を落としてしまったので地面に落ちる前にキャッチしておく。

「い、一体何なんだい？急に音が・・・」

「多分大丈夫だ」

俺は今だに鳴っている携帯を開き、誰からの着信かを確認する。

「仁これが何かわかるの？」

「似たやつなら知っている」

100%携帯電話だと思っけどな。

着信のところには『神』とかいてある。

・・・あらかた犯人の目星はついたな。

俺はボタンを押し、電話に出る。

「もしもし」

『俺だ。神だ』

「……俺は神の知り合い結構いるぞ」

土着神なんてほとんど知り合いだ。

『お前をその世界に送った神だ』

やっぱり神（仮）か。

俺をこの世界に送った張本人にして、ゲームをしながら世界を創る
といった何とも適当な神だ。

「で、何の用だ？」

『あれ？意外と普通？てつきりなんか文句言われるかと思ったのに』

「イタ電ならきるぞ」

『あゝ、普通に用あります』

まったく……人が話し聞いてやってるってのに。

『実はな、そっちの世界で堕神が生まれた』

「なんだそれは？」

今まで生きてきた中では聞いたことがない。
まあ神自体が生まれた事がごく最近だしな。

『墮神とは読んで字の如く、墮落した神のことだ』

「お前みたいにか？」

『確かにゲームやったりサボったりしてばかり私は墮落はしていない』

・・・こいつサボったりもしてるのか。

『とにかく墮神は本来人間を助けるべき存在の神が妖怪のように人を襲ってしまふ。墮神の手にかかれば人間なんか三日あれば絶滅してしまう』

そんな危険な奴なのかよ・・・

「てかなんでそんな危ない奴が急にうまれたんだ？」

『・・・・・・・・』

え？何この間？

まさか……

「……お前が原因とか言わねえよな？」

『しょうがないだろ！！藍しゃまが倒せないんだよ！！！！それで熱中してる内にいろいろと変なボタン押しちゃったんだよ！悪いか！！！！』

「悪いわ！！！！まずゲームなんかしながら世界をいじれる環境にするなよ！！！！」

こゝこいつは……

てかこいつ俺がこの世界にきてから全然妖々夢進んでなくね？俺がこの世界に来る前は妖夢が倒せないとかなげいてたよな。

『えゝい、そんなもんは知らん！！！！ともかく……いやあああ！！！！！！また抱え落ちいい！！！！！！』

「つて、今もやってるのかよ！？反省しろよ！！！！」

なんて神だ……

こいつなんかのせいで墮神なんて奴が生まれたのかよ……

『神に反省なんて言葉はない！！！！』

「いや、嘘だろ」

『ともかくお前は堕神を抹殺しろ！私は藍しゃまを倒す！場所はメ
ールで送る！以上！！』

「まずお前はゲームをやめ……………」

ガチャ！！

ツー、ツー、ツ……………」

電話きりやがった。

「ねえ仁さつきから一人で何言ってるの？」

電話がきれると諏訪子が尋ねてきた。

たしかに電話を知らない人が見たら今の俺は一人で喋ってる変人
でしかない。

「これは遠くにいる奴と話しをする道具だ」

「そんな事ができるのかい？」

「実際今してたろ」

ん？

また携帯が鳴り始めた。

「あれ？また鳴ってるよ？」

「今度はメールみたいだな」

「メール？」

「遠くにいる奴にすぐに手紙が送れる」

メールを開くと、日本地図の画像がついていた。
東北のほうに赤い星がついているのでここに墮神がいるのだろう。

「なんて手紙がきたんだい？」

「助けが欲しいってな。だから今から行く」

「あ！仁ここに帰って来る気ないでしょ！！！！助け終わったら旅に出る気だ」

「…………ソナコトナイヨ？」

「なんだい、その喋り方は？」

なんで諏訪子そんなことわかったんだ？
ニュータイプか？

「ダメ！！帰ってきてよ！！！」

諏訪子が抱き着いてきた。

身長差があるので足に抱き着いている感じた。

「ほら、諏訪子。仁が一定の場所に留まれるわけないだろ」

神奈子が諏訪子をあやすように優しい声で語りかける。

「でも・・・」

「それにこれが今生の別れじゃないだろ？」

俺は諏訪子の頭を手をおきながら言う。

「・・・わかったよ」

諏訪子は離れてくれた。

それと同時に俺は飛び立つ。

「神奈子。諏訪子の事頼むぞ」

「わかってるよ。あんたもいろいろと気をつけなよ？」

「ああ」

俺は今度は諏訪子の方を向く。

「お前は我が儘ばかり言って神奈子を困らせるなよ？」

「あ、子供扱いしてる！！」

「俺にしたらまだまだ子供だ」

「あゝうゝ・・・」

俺はさらに飛び上がる。

「じゃあねー仁。またいつかー!!」

「たまには顔見せにきなよ」

「・・・・・・・・じゃあな」

俺は二人に背を向け、飛んでいった。

あ、携帯持って来ちゃった。

東北と雪女（前書き）

10万記念になんかやってほしい事があつたら27日の朝7時まで
に言ってください。

可能な限り実行します。

何もなかったら10万はスルーします。

東北と雪女

東北の方は寒いな。
凄い雪が降ってる。

あの神（仮）の地図に従い、東北にやってきたが墮神の気配はおろか、生き物の気配すらない。
あるのはずっと深々と降ってきてる雪と眼下に広がる森。
そして遠くに見える山だけだ。

だが、この近くに何かがいるのはわかる。
世界が静かすぎる。

たしかに冬で雪が降っているので動物達が少ないのは当たり前だが、まったく見かけないのはおかしい。

なにより妖怪もいない。

寒い地方では『寒さ』への恐怖で冬の妖怪がたくさん生まれているはずだ。

その冬の妖怪が一番活動するこの時期にいないのはおかしい。

おそらく墮神に消されたか、逃げ出したのだろう。

・・・この分だとこの辺りの人間達は・・・

「凍てつく波動!!」

下から衝撃波のようなものがとんでくる。

・・・墮神・・・ではないな。

この程度ならあの神（仮）も慌てないはずだ。

俺は障壁を張る。

おそらく手で防ぐと凍ってしまうだろう。

衝撃波が障壁に当たると案の定障壁が凍った。

・・・森の中にいるようで姿は確認できないが、雑魚ではなさそうだな。

姿も気配も上手く隠している。

どうせならこいつに今の状況を聞くか。

「四氷柱!!!」

今度は森の四ヶ所から俺を囲むように氷の柱ができ、それぞれが俺を
目指し突っ込んでくる。

どうやら場所を探られる暇を与えないつもりのようなようだ。

「溢れ出す欲望」

俺は氷の柱を破壊しながら森を無差別に攻撃する。

ある場所の砲撃が凍った。
どうやらあそこにいるようだ。

「一徹の砲撃」

俺は今度はそこに凍らせられない威力の砲撃を放つ。

「！ キヤアアアア・・・」
どうやら当たったようだ。
とりあえず当たった場所に行くか。

攻撃が当たった場所に行くと雪のように白い着物を着た女性がいた。
この雪の中こんな格好できる人間はいないので、多分妖怪だろう。

髪は白っぽい青。

身長は俺より少し小さいぐらいだ。・・・目を覚まさないが生きてるよな？

いちお威力加減したけどな。

「ほら、起きろ」

そう言いながらほつぺを軽く叩く。

「う、ん・・・」

お、反応あり。

目が覚めたようだ。

「！こ、凍り付く世界！！！」

俺を見るといなや寒気を体中から放つ。

その寒気は凄まじく、氷河期を思い出すレベルだ。

俺を含め周りの森、雪すら凍り付いた。

だが氷河期を喰らった俺は寒さにたいする『限界』が異常に高い。

なので、その凍りを一瞬で砕く。

「な………」

そしてそれをありえないと言った表情で彼女は見ている。

「……何故俺に攻撃をした？」

口を開け呆然としていた彼女に尋ねる。

「ふ、ふざけないで！！！あなたが私の仲間を殺したからに決まっているでしょ！！！」

彼女の青い目には明らかな敵意がみえる。

「……またこのパターンか。」

楓といい、こいつといい、何故妖怪はまともな確認もせずに敵だと思っただろうか？

「それは俺じゃない」

「どこにそんな証拠があ……」

「じゃあ逆に俺が襲ったて証拠は？」

「それはもちろん……あれ？」

どうやら気付いたらしい。

「ほらみる」

「で、でもこんな大きい力を持つてるし、此処にいたし……」

「ともかく人違いだ。それより俺はこの辺りにいる神を捜しているんだが知らないか？」

とりあえず面倒臭くなりそうなので、無理矢理質問をする。

「神？この辺りの神は行方不明らしいけど何か用でも？」

「ちょっと殺しにきた」

「えええ！？ちょ、ちょっとどついつ事よ？？」

俺は神（仮）の話しをはぐらかしながら、来た理由を話す。

「……と、いう訳だ」

「その墮神って妖怪も襲うの？」

「分からないが、襲う可能性は大きい」

「……」

彼女は黙り込んでしまった。

さっき仲間がどうか言ってたので、それと関係があるのだろう。

「それで、次はお前の名前と話を聞かせてもらおうか」

「あ、ごめんなさい。私は白岩冷華。雪女よ」

「……白岩？」

なんか近い名前を聞いたことが……？

「それで、ついさっきの事なんだけど……」

冷華の話をまとめると、自分の所にこの辺りの妖怪が来て、仲間が強い力を持った奴に殺されてるから助けにきて欲しい、と言われたらしい。

それで急いで来たのはいいが、急いできすぎて敵の特徴が強い力を持っているしか聞いてないことに気付き、引き返そうとしていた時に俺を見つけたらしい。

「・・・それだけの情報で襲ってくるなよ」

いい迷惑だ。

「ごめんなさい・・・そういえばあなたの名前は？」

「神道仁だ」

そついや名乗ってなかったな。

「ともかく、その墮神つてのが仲間を殺したと考えていいのかしら？」

「おそろくな」

「じゃあ急いで捜しましょう。雪が降ってる間なら私も力になれるし」

たしかに、さつき戦った時も結構強かった。

もし猛吹雪なんかだったら諏訪子や神奈子に並ぶかもしれない。

でも、

「その必要はないみたいだ」

「え？」

俺らが後ろを振り向くと、禍々しい神力を放ち、直径10メートルくらいの黒い球体があった。

「……これが墮神か」

俺は静かに呟き、黒くドンヨリとし球体を見つめた。

東北と雪女（後書き）

冷華はふとましくありません。

墮神と憎しみ（前書き）

今の所要望はないので記念をやる予定はありません。

墮神と憎しみ

墮神は真っ黒い塊だった。

だがルーミアの創る闇とは明らかに違うのが遠目でもわかる。
これは漆黒というよりどす黒い感じだ。

そしてぼそぼそと呟きみたいのが聞こえる。
だが何を言ってるのかは聞き取れない。

「凍てつく波動!!」

隣にいる冷華が先制攻撃を仕掛ける。
おそらく仲間の事で怒ってるのだろう。

てか、なんで妖怪はこう直線的何だろうか？
普通正面から仕掛けるか？

「え？」

「！」

墮神に攻撃が当たるが墮神は凍りつかない。

俺の障壁を簡単に凍らせたから相当冷たいはずなんだがな。

「・・・二・・・イ・・・ウ・・・ク・・・」

若干墮神の言ってることが聞き取れてきた。

「・・・イニクイニクイウラムニクイウラムニクイニクイ・・・」

なんだかとてもない事になってるな。

「ニクイ！ニクイ！！ニクイーーーー！！！！！！」

墮神からこれまたどす黒い弾幕が出て来る。

・・・神力じゃない？

だが霊力や妖力の感じもしない。

ともかくこいつは危険だ。

「冷華！こいつは防ぐな！！避ける！！」

「え、ええ」

自分の攻撃が効かなかった事と墮神の言葉に軽く衝撃を受けているようだが、大丈夫のようだ。

弾幕の密度は相当濃く、普通の妖怪や下級の神では30秒も持たないだろうが、冷華は結構強いので何とか避けている。

「徹の砲撃」

弾幕の合間をぬって砲撃を撃つ。

「な!？」

•
•
•
•
•

これまた効果がないいな。

「……いや、効いているのがわかりにくいだけか？
それとも霊力や妖力は効かないのか……」

「才才才才才才才才才才！！！！！」

今度は墮神から触手みたいのが生えてきて、辺り構わず暴れている。

周りの木々を薙ぎ倒し、地面を削っている。

「わ！？！」

俺はともかく冷華がきつそうだ。
ギリギリのものが増えてきた。

・・・こりゃ、とばして行くか。

「神霊砲」

今度は霊力と神力を混ぜた砲撃を放つ。

砲撃と言っても細く密度が濃い。

レーザーと言った方がいいかもしれない。

砲撃が当たると、黒い塊がブルブルと震える。
どうやらダメージがあるみたいだ。

神力なら喰らうのか？

「ガガガガガガガガガガ！！！！！！」

黒い触手が地面に刺さり、墮神を固定した。
そして気味の悪い声と共に一点にエネルギーが集まる。

砲撃か！？

まずい……この位置では冷華が逃げる事ができない。

・
・
・
受けるしかないな。

「俺の後ろに隠れてろ！！でかいのが来るぞ！！！！！！」

「仁は大丈夫なの？」

「最低でもお前よりは大丈夫だ」

とりあえず冷華を俺の後ろに隠す。

「魔神壁」

魔力と神力を混ぜた障壁を創る。

神力を混ぜたのは防御も神力でしか出来ない可能性があるからだ。

「ガ————!!!」

砲撃が放たれる。

この砲撃は神力も混ぜられているようで、さっきの弾幕や触手に比べて威力がべらぼうに高い。

だが魔神壁とぶつかるが防げてはいる。

・・・だがさっきの力が何かわかった。

『負の感情』だ。

障壁越しにもそれが伝わってくる。

（何故あの子を殺した！！）

（お母さん・・・何処行っちゃうの？）

（いやだぁーーーー！！！！助けてーーーー！！！！）

（人殺し！！）

（待ってくれ！！！！見捨てないでくれ！！！！！！）

様々な負の感情が伝わってくる。

おそらくもろに喰らったらこの感情に吞まれてしまっただろう。

そして、何より一番伝わってくるのが、

（何故・・・私はこんなものになっているんだ？）

・・・堕神の元になっている神だろう。

（誰か止めてくれ！！！！こんな姿は嫌だ！！！！！！！！！！）

「・・・・・・・・ああ」

砲撃が止む。

耐え切れたが、冷華は伝わってきた感情に圧迫され、膝をついて腕で体を支えている。

でも外傷はないので大丈夫だろう。

俺は懷からナイフをだす。

こいつは諏訪子いわく神力の塊らしいので効くだろう。

「刀砲・連斬」

拳砲のナイフバージョンを放つ。

リアクションは薄いが、多分喰らっているだろう。

「グオオオオオオオ！！！！」

やはり喰らっているようで空中に逃げ出す。

だが逃がしはしない。

「魔神霊の腕」

魔力と神力と霊力を混ぜた巨大な腕を創りだす。
腕は空に向かうように生えている感じた。

そしてその腕が倒れ、墮神を地面に叩きつける。

「アースバインド」

俺は地面に魔力を流し込み、魔力で出来た縄を地面から生やし縛る。

そして俺は腕を前に突き出す。

「神撃の道」

純粹な神力だけの砲撃を放つ。

それは道のように真っ直ぐに進む。

砲撃は墮落に当たると墮神の中で止まる。

そしてそこから各方向に新たな砲撃が放たれる。

「^ピギヤアアアアア!!」

墮神は爆発し、この世から消え去った。

（ありがとう・・・）

そんな声が聞こえた気がした。

「ごめんなさい……結局役に立たなかったわね」

「気にすることはない。あいつ相手にまともに戦えるほうがおかしい」

妖力が効果ない時点で冷華は戦えない。

多分神でも八咫鳥ぐらいでも互角かそれ以外と言ったところだろう。

「ともかくありがとう。仲間の仇を取ってくれて」

「礼を言われる筋合いはない。俺はただ頼まれたただけだ」

「それでもいいんだ。結果は変わらないんだから」

まあ、たしかにそうだな。

「じゃ、俺はそろそろ行くよ」

「……ゆつくりしていけばいいのに」

「ちょっと行きたい場所があるからな」

人間達の様子を詳しく見ていきたい。
もしかしたら飛鳥時代くらいになってるかもしれない。

「そうなの？じゃあ無理には止めないけど」

「そうしてもらうと助かる」

俺は飛び立つ。

「気が向いたら来なさいよ」

「ああ」

俺は奈良辺りを目指しとんでいった。

飛鳥とUSC（前書き）

・・・頭が痛い
インフルか？

うう・・・何書いたかあんまり覚えていない。

飛鳥とUSC

どうも、神道仁です。

今、飛鳥にいます。

ちなみに県でいうと大阪とか奈良みたいなかんじです。

で、今の人間の状態を見たくてきたけど聖徳太子がいるよ。
厩戸の皇子って呼ばれてたから間違いないだろう。

まだ10歳にもなっていないっばいけど。

でもそれより気になる事をこの飛鳥の都で聞いた。

なんでもここからずっと東に行った所に奇妙な花が咲くらしい。
花びらは黄色で真ん中は黒っぽく、日輪みたいな形をしているらしい。

そしてその花畑にはこれまた奇妙な格好をした女がいるらしい。
雨でもないのに白い傘をさし、髪は緑色だそうだ。

しかもその女は妖怪らしく素手で大地を砕き、傘の一降りで空を裂

くらい。

それほど強い上に性格が残虐で、捕まると楽には殺してもらえずなぶり殺されるらしい。

噂では、捕まった男の絶叫が一日中近くの村まで聞こえたらしい。

・・・これ完全に風見幽花だよね？
それで奇妙な花って向日葵だね？

緑色の髪に白い日傘。

そして向日葵畑に住み、この飛鳥の都まで轟く強さ。
なにより人をいたぶる残虐さ。間違いないだろう。

どうしようかなあ・・・

会ってみたいけども、会ったら多分戦いになるよな。

風見幽花って戦闘狂だった気がするもんな。
面倒なんだよな、戦闘狂って。

でも向日葵畑ってのもみたいんだよなあ・・・

よし！！

離れた所から見よう。
気付かれないように。

とりあえず目立たないために歩いて行く。

下手に霊力とか使って風見幽花が察知したらたまったもんじゃない。

この時代はでも商人もどきみたいな奴らがいるのでそのふりをする。
そうしないと怪しまれる。

設定はヒスイ商人だ。

この前追いはぎしてきた奴から逆に持ち物奪ったときヒスイをたくさん持っていたので実際に商売もできる。
基本的にするつもりはないけどね。

「これ、その者。何処に行く？」

後ろから話しかけられたよ。

余り歩き回る人がいないから話しかけられた事は今まではなかった

んだけどな。

「ヒスイを売りに近く村まで行くのでございますよ」

営業スマイルを浮かべ、後ろを振り返る。

口調が丁寧なのは経験上さっきみたいな話し方をする奴はプライドが高く面倒臭い奴が多いからだ。

下手にでてれば基本はこういう奴は大丈夫だ。

「おおそうか。しかし気をつけよ。この辺りは妖怪が出るからな」

声でもわかったが男がいた。

服装は普通・・・腰に剣をさしてる!?

この時代は剣を持っているのは渡来人か兵士みたいな軍事関係者くらいだ。どちらにせよ面倒だ。

また厄介な奴に声かけられたものだ・・・

ちなみにこの男は結構年だががたいがしっかりしているので兵士かもしれないな。

「それには十分気をつけていますゆえ・・・」

そう言っただけ俺はその場を去ろうとする。

「時にヒスイ殿」

失敗した。

・・・てかヒスイ殿って俺のこと？

「行き先が決まっていらないのならば一緒にこぬか？代わりとっては
なんだが、そなたの護衛をしよう」

いや、そんないいから。

「ちなみに私はある妖怪を退治する途中だが案ずるな。そなたに迷惑はかけん」

・・・なんだろう、なんか嫌な予感がする・・・

「・・・その妖怪とは？」

「たしかな・・・」

予感よ！！

外れていてくれ！！！！

「緑の髪をして、日輪のような花が生えている所にいる妖怪じゃ」

わあい。

それ風見幽花だ。

目的地一緒だ。

・・・やな予感当たっちゃったよ！！

「・・・その妖怪は非常に強力と聞きますが大丈夫で？」

見た感じこいつは身体能力はまだましみたいだが、霊力はゴミレベルだ。

赤子でももうちょっと霊力はあるはずだ。

何か秘策がないと確実に勝つどころか勝負にもならないだろう。

「大丈夫だ。私にはこの神剣がある！！なんでも大陸の神が創り出したものらしい」

ああ。その剣ね。

どう見ても神力のかけらもありません。
騙されたんだな。

結論

この男は放置すれば確実に死ぬ。

・・・デ○ノート並の正確せいだよ。
どうしようかな・・・

知らなきゃ知らないでよかったが、知ってしまった以上こんな自殺
みたいな事はやめさせないとな。

「やめたほうがいいのでは？その妖怪は遠くから妖術ま使っらしい
ので剣は分が悪いですよ」

これで諦めてくれ！！

「なんと、そうなのか？それはいい事を聞いた。ならば一気に近づ
くしかないな」

駄目だこりゃ……

「ではヒスイ殿行こうか。そなたは運がいい。なんとって私の活躍をまじかで見れるのだからな!!!」

そう言つて男は歩いて行つてしまった。

俺が行く事は決まつてるんだな……

……こうなりや直前でなんとかして助けだそう!!!!!!

「ほう。これはまた面妖な花だな」

着きましたよ。

男は向日葵を見て驚いている。
たしかに初めて見る奴には珍しいだろうな。

「ではヒスイ殿はここで待っておれ。すぐに戻るゆえ」

「はい。わかりました」

男は花畑の中に走って行った。

・・・さて、俺も行きますか。

俺は気配を消し、後について行く。

「さあ、花の妖怪よ！！！！観念し・・・・ぶへらあ！！！！」

男は名乗りすらまともに出来ず、ノックアウトされた。

傘で吹き飛ばされたが大丈夫だろう。

そして吹き飛ばした本人は口元が吊り上がる感じで笑っている。

Sの顔だよ・・・

チエックのスカートに、首には黄色のリボン。

靴はブーツみたいで踏まれたら痛そうだ。

そして白い傘は若干赤みがかったている。

多分反り血だろうな。

おっと、男に向かって歩き出したな。

捕まったらグロい事になるから助けておかないとな。

「それで勘弁してやってくれないか？花の妖怪」

「・・・・・・・・」

奴は俺の言葉で足を止め、振り返る。

「・・・・・・・・」

そして無言のまま俺を見つめてくる。

特に目をじつと見てくる。紫色が珍しいのだろうか？

「あなたが神道仁かしら？」

・ ・ ・ あるえ？
名前知られてる？

飛鳥とUSC（後書き）

体調の関係で更新が遅れるかもしれません。

本当にすいません。

更新スピードだけがこの小説の取り柄だったのに……

お茶とイス（前書き）

昨日感想で励ましのお言葉を頂きました。

本当にうれしかったです。

お茶とイス

ズズッ

「あら、このお茶はなかなかおいしいわね」

「・・・・・・・・」

ズズッ

今俺はあの風見幽花とお茶をしている。テーブルに向かい会って座っていて、テーブルの真ん中にはポットが置いてある。

何を言ってるか分からない？

前回からなんでこうなったて？

俺だつて分からないさ。

なんかあの後いきなり「お茶はいかがかしら？」って言われて今にいたる。

俺だっているいろと突っ込みたかったさ。

なんで俺の名前を知っていて、なんでお茶に誘って来るのか聞きたかったさ。

でもそれよりも衝撃的な事があってそういった事が全て吹っ飛んだ。
この時代の日本になんで紅茶があって、なんでティーカップがある
のかすらどうでもよくなった。

問題なのは今俺が座っているものだ。

「・・・・・・・・なあ」

「何かしら？」

「俺が今座っている・・・・・・・・」

「そのイスがどうかしたの？」

「え？いや、これ・・・イス？」

「イスよ」

「いや、でも・・・・・・・・」

「イスよ」

「・・・・・・・・」

・・・ここまで言い切るか、普通？

とりあえず文章だけでは今の状況が伝わらないと思うので、座っているものを説明しよう。

簡単に言おう。

人だ。

ずたばろの服を着ていて、四つん這いになりその背中に俺が座っている。

ちなみに幽花も同じく人に座っている。

その人達はうなだれて生気がない。

四つん這いになっているので一応生きてはいるのだろうが・・・

「……………とりあえず自己紹介してもらえるか？」

もう突っ込んだら負けだ。

とりあえず名前すらこちらは聞いてなかったなので、聞いておく。

まあ俺は知ってるけど一応だ。

「私は風見幽花。妖怪よ。それから趣味は弱い者イジメと花を育てること」

……………こんなとんでもない自己紹介をする奴初めて聞いたよ……………

何？

花を育てるはともかく趣味が弱い者イジメって、どこの魔王？？

「じゃあ次はあなたの紹介をしてもらえる？」

「名前知ってたじゃん」「あくまで名前と紫色の目をしてるって事
だけしか知らないわ」

「……………それ何処で聞いた？」

知らない間に俺有名になってるのか？

・・・でもあんまり凄い事やってないと思うんだけどな。

「・・・あなた自分で気付いてないの？」

「何に？」

そこで幽花はふう、とため息をつく。

「あなたが妖怪や神の間では有名になっている事よ」

幽花は呆れ顔で言う。

「なんで有名なんだ？」

でも俺には有名になる心当たりがない。

「本当に呆れたわ・・・あなた諏訪大戦の事を覚えていないの？」

「ああ、あれか」

でも別にたいした事してなくない？
結果負けたしな。

「……簡単に言うわね……一時期は神すら叩き潰す人間がいるって妖怪達はパニックになっていたのよ？」

うへー、俺の知らないところでそんなことがあったのか。

「じゃあ俺をお茶に誘ったのはなんでだ？」

「ただ単に神すら蹴散らす人間に興味があつたからよ。強さは見た感じでだいたいわかるけど、どんな人物かは分からないでしょ」

そう言つて幽花はお茶をすする。

でもその目はじつと俺を見つめてくる。

「……それで俺のことはわかつたか？」

この短時間なら基本的に第一印象が主だと思うが、それなりに気になるので聞いてみる。

「なんとも言えないわ。この短時間じゃ分からないもの」

「それもそうか」

出会つて数分でその人の事がわかるわけない。

「……一つ、質問していいかしら？」

幽花はカップをテーブルに置き、変わらずこちらをじっと見つめながら聞いてきた。

「なんだ？」

「あなたは人間と妖怪どちらの味方なの？」

「どちらでもない」

「……即答ね」

「迷う理由がないからな」

俺は人の味方というわけではない。
かといって、妖怪の味方でもない。

今、人間と妖怪は互いに依存しあっている。
紫にも言ったが、人間は妖怪という恐怖に対して結束し、妖怪は人間の恐怖を糧に生きている。

そんなバランスの中に俺が入ったら確実に両方滅びる。

俺はそんな事望んでいない。

「……変わった人ね」

「よく言われる」

「でしょうね」

……ん？

今のどういう意味だ？
俺けなされてない？

「そういえばあなた今日これから予定あるかしら？」

「いや、特にない」

……やべ、なんかあるって言ったほうがよかったか？
嫌な予感がする……

「そう」

幽花はそこで立ち上がる。

「勝負願えるかしら？」

幽花はそう言って、ニッコリと笑いながら殴りかかってきた。

家とご飯（前書き）

すいません、すいません、すいません！！！

幽香が幽花になってしまっていました。
今回からは直しています。

家とご飯

俺の顔に幽香の拳が迫る。

それは一般人では目で追うことすら出来ないスピード。

普通の人間なら避けることはおろか、何が起こったか分かる前に死ぬだろう。

しかし俺はそれを受け流す。

殴ってきた手の側面に手の平をあて体を回し後ろを向く。

そこであてていた手で幽香の腕を掴み、背負い投げの要領で地面に叩きつける。

そして倒れたところで首にナイフをあてる。

「……やっぱり敵わないわね」

倒れたまま幽香は言う。

その声は落胆というよりかは予想通りといった感じだった。

「まだやるか？」

一応聞いておく。

離れた瞬間にまた攻撃されたらたまったもんじゃない。

「もういいわ。だから刃物を離してもらえるかしら？」

「ああ、わかった」

俺はナイフを首から離す。

そして幽香は立ち上がり、服についた泥を落とす。

「それにしてもいきなりなんで攻撃してきたんだ？」

対応できるといっても心臓に悪いからやめて欲しい。

「ただ強い相手と拳を交えたかっただけよ。この辺りの強い妖怪はあらかた倒しちゃって最近強い相手と戦ってなかったしね」

そーなのかー。

でもさ・・・

「せめて一言いつてからにしろ」

さっきも言ったが本当に心臓に悪い。
血圧めっちゃ上がってる気がする。

「言ったじゃない。『一勝負願えるかしら?』って」

「あれは殴りながら言ったんだ」

「あなたなら問題はないでしょう?」

「そういう問題じゃない」

まったくこいつは……
こちらの身にもなってほしいものだ。

……てか幽香。

靴の泥落とすのひ人の頭使うな。
さっきまでイスやってた人がいつの間にかに幽香の近くにいて頭を
差し出している。

そして幽香はそれがさも当たり前かのようにその人の頭に足を乗せ
泥を拭いている。

「……さっきから気になっていたんだが、その人達は何なんだ

「？」

「調教したの」

「……………」

「……聞いてはいけない事を聞いてしまった気がする……
何となくそんな気もしていたが……いや、それだとは思っていた
が外れていて欲しかった。」

「あなたも一匹いる？」

「いるか」

俺はそこまでSではない。

そういえば幽香アルサド気炒チヤクってUSCアルサド気炒チヤクって呼ばれてたっけ？
めっちゃ納得。

「そういえばあなた今日寝泊まりする所ある？ないなら泊めるわよ」

「……………」

たしかに泊まる所はない。

もうそろそろ日も暮れるので、ありがたい話しではある。

でも怪し過ぎるよ。

親切過ぎるよ。

今あんな人の頭に足を乗せながら靴の泥落としている人の言葉じゃないよ。

朝起きたら縄で縛られてたとか俺はやだよ？

俺はそんな趣味ないよ？

「別に大丈夫よ。何もしないし、だいたい私じゃあなたをどうこう出来ないでしょ？」

いつまでも答えないので警戒されていると思ったんだろう。
実際その通りだけだな。

・・・でも幽香の言うことももっともなんだよな。
気をつけていれば大丈夫か？

「・・・じゃあお言葉に甘えるか」

大・・・丈・・・夫だよな？

「じゃあ家に案内するわ」

ニッコリとほほ笑み、日傘をくるくる回しながら幽香は進んで行った。

どうやら花畑の中心に向かっているようだ。

「……………こりやまた……………」

幽香の後について行くと小さな小屋があった。
しかしその造りはレンガだった。

どんだけ時代を無視すれば気が済むんだよ…………

「さ、小さいけどどうぞ」

幽香がドアを開け中に入る事を促す。

「……………お邪魔する」

突っ込むのはやめよう。

無駄な気がする。

中に入るとまず目を引くのは様々な植物の鉢植えだ。
いろんな種類があり、中には見たことないようなものである。

他にはベッドとテーブルとイスがあるくらいだ。
ちなみにイスは普通のだよ。

窓は二つほどあって、風が抜けるようにそれぞれ反対側に造られている。

・・・もう一つドアがあるがなんか血の臭いとうめき声が聞こえるから触れないでおこう。
触らぬ神に祟りなしだ。

「この家にちゃんと人を招いたのは初めてね。獲物なら何回もあるけど」

幽香がいつの間に隣に来ていた。
獲物って言葉には触れないでおこう。

触らぬ（ry

「そういえばさっきの男どうしたのかしらね？」

多分俺と一緒に来た男の事を言ってるんだろう。

「さつき目を覚ましてもの凄い速さで逃げてたぞ」

オリンピック並の速さだった。

「あらそうなの？残念ね。あついうプライドだけ高いような奴は調教のしがいがあるのに……」

うん!!

俺は何にも聞こえてないよ!!

「とりあえず夜ご飯作るから適当にくつろいでいて」

「……料理できるのか？」

全然そんなイメージないんだけどな。

「失礼ね。女としてそのくらいできるは」

「そりゃ悪かった」

「じゃあ少し待ってなさい」

そう言って幽香はドアを開け、隣の部屋に入って行った。

・・・あれ？

あの部屋って血生臭い部屋だよ？
うめき声が聞こえてくる部屋だよ？

「イギヤアアアアア！！！！！」

・・・料理・・・ってさ、こんな誰かの絶叫が聞こえてくるもん
だっけ？

・・・メニュー聞いておくべきだったな・・・

いろいろな不安を抱え、とうとう胃の辺りが痛くなってきた頃に幽
香がドアを開け、入ってきた。

手にはお盆が入っているが何が入っているかは見えない。

・・・てかどうやって料理をしたら頬や腕に血がつくんだ？

「待たせたわね」

そう言つて幽香はお盆をテーブルに置いた。

「「ごちそうさまでした」」

幽香が作ったのは和食だった。

ご飯にみそ汁に焼きしゃけ。

意外とおいしかった。

特にみそ汁のレベルはかなり高かった。

なんで血だらけになつたのはいまだに謎だな。

「おいしかったでしょ？」

得意顔で聞いてきた。

自信が結構あつたのだろう。

まあ実際おいしかったしな。

「ああ、うまかった」

「でしょ?」

幽香はさっきまでみたいなニヒルな笑いではなく普通の笑い顔して言った。

不覚にも少しドキツとした。

「……そういえば俺は今日何処で寝ればいいんだ?」

紛らわすようにちょっと早口で言った。

「あのベッドよ」

部屋に一つしかないベッドを指差しながら言う。

「じゃあお前は何処で寝るんだ?」

「あのベッドよ」

先程と変わらずに同じベッドを指差す。

「オイ、ちょっと待て。落ち着け」

え？

この人何を言ってるの？

同じベッド？

馬鹿言っちゃいけねえよ。

「私はいたって冷静よ」

「だったらなおさら質が悪い」

同じベッドって・・・
そんなんやバイ。
いろいろとヤバイ。

「じゃあ何が問題なのか言ってほしいわ」

今度は先程までとは打って変わったニヒルを笑いを浮かべている。
Sの笑いだ。

「・・・お前絶対楽しんでるだろ」

「何の事かしら？」

「・・・・・・・・」

そんな笑い顔を浮かべたって説得力はないぞ！！

結局俺はベッドでは寝なかった。
床の上に毛布を敷いて寝た。

そうなった時幽香が若干がっかりしたような顔したのは内緒だ。

二回目と幽霊（前書き）

幽霊と言っても幽々子様ではありません。

・・・気付いたらなんか20万PVいつてた。
なんか勢いがありすぎて怖い。

二回目と幽霊

風見幽香と初めて会ってから数十年が経った。

俺は基本的に飛鳥の都にいて、時々会いに行ったりもする。

・・・たまにとてつもないもの見せられたりもするけどな。
あれはSとかそういう次元の問題ではない。

一体幽香は何の恐怖から生まれたんだろうか？

でも最近は本人いわく落ち着いているらしい。
・・・前まで一体何やってたんだろ？

「仁さん。お茶ですよ」

「おお、ありがとう」

そう言っただけ俺はお茶を受け取る。

今俺は都のある豪族の所にやっかいになっている。
ちなみに豪族とは貴族みたいな奴らと考えてくれ。

その今お茶をくれた豪族の名は中臣鎌足だ。

誰か分からない？

歴史の教科書の645年あたりをみてみな。

絶対のつてるから。

ともかく鎌足は25歳くらいで髭が生えている。

大化の改新まであと10年くらいだな。

大化の改新が分からない人は歴史の教科書の64(r y

ズズッ

「平和だな」

「平和ですね」

鎌足も俺の隣に座り、一緒にお茶を飲んでいる。

俺が何故そんな偉人の所にいるのかというと、たまたま妖怪から助けただけだ。

助けた後に名前を聞いてびっくりしたがな。

後俺は仙人として通っている。

~~~~~

「・・・・・・・・」

「ん？」

二人で平和の余韻にひたっていると、俺の携帯が鳴り始めた。  
着メロはネクロファンタジアだ。

ピッ

『オイ聞いてくれよ！！！！藍しゃまをやっと・・・・・・・・』

ピッ

何かだるそうなので切った。

「仁さん、それはなんですか？」

「遠くの人と話ができる仙具だ」

「ほおー」

とりあえず仙具と言つとけばみんな納得してくれる。

~~~~~

「・・・・・・・・」

「おや？」

再び鳴り始めた携帯。

ピッ

『酷いな！なんで切つたんだよ！！神だぞ？』

みんな気付いているとは思うがこいつは俺をこの世界に送った神だ。

「で、何の用？」

『あれ？ちよつと無視しないでよ？俺今文句言つてたじゃん』

「用ないなら切るぞ」

『わゝ、もう用あるから切るなよ!!』

どうせこいつのことだからまた面倒な事言ってきそうだな。
堕神だってほつといたら危なかったし。

『実はさ……魂が一つ輪廻の輪を外れちゃったんだよね……』

「藍倒してハイテンションになったのが原因だろ？」

『……ソ、ソナコトナイヨ?』

「何故カタコトになる」

こいつはいい加減にゲームの進行でいちいち世界に影響を及ぼすのはやめてくれないかな。

しかも今度は輪廻の輪に影響を出すとは……

「で、今度は俺に何をしろと？」

『その魂を閻魔のところに連れて行って事情を説明して』

「……閻魔に説明するくらいお前でもやれるんじゃないか？」

俺とこうやって話を出来てるしな。

『……………とにかく頼んだぞ！！！！』

ピッ

あ、切りやがった。

それと同時にメールがきて、魂の場所だと思われる地図と閻魔のところの座標が書いてあった。

転移して行けという事だろう。

てかこの魂の場所って中国？大陸を指してるな。

「ちょっと出かけてくる」

「どちらへ？」

「三國だ」

三國とは今の中国の呼び名だ。

一刀君達が創り出した国はいまだに残っている。

遣ズイ使も遣三使だったしな。

「……まあ仁さんなら簡単に行けるでしょうね」

この時代は中国に行くまで命懸けなのでこんな簡単に言う奴はまずいないだろう。

「じゃ、行つて来る」

俺は転移魔法を使い、三國にとんだ。

で、三國に着き魂の場所に行つてみると・・・

「おお！！仁！！久しぶりだな！！」

華雄がいた。

・・・まさかこいつとはな。

人の時とは違い、若干色素が薄い気がする。

それ以外は人の時のままだ。

年も変わった感じがしない。

てか霊に年齢とかあるのか？

「まさかお前が霊になっているとはな・・・」

知り合いとは全く思っていなかったからびびった。

「霊という事やはり私は死んでるんだな」

「ショック受けないんだな」

あんまり驚いた感じがしていない。

「死んでしまったものはしょうがないだろ。それで私はどうすればいいんだ？いつまで経ってもお迎えが来ないんだが」

世の中がこんな考えの人ばかりだったら宗教とか生まれなないかもな。

「とりあえずお前は今非常に面倒状況だから、閻魔のところに連れていく」

「私は嘘をついたことがないから舌を抜かれる心配はないな!」

いや、そんな自信満々な顔で言われても・・・

「そういえば仁は死に神だったのか？年も取っていないようだし」

そういえば華雄にはその辺りの事説明してなかったな。

「俺は仙人みたいなもんだ。これは頼まれたからしている」

「仁は仙人だったのか。じゃあ妖術とかも使えるのか？」

「ああ」

俺は転移の魔法陣を展開する。

「おお!!」

これには結構驚いてるな。

俺の転移魔法は二人以上運ぶ時は魔法陣が必要になる。

ちなみに陣の出す光の色は青紫だ。

「閻魔の所に行くからこの円の中に入れてくれ」

「了解した」

俺は華雄が入った事を確認してから転移した。

「着いたな」

転移が終わるとそこは河原だった。

でも空の色が普通ではありえない色だし、なんかおどろおどろしいし、多分ここは普通の川ではなく三途の川だろう。

「ふむ。ここが三途の川というやつだな」

華雄はなんかめっちゃ落ち着いている。

お前本当に少し前まで普通の人間だったんだよな。

「お待ちしてましたよ」

振り向いてその声の主を見ると、彼岸花に囲まれた、緑色の髪の少女が素足で立っていた。

閻魔と真名（前書き）

総合評価も800越えててびっくりしました。

閻魔と真名

その緑色の髪 of 少女は紺色の服とスカートをはいていて、これまた紺色の帽子を被っている。

帽子には金色の装飾が着いている。

そしてよくわからない文字が書いてある卒塔婆みたいな木の棒を持っている。

・・・どう見ても四季映姫・ヤマザナドゥです。

通称は閻魔、俗称は山田。

東方一のお説教好きの方です。

服装とか背はゲームと余り変化がないように思われる。
小町もいるのかな？

「・・・お前は誰だ？」

華雄が若干警戒したように言う。

まあ普通はこんのが閻魔だとは閻魔だとは思わないだろうな。

「私は四季映姫・ヤマザナドゥ。閻魔です」

「な!？」

華雄は目を見開いて驚く。

さすがにそうだとは思わなかったんだろうな。

「とりあえずあなたの現状について説明します」

・・・少女説明中

「・・・つまり私はその神のミスで輪廻の輪を外れたと？」

「そういう事になります。ハア・・・本当にすいません・・・」

そのため息からはいろんな苦勞が伺える。

「苦勞しているんだな・・・」

「それはお互い様ですよ。あなたもあの神にはいろいろ被害を受けているでしょう?」

「ハア……」

なんだろう……

めっちゃ気が合う気がする。

「……なんか話を聞くかぎりロクな神ではなさそうだな」

華雄もなんか悟ったようで苦笑いしている。

「ともかく、今後のあなたの処遇ですが今回は完全にこちらのミスですので自由にしてもらって構いません」

「つまり生きている時と変わらずにいればいいんだな？」

「まとめるとそういう事です」

どうやら華雄は特に問題もなくこの世に留まるようだ。

「てかこんな簡単に話しが決まるんだったら俺いらなくないか」

俺は例の神に事情を説明するように言われてたんだかな。

なんか映姫は既に華雄の事知ってたしな。

「いえ、あなたに連絡があつたのを浄八璃の鏡でわかっていたからスムーズにいきましたが本当だったらもつとごたごたがあつたでしょう」

ちなみに浄八璃の鏡とは死者の生前の行いを映す鏡の事だ。
今の言いようだと普通に現世も覗けるようだ。

ある意味究極のプライバシーの侵害だ。

死人に口無しだから文句とか言えないけどな。

「じゃあ結局あの神は何もしてないのか」

あいつがしっかりしていればこんな面倒な事にはもともとならなかった。

「そういう事です・・・」

映姫もなんか疲れてそうだな。

「私が思うにその神が四季殿に伝えればすんだ話しじゃないか？私
がここに來てすることもないようだしな」

華雄よ。それを言ったらおしまいだ。

「あいつは私と話したら説教されるとわかっているから私の所には
絶対に來ません」

だからあいつ俺に任せたのか。

「そういえば神道仁。あの機械を使ってこちらからあの神に連絡出来ますか？」

あの機械とは携帯の事だろう。
たしかこちらからも通話が出来たはずだ。

「できるぞ」

「では少しの間借りれますか？」

「いいぞ」

説教するんだろうな。
なんかオーラ出てるし、相当鬱憤が溜まってたんだな。

映姫に使い方を教え、渡す。

「……四季映姫・ヤマザナドゥです……はい、閻魔のです……
・神道仁から借りました。それより私は貴方に言いたいことが山ほどあります！！まず貴方は自分が神であることを忘れ……………」

スーパー説教タイムに突入しました。
多分数時間くらい続くな。

「そうだ、仁。頼み事をきいてくれないか？」

「いいぞ。暇だし」

映姫の説教が終わって携帯返してもらうまで帰れないからな。

「私は今回の件で生まれ変わっ・・・この場合死に変わったのほうがいいのか？」

「いや、知らんよ」

何故そんなことに無駄に細かい。
いつもはおおざっぱなのに。

「ともかく、私はこの期に自分に真名を付けようと思う。それで仁に私の真名を考えてほしいんだがいいか？」

「俺なんかでいいのか？」

「ああ、頼む」

うん……

こつこの考えるの苦手なんだよな。

「穿^{セン}つてのはどうだ？自分の意志を穿つ、貫くという意味合なんだがな」

「うむ！直線的な私にピッタリだな！！」

「……直線的って普通自分で言うか？
ま、気にいってくれたならいいけどな。」

「……そもそも貴方は自分の行動に責任を持つべきです！！貴方のちょっとしたミスで大勢の生き物の命が失われるのですからね。それに墮神の時なんかは仁がなんとかしてくれましたからいいものを……」

今だに説教続行中。

「暇だし模擬戦でもしてる？幽霊の状態だといろいろ勝手が違うしな」

まず飛べるしな。

「おお！！それはありがたい！！！！ぜひお願いする」

そういえば華雄って戦闘狂だったけ？

めっちゃ喜んでるよ。

顔が満面の笑みだよ。

「じゃ、華雄行くぞ」

「あー、待ってくれ」

「？」

「私の事は穿と読んでくれ」

「・・・わかった。じゃあ改めて。行くぞ、穿！！」

「来い、仁！！！！」

穿は霊力の才能があったようで霊力は割と簡単に扱えるようになった。

空も普通に飛べるようになった。

ちなみに映姫の説教が終わる頃には日付が変わっていた。

鬼と酒場（前書き）

毎日更新がなかなか辛くなってきたな・・・

更新スピードがいろいろおかしくなるかもしれません。
すいません。

鬼と酒場

「ほお・・・思っていたよりも太くてかたいな」

「ん？穿は見るの初めてなのか？」

「話しには聞いていたが実物を見るのは初めてだな。そういえば話
しに聞かざり苦いらしが実際はどうなんだ？」

「人によるだろうな。まあ馴れたな」

「では物はために・・・」

パクっ・・・シャリシャリ・・・

何故か今の日本にキュウリがあった。
こんなに早く日本に来てたかな？

穿も初めて見るらしいしな。

「フム、意外といけるな。この食感はなかなか新しいな」

「それはよかったです」

鎌足がお茶をすすりながら言う。
キュウリは鎌足が持ってきた。

珍しい野菜が手に入ったと言って見せてくれた。

ちなみに俺と穿はいまだに鎌足の家にお世話になっている。

映姫の所から戻って来て、穿はいくあてもないので俺と一緒にいる。
鎌足は幽霊とわかっていながらすんなりと受け入れてくれた。

やっぱり器が違うな。

それからもう大化の改新は起こった。

歴史どおりで鎌足と中大兄皇子が蘇我氏を倒し、二人が権力を握った。

「いろんな、シャリ、料理に、シャリ、使え、シャリ、そうだな」

「穿は食つか喋るかどっちかにしろ」

「シャリシャリシャリシャリ……」

食う事を選んだようだ。

てかそんなにうまいか？

何の味もついていないキュウリなだけだな。

「あ、仁さんお茶お代わりしますか？」

「頼む。悪いな」

「シャリ、私のも頼む」

……時の権力者にこんな事頼むの俺ぐらいだよな。

「仁……！！！！大変だ……！！！！」

そんな感じでのんびり三人でお茶を飲んでいると一人の少年が文字通り転がり込んで来た。

こいつは中臣不比等。

鎌足の息子だ。

15歳くらいでイケメンの部類に入るが、恐ろしいほど女たらしだ。

顔が整っているためさらに質が悪い。

「どうしたんですか、不比等。騒々しいですよ」

鎌足がお茶を飲みながらいさめる。

てか息子が転がり込んで来たのにえらく落ち着いているな。

「あ、父上。申し訳ありません。でも大変なんです！！鬼がでました！！！！」

「鬼？」

・・・たしかに若干だがこの飛鳥の都から妖力を感じるな。
でもこの大きさは鬼か？

鬼にしては妖力が小さすぎる。

「それ本当に鬼か？あんまりでかい妖力は感じないが」

「本当なんだよ！！酒場に行ったら頭から角が生えた少女と胸のでかい女が酒を飲んでたんだよ！！！！」

「だが町は騒ぎになってないぞ？」

「角を隠しているんだよ！！布を被って隠しているのをちらっと見たんだ！！！！」

「・・・・・・・・」

まあそれなら無くは無いが・・・

「・・・暴れてないなら放っておいていいんじゃないか？」

「えええ！?!」

ぶっちゃけ鬼は面倒臭い奴が多いしな。
会ったら勝負挑まれるかもしれないしな。

「え、いや、でも・・・」

鬼がいて不安なのはわかるが少しは落ち着けよ。

「シャリシャリシャリ、ゴクン・・・なら私が行こう」

穿が名乗り出た。

おおかた鬼に興味があるのだろう。

・・・てか、まだキュウリ食ってたのかよ。

「鬼に興味があるのか？」

「ああ。今の私が人外のもの達にどれだけ闘えるか確かめたい」

立ち上がり、目を輝かせながら言う。

なんで戦闘でそんな目が出るんだよ。

菓子貰った子供みたいなさ。

そういえば穿は結構強くなった。

幽香までとは言わないが、強い部類に入る。

・・・初めて幽香に合わせた時はいろいろ凄かったな・・・
口喧嘩するわ殴り合いするわ、殺し合いするわで大変だった。

トイレから帰ってきたら近くの向日葵が血で赤くなるぐらいやばかった。

ほとんどの血が幽香の下僕だったかな。

閑話休題

「じゃあ俺も行くか」

「なんだ結局仁も行くんじゃないか」

「穿一人で鬼二人を相手にするのはきついだろっからな」

それに俺の予想が当たっていればその二人はかなり厄介だ。

「では、不比等。その酒場に案内してくれ」

穿は己の獲物である斧を担いで言った。

「それじゃあ二人とも頑張って!!」

スゲースピードだな。

不比等は案内が終わると同時に走って帰って行った。

まあいても邪魔になるしな。

「……凄い酒の臭いだな。鬼はこんなに酒を飲むのか？」

今俺らは酒場の外にいるがそれでも酒の臭いが伝わってくる。酒場だから酒の臭いがするのは当たり前だがその臭さが尋常じゃない。

宴会でもしてるのかってぐらいだ。

「飲むぞ。というよりもあいつらは常に酒飲んでいる」

「そんなに酒が好きなのか……話しが合いそうだな」

これ聞いてそう思う奴はそうそういないと思うがな。

「ともかく入るぞ」

「ああ」

俺らは酒場に入って行った。

「おゝゝ、兄様じゃないか！！久しぶり！！！」

「……やっぱりお前だったか、勇儀」

酒場には全身を覆うマントみたいのを着ている勇儀がいた。

……てかフード外すなよ。

ほら、周りの人がお前の角見て驚いてるじゃんか。

「いやゝ、まさかこんな所で兄様に会うなんて驚いたよ」

そう言って笑いながら肩を叩いてくる勇儀。

「お前楓に似てきたな」

楓も昔こんな事してきた気がするな。

「そうかい？」

「その喋り方とか特にな」

「自分ではあんまりわかんないけどね。とりあえず兄様も飲んでい

きなよ！！酒好きだったよね？」

「たしかに好きだが今は状況が掴めていない二人に説明するべきだ」

穿ともう一人のマントを着た奴は首をひねっている。
ちなみにマントを被った奴はフードで顔が見えない。

「あ、悪かったね。スイ香、この人は神道仁。ここまで言えばもうわかるだろう？」

「！ あんたがああ噂の……」

そっさいながらフードをとる。

フードをとると、立派な二本の角が現れた。

「私は伊吹スイ香。いろいろ噂は聞いてるよ」

やっぱり予想は当たってたな。

鬼と酒場（後書き）

俺の携帯スイ香が漢字で出ない・・・

どなたかいい変換の方法知りませんか？

酒と飲み比べ（前書き）

月黄泉さん、キラさん、ケルトさん、九字架さん、萃の字に関して
ありがとうございました。

おかげで萃香とだせるようになりました。

特に月黄泉さんは二回もありがとうございました。

酒と飲み比べ

萃香の格好は白いワンピースに青っぽい感じのスカート。

腰にはベルトを巻き、胸元と髪には赤いリボンが結ばれている。

髪は勇儀と同じような色で萃香のほうが頭いくつつ分も背が小さい。

そして腕とベルトからは鎖がついていて、球と三角錐と立方体のものがついている。

よくみると勇儀の腕にも鎖がついている。

どうやらあれが二人の力を抑えているようだ。

「そっぴいえばその女は一体誰だい？見たところただの人間ではない
ようだけど……」

勇儀が華雄を指差しながら言う。

「仁の女？」

萃香はケラケラと笑いながら言うてくる。
からかってきているようだ。

てか、普通初対面の奴にこんな事言うか？

「な！？ち、違うぞ！！私の名は華雄、ただの亡霊だ！！！」

そして何故お前は顔を真つ赤にして大声を出す。
よりからかわれるだけだぞ？

「そんな大声出しちゃってー。あやしいなー」

「こ、この酔っ払いめ！！」

なんだかんだで仲良くなりそうだな。この二人は。

「こいつは華雄。亡霊だ。いろいろわけあって今一緒にいる」

「亡霊か。初めて見たよ。それにしても兄様には驚かされるね。普通亡霊と生きた人間は一緒にいるなんてありえないよ？どんなわけなんだい？」

「知り合いの神のミス」

「・・・なんだかよくわからないけど、やっぱり兄様は常識に当て嵌まらないね」

勇儀よ・・・それどういう意味だ？

俺が常識からぶっ飛んでいるって事か？

・・・否定出来ないな。

「えゝい、埒があかん！！飲み比べで私と勝負しろ、チビペタ鬼め
！！！！」

「なっ、チビはともかくペタだって！！？胸の事を言ってるのか？
」

華雄は勝ち誇ったような笑みを浮かべ、鼻で笑う。

「その絶壁意外何処をペタと言うのだ？」

「くそー！！牛胸の露出狂め！！」

「ろ、露出きよ！？」

「フン。そんな薄い服と牛胸で死後も男どもを誘惑でもしているのかい？」

「上等だー！！私の酒の強さは並じゃないぞ！！！」

「鬼に酒で勝負した事を後悔させてあげるよ！！！！」

そう言って二人は酒を口にいれるが、何故樽のまま飲む……
普通の奴が見たらそれだけで胸やけしそうな光景だ。

案の定ほかの客達はもう既に全員店を出ていた。

ただ店主が泣きそうな顔をしてこちらを見てくるだけである。

すまん・・・俺は助けられんぞ。

「ハッハッハッ！！あの亡霊も萃香もなんかそっくりだね。見てて面白い」

「・・・たしかにな」

あの二人は同じタイプなのかもな。
似た者同士は喧嘩するっていうし。

「そういえば神と喧嘩したって本当かい？なんでも一人で凄い数薙ぎ倒したって聞いたけど」

「ああ、事実だ」

それを聞くと勇儀は身を乗り出してきた。

・・・顔が近いよ。

「じゃあ兄様の武勇伝聞かせて！まず八咫烏を倒したって本当？できれば詳しく聞きたいんだけど」

なんか喋り方変わってない？

まあなんでもいいけどさ。

「ああ、八咫鳥は倒したぞ。それであの時はな……」

一応諏訪大戦の事は全部話した。
ついでに堕神の事と華雄の事も話した。

「兄様は初めて会ったときと変わらないね。想像の斜め上をいつもいってるよ」

「そついうお前はいろいろ変わったな」

あんな幼女だったのに今では凄い美人になった。
スタイルも半端なくいいしな。

「そうかい？私としてはそんな変わった感じはしないけどね」

「いや、それはおかしい」

こんな変化してるんだから本人でもいくらなんでも気がつくだろう。

「あの、すみません……」

「ん？」

店の店主が話しかけてきた。
多分さつきから話しかけるタイミングをはかっていたのだろう。な
んかチラチラ見てきてたし。

「お連れ様にあのペースで飲まれるとうちの酒が全て飲まれてしま
うのですが……」

「……」

たしかにこの量はヤバイ。
床には空樽がいくつも転がり、もはや空気自体が酒臭くなってる気
がする。

そんぐらいの量をこの二人は飲んでいる。
現在進行形で。

「しゃしゅがは、ヒック、鬼だ、ヒックな。まだつゆぶれ、ヒック、ないとはにゃ……」

「ヒック、あんたもなかヒック、なかやるにえ。人間にしてヒックによくのがもつヒック、たいないによ……」

この店はこの都一番の酒場だ。

おそらく二人は普通の人が一年くらいで飲む量をこの短時間で飲んでいるだろう。

なんか呂律とかおかしいけどな。

「わ、私はヒック、亡霊だー」

「そ、そうにやったね」

「……なんか二人ともおかしくなりそうだな。
ここいらで止めるか。」

「ほらほら二人とも！！酒もなくなりそうらしいからそこまでにな」

勇儀も止めた方がいいと思ったのか、手をぱんぱんと叩き止めに入った。

それを聞いた二人はおもむろに立ち上がった。

「じゃあ、ヒック……」

「ヒック、次は……」

まさか……

「拳で勝負じゃ——！！！！」

やっぱりか——！！！！

二人の拳が互いに互いを殴り、二人とも吹き飛ぶ。
そして店の壁にぶつかり穴が空き、店が半壊した。

店主は涙目だ。

「うおおおお！！！！」

二人が立ち上がって近づき胸倉をつかみ合う。

「・・・・・・・・オイ」

ピタッ

俺のドスのきいた声を聞き、二人の動きを止めた。

「お前どれだけ暴れる気だ？」

その声のまま、俺は二人に近づく。

「え、いや、これは・・・・・・・・あれだ・・・・・・・・つい酒の勢いで・・・・・・・・」

「そ、そうだよ！べ、別に悪気があったわけじゃ・・・・・・・・」

どうやら二人とも完全に酔いが醒めたようだ。

だがそれでもなお俺は二人に近く。

「いい加減に・・・・・・・・」

俺は両手を振り上げる。

「しろ！！！！」

「へうっ！！！！」

二人の頭に拳固が当たり、二人とも揃ったような倒れる。
どうやら気を失ったようだ。

結局俺と勇儀は互いの連れを引きずって帰った。

店？

もちろん弁償したよ。

鎌足が。

鎌足と藤原（前書き）

総合評価が1000を突破？

開いた口がふさがらない。

鎌足と藤原

「どうやら私はここまでのようですね……」

「……気を強く持て。不比等が心配するぞ」

「自分の最後くらい自分でわかりますよ……仁さんだってわかっているでしょう？ 私は老いには勝てません」

「……」

鎌足の命はもう長くないだろう。

病気ではなく、老衰。完全に寿命がきている。

こうなったら俺がどうこうできる問題ではない。

鎌足の自慢の髭は白くなってしまい、顔にシワも増えた。
今では床に伏せ、あまり歩かなくなっている。

ちなみにこの場には俺と鎌足しかいない。
穿は不比等とともに酒場に行っている。

やけ酒だろう。あいつは父親のことが好きだったからな。
そんななか部屋の襖が開き、鎌足の侍女が入ってきた。

「旦那様、実は……帝がお見えになれています……い

がいたしますか？」

侍女は口ごもる感じで言う。

今鎌足は客室で帝を迎える事はできない。

迎えるとしたら布団に入った状態だが、それは無礼だ。かといって追い返すことも無礼だ。

「今から仕度をする・・・少し待っていただけ」

だから鎌足は無理をしてでも客室で迎えようとするだろう。自らの命を縮めてでもな。

それがわかってたから侍女も口ごもった。

「・・・命を縮めるぞ？」

布団から出ようとする鎌足を手で制して言う。

「あの人は今生の別れぐらいしっかり言いたいんですよ」

あの人、つまり今の帝は中大兄皇子だ。

その昔鎌足と一緒に大化の改新を行い、蘇我氏を倒した人物だ。鎌足も思い入れが強い人物だろう。

「ほら、あなたもぼおっとしてないで早く伝えに行ってください」

鎌足がいまだに襖の近くに立っている侍女に促す。

「その必要はないぞ」

「な!？」

「……なんと」

「……」

なんと帝が自ら部屋に入ってきた。

侍女は慌てて平伏し、鎌足は硬直する。

「鎌足……やはり体調はよくないようだな」

「帝、すいません。今から準備を……」

「いいんだ。私はただ一人の友人として来たんだ」

そう言って鎌足を布団に寝かしつける。

「俺は出てる。二人でつゝの話しもあるだろしな」

「すみません、仁さん……」

「かたじけない、仁殿」

俺は二人を残し、部屋をでていった。

「うおおおおお！！！！！　仁んんん！！！！！！　お、お父様は、お父様は！！！！！」

「よし、まず落ち着け」

部屋を出て二人が話し終えるのを待っていると不比等と穿が帰ってきた。

不比等が号泣しながら。

「仁、頼む……お父様を助けてやってくれ……！」

「だからそれは無理だ。人の寿命だけはどうしようもない。例えそれが仙人だろうが神だろうがな」

「じゃあ華雄さんみたいに亡霊にするのは……」

「それも無理だ。穿の場合は相当特殊なんだ」

「ウウ……」

また泣き始めたよ……

そりゃシヨックなのはわかるが……

「さっきからずっとこの調子なのか？」

「ああ、酒場でもこの感じだ」

穿がため息をつきながら言う。

多分穿はいろいろ大変だったんだな。なだめたりとか。

「……仁、俺は決めたぞ……」

「何をだ？」

急に泣き止んだと思ったら、今度は何か覚悟を決めたような声で話し掛けてきた。

「俺はお父様みたいな立派な男になるぞ！！そしてハーレムをきずく！！！！」

「……穿、こいつどのくらい酒飲んだ？」

「なんだよ、俺はそこまで酔ってないぞ！！！！」

「だったら尚更質が悪い」

こいつは一体何を考えているんだ？
これを真面目に言ってるんだっいたら相当頭がやばい感じだ。

「若様、旦那様がお呼びになってらっしゃいます」

「ああ………すぐに行く」

そんな感じ話していたら侍女が来て、不比等を連れて行った。
侍女の雰囲気からしてかなり真面目な話しのようで、不比等もすぐについて行った。

「……やはり鎌足殿はどうにもならないのか？」

不比等達がいなくなると穿が話し掛けてきた。

こいつも鎌足にはいろいろ借りがあるし世話になっているから助け

たいのдарうつ。

「何度も言うが無理だ」

「そうか……」

穿は悲しげな顔をして視線をそらした。

やっぱり俺は小さい。

強い力を持っているとはいえ、所詮この世の理をひっくり返すことはできないんだから。

死にそうな友一人助けられないんだから。

鎌足はその数日後死んだ。

親族達に囲まれながら死んだ。

そして死ぬ前に大織冠と藤原の姓を帝から授かった。

不比等もそれにともなつて姓が藤原になり、藤原不比等になった。

俺と穿は鎌足・・・いや、不比等の家を出た。

こういう時に区切ろうと思ったからだ。

そして俺らはいくあてもないので、近くの知り合いの所に行く事にした。

「と、言うわけでお前の所に来た訳だ。八咫鳥」

「・・・貴殿の考える事は相変わらず変わっているな」

俺らは八咫鳥の所にやって来た。

ちなみに今喋っている場所は八咫鳥の神社の中だ。

「変わってるか？」

「普通知り合いだからと言って神の所に遊びに来たりしないと思う

ぞ？」

そついう穿は供え物の酒を飲んでいる。

「華雄殿・・・供え物の酒を飲むのはやめてほしい」

「・・・これは失礼」

「なんで今間があつた」

穿は渋々といった感じで酒の入った徳利を置いた。

「ともかく来るなら前もって言うてほしいものだ。我にも我なりに都合がある」

「なんか今日まずかつたのか？」

「実は・・・華雄殿、供え物のキュウリを食べるのをやめてほしい」

「こいつはいいから内容は？」

「たく、こいつは少し自重してほしい。」

「他の教えの神が来る」

「他の教え？」

多分仏教だな。

今の日本でこの時代に勢力を伸ばしている宗教は仏教だ。

帝とかも信仰してるしな。

「なんでも天竺で起こった教えらしい」

やはり仏教だな。

天竺とは今のインドのことだ。

「その教えとは仏教のことか？」

「華雄殿は知っているのか？あとさりげなく供え物を懐に入れるのはやめてほしい」

「私は大陸出身だからな。あと少しぐらいいただいたら駄目か？」

「駄目だ」

「……普通供え物貰っていいって聞くか？
どこまで直線的なだよ。」

「それで何て神が来るんだ？」

「毘沙門天だ」

「は？」

仁と毘沙門天（前書き）

なんだこの駄文は？

本当になにがしたいんだ俺は？

仁と毘沙門天

毘沙門天・・・仏教の神で北方を守護するといわれている。
日本では七福神にも入っている。

だが今回それはたいした問題ではなく、一番の問題はここが東方の世界だということだ。

東方で毘沙門天といえば寅丸星が代理として働いていたことを思い出すが、この時期にはさすがにまだ生きてないだろう。

では何が問題なのかというと毘沙門天の性格だ。

この世界では神が普通に存在するが、それは人間のイメージを受けてその姿が生まれる。

・・・知ってるか？

毘沙門天の仏像のなかには鬼を地面に這わせ、その上に立っている
仏像があるんだよ？

知ってた？

とにかくこんな仏像がある時点でSの確率が高い。

Sじゃなかったとしてもぶっ飛んでいる可能性がある。

実際のところその仏像は虐めて楽しんでいたり、鬼を成敗しているわけではないが物事にはイメージがある。

初めてその仏像を見た人間はどう思うだろうか？

まず間違いなくSと感じるに違いない。いや、絶対にそうだ。

少なくとも俺はそう思った。

「仁、どうかしたのか？急に黙って」

結構長く考え込んでいたようで穿が心配そうにこちらを伺ってきた。

「大丈夫だ。問題ない」

「……ん？これどこかで聞いたことあるか？

「それより早くおいとましよう。客が来たら邪魔になるだろうしな」

毘沙門天とエンカウントしたくないしな。
嫌な予感するし。

「それなら大丈夫だ。貴殿も神の一角に入っているしな」

「おいちよつと待て。それ初耳だぞ」

俺が神？何それ？

「・・・なんか仁だとそんなこと言われてもあんまり驚かないな」

穿、それはどういう意味だ？

「自分自身で気付いてないのか？」

「何を」

「貴殿に信仰が集まっていることにだ。貴殿は諏訪大戦の時の戦いぶりから武神の扱いを受けている。ちなみに本社は神奈子達の所にある」

新事実です。

俺知らないうちに神になっていました。
しかも武神です。

・・・どうりで神力が減らないわけだ。
もっと早く気がつくべきだったな。

「だから貴殿がいてもなんら問題はない。華雄殿も神の間では有名だから問題ないだろう」

「私が有名？」

穿が疑問に思い首をかしげる。

「神（仮）が輪廻の輪から外しちまったからだろ」

「なるほど」

こんな事は普通起こらない。
よほどアホなやつがない限りな。

「というわけで毘沙門天が来るまで暇なので我等で飲まないか？」
そう言って八咫鳥は供え物から酒をとり出す。

「おお、八咫鳥殿！！かたじけない！！！」

穿が一番嬉しそうだ。

「なにか酒のリクエストはあるか？」

「一番いいのを頼む」

あつかましな。

・・・これもどつかで聞いた事があるな。
エル○ヤダイだったか？

「ならば此処の地酒を出そう。此処は酒の名地だからな」

そう言つて八咫鳥は酒の中から目当ての酒を探す。

「し、失礼します！！！」

そんな感じで酒盛りの準備をしているといきよいよく戸を開けながら一人の女性が入ってきた。叫びながら。

「・・・・毘沙門天殿か？」

八咫鳥が恐る恐る聞く。

なんかいきなりの来訪にみんな呆氣に取られていたので恐る恐るになつたのだろつ。

ちなみにこの毘沙門天と思われるやつのは見た目は若干くせつ毛がある金色の髪をし、身長とかは紫と一緒にぐらいだろうか。

服は羽織りを一枚羽織っていて、そのしたは薄い服だ。
あとは短パンを履いている。

胸は巨乳だ。そう巨乳。
メロンサイズだ。

そしてなんか顔が赤い。
呼吸も早いし、なんか緊張しているようだ。

「は、はい！！私が毘沙門天でちゅー！！！」

・・・今噛んだ？

あ、なんか顔がさらに赤くなっていく。
まるでトマトみたいだな。

「失礼だが今のは・・・ムグッ！！！」

なんか穿がいらんこと言いそうだったので口をふさぐ。

こういうタイプの奴に突っ込むと確実に状況が悪化するからな。

「とりあえず長旅で疲れただろう。食事と酒を出そう」

「は、はひー！」

八咫鳥は準備をしに裏手に引っ込む。
さすがに空気を読むのがうまいな。

・・・てか毘沙門天さん。
もうちょつと落ち着いてもいいんじゃない？
そわそわしすぎだよ。

何か俺と穿をチラチラ見てくるし。

あ、誰かわからないのか。
だからこちらを見てきたのか。

「俺は神道仁だ。悪いな自己紹介が遅れて」

「いえいえ、そんなことないです」

手をブンブンと振りまさしく全力で否定する。

「って、神道仁んんんんんんん！?!?!?!?!」

ウオオ!

急にピタッと動きを止めたと思ったら、思い出したように叫び始めた。

「し、神道仁ってあの武神の……」

ぶるぶる震えながらこちらを指差してきた。

でもその目に映るのは恐怖な感じはしないな。

「そう言われたりもしてるらしいな」

その途端、手を捕まれて顔がぐつと近づいてきた。

「わ、私ずっと大ファンでした!!!!!!お会い出来て嬉しいです!!!!!!」

そのまた手をブンブンと振られる。

てかファン?

神がファン?

なんだかよくわからないけど、ともかく嬉しそうだな。目がめっちゃ輝いてるし。

「お、おお・・・それはよかった」

俺は軽く勢いに押されながらも喋る。

「・・・神の間では仁はそんなに有名なのか？」

穿が顔を若干引き攣らせながら毘沙門天に尋ねる。

・・・何か怒ってる？

「もちろんですとも！！私も武の神だから特に知ってますけど・・・
ってそういうあなたは亡霊ね華雄さん！？」

今度は穿を見て驚く毘沙門天。

忙しい奴だな。

「私の事も知っているのか？」

「ハイ！！駄神・・・じゃなくて創造神様がミスをした魂として有名ですから！！！」

あいつって創造神だったんだな。

神（仮）から次から直さないとな。

・・・てか今駄神って言わなかった？

俺もそう思う。

「準備ができた．．．．なんか凄い馴染んでいるな」

八咫烏が裏手から膳を持ってやってきた。

今の状況に少し混乱しているようだがそりゃそうだろう。

さっきまでカミカミでめっちゃ上がったた奴が今は穿と握手してブンブン振っているんだから。

「あ、八咫烏さん。ありがとうございます」

どうやら八咫烏に対してももう上がっていないようだ。

「では食事にしようか」

「うう、私だって好きでドジしているわけではないんですよ？なに他の神達はとても厳しいんです……」

食事とは名ばかりの宴会になった。
みんな相当酒を飲んでいる。

特に毘沙門天は泣き上戸だったようでさっきから俺の右腕にくっついて泣きながら愚痴っける。

「……………」

んで左には穿が仏頂面で酒を飲んでいる。
こちらも腕を絡めながら。

ちなみに八咫鳥は酒に弱いようでもう潰れている。

んで二人ともさ。

胸が当たってるんだよ。

毘沙門天の方は多分酔った勢いでやってるんだろうが、穿は絶対わざとだろ。

穿は絶対このぐらいの量の酒じゃ酔わないもん。

ともかく男にしたなら両手に花で嬉しいんだろっけどさ、この板挟みは実際ヤバイよ？

体の半分で空気が違う。

毘沙門天の方はなんか湿っばいけど穿のほうはペリペリしてる。

超いずらい。

「なあ、二人とも」

「・・・それで結局私の、ってなんですか？」

「・・・何だ」

「離れてくれない？俺の酒尽きたからつぎに行きたいんだけど」

今はこうでも行ってこの状況を一秒でも早く打破したい。

「それなら私が酌をしてやるから大丈夫だ」

「お酒もしっかりと確保してあるから大丈夫です!!」

八咫鳥!!

早く起きてくれ!!!

この状況から助け出してくれ!!!

「……それよりお前はいつまで仁にくっついてるんだ。仁が迷惑している」

穿!!

何故この流れで突っ掛かる!!!

「仁さん!華雄さんが虐めて来ます」

いや、顔をぐりぐりしてくるなよ。

ほら、左の方から殺気が出てきたよ。
俺にこれをどうしろと?

てか毘沙門天酒飲んで性格一気に変わったな、おい。

「とりあえず毘沙門天……駄目です!」……は?」

なんか遮られた。

「私のことは葉月はづきと呼んでください」

「それ真名じゃないか？」

神の真名は人間のものよりも大切なはずだ。
その言葉自体に力が宿っているからな。

「いいんです。仁さんに文句を付けられる神はいません!!」

そういう問題なのか？

「じゃあ葉月。頼むから離れてくれないか。主に俺の左腕のために」

穿の奴半端ない力で絡んできやがる。
なんか折れそうで怖い。

「わ、私が横にいたらそんなに嫌ですか？（涙目）」

そんな目で見えるなよ——!!!!
俺にどうしろと？

耐えろというのか？
この状況に？

八咫鳥——!!!!

本気で起きてくれ!!!!

頼むから!!!!!!

「・・・すまん、我ではどうする事もできん・・・」

そんな声が入知れず誰かが呟いたそうだ。

仁と毘沙門天（後書き）

24日より期末テストがあります。

前後一週間ぐらい更新が厳しいと思います。

本当に申し訳ありません。

竹取と不比等（前書き）

テストが近いのに執筆が進む・・・

竹取と不比等

葉月は恐ろしい奴だ。

あれだけの事をやっておいて酔っていた時の記憶がほとんどないとは……

そのくせ真名を授けた事を覚えているんだから質が悪い。

そして葉月は自分の寺に帰り、俺と穿はしばらく八咫鳥の所にいた。

そこで穿を鍛えたり、一応俺も神なので人助けをしたりした。

そのためか神力がまた上がった。
多分信仰が増えたんだろう。

そんな感じで数十年が経った。

その間に壬申の乱が起きたり、都が平城京に移されたりした。

不比等も頑張っているようで大宝律令を作ったりしたらしい。

そんな中、気になる話を聞いた。

なんでも都にはこの世のものとは思えないほどの美しさを持った少女がいて結婚相手を捜しているらしい。

完全に竹取物語だ。

それでその姫つてのは蓬萊山輝夜だろう。

月で大罪を犯したため地上に流された不老不死の少女だ。

そして俺の記憶が正しければ輝夜は月に帰えりたがらず自分を迎えるにきた月の奴らがある人物と一緒にみな殺しにしたはずだ。

その人物とは八意永琳。
数億年前に別れたきりだ。

また会いたいな……

「穿、俺は都に行くがお前はどつする？」

「また急だな。何か用があるのか？」

穿は斧の素振りを止めてこちらに歩いて来る。

俺が座っている縁側までくると俺は冷たいお茶を差し出す。
季節は初夏なので少しくらいの運動でも暑いだろう。

亡霊に暑いとかあるかわからないけどな。

「すまない」

穿は俺から茶飲みを受け取ると一気に飲み干す。

「それで何の用なんだ？」

茶飲みを置き、改めてこちらを見てくる。

「会いたい人がいる」

「……噂の竹の姫か？」

若干穿の顔が険しくなる。

穿は割とヤキモチ焼きらしい。
葉月の一件の後顕著になった。

「正確には違うが、俺の会おうとしている人物に会おうとすると自然と会う事になるだろうな」

「じゃあ誰だ？」

「秘密だ。それよりお前は どうするんだ？ ついて来るか？」

なんか穿は納得してないがしょうがないだろう。
説明すると長くなるしな。

「……ついて行こう。私も暇だしな」

少し考え、手に持っていた斧を背中に担ぎそう言っ。

「それで何時行くんだ？」

「思い立ったが吉日……だ」

八咫鳥と別れを済ませ、二人で都に向かう。

出発するとき八咫鳥と少々もめたがなんとかおさまった。

「一応貴殿も神なのだから一つの場所に腰を据えたらどうだ？」とか言われたが無理だ。

多分飽きる。

「それでどうするんだ？その目的の人物に会えるにはまだ時間があると言っていたが」

「不比等の所にも行こうかと思っている」

穿も飛ぶ事に慣れ、会話をしながらでもスピードを出すことが出来るようになった。

ちなみに今のスピードは時速120キロくらいだ。

「見えてきたな」

やはり飛ぶと早いな。

転移魔法のほうはもちろん早いが、やはり移動している実感に欠ける。

俺は飛ぶほうが好きだ。

さて、不比等は成長しているかな？

楽しみだ。

「ええい放せ、じいや！！私は何が何でも天竺まで行くのだ！！」

「いえ、放しません！！貴方はもっとご自分のお立場をお考えください！！！！」

成長していなかった。

んで、今の状況を説明すると・・・

『おお！！仁、久しぶり！ところで蓬萊の玉の枝って何処にあるか知らない？』

『天竺の方じゃね？』

『よっしゃー！！行くぞ天竺！！！！』

『ちょっとお待ち下さい！！！！！！』

と、いう訳だ。

ちなみに今不比等を止めている奴は鎌足の生きていた時からいて俺達とも顔見知りだ。

「ちょ、仁殿と華雄殿も見えてないで旦那様を止めるのを手伝ってくださいよー！！」

「とりあえず何で不比等はそんなに蓬萊の玉の枝を欲しがっているんだ？」

「よくぞ聞いてくれた！！！！」

おいおい、急に動きを止めるなよ。
ほら、じいやこけたぞ。

だが不比等は俺達の方に身を乗り出して来た。

「実はあの竹の姫に……………」

貴族説明中……………

まとまると不比等はかぐや姫に求婚したところ蓬萊の玉の枝を持って来るように言われたため、そのありもしない物を探していたらしい。

まあ、わかってたけどな。

てか、そんなもの探しに天竺に行こうとするとか凄いな。
アホすぎる。

「ともかくそういう訳だから私は天竺に行く」

「いい加減にして下さいよ！！その間貴方の仕事はどうするんですか！！だいち貴方は既に妻がいるでしょうが！！！！」

……………妻がいるのにその執着ぶりかよ……………

たしかにこの時代は一夫多妻制だがそれはやり過ぎだ。

「大丈夫だ。あいつらならわかってくれる」

「『あいつら』ってもう何人も妻がいるのか!？」

これには穿がくいついた。

でもこいつだったら妻の4、5人くらいいても驚かないがな。

「ああ。12人いる」

「な!?!」

前言撤回。多すぎだ。

・・・なんか穿がプルプルしてる。
地雷踏んだな。

「不平等!!貴様という奴は!!!!」

「あいた!!」

穿の拳が不平等の頭に落下し、不平等が頭を抑えうずくまる。

「いいか！！お前はそんな軽い気持ちかもしれないが女性はお前の事を大事に思っているものなのだぞ！！！」

「華雄さんが仁を思っているみたいに？」

「オイオイ・・・。」

何火に油注いでるんだよ。

「なっ！？？ふ、不比等おおおおお！！！！！！！」

穿は背中に床に置いていた自分の斧を掴み不比等に切りかかる。

「ちょ、それ洒落にならないって・・・ああああああ！！！！！！！！！」

「待て、逃げるな！！叩つ切つてやる！！！！！」

「華雄殿、室内で暴れないで下さい・・・・・・。」

あゝあ。みんな走って行っちゃったよ。
不比等も変わらないな。

「あ、あの……」

ん？

気がついたら黒髪の少女が近づいてきていた。
もちろん着ているのは着物だ。

年は14、5歳くらいか？

「何か用か？」

「あ、えつと……貴方はおとう……旦那様と仲がいいんですか？」

なんかしどろもどろしているな。

それに気になる単語言いかけたし。

「仲がいいっちゃいいな。それで君は？」

「ここの従者をしている妹紅といいます」

なんと！？

妹紅と血（前書き）

勉強の息抜きに投稿。

感想、指摘お待ちしております。

妹紅と血

これが妹紅！？

丸っ！？

もつと言葉遣いが荒かった気がするんだけどな。
髪もたしか白かったはずだけだな。

いや、あれは不死になってからか？

「それで妹紅ちゃんは何の用があるのかな？」

とりあえず動揺が悟られないように落ち着いた声で言う。

ん？ちよつとムツとした顔になった？

「なんか子供扱いしてません？」

あゝ、なるほど。

そういうわけね。

「悪かった、悪かった。じゃあ妹紅は何の用で俺に話し掛けたんだ？
？こんな感じでいいか？」

今度はちゃん付けせずに、くだけた感じで話す。

お、満足した顔になった。

たしかにこの時代ならこの年で十分大人なんだよな。

「はい、それでいいです。それで用というのは・・・」

妹紅が話そうと口を開くと・・・

「仁んんん！！助けて！！華雄さんに切り殺される！！！！」

不比等が俺に抱き着いて、助けを求めてきた。

・・・間が悪。

何か妹紅も話そうと口を開けたまま固まってるし。

「えゝい、不比等！！さつさと仁から離れろ！！」

「だが断る！！離れたら華雄さんは切り掛かるじゃん！！！！」

「当たり前だ！！！！」

「華雄殿、落ち着いて下さい！！襖を何枚壊す気ですか！！！！」

・・・お前ら騒ぎすぎだ。

妹紅が固まるを通り越して呆然としている。

そして穿。お前どれだけ暴れた？

なんか今の一瞬で乱闘があつた後みたいになっているぞ？

そしてじいやはもつと主人の心配をしるよ。

何故穿への注意が襖に関してなんだよ。

たしかに金額は馬鹿にならないだろうけどな。

「とりあえず不比等は俺から離れろ。邪魔」

妹紅と会話してたところなんだよ。

「仁！！それは俺に死ねって言ってるのか！！！」

「そうじゃねえよ。今ちようど会話中だったから邪魔なだけだ。」

大袈裟な奴だ。

穿が本当に殺すわけ・・・やっぱりあんまり否定出来ないかも。

「会話中？あ、妹紅じゃん」

不比等が呆然としている妹紅に気がついた。

「ハッ！！す、すみません旦那様！」

妹紅は慌てて平伏しようとする。

「ああ、いいいいよそんなの。親子なんだし」

不比等は手をひらひらさせながら軽く言う。

だが妹紅の目が見開かれる。

「だ、旦那様！！それは人前で言つては……」

「……相変わらず不比等は頭のネジが何本か抜けてるんじゃないか？」

こんな秘密みたいな事簡単に言っているのか？

妹紅めっちゃうるたえてるし。

てか二人は親子だったのかよ。

そういえば妹紅の名字は藤原だったな。

「大丈夫、大丈夫。この二人なら平気だ」

「何か訳がありそうだな」

「よくぞ聞いてくれた！！実は十数年前に・・・」

そう言つて説明を始める不平等。

てか、またこのパターンか。作者もひねりが無いな。

貴族説明中・・・

まとめると、不平等がとある町娘に一目惚れをしそのまま関係をもち子供ができた。

しかし不平等は貴族。

そういつた事が露呈すればいろいろまずいので隠しているそうだ。

もとい不平等はその女性や妹紅を実際に家族として迎えようとしたがさすがにそれは周りの人間が止めたらしい。

ちなみに妹紅の母親は既に病死。
だから不比等が引き取ったらしい。

もちろん不比等との関係は秘密にしてあり表向きは従者としてあるらしい。

「・・・なんというか」

なんでこいつはこう後先を考えないんだろうか？

「身分の差にもめげずに己の思いを貫いたところは評価できるな」

穿、それは違う。

ただ単にアホなだけだ。

「ともかく俺らが誰にも言わなければいいんだろ」

「え？」

いやなんで妹紅がそんな意外そうな声を出すの？
なんか衝撃を受けた顔をしている。

「い、いいんですか？私の血の半分は賤しい身分の血なんですよ？」

「で？」

「それがどうかしたか？」

言いたい事はわかるが別に俺はそんな事を気にするほど小さい人間ではない。

穿も同じようでは何食わぬ顔をしている。

・・・多分妹紅が言いたい事がまずわかっていないだろう。

まあどちらにせよ気にはしないだろうがな。

「え、いや、でって・・・」

「大丈夫だ妹紅。この人達はそんな小さい事を気にする人達じゃないよ」

優しい微笑みを浮かべながら妹紅の頭を撫でる不比等。

・・・不比等は実際いい奴なんだよな。

馬鹿正直だけど。

「だからそんなに自分を蔑むな。お前の体には私と綺麗なお母さんの血しか流れてないよ」

「お父様・・・」

不比等はそつと妹紅を抱き寄せた。

妹紅の頬には一筋の涙が流れていた。

「お見苦しいところをお見せしました・・・」

落ち着いた妹紅が自分のしていた事に気づき、顔を赤面して俯いている。

なんだか微笑ましい。

「そついえば妹紅は結局俺に何の用だったんだ？」
いろいろあつてすっかり忘れてた。

「それはもういいんです」

妹紅は曇りない笑顔で言う。

多分不比等の事に関する事を聞きたかったんだろう。

大方最近かぐや姫に熱中していて構ってくれなかった父に対して不安に思っていたんだろう。

自分は愛されているかどうか。

実のところ自分は父になんとも思われていないんじゃないか。

みたいなな。

それで俺に探りをいれて欲しかったってところか？

ま、不比等はあんな感じだから杞憂だろうな。

「ん？なんだ妹紅。何か悩みがあったのか」

「はい。でももう解決しました！」

「？」

不比等は何かわかっていないみたいだが妹紅は嬉しそうだからいいか。

「旦那様！！一大事ですぞ～～！！！！」

あ、じいやが走って来た。

途中からいないと思ったらどこか行ってたんだな。

「一体どうした？」

不比等もただならぬものを感じたのか真面目な顔になる。

「蓬萊の玉の枝が見つかりました！！！」

「な、何！！何処にだ」

「なんでも天竺からの商人が持っていたそうです」

「よっしゃー！！！！」

怪しすぎだろ……

なんでそんな伝説の宝を商人が持ってるんだよ……

「水差すようで悪いが……」

「急げじいや！！買って来い！！！！いくらかかっても構わないぞ！！！！」

「承知しました！」

「妹紅！！姫の所に行く準備を手伝ってくれ！！」

「は、はい！！」

……何言っても無駄だなこりゃ。

「ふむ。蓬萊の玉の枝とは売っているものなのだな。世界は広いな」

お前も疑わないのかよ……

「はぁ・・・」

俺は軽いため息をして歩きだす。

「何処か行くのか？」

「ちよつと散歩だ」

とりあえず他の奴らがいろいろと心配だがまあいい。
なんか歩きたい気分だ。

気付いたら夜だ。

どれだけ俺ほつつき歩いてたんだよ・・・

ともかく今日は満月だ。

どうしてもぼーっと眺めてしまふ。

・・・永琳に会えるのかな？

できれば明にも会いたいな。

結局あいつは神道を名乗っているのかな……

……今気が付いたが明が世界で最年長の妖怪か？
強くなってるのかな？

ん？なんかあつちに大きな屋敷があるな。

珍しいなこんな都の外れに。

……もしかしてこれが輝夜の屋敷か？
なんかあつちの方に竹林あるし。

よし、ついでに会って行くか。

そう思い屋敷の周りを囲む塀によじ登る。

よじ登るり屋敷を見渡すと中庭の所で月を見ている長い黒髪の少女
がいた。

あれが蓬萊山輝夜だな。

たしかに美人だな。

そして俺は気配を消し、輝夜の後ろまで行った。

「月を見て故郷を思い出すか？月の民よ」

輝夜と詐欺（前書き）

タイトルもさることながら中身も微妙です。

輝夜と詐欺

輝夜の着ている服はもちろん和服だ。

だがなんか下はスカートっぽいし胸元にはリボンが付いていて時代が混ざっている感じだ。

髪は綺麗な黒髪で目も真っ黒だが、その目には困惑の色が浮かんでいる。

まあたしかにいきなり人が現れたら驚くよな。

それにしても月人ってのは地上の人間と感じが違うな。
なんというか……純粹？

靈力に淀みが無いっていうか？

昔からこんな感じだったかな？

「……月の民って一体何の事かしら？ だいたい貴方は何者？ ただのこそ泥ではなさそうね」

ようやく輝夜のフリーズが治り話し始める。

にしてもシラを切るか。
まだ誰にも言っていないのか？

「俺は神道仁。ただの人間だ」

「！・・・なるほど貴方が・・・」

え？

俺の事知ってる？

たしかに月に知り合いはいるけど、そんな知られるもんか？

・・・そっぴや輝夜って永琳の教え子だったか？
だったら永琳から聞いたのか？

「だから私が月人だってわかったのね。それにしてもまだ生きていたなんて驚きだわ」

「俺の事知ってるのか？」

「もちろん。貴方月では有名なもの」

・・・なんか俺って知らないところどころでいろいろと有名になってるな。

「その昔、何万人もの月の民を自らの命と引き換えに救った伝説の英雄。だいたいそんな感じで知られてるわ」

たしかに事実だがな・・・

「それに私は永琳や明からも聞いたわ。仲良かったんでしょ？」

「・・・これはまた懐かしい名前聞いたな。二人を知ってるのか？」

その名前を音で聞いたのは数億年ぶりだな・・・

「ええ。永琳には一時期勉強を教えて貰ってたし、明ともよく遊んでいたしね」

二人とも聞く限りでは元気そうだな。

「そういえば永琳は貴方に会ったために必死だったわよ。私の『永遠と須臾を操る程度の能力』を研究して貴方と同じだけ生きられるようにしたり」

・・・その研究の成果が蓬莱の薬か。
まさか誕生にそんな秘密があったとは。

ちなみに輝夜の『永遠と須臾を操る程度の能力』は……説明が面倒だ。

簡単に言えば『永遠』は人間が干渉出来ない長い時間で、『須臾』は人間が感知出来ない短い時間だ。

ともかく人の手に負えるものではない。

「あいつそんな事してたのか……」

「思われるって良いわね」

……なんだそのニヤニヤした顔は……
別に永琳とはそんな関係じゃないぞ？

たしかにかなり長い時間一緒にいたがな。

「それはそうとなんでお前は地上にいたんだ？」

なんか話しがヤバイ方向に行きそうだったので逸らす。

「……逃げたわね？」

「何の事やら？」

「・・・・・・・・」

何だよその不安そうな目は・・・

お前もSか？ Sなのか？

「・・・・ハア、まあいいわ。私が地上に来たのはその永琳の研究成果の薬を飲んでしまったからよ」

「薬？」

「それは蓬萊の薬って言って飲むと不老不死になるわ」

まあ、知ってたけどな。

「それで私は月の重役が飲む分を飲んじゃったのよ。それで地上に流されたの。まあ地上でも薬の効果があるかどうかの実験でもあったでしょうね」

「お前結構凄いことやってるな・・・・」

月のお偉いさんのもの横取りするとか度胸あるな。

「退屈だったのよ。それよりも貴方の話しも聞かせてくれない？ 今も結構暇なのよね」

そういえば輝夜が求婚者達に無理難題を言ったのって単なる暇つぶしだったけ？

当の本人達にはいい迷惑だな。

「そうだな・・・じゃあ神の話してもするか」

「神？」

お、結構興味ありそうだな。

表情はあんまり変わらないが目が少し変わった。

「そ、神。あれは地上にまた人間達が生まれ・・・」

「やっぱり長く生きてるといろいろ面白いことがあるのね」

輝夜はなんか満足そうだ。

話しの中盤からは身を乗り出して一心不乱に聞いてたしな。

「長く生きてるだけじゃなくて自分から動くことも大切だけどな」

堕神とか穿とかの時は巻き込まれたけどな。駄神にな。

「ふ〜ん・・・それにしてもやっぱり地上は良いわね。月に帰りたいくはないわね」

なんか俺の言葉はあんまり聞いてないみたいだな。

「月に帰るのか？」

これまた知ってたけどな。

「そうなのよ・・・一ヶ月前に連絡がきて罪が許されたから月に帰って来い、ってね。まあ元々こうするつもりだったんでしょうけどね」

そう言っただけで輝夜は肩をあげる。

実験みたいなものとも言ってたし、罰といっても形だけなんだろう。

「やっぱり逃げちゃおうかな・・・。後一ヶ月くらいしたら迎えるも来ちゃうし」

「逃げるなよ。だいち迎えの奴らがそのまま探すだろ」

「じゃあ迎えの連中をどうにかしないと・・・」

なんか危ない事考えてるな・・・

・・・もしかしてこの考えから例の行動を写したのか？

「とりあえずもう夜明けになるから俺は帰るぞ」

「えゝ帰るのゝ。私暇になるじゃないの」

「お前の都合でものを言うな」

なんて我が儘な奴なんだよ。

「じゃあまた来てくれない？夜だけでいいわよ」

「何故上から目線なんだ。気が向いたらまた来るよ」

そう言っただけ俺は気配を消して帰る。

月はまだ沈み、東の空がしらみ始めていた。

「うわああああああん！！！！恥かいたあああああああ！！！！」

「お、お父様！！元氣を出して下さい！！！！」

・・・誰が泣いてるかって？
不比等だよ。

状況を説明すると不比等が部屋の中央でうずくまって滝みたいに涙を流している。
それで妹紅が不比等を慰めている。

ちなみに時間的には俺が輝夜のところから帰ってきた翌日。
不比等が輝夜に買った蓬萊の玉の枝を持っていて帰ってきた後だ。

なんでこうなったかはもうみんなわかっていると思うが一応説明しておく。

大金はたいて蓬萊の玉の枝を買う。

←

輝夜に持つて行く。

←

ただ輝夜の屋敷にそれを作ったという職人達がやって来て金を払えと言われる。

←

不比等はそれを知らない。

←

騙された事に気がつく。

←

輝夜に馬鹿にされる。

←

馬鹿なの？死ぬの？

←

今に至る。

不比等も散々だな。

商人に金払ったのに職人達にも金払ったんだからな。

職人達は商人に藤原不比等から頼まれたと聞いており、金も不比等から貰えと言われてたらしい。

あくどいよな、その商人。

商人と言えば今穿がめっちゃ金が入って大陸に逃げよとした某商人を祟りに行っている。

凄いや穿は？

あれでも一応亡霊だから呪いやら凄いや？

まあこの話とはなんの関係ないけどね。

ホントだよ？

「大丈夫ですよ！！お父様は普段からあれですから今更何も思われませんか！！！」

・・・それ慰めてる？

妹紅、それを本気で慰めに言ってるんだったらやばいぞ？

「そうだな!!今更気にしたってしょうがないよな!!!!」

「そうですよ!!!!」

立ち直り早っ!!

てかあれで立ち直るのかよ。

「よし!!じゃあ張り切って今度こそ天竺行くぞ!!!!」

「何故そこに戻る」

数週間後にとある商人が自殺した。

なんでもこの世の不幸という不幸がこの数週間で一気に来て財産も何かも失ったらしい。

俺は知らないよ？

ホントウダヨ？

輝夜と詐欺（後書き）

感想をくれてやるという心優しい人がいらっしやいましたら感想を下さい。

それによって作者の更新スピードが変わります。

多分・・・

月人と再会（前書き）

急ぎすぎましたね、ひどいミスがありました。

さっきの投稿から三件感想をいただきました。
ありがとうございます。

ちょうど私が書きたかった所だったのもあり、
今日中に更新できました。

月人と再会

不比等が輝夜に求婚してから一ヶ月が経った。

その間にも輝夜に求婚する人はいたがことごとく散っていった。

ある者は竜の首の玉を求め海に出て嵐に遭い、またある者は燕の子安貝を求め木から落ちた。

ともかくみんな災難だった。

不比等は不比等で今だに諦めていないらしく、事あるごとに天竺に行こうとしている。

この前なんか妹紅が教えてくれなかったらやばかった。
まさかあの短時間で港まで行くとはあいつは人間か？

距離は正確にはわからないがここは奈良県。内陸部だ。
一日もかからず沿岸にいかれてる。

かぐや姫は天人で八月十五日に天に帰ってしまう。

そんな話しが都中で噂になったのはその頃だった。

「戦じゃああああああ！！！！！！」

「うるせえよ！！」

今俺の目の前には鎧で完全武装した不比等がいる。
手には薙刀を持ち、背中には矢を入れる筒を背負っている。

「これがいてもたってもいられるか！！！！かぐや姫を拉致しようとする天人など私が一人残らず追い返してやるわ！！！！」

武装している理由はもちろんかぐや姫を連れていかせないためだ。

「天人が女だったら？」

「平和的話し合いで帰ってもらおう」

「……………」

心配だな。

こいつじゃなくて天人が。

もし女だったら気分を確実に害す。

「よし！！ともかく行ってくる！！！！」

ちなみに今日が八月十五日。

輝夜に迎えが来る日だ。

まだ朝早くだがこいつは輝夜の屋敷の門を寝ずの番をするらしい。

「お父様……本当に行くのですか？」

「大丈夫だ、妹紅！！私は必ず勝つ！！」

いや、妹紅が心配してるのはそこじゃない。

心配してるのはお前の安否だ。

全く、なんでお前からこんなできた子が生まれたんだか。

「……わかりました。無事に帰ってきてくださいよ？御武運をお祈りしております！！！」

本当に妹紅はできた子だな。

「もちろんだとも！！それではさらば！！！」

不比等はそう言い残して去って行った。

「……仁さん、お父様は大丈夫でしょうか？」

顔が暗いな。

こいつはよほど不比等が好きなんだな。

「きっと大丈夫だ。あいつは殺さたって死なないだろ。とりあえず家に入るときな。朝飯の用意があるんだろう？」

妹紅はたしかに屋敷の主人の不比等の娘だが立場は使用人だ。だから当然雑務もこなす。

「あ！そうでした！！それではお先失礼します」

妹紅は俺に一礼して慌てて屋敷に入って行った。

「それでどうするんだ？お前が会いたい者らはそのお迎えの中にいるかもしれないんだろ？」

いつの間にか穿が隣にいた。

やはり亡霊なので気配を消すのがうまい。

最近では俺もぼーっとしていると気づけないレベルまで成長している。

ちなみに穿には永琳達の事を話した。

月に人がいることになんか驚いていたが、割とすんなり受け入れてくれた。

「もちろん行くさ」

「まだ行かなくていいのか？」

「おそらく来るのは夜だ。今夜は満月だしな」

竹取物語でもそうだったしな。

「なるほどな。それでお前は暴れないのか？輝夜とやらは地上にいたがっているのдар？」

「状況しだいだ」

それは本当に状況しだいだ。

もし明が敵になるようだったら俺は確実に戦わない。

「もし戦うなら遠慮なく言ってくれ。手をかす」

己の獲物をにぎりしめながら言う穿。

でもお前は多分暴れただけだろ。
言わないけど。

「頼りにしてるよ」

夜になった。

俺と穿は気配を消して輝夜の屋敷にいる。

おそらく門の前には不比等がいるだろう。

そして屋敷の周りは今の帝が送った兵が取り囲んでいる。

その数二千。

本当に戦争でもするのかよ。

てか帝までたぶらかすとか輝夜も凄いな。
噂では帝を泣き落としたらしい。

んでもって屋敷の中には翁が個人的に雇った傭兵達がこった返している。

中には盗賊みたいな奴らもいる。

とりあえず数だけ揃えたのだろう。

だがこれだけでも月の迎えに勝てないだろう。
装備のレベルが違う。

俺がいた時でさえ百人たらずでこの程度の人数ならば返り討ちにしてみようだろう。

「牛車が見えるぞ！！敵だ！！！」

外にいた誰かが叫んだ。

それを聞き、その場の全員が身構える。
翁でさえ自前の槍を構えている。

ちなみに輝夜は従者に部屋の奥に連れていかれた。

そしてみるみる牛車は近づいて来る。
牛車は全部で三台。割とでかい。
一台に四、五十人ぐらい乗れるだろうか？

そして牛車が兵達が攻撃できる範囲にまで近付いたとき、
時が止まった。

だが俺や穿は動けるし牛車も動ける。
どうやら止まったのは兵達だけのようだ。

「な、なんだこれは!？」

穿が相当動揺している。

キヨロキヨロと周りを見てなんとか状況を確認しようとしている。

「これは輝夜の能力だな。おそらく俺達以外の時間を止めたんだな」

「……………」

「つまり俺達や月人以外動けないってことだ」

「なるほどそういう事か」

そうこう話している内に輝夜が牛車の傍まで行き…………乗った？

どういう事だ？

やけに大人しいな……

「なんだ？随分大人しく乗ったな」

穿も疑問に思っているらしい。

「いや。あいつがそんな簡単に……………」

その時輝夜が乗った牛車が爆発した。

そして爆風から輝夜と三人が出てきた。

一人は間違いなく永琳だ。間違いはない。

もう一人は……明か！？
随分大きくなつたな。

永琳と変わらないぐらいの身長だ。

髪は幽香ぐらいの黒髪で着ているのは着物だ。

輝夜と違い完全に着物だが、永琳みたいに色が真ん中で二色に別れている。

まさかそこを受け継ぐとは……

最後の男は……誰だ？
思い出せん。

まあ見方みたいだからいいか。

とりあえず明もこちら側みたいだな。

よし、暴れるか！！

「行くぞ、穿。それからさっき出てきた三人は見方だ。間違っても攻撃するなよ?」

「了解した!!では、早速行くぞ!!!」

穿は斧を後ろに構える。

「破国斬!!!!」

一気に振り切り、衝撃波を飛ばす。

それは牛車の一つに当たり、真つ二つにした。
そして牛車は爆発した。

いきなりの攻撃に輝夜達は驚いていたが、永琳は一人涼しい顔をしていた。

「……俺が来るって読んでやがったな?

とりあえず挨拶しに行くか。

転移魔法を使い、あいつらの所まで行く。

「よっ、久しぶりだな」

「「「!!!!」」」

いきなりの俺の登場に永琳以外が驚く。

てか近くで見て思ったが明綺麗になっ たな。

そして男を思い出した。
隊長だ。

この銀のジャケットは間違いない。

「お……」

お？

しかも明の顔がどんどん泣きそうになっていく。

「お父様!!!!!!!!!!!!!!」

「お父様!？」

あれ？

俺なんか明にとんでもない呼ばれ方してるよ？

しかも抱き着かれてるし。

「ずっと会いたかった!!!!!!この日をずっと待ち望んでいました
!!!!!!」

明の声は涙声だ。

抱き着かれて顔は見えないが泣いているのだろう。

「あら、手伝ってくれるなんて以外ね。それよりもよく私達の行動
がわかったわね」

輝夜がさも以外そうに言う。

「あんな会話すればわかる。それに会いたかった奴らもいるしな」

俺は今だに抱き着いてヒクヒク言わせている明を見た後、俺が
この世界で初めてあった人物を見る。

その人物は微笑を浮かべながらこちらを優しく見つめていた。

「久しぶりだな、永琳」

「久しぶりね、仁」

俺らはそのたった一言だけで充分だった。

明と幻（前書き）

とりあえず昨晩中に再び更新を期待していた方はすいません。二回が限界でした。

明と幻

空には満月があり、星が輝いている。

それは太古の昔から変わらない。

今日の星もあいつとずっと前に見た時と変わらずに輝いていた。

「なんだ、意外とさっぱりした感じね。私は永琳が明みたいな感じになるのを期待したのに……」

なんで輝夜はそんなに不満そうなんだよ。

でもそんな永琳も見てみたいかもな。

「今はそれどころではないですよ、姫？今は迎えを何とかしなければ」

永琳がやゆすように言う。

輝夜も見た目以上の年だろうが、永琳にかかれば子供みたいなもんだな。

俺からしてもただけだな。

「あのー、仁さん？一応私も久しぶりなんですけど……」

あ、隊長のことすっかり忘れてた。
てかお前よく生きてたな。

「悪い悪い。にしてもお前よく生きてたな。めっちゃ早死にするイメージあつただけだな」

「怖っ！！なんですかそのイメージは！？って姫もなんでそんな顔しているんですか！！」

「たしかにザコキャラのイメージがあるわよね」

「え、永琳殿まで……」

あゝあ、落ち込んだじゃったよ。
俺らのせいだけだな。

「そつえばお父様。あの斧で切り掛かっているのは誰ですか？」

明が落ち着いたのか、穿を指差しながら尋ねてくる。
でもまだ若干鼻声だな。

てか明は一体いつまで抱き着いているつもりなんだ？

「あいつは華雄。俺の仲間だ」

真名は本人に許されなければ言うてはいけないので教えない。

それより穿凄い暴れてるな。

まさしく無双状態だ。

「じゃあ彼女に攻撃を当てないようにしないとね」

永琳が弓を手に持つ。

「ほら、俺らも戦うぞ。あいつだけではそろそろ限界だ」

俺らが話してる間抑えただけでも充分凄い。

「明も離れてくれないか？」

さすがにこの状態では戦えない。

「……………（うつるうつる）」

な、何故それだけで涙目になる！

上目使いをやめろ！

じっと見つめるな！！

「明。会えて嬉しいのはわかるけどそろそろ離れなきゃだめよ」

何か永琳は明の母親みたいだな。

「……………ハイ……………お母様」

そう言っただけから離れる明。

やっぱり明にとって永琳は母みたいなもんなんだな。

服も永琳みたいな感じだしな。

……………ん？

俺↓お父様

永琳↓お母様

イヤイヤイヤイヤ・・・・

「なあ明。俺と永琳の呼び方って・・・・」

なんかいろいろとまずいだろ。
俺まだ結婚もしてないよ？

「？ お父様はお父様ですしお母様はお母様ですよ？」

いや、そんなさも当然みたいに言われてもさ・・・・

「あら、何か問題があつたかしら？」

そう言つてニコツと笑う永琳。

・・・・お前の仕業か・・・・
明に何を言つたんだよ・・・・

「はあ・・・・まあいい。俺もさっさと行くぞ」

言うだけ無駄な気がするからもうやめよう。

ちなみに輝夜と隊長はもう穿と共に戦っている。
にしてもやっぱり隊長弱いな。

どう見ても足引っ張ってるよ。

「じゃあ行きます！！お父様！！私の力見ていてください！！！」

明が手を挙げると計十発の弾幕が空中に現れる。

「行け！！困惑八方弾！！」

明が振り下ろすと十発全ての弾が打ち出される。

十発だけなら月人達にとっても問題ないだろう。

しかし弾が全て途中で増殖する。一個がだいたい百個ぐらいになった。

いや・・・これは増えたんじゃない・・・

「幻か」

どうやら最新の十発以外は全て幻みたいだ。

しかもただの幻ではない。

幻が実態になり、実態が幻に変わっている。
だが実態の数は十個を越えていないようだ。

「そうです！！私の『実と虚を操る程度の能力』を使って創り出しています」

成る程能力か。

つまるところ弾の実と虚を操って実態を幻に変え、幻を実態に変えているんだな。

これは恐ろしいな。

幻覚だと思っていたものが急に実態をもつんだからな。

幻覚を見破れる奴ほど苦労するだろうな。

事実月の奴らはたった十発しか実態がないのに、なまじ幻覚を見破れるために混乱し自爆している。

「・・・成長したな」

やはり会っていなかった年月の長さを感じるな。

見た目とか依然に中身や能力。

その変化が時間の経過を教えてくれる。

なんか俺じいさんみたいな事考えてるな・・・

実際じいさんだけだな。

「幻惑摩天楼!!」

俺の弦きは明には聞こえなかったみたいだ。

明は追い打ちとばかりに新たな技を使う。

・・・どうやらこの技は幻覚でその人感覚を狂わすようだ。

さつきから自分から弾に当たりに行く奴や、全く動けなくなる奴が続出している。

・・・さて、俺も行くか。

俺は自分の周りに七つの弾幕を出す。

そして俺の得意技を繰り出す。

「溢れ出す欲望」

数えきれないほどの砲撃が月人達を襲う。

「全く・・・あんな凄い攻撃出来るなら私達が戦う必要なかったじゃない・・・」

「姫はこういう時に動かないとずっと籠りっぱなしだからいいじゃないですか」

「さすがはお父様です！！あんな広範囲攻撃が出来るなんて！！！」

「たしかに凄いが私としてはもっと戦いたかったんだがな……」

「仁さん？なんか私に一発砲撃が掠ったんですけど……」

結局あの一撃が決定打となり、月人達は全滅した。

誰がどのセリフかは言わずともわかるだろう。

ちなみに最後の奴はわざとではない。
さすがに戦闘中はふざけない。

「とりあえずこれからの事を話し合おう」

これだけの事をしたんだ。月から追つての一人や二人くらい来るだろう。

だから逃げるなり、隠れるなり対策をとっておいたほうがいい。

「そうね……じゃあいくつかに別れて逃げましょう。三つぐらいがいいかしら？」

「ならばちょうど二人ずつで別れられるな。……そういえば自

己紹介がまだだったな。私は華雄。亡霊だ」

そういえばまだしてなかったな。

「私は八意永琳よ。よろしく華雄」

「こちらこそ頼む」

そう言つて二人は握手する。

「それでこつちが蓬萊山輝夜に神道明」

「神道？」

明は俺と同じ名字を名乗っているんだよな。

「明は仁に名付けられたから神道を名乗っているのよ。それから最後の一人は隊長よ」

「……随分変わった名前だな」

「本名は別にあるけど発音が地上の人間ではできないから隊長と呼ばれているわ」

永琳や輝夜は出来るだろうがな。
でも昔は俺が隊長って呼び出してからみんな隊長って呼んでたんだ

よな。

「隊長つて本名が隊長じゃなかったんだ・・・」

なんか明が驚いているがスルー。

「じゃあ自己紹介も終わったところでどう別れる？」

「こんなのはどうぞ・・・」

「！！ 輝夜！！危ねえ！！！！」

「！！？！！！！」

なんだ！？

いきなり輝夜の後ろの空間が歪んだと思ったらいきなりナイフを持った男が現れやがった！！！！

ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ!!

あのナイフはヤバイ。

直感的にあれば蓬萊の薬を飲んでてもヤバイものだわかる。

クソ・・・完全に虚をつかれた・・・
間に合わない・・・

俺の伸ばす手も虚しく、輝夜にナイフが迫る。

しかしそのナイフは輝夜に届く事はなかった。

なぜなら時が止まり動けないはずの不等が動いていて、輝夜を庇いナイフを代わりに受けていたのだから。

蓬萊と暗殺者（前書き）

・・・相変わらず酷い駄文だな。

蓬萊と暗殺者

「不比等お!!」

クソ、なんで不比等が動けるんだよ!!

輝夜有能力で止まってたんじゃないのか!?

不比等を刺した奴は空間が歪んだと思ったらまた消えていた。
そして不比等は崩れ落ちる。

胸を刺されてやがる……致命傷だ。

「永琳!そいつを頼む!!知り合いなんだ!!」

「わかったわ」

「貴方……」

直ぐさま永琳がしゃがんで容態を確認する。

輝夜は不比等の事を覚えていたみたいで軽く呆然としている。

まさかここまでやるとは思わなかったのだろう。

いくら愛を言おうとも所詮口先だけ。

その程度の解釈しか輝夜は不比等にしてなかったはずだからな。

「頼むぞ！・・・あいつは何処に行った！！！」

「なんだ？完全に気配が絶たれている？」

穿の言う通り、刺した奴の気配が微塵も感じられない。

「お父様、あいつは月の暗殺を生業とする者で、能力を持っています」

「能力？」

あらかた姿を消すものだろうな。

「たしか『自らの存在を隠す程度の能力』だったはずですよ。こちらからの視認は不可能なので奴が攻撃をしてきた時にカウンターを決めるしかありません」

隊長が身構えながら答える。

「・・・そりやなんと暗殺向きの能力だな」

面倒だな。

こちらから見えないのはうざいな。

「どうする？これではこちらからは動けないぞ？」

「なら見えるようにすればいい」

「「は？」」

干涉系の能力を破る方法はいたってシンプルだ。

その能力を発動させている力以上の力で押し潰せばいい。

まあ半端なく力が必要だから普通は出来ないがな。

「・・・・・・・・！！」

俺は輝夜の能力が破る限界ギリギリの力を放つ。

パァーン

すると空間がガラスが割れたようになり、呆然としている男が現れた。

「「「!?!?!」」」

その男だけでなく、明と隊長も驚いている。

穿が驚いていないのは能力を破る事の異常さがわかっていないのだろっ。

「・・・見つけたぞ」

その時の俺の声は自分でも驚くぐらい冷たい声だった。

そして俺は無言で近づき拳を振り上げる。

「拳砲・零」

俺は呆然としていて無抵抗の相手に対して零距离で砲撃を放った。

男は悲鳴を上げる間もなく塵になった。

「永琳、不比等はどうか？」

俺は砲撃を放った後に直ぐさま永琳達の所に戻って来た。

「・・・だめね。月の設備ならともかくここじゃ無理ね」

不比等は目をつぶり横になっている。

胸が上下しているのでまだ呼吸はしているのだろう。

そして輝夜がひざ枕をしている。

時折頭を撫で、なんとも言えない表情をしている。

無表情のような、悲しんでいるような。

「そうなのか？見た目はあまりそうは見えないが」

たしかに穿の言う通り、見た目はせいぜい胸元が裂けているぐらいだ。

血も出ていない。

「身体ではなく、魂に損傷があるのよ」

「魂に？」

「そう。あのナイフは月の最新兵器よ。一定の霊力を注入して切り付けると魂を毒し、完全に消滅させるわ」

なんて武器だよ……

月では神に喧嘩売ってるのか？

そんな輪廻の輪を破壊するような物作っちゃうなんて。

「なんとも物騒な武器だな……」

穿は亡霊なのでそういった武器の恐ろしさがよくわかるのだろう。顔を割としかめている。

「元々あの武器は蓬萊の薬を飲んだ者を処刑するために作られたものですからね……」

たしかに蓬萊の薬は肉体に変化をもよおすが魂には効果がない。殺すにはそれぐらいしなけければならないだろう。

「もうかなり魂が侵されてるは。魂を治療する術は地上にはないから治すのは不可能よ・・・」

「そうか・・・」

何やってるんだよ俺は・・・

今回は助けられたはずだろ？
目の前の出来事だっただろ？

それなのに・・・それなのに!!

「・・・どうして彼は私の能力が発動している中で動けたのかしら？」

輝夜が手を不比等の頭におきながらおもろに言った。

・・・たしかにそれは俺も気になっていた。

時が止まっている中で普通は動けない。動けるはずがない。

「彼の霊力が相当強かったんじゃないですか？我々に匹敵するくらいに」

「たしかに輝夜ちゃん的能力は力がそれなりにある人には効かないからね」

「いや、いくらなんでもそれだけの力があれば仁が気が付くぞ」

たしかに輝夜能力が効かないレベルだったら俺が気が付いたはずだ。

・・・もしかしたら・・・

俺は不平等の手を握る。

その手はもう死ぬ人間の手とは思えないほど暖かった。

霊力を流し探ると俺の予想したものは直ぐに見つかった。

『光の速さで移動する程度の能力』

これが不平等の能力だ。

人間に能力があるという事はそれだけで相当量の力を持っていることになる。

迂闊だった・・・

まさか不比等にこんな潜在能力があるとは思わなかった・・・

・・・港まであの速さで行った時に気が付くべきだった。

恐らくあの時既に不比等の能力は開花しかけていたのだろう。

あの時にもっとよく探るべきだったな・・・

「何かわかったの？」

永琳が話しかけてきた。

どうやら結構長い時間固まっていたようだ。

「不比等は能力持ちだった」

「・・・そう」

永琳はそれだけで悟ったようだった。

それから全員でそれからの事を話しあった。

まず帝の兵士達や翁達には明の幻覚で輝夜が月に帰ったように見せた。

不比等に関しては、唯一天人に立ち向かい殺された事にした。

そして輝夜自ら帝や翁にあたかも自分が帰ったような手紙を書いた。これでだれもが輝夜が月に帰ったと思うだろう。

それから手紙と共に蓬萊の薬も渡した。

そしてそれは不比等の亡きがらと共に埋めてほしいと書いた。

ここは竹取物語と違うが、これは輝夜の本心のようだった。

そしてみんな別れて逃げる事になった。

永琳と輝夜、穿と明、隊長、俺に別れ逃げる事になった。

穿と明はかなり文句を言っていたがうまく永琳が言いくるめた。
相変わらずあいつの話術は凄い。

夜が明ける前にみんな都を去ったが、俺だけはまだ残っている。

なぜなら俺にはまだやる事が残っているからだ。

俺は妹紅にどんな顔をして会えばいいのだろうか？

機械と決意（前書き）

明日から本気で試験勉強をするため2月中での更新はこれが最後になります。

次回は・・・3月5日くらいかな？

今回もやっぱり駄文。

なんか真面目な話してかけないかも。

機械と決意

かぐや姫が月に帰った。

この話しは一日とたたずに都中に広まった。

帝の送った兵は不思議な妖術により動けず、翁達は悲しみのあまり床に伏せた事も広まった。

もちろん不比等の事も。

「お父様・・・」

ここは不比等の屋敷。

部屋の中央には息絶えた不比等が寝転べられていて、この部屋に生きてる者は俺と妹紅とじいやだけだ。

じいやの配慮で部屋の周りには人がいない。

これなら妹紅も周りを気にする必要はないだろう。

外は夕方で時折カラスの鳴き声が聞こえてくる。
襖の隙間からはオレンジ色の光が漏れている。

妹紅は泣いていない。

隠れて泣く事も無く、まだ妹紅は不比等が死んでから一回も泣いていない。

今も無表情のままでは不比等の顔をじつと見ている。

そして不比等の顔の横にある小さな壺も一緒に見えているようだ。
壺の中には輝夜が残した蓬菜の薬が入っている。

輝夜が残した言葉通り不比等の亡きがらと共に埋める予定だ。

「おかしい話ですよね……目の前に不老不死の薬があるのに
死んでしまったんですよ……」

妹紅は壺を見ながら言う。

その目は虚で生気が感じられない。

それから妹紅には真実を全て話している。
あの時の状況も、不比等の能力の事も。

「すまない・・・俺がもつと気をつけていれば・・・」

悔やんでも悔やみきれない。

俺が不比等の能力に気づいていれば？

俺が不比等が動ける事に気づいていれば？

俺がああ暗殺者に気づいていれば？

状況が変わるところはいくらでもあった。
なのに何故俺は・・・

「仁さんは別に悪くないですよ・・・結局のところお父様が選んだ
選択ですし」

妹紅はそう言って笑顔をつくる。
だがその笑顔は誰がどう見ても無理をしている。

見ていて痛々しい。

「でも・・・お父様にはもう少し周りの事を考えて欲しかったな・・・」

俯きながら言うその言葉はギリギリ聞こえるか聞こえないぐらいの小ささだった。

同時にカラスの鳴き声も聞こえてきたため、それは尚更だった。

「仁さん、お父様に薬を飲ましてもいいですか？意味ないのはわかっていますけど・・・なんだか気が済まなくて」

「半分くらいなら問題はないはずだ」

「ありがとうございます・・・」

妹紅はたどたどしい手つきで薬を取り出す。

蓬萊の薬は塗り薬みたいにクリーム状だった。

ただそれは塗るものではなく飲むものだ。

妹紅はそのクリームをスプーンみたいのに薬をつけ不平等の口に運

ぶ。

いつの間にかじいやが水を持って来て無言で妹紅に差し出す。

妹紅はそれを受け取り、不比等の口に流す。

その時、妹紅の頬に涙が一筋流れていた。

日はもうほぼ沈み、世界は闇に染まりつつあった。

真夜中。

空には少し欠けた月が輝いている。
だが雲が多く星はなかなか見えない。

明日は雨だろうか？
空気が沈んでいる感じがする。

明日は不比等の葬儀だから出来れば降らないでほしいな。

そんな空の下、俺は一人都の路地裏を歩いている。

さすがにこの時間では誰もいず、猫が歩いているくらいだ。

「出てこい」

俺は振り返り、誰もいないはずの路地に対して話しかける。

だが俺にはわかる。

微弱な殺気が。

そしてこの隠れ方には覚えがある。

昨日同じ隠れ方をする奴に会ったばかりだ。

「・・・やはりお前には我々の能力が効かないようだな」

空間が歪み、中から男が現れる。

その男はスーツ姿で黒い短髪。そして手にはナイフを持っている。

その姿は昨日不比等を殺した奴と同じ姿だった。

「おかしいな？お前は昨日俺が塵にしたはずだが？」

それは間違いない。

完全に殺すつもりでいったから生き残るなんてまずありえない。

・・・気配が違うな。

単なるそっくりなだけか？

「お前が昨日殺したのはN o ・ 2 3。俺はN o ・ 5 だ」

一切動きを見せず機械的にしゃべる男、いやN o ・ 5。

この言いようから恐らくこいつらはクローン、もしくはロボットだろう。

最低でも23体はいるようだ。

明や隊長がこいつらを名前ではなく『暗殺者』と呼んだのはどの
O・か識別出来なかったからだろう。

「どうやらあいつと同じ能力を持っているようだな」

「そうだ。我々は全員同じ能力を持っている」

再び機械的で無機質な声で喋ってくる。

「お前ロボットか？」

何となく喋り方でそう思ったただけだな。

「ここで消えるお前に喋る必要はない」

その言葉と同時に俺の周りの空間が歪み、四人の男達が現れる。
全員NO・5と同じ顔だ。

手には全員同じくナイフを持ち俺に一齐に切り掛かる。

遅え・・・

俺はしゃがんでナイフを避け、回転しながら全員に蹴りを入れる。

「紅蓮脚」

四人全員が真つ二つになる。

切断面からコードや機械的な物が見えたのでこいつらはロボットのようだ。

体制を整え正面を見ると既にN o . 5はいなかった。
恐らく能力を使い消えて逃げたのだろう。

・・・視界に入れば感知出来るようにはなったが離れられるとわからないな。

厄介な能力だ。

ちなみに感知出来るようになったのは一度あの能力を破ったからだろつ。

・・・さて、逃げた奴は追わずにこいつらの残骸を片付けますか。

気が付くと、空の雲はなくなっていた。

「妹紅がいなくなつた？」

次の日、不比等の葬儀のため屋敷に来てみるとじいやからこんな話を聞いた。

「はい、朝から屋敷の何処にもいないんです・・・しかも厄介な事に・・・」

そう言ってじいやは俺に耳打ちする。

「蓬萊の薬がなくなつた・・・か」

妹紅だな。犯人は。

何が目的なんだ？

やはり復讐のためか？

・
だが妹紅はあんまり輝夜を恨んでいるそぶりはなかったんだが・・・

「一体どうしましょうか？これでは帝になんとと言われるか・・・」

帝も輝夜にベタ褒めらしいからな。

輝夜の最後の言葉通り出来ないときれるかもしれない。

「とりあえず不比等の遺体に飲ませたと言っておけ。嘘ではないし、それなら墓も荒らされないだろう」

実際のところ、こっちのほうがよかったのかもな。

不老不死の薬があるなんて聞けば墓を掘り起こす奴なんて腐る程いるだろう。

だがもう既に服用済みならば荒らす奴もいないだろう。

「わかりました。関係者にはそう伝えておきます」

そう言ってじいやは走り去って行った。

俺は晴れた空を見上げる。

「あいつ何処行つたのかなあ・・・」

俺は人知れず呟いた。

時は遡り、夜明け前。

都の東の門に一人の少女がいた。
その少女は年に似合わず白髪だった。

そして少女の目には憎しみではなく、
なにか決意が感じられた。

機械と決意（後書き）

しばらく間が空くけどまた皆さん見てくれますかね？

心配です。

神々と集会（前書き）

テスト中なのに・・・

勉強しなきゃいけないのに・・・

2月はもう出来ないって言ったのに・・・

こんな意志が弱い人ですいません。

神々と集会

都であの事件があつてから、数十年がたった。

都は平安京になり時は平安に移つていった。

今では輝夜の話しも眉唾ものになってきている。

俺は相変わらず暇している。

暇だから鍛冶技術を学んだ。独学だが割といい線までいったと自負している。

学んだ理由は自分の武器が欲しかったからだ。
日本刀みたいなのが欲しい。

神から貰ったナイフもいいが長い物が欲しい。
ナイフで切るんだったら殴ったほうが早いからな。

そんな訳で鍛冶をやったが納得できるものは出来なかった。

普通の人が使うには問題がないが俺が使うには脆すぎる。

これは鍛冶技術うんぬん以前に材質の問題だ。・・・この神製のナイフは何からできているのだろうか？

俺が全力で扱っても刃こぼれ一つない。

さすがは神製品。チートだな。

ともかくそんな感じで工房に籠っていたからあんまり人に会っていない。

工房は山奥に人知れず作ったためまず人はこない。

たまに迷った奴が来るぐらいだ。

そんな引きこもり生活が続け、そろそろ諦めるかと思っているとそれは起こった。

♪~~~~~♪

携帯が鳴った。

ちなみに着メロはオーエンだ。

「……………」

この携帯が鳴るという事はまたあの駄神がなんかやらかしたということだ。

・・・またか。何時になったらあいつは学習するんだろうか。

だが意外にも着信の所には『山田』と書いてあった。

・・・恐らく映姫だな。

そんな感じで読んでいる人もいるしな。

てか何故に表示が山田？

「もしもし」

『神道仁ですか？私です。四季映姫・ヤマザナドゥです』

やはり閻魔様でした。

そういえばどうやって電話してきたんだ？

『ちなみに連絡方法は駄神・・・じゃなくて創造神から奪っ・・・貰いました』

流石閻魔様。

心の中の疑問まで答えて貰えるとは。

なんか変な事言いかけてたけど気にしない。

「それで何の用だ？」

『実はいろいろな問題が一挙に出たため力のある神が集まり対策をとろうと思いついて神々に声をかけているんです・・・』

なんか映姫の声に元気がない。

やはり問題つてのは駄神関係か？

そついえば俺も神なんだよな。
自覚ないけど。

「・・・大丈夫か？なんか声疲れているぞ？」

『上にも下にも問題児がいますからね・・・』

そりゃ大変だ・・・

中堅管理職は何時の時代も大変だな。

「・・・がんばれ」

とりあえず励ましておこう。

『有り難うございます・・・。ともかく明日にでも集まろと思えます。場所、時間はこの後めーるで送りますが、予定は大丈夫ですか？』
『おお・・・なんか映姫からメールって言葉を聞くとはな。別に予定もないし行くか。暇つぶしに。』

「わかった。じゃあ切るぞ」

『はい。ありがとうございます』

電話を切ると直ぐさまメールがきた。

場所は冥界か・・・

冥界への結界は普段は強固に護られそんじょそこの妖怪や神では破れないようになってる。

どうやらこの時点ではまだ結界はまだ緩くなっていないらしい。

白玉楼すらまだないだろうしな。

だから今日はあえて結界を緩め、力が強い者は越えられるようにしたらしい。

指定された場所に行くと若干空間が歪んで見えた。

成る程このレベルなら普通の奴は結界を発見することすら出来ないはずだ。

それで歪んだ空間に入ると長い石段が現れた。

なげー。

一番上がみえねえよ。

とりあえず飛んで上がって行くが景色が変わらず暇だな。

お、幽霊だ。

白い饅頭みたいなのがふわふわ浮いてる。

みんな同じ顔（？）だな。

生前どんな奴だったかさっぱりわからないな。

上に幾程幽霊が増えるな。

この世じゃない感じがひしひしと伝わってくるな。

「いらっしやいませ。それではこちらにお名前をお願いします。」

石段を上がりきるとなんか机が置いてあり受付嬢がいた。

鎌背負ってるし死に神か？
でも小町ではない。

眼鏡をかけ、青い着物を着ている。

髪も青く短く、なんだかぼんやりしている感じだ。

ぼんやりっていつかのほほんとしている。

とりあえず名前を書けと言われたので置いてある紙に名前を書く。
もちろん墨と筆でだ。

既に来た奴の名前を見ると・・・

天照大神、八咫鳥、・・・大国主神、・・・八坂神奈子、
洩矢諏訪子・・・秋静葉、秋穰子・・・etc・・・

豪華な顔ぶれだな。

知った顔もちらほらいるな。

てか秋姉妹・・・昔はこんなに強かったのか・・・

まさかこのレベルの集まりに呼ばれるとは・・・

「ではお名前をお書きしましたら奥にお進み下さい。映姫様達がお待ちです」

のほほんとした感じの死に神が指差した方には陣幕みたいのがはつてあつた。

どうやらあそこに集まっているようだ。

陣の中にはわりとたくさんの神々がいた。
基本的にみんな人の形をしているが時折八咫鳥みたいな奴が混じっている。

既に何人かは真面目に話し合っているが、中には用意された酒を飲んだり飯を食っている。

「お、仁じゃないか？久しぶりだね」

そう声をかけられたので横を向くと神奈子がいた。

相変わらずしめ縄を担いでいて、容姿も全く変わっていないかった。

「神奈子か。数百年ぶりくらいか？」

飛鳥時代には既に別れてたからな・・・最低でも2、300年くらいたってるな。

「そんなぐらい・・・かな？それよりたまには私達に顔みせなよ。一応あんたの本社私達の所にあるんだからさ」

そういえば八咫鳥がそんな事言ってたな。

「それに・・・」

ん？なんか神奈子がニヤついてる？

俺はその理由を直ぐに理解する。

「じーーーーん！-！-！」

「オブツ！-！」

諏訪子がミサイルみたく腹に突っ込んできた。

久々にダメージ受けた気がするな・・・

「バカバカ！！たまには遊びに来てくれたっていいじゃないか！！」
「！」

そんな事いいながらポカポカ殴ってくるが地味に痛い。

一般人がくらったら一撃であの世に逝きそうだな。

・・・てかこいつ酔ってる？
なんか酒臭いし顔が赤い。

「悪かった、悪かった。今度からたまに行く」

多分今俺は苦笑いしているだろうな。

見てる周りの神も何人か苦笑いしているしな。

「そうだよ！！子供だっているんだし！！！」

お、落ち着け、俺。

Coolだ。Coolになれ。

俺はそんな行為には及んでないはずだ。

そうだ、きっと酔っ払いの世迷い事なんだ。
きつとそうだ。

「諏訪子、ちゃんと説明しなきゃ駄目じゃないか。仁が混乱してるよ」

神奈子はいまだにニヤついている。

「・・・どゆこと？」

「実はね、100年くらい前に諏訪子が・・・」

神様説明中・・・

・・・つまるところ、俺への信仰は一度本社がある諏訪子達の所を
經由して俺の所に来る。

それで諏訪子の所に来た俺の信仰と諏訪子自身の信仰を混ぜ生命を
創りだしたそうだ。

たしかにそれは俺と諏訪子の子になるが・・・

「お前は何勝手な事やっているんだ！そしてしっかり説明しろ！」
俺は諏訪子の頭を両腕でぐりぐりとする。

「ちよつ、痛い痛い痛い！！力強すぎ！！！」

つたく・・・この神は・・・

「皆さん、時間になりましたので円になって座ってください」

そんな事していると映姫が現れた。

よく見ると中央に座布団が円形に並べられている。

あそこに座れという事だろう。

全ての神が座る。

中央には映姫と受付にいた死に神が立っている。

それから小町もいる。

陣の入り口の辺りにいるが器用にもたちながら眠っている。

神々の陰に隠れているため映姫からはちょうど視角になっている。

「光明（こうみょう）、呼んだ方はみな来ていますか？」

「えっ……毘沙門天様だけまだ来てません」

どうやらあの死に神は光明と言っらしい。

てか葉月が来てないのか。

道にでも迷ってそうだな。

「そうですか……。仕方ありません。時間ですので始め……
す、すいませ〜ん!!」……どうやら来たようですね」

陣の入り口の辺りを見ると葉月が走ってやって来ていた。

「道に迷って、アウト!!」

本気で道に迷ってたよ……
しかもこけたし。

ん？

なんか跳んできた？

どうやら葉月がこけた時になんかとばしてしまったようだ。

……あれ宝塔じゃね？

大丈夫なのか？あんな扱いして。

それで宝塔がこっちの方まで跳んできたと思ったら……

チュドーン!!!

「キャアアアア!?!?!」

「穰子!?!?!」

宝塔が爆発した。

そして秋姉妹の帽子のどっちがどっちだかわからない方に直撃した。

てか危ないな!。

爆発物を投げるなよな。

なんか彼女プスプスとこげてるよ。

・・・何故焼き芋の臭い?

「す、すいません! ってああ!?!?! 宝塔の本体の水晶がない!?!」

またハプニングか。

ちなみに宝塔は手の平サイズの塔の形をしていて真ん中に穴が空いている。

あそこに水晶とやらがはまっていたのだろう。

「・・・皆さん足元に落ちてませんか？」

映姫が呆れ顔で言う。

「気をつけてください。そこが爆発しますから」

うおい！？

途端に陣の中が騒がしくなる。

ほとんどの奴が立ち、周りを確認し始める。

「小町、貴方も探すのを手伝っ・・・って貴方何堂々と寝ているんですか！・・・！」

小町がこのどさくさではれたようだ。

「ふえ！？え、映姫様？！べ、別にサボってませんよ？寝ながら仕事してました！」

「黙りなさい！！そもそも貴方は・・・」

「まあまあ、映姫様落ち着いて下さい」

「あれ？諏訪子が持つてるのが水晶じゃないかい？」

「あ、それです！！諏訪子さん、それを返して・・・」

「あゝうゝ！！」

ブンッ！

「何故投げたんですか?!?」

「あんたまだ酔ってるね!？」

「何故我のほうに投げた・・・」

「ちよつ、八咫鳥!!どうして砲撃準備してるんだい!？」

「だ、駄目です!!!、砲撃なんか当てたら・・・」

八咫鳥の砲撃が宝塔に当たったら当たり前に大爆発が起こり、爆風で砂埃がたつ。

俺は一人障壁を張っていたため無事だった。

砂埃が晴れるとみんな地に伏していた。

「・・・何これ？カオス？」

俺は一人呟いた。

神々と集会（後書き）

大国主神って名前だけ出したけど必要なかったかな。

ちなみにてゐと関係があります。

会議と議題（前書き）

やっと・・・更新。

更新が遅れた理由は活動報告に書きます。

久々だから今までよりも酷い出来です。

会議と議題

「・・・それでは今回の議題について簡単に説明します」

映姫はなににもなかったかのように喋り始めた。

周りの神達もそうだが誰もさっきまでのことには触れない。

ただみんなボロボロな感じで疲れてるけどな。

「まず、一つ目。これは創造神がやらかした事です。自然のバランスが乱れています」

ハイ、いきなりあのアホがやらかした事ですな。

どうせまたゲームやりながらミスったんだろうな。

なんか周りのほかの神達も「またか・・・」って顔してるな。
映姫もなんか遠い目してるし。

そんな中、名前の知らない神が手を挙げ映姫に喋りかけた。

「それで具体的にどういった問題が？」

「まだこれといった問題はありません。しかし自然のエネルギーバランスが狂ってしまっている為、そのエネルギーが漏れる可能性があります」

「そうなった場合エネルギーはどうなるのですか？」

「エネルギーが独立すると思われます」

・・・これ妖精じゃね？

そういえば俺長く生きてるけど妖精に会った事なかったよな。
今まで大して気にしてなかったけどまだいなかったから会わなかったんだな。

「大丈夫なのかい？自然のなら結構強いエネルギーが漏れそうだけ
ど」

「危険なら直ぐに我等で殉滅すべきだ」

八咫鳥・・・物騒だな。

てかさっきの事まだ懲りてないんだな。
直ぐに砲撃なんかするからああなったのに。

「陽炎^{かげろう}、貴方は少し反省なさい。貴方のそういう攻撃的な所は改善すべきです」

「申し訳ありません、主……」

八咫鳥が隣に置いてある勾玉に怒られた。
どうやらあの勾玉の中に八咫鳥の主の天照大神がいるようだ。

陽炎とはおそらく八咫鳥の真名だな。

「とりあえず危険性はありません。たしかにエネルギーは強大ですがかなりの数に分散されますから、各固体はそれほど強くありません」

「……かなりの数になりそうだね」「なので人間に隠すのは不可能です。だから各社に帰ったら人間達に説明をお願いします」

少し会場がざわつく。

なんと説明するかほかの神と相談しているのだろつ。

「それでは二つ目です。どなたがこのナイフを見た事がありますか？」

そう言つて映姫が懐から取り出したナイフに、俺は見覚えがあつた。

忘れもしない、不比等の命を奪つた物と同じ形の物だつた。

「・・・月のナイフか」

「はい、その通りです。やはり貴方は知っていましたか」

「いろいろあつたからな・・・」

なんとも思い出深い。

あの日は本当にいろいろあつたからな。

「そのナイフがどうかしたのですか？見たところ普通のナイフと変わらないようですが・・・」

「このナイフは一定量の霊力を込め切ると対象の魂を消滅させることができます」

『！』

その言葉に会場が凍り付く。

通常、死とは消滅ではない。

死んだ後は死んだ魂があゝの世に逝き、閻魔に裁かれる。

そして転生するなり、地獄に堕ちるなり決まる。

そして転生して死んだ奴はまた閻魔のところに逝く。

つまり生物は魂がある限り無限にサイクルを続ける。

これが輪廻だ。

しかし、このナイフは輪廻の輪を簡単に破壊する。

輪廻には精密なバランスがあるので、一カ所でも綻びがあればどうなるかわからない。

最悪、このナイフが発端で生物の個体数が激減する確率もある。

月人はそんな事になるなんて夢にも思っていないだろうな。

「……今のところ被害は？」

天照大神が重苦しい雰囲気の中口をあける。

・・・勾玉だから口とかないけどな。

「人間が一人です。輪廻の方はほかの閻魔や死に神達が修復中ですから問題は今のところありません」

「現在のナイフの数は？」

「地上にあるのは54本です」

あのロボット一体につき一本持っていたからあれ54体も地上にあるのか。

・・・なんかあれを見るとマトリックスのあのエージェントを思い出すな。

スーツ着てるし。「どうして月のそんな物騒なもんが地上にあるんだい？」

「ある神の抹殺のために持ち込まれたようです」

「その神って？」

「・・・」

映姫はここで口を閉じ、こちらを見る。

「まさか……仁さん？」

「だろうな」

実際前狙われたしな。

そつえばあれから襲われないのはなんでだ？

人目に付かない場所とはいえ霊力を隠したりはしてないんだけどな。

「そんな不可能な事をやろうとしているとは……」

「命狙っている人に同情します」

お前らの中で俺の存在はどうなっているんだ？
暗殺者に同情ってどういう事？

「まあ今は月に侵略した妖怪を狙っているようですけどね」

なにそれ？

初耳だよ？

でも映姫がさも当たり前のように言ってるから多分有名なんだろうな。

やっぱり引きこもり生活は駄目だな。
世の情勢がさっぱりわからない。」

「という事はスキマ妖怪を狙っているのかい？」

あゝ、はいはい。

神奈子の言葉で思い出した。

たしか紫が月に戦ふっかけてボロ負けしたって話しがあったな。

「そのようです。それから最後の問題はそのスキマ妖怪、八雲紫についてです」

「彼女がある肉体を封印し、その魂を輪廻の輪から完全に外しました」

これ・・・幽々子じゃね？

仁と西行寺家（前書き）

何故か連投

仁と西行寺家

桜が舞い散っている。

道の両脇に生えている桜の木が一斉に散っている。

その道を俺は一人で歩いている。

手には徳利を持ち、酒を飲みながら桜を見ている。

そんな感じで歩いていると前に屋敷が見えてきた。
まるで平安時代の貴族のような屋敷だ。

あ、今平安時代だ。

ともかく立派な門があり、造りもしっかりしていて何よりでかい。

そして表札には《西行寺》と書いてある。

『とりあえず、このメッセージを八雲紫、および今は亡霊になってしまった者に伝える必要があります。これは仁に任せたいと思います』

『何故決定事項なんだ？』

『貴方は社に帰り人々に説明する仕事がありませんから』

『それを言われると弱るな・・・』

『それではお願いします』

『・・・わかった』

こんな感じ俺が西行寺家に来る事になった。
まあ幽々子に興味あるしいいんだけどな。

あんまりよく覚えていないがたしか幽々子は自分の能力に悩み自殺したんだよな。

んで亡霊になってからはテンション高くなって生前の記憶を失ったんだっけ？

たしか能力は『死を操る程度の能力』だったな。
こんな能力が普通の人間にあつたら悩むよな。

ま、それは置いといて、さっさと仕事するか。

俺は徳利を懷にしまい門をノックする。

「？」

すると違和感を感じた。
世界が隔離されている感じた。

「……結界か」

紫が張ったのか？

だとしたらあつちはこちら側が幽々子を消しにかかってくると思っているかもしれないな。

ともかくこのままじゃ入れないから破るか。
俺は門に手を当てながら霊力を流す。

すると結界は音も無く消えた。

なかなか強力な結界だった。俺相手なら後数倍は強度が欲しかったな。

そして俺は扉を開け中に入る。

「妖童餓鬼の断食！！！」

入るといきなり赤い弾幕が視界をうめつくす。

だが避けられないほどでは・・・

「！」

なんだ？

若干周りの動きが遅くなった？

まあそれでも充分全部避けられるがな。

俺は来た刺のような弾幕を全て避ける。

避けながら思い出したがこれ妖夢の技だな。
こんな時代から妖夢って生きてたっけ？

弾幕を完全に避けきると放った奴が確認できた。

白い髪。

緑を基調とした服に袴。

そして手には二本の剣。

見た目的には17、8歳くらいだ。

だが、その目にはそんなぐらゐの歳では決して宿らない覚悟が灯っている。

「なかなかいい攻撃だったぞ？」

今の技は割と洗練されていたし、奇襲のタイミングもよかった。俺に対しては駄目だったかな。

「・・・」

「だんまりか。名前くらい教えてほしいものだな。少年」

俺は目の前の男に問い掛ける。

「少年ではない！魂魄妖忌だ」

・・・そういえば妖夢の祖父がそんな名前だったな。

たしか初代庭師兼剣術指南役だったか？

んでもって妖夢の師匠。

なんか納得。

どうりで同じ技使うわけだ。

妖夢みたく、なかなか強いが・・・

「まだまだ半人前だな」

「何っ!!」

その一瞬の隙に一気に間合いを詰め殴りとばす。

「ガッ!!」

そのまま吹き飛び堀にぶつかる。

動かないしどうやら気を失っているようだ。

「間合いが命の剣士が敵の言葉に我を忘れるようじゃまだまだ半人前だ」

そして俺は振り返る。

「こいつは訳すら聞かずに襲ってきたがお前はどつする、紫？」

「・・・貴方には敵わないわね、仁」

その声と共にスキマが開き、紫が出て来た。

「以上がメッセージだ」

とりあえず神の会議で決まったメッセージを伝えた。

まとめると西行寺幽々子は無理に封印を解いて輪廻に戻したりせず、その代わりに冥界に移り霊達の管理をするというものだ。

つまり幽々子には危害は加えないという事だ。

「それを聞いて安心したわ。私が無理矢理にあの子をああしたんだから何かあつては申し訳がたたないわ」

そう言つて紫はため息をつく。
心底安心したようだ。

何時もの胡散臭い笑みではなく、普通に微笑みを浮かべている。

「やはり本人の意志ではなくお前のエゴか」

自殺するような奴がこんな事を望んだりするわけないしな。

「・・・そうよ、それは紛れも無い事実。だから否定しないわ。でも・・・」

「確かにあのまんま普通に死んでたら西行寺幽々子の魂は消されていただろうな」

「・・・」

どうやら紫が言いたかった事であつていたようだ。

紫は口をつぐみ無言になる。

実際少し考えればわかる事だ。

能力は魂に刻まれているものだ。

つまり転生したとしても基本的に類似の能力を持つ。

幽々子の能力は基本的に『死』に関するものだ。

これは普通の生物が持つにはおもすぎる。

使い方を間違えば世界が滅びるのだから。

だから閻魔達は幽々子の魂を危険に思い、始末する可能性があった。

だが人外、特に亡霊となれば話しは別だ。

亡霊は人間とは違い欲望ではなく基本は恨みで動く。

だから世界を恨んだりしてないかぎり被害は広がらない。

その上幽々子は無理矢理亡霊にされた。

穿のように恨みがない可能性がでかい。

そうなると被害が無駄に広がる確率は極端に低くなる。
だから神達もこれ以上言う必要がなくなる。

「よくもここまで考え出したものだ。敵わない」

「でも貴方も大事な友達のためならこれ以上の事をすると思っわ」

「・・・」

その時俺の頭の中に鎌足と不比等の顔が浮かんだ。

「・・・俺はそんなたいした人じゃねえよ」

どちらも浮かんだのは死に顔だった。

「・・・ごめんなさい」

紫には俺が怒って見えたのか謝ってきた。

「悪い、怒っている訳ではない。とりあえず当の本人に会いたいんだが」

さすがに本人が何も知らずに話しがばんぼん進むのはまずいだろう。

「わかったわ。でも妖忌はどうする？」

「~~~~~」

いい感じに目を回してるな。

「ほっというて平気そうね」

・・・お前も案外鬼畜だな。

俺も助けないけど。

紫に連れられ、俺は屋敷の中に入って行った。

長い廊下を歩いて行くと、紫はある襖の前で立ち止まった。

「ここに幽々子がいるわ。亡霊になって間もないから何か問題があるかもしれないけどそこは大目にみてあげて」

そう言うのはいい。

でめなんでそう言って手を重ねてウィンクする。

そんな事やってるからBBAなんて言われるんだ。

「・・・なんか失礼な事考えなかった？」

「気のせいだ。ともかくはいるぞ」

そう言って襖を開ける。

部屋の中央にはピンク色の髪をして青い着物？に桜の刺繍がしてあり、何より目立つのは帽子に着いた死者の三角の布。

そんな見た目の女性が俯せに倒れていた。

「ちょ、幽々子！一体どうしたの！？なんで倒れてるの！-!-!」

紫が急いで側に駆け寄り肩揺する。

めっちゃ取り乱してるな。

俺もさっぱり状況がわからないがな。

グ~~~~~

「「・・・」」

説明しよう。

今のは腹の音だ。

そして紫でなければもちろん俺でもない。
そんでもってこの部屋には三人しかいない。

じゃあ犯人は？

「ユ、ユカリ・・・私・・・お腹が空き・・・すぎて・・・死にそうなの」

俺、長く生きてきたけど餓死しそうな亡霊始めて見た・・・

飯と幻想（前書き）

停電だから毎日更新は難しそうです。

訂正、食っているのは幽々子だけだ。

「そつえば貴方が料理できるとは意外ね」

料理と言っても台所にあつた作りかけの料理を仕上げたただけがな。多分、妖忌辺りが作っていたのだろう。

・・・それにしても凄い量だな。

料理は大皿のものがいくつもあつて、軽く10人分くらいある。焼き魚だけで17枚あるし。

「料理は人が生きる為に必須のスキルだ」

遙か昔に料理が出来ずに来るしんだ。

魚も恐竜も焼いて食うしかなくて死にそうだった。

数百年は同じ感じのもの食ってたな。

「ふん。それより幽々子にそろそろ説明したら?」

「この状況でか?」

その話すお相手はもの凄い勢いでもぐもぐしてるんですけど。

「・・・つまり私が冥界に移動して仕事をすれば丸くおさまるのね？」

説明中に幽々子は食い終わった。

あ、あの量をこんな短時間で食うとは・・・

「理解が早くて助かる。それでどうする？」

「せっかくだし行ってみようかしら」

よかった。

本人も乗り気みたいだ。

「幽々子様——！！！」

そんな空気の中、妖忌が切り込んで来た。

襖を切り破り、俺に向かって切っ先を向けている。

後ろにいる白いふわふわした半霊も戦闘体制みたいのをとっている。

・・・そういえばなんでさっき半霊がいなかったんだ？

「さっきは結界の都合上半霊が使えなかったが今度は違う！！もう遅れはとらん！！！」

そういう訳ね。

てかこいつ思い込みが激しいな。
本当に敵かどうかくらい確認しろよ。

「何故俺とお前が戦う必要がある？」

「それはお前が幽々子様を・・・」

「その時点で考え方がおかしい」

「へ？」

青年説明中・・・

「申し訳ありませんでした！！！！！！」

いや、確かに謝るべきだけどさ・・・土下座はやめてよ。
それやられるとなんかこっちが悪い感じになるんだよ。

「わかったから、それ止めてくれない？」

「いえ、貴方が許してくれるまで止めません！！」

真面目過ぎだろ・・・

てか俺わかったって言ったよな？

「ああ、酷いわ、妖忌。貴方が客人に切り掛かってしまったばかりにその冥界への移動も無くなってしまったのよ？」

そう言いながら、よよと崩れる幽々子。

「な！？それは本当ですか??！」

それを聞き、立って幽々子に詰め寄る妖忌。
あ、土下座止めてる。

「嘘よ」

「ちょ、幽々子様!？」

「駄目じゃない妖忌。土下座止めちゃ」

「紫様もおちよくるの止めてください!!」

なんか妖忌のポジションかわいそうだな。
まだなんかおちよくられてるし。

「とりあえず妖忌。お酒持って来てちょうだい」

「今の話しの流れ的になんでそうなるんですか!!」

「ほらほら！主人の命令よ」

結構幽々子めちゃくちゃ言うな。

「わかりましたよ！行ってきます！！」

そう言つて襖の方へ向かう妖忌。
今襖切られてズタズタだけどな。

「よろしくね。あ、あとその切つた襖直しといてよ」「わかつてますよ！！」

・・・あの白髪つて苦労したストレスによるものじゃないよね？

「妖忌もいなくなつたし、一つ真面目な事を話すわ」

妖忌がいなくなった後すぐ、紫が真面目な顔で話し掛けてきた。
よく見ると幽々子も真面目な顔になっていた。

「貴方の夢の事よね」

事実、幽々子の声からはさっきまでのふざけた感じは消えていた。
にしても紫の夢？

「ええ。仁、貴方は昔浜辺で私と話した事を覚えているかしら？」

「……随分と前の事を引っ張り出してきたな」

あれはまだ諏訪子とも会ってないから……縄文時代くらいか？
千年は前の話だな。

「私はあの時の貴方の言葉に衝撃を受けたわ」

たしか、人間と妖怪はお互いに依存してるって話しをしてたんだっ
たな。

「だから私は人と妖怪が完全に共存した世界を見てみたいと思った。
その世界には今の私に無いものがあると思ったから」

紫の目は真剣そのものだった。
決して酔っ払いの狂言でもなければ、ふざけて言っているのではないともわかる。

本気なんだな。

「それでお前の夢はその世界を創る事か？」

「ええ。だから私はその為にいろいろとやってきたわ」

これは想像だが、恐らく月への侵攻もその一環なんだろう。
大方月の土地を使いその世界を創ろうとしたってどこか？

「でも私一人では『限界』があるわ。幽々子も手伝ってくれらって
言っではくれているけど……」

「わかった」

「……できれば貴方につて、え？」

「手伝おうって言ってるんだ。お前のその夢の世界を創るのを」

恐らくこの世界こそが『あれ』なんだろう。

……長かったな。

やっと『あれ』が出来るのか。

何億年も待ったな。

「ありがとう・・・」

紫の頬には一筋の涙が流れていた。

それはもちろん悲しみではなく喜びでだ。

多分、この事を話す度に否定されただろう。

人間からしたら妖怪と共存なんて恐ろしくて出来ないし、妖怪からしたらそんなもの馬鹿馬鹿しくてやろうなんて思わないだろう。

だから今まで同調してくれた奴なんてほんの一握りなんだろう。

それがわかっているからこそ、俺も幽々子も紫が泣いても何も言わない。

幽々子は微笑みを浮かべ、静かに見つめている。

「それでその世界にはもう名前があるのか？」

きつと『あれ』だと思う。

もし違っても無理矢理変える。

「！ そついえば決まっていなかったわね」

紫が問い掛けられて自分が泣いてる事に気づき、急いで涙をぬぐった。

てかまだ決まっていなかったのか。
じゃあ意地でも『あれ』にしなきゃな。

「仁か幽々子なんか良い名前ないかしら？」

「うん・・・あつ、デイズニーランド」

「「却下」」

「え〜」

いろいろと突っ込みたいが、まず何故お前がそれを知っている？

たしかに東の方の夢の国だが・・・

「仁は何かいいのあるかしら？」

「『幻想郷』」

・・・この名前を聞く事が出来る日が来るなんてな。

鬼と求めるもの（前書き）

また風邪引いた・・・

鬼と求めるもの

「幽々子様、お酒持って来ました」

しばらく三人で今後の事を話していると妖忌が酒を持って入って来た。

わりとたくさん持って来たな。

たしかにここにいる奴らは全員酒豪だろうがな。

「ありがと、妖忌。それからもう一つ頼み事していいかしら？」

酒を受け取りながら幽々子が至って普通に尋ねる。

「はい、なんですか？」

妖忌も普通に答える。

「鬼の所に行つて欲しいの」

「はい、わかり……え？」

これは普通にはいかなかったな。
いや、普通の反応だな。

「幽々子様？そういうのは何時、何処へ、何の為にという情報が一番大事なのです。だからそれを言っして下さい」

妖忌冷静だな。

多分こんな事が何度もあるから慣れてるんだな。

「今から、鬼の所へ、貴方はただ逝くだけでいいわ」

でも幽々子にはあまり意味がなかった！

「そうじゃなくて、もっと具体的な中身を言っして下さいよ！！それより今の行くの字がおかしくありませんでした？」

「大丈夫。貴方はもう半分逝ってるわ」

「紫様も使い方がおかしいです！！」

・・・何かこのままだと話が進まなそうなので読者には俺が説明しよう。

メタ発言？

気にしたら負けだ。

『幻想郷』は場所の目星はだいたい出来てる。

←

じゃあ次は住人だ。

←

とりあえず最強クラスの鬼から声掛けとくか。

←

俺と紫知り合いだし、今からでも行つとくか。

て、感じの話しだ。

妖忌？

あいつは幽々子が社会勉強になるだろうと連れてくように頼まれた。

まあ鬼に会うのはいろいろと刺激なるだろうな。

「だからとりあえず事情を説明してくださいよ！！事情も知らずに鬼の所になんて逝きたくありませんよ」

まだやってるのか。

てか妖忌も行くの字が変になってるぞ？

「問答無用でスキマツアー！」

そう言つて紫が指を鳴らすと妖忌の足元にスキマが出来る。

ああやっていきなりだと怖いよな。

「つて、あああああああ……」

哀れ、妖忌は成す術なくスキマに落ちて逝つた。

てか落ちる時に妖忌が上を向いて右腕を挙げてる感じが……

「さ、私達も行くわよ」

「私は留守番だけど頑張つて」

「……俺なんか妖忌が可哀相になってきた」

せめて少しぐらいあの落ちざまに触れてやれよ。

「仁様がいてくれて助かりました。二人とも全く説明してくれないんですから……」

スキマから出て、鬼神の楓の所まで歩いている途中で妖忌にいろと説明してやった。

理由は妖忌が余りにも不敏だからだ。

「苦労してるな……」

「はい……」

「ほら、二人とも！サクサク行くわよ！！日が暮れちゃうわ！！」

「……」

あえて……何もいうまい。

ちなみに今俺らは林を歩いている。

季節は春。

周りの木々や花がこれでもかと咲き誇っている。

「それにしても何故歩いているんですか？紫様の能力なら鬼の所まで直接行けると思うんですけど」

たしかに紫の能力なら楓達の所に直接行ける。
だがそれをしない理由はもちろんある。

「今は時期が時期だし、誠意を見せなきゃね」

「時期？」

正確には妖精の大量発生だ。
そのせいで今縄張りが騒がしいから妖怪達はちよつと荒れてるんだ
よな。

今も林の周りに妖精がチヨロチヨロしているがさすがに俺や紫にちよつかいを掛けてくる強者はいないな。

「そろそろ山に着くわよ」

徐々に地面が丘陵地になってきたな。
妖力やら靈力を隠したりしてないからあつちはまだもう気付いてるはずだ。

そろそろなんかしる動きがあってもおかしくないんだがな・・・

「!・・・」

「来たわね・・・」

「へ？」

妖忌はまだわかっていないがでかい妖力が近付いてる。
この大きさは雑魚ではないな。

「!これって」

妖忌もやっと気付いたようだ。
途端に体が強張り、剣に手をかける。

・・・まだまだ未熟だな。

そして、でかい妖力が目の前にまでやって来る。

「・・・・・・・・・・いらっしやい・・・・・・・・・・」

空から少女が降ってきた。

格好は着物のような服を着ていて、頭には角が見えないが恐らくこいつは鬼だな。

この大きさの妖力ならまず鬼だな。

これはどの鬼も共通なのか、髪は金髪のセミロングだ。
目は青色、それと同じ色の青い着物だ。

身長は勇儀より少し低いぐらいで、なにより目を引くのは胸だ。

でかい。

とにかくでかい。

諏訪子やら輝夜あたりがキレそうだ。

ほかの特徴は垂れ目だ。

あとなんか大人しそうだな。

「・・・・・・・・こつち・・・・・・・・・・」

その少女は名前すら名乗らずただ指を指す。

「……………来て……………」んでそのままそれだけ言って山を
上がって行った。

「……………大丈夫なんですか？着いて行っても？」

妖忌が心配そうに尋ねて来る。
確かに不安だがな。

名前すら名乗らず行っちゃったし、めっちゃ怪しいよな。

「大丈夫よ」

「なんでそんな言い切れるんですか？」

「鬼は嘘つかないからな」

「よく来た！！仁にスキマに半人半霊！！鬼はあんたら歓迎するよ
！！！！」

『イエーイ!!!』

「今日は無礼講だ!!!みんな存分に飲んでくれ!!!」

『ヤッホーイ!!!』

「あの・・・私が言いたい事わかりますか？」

「ええ、分かるわ」

「叫んでみる。宴会中で誰も気付かない」

「では・・・何で話し合いするはずが宴会になっているんですか
あああああ!!!!!!」

楓のスピーチでも分かる通り、現在宴会中だ。
鬼なんてなんかしる理由つけて宴会始めるからな。

「諦める。これが鬼だ」

「ううう・・・」

「仁に紫!!!久しぶりだね!!!」

そんな感じしていると飲ん兵衛・・・じゃなくて萃香が現れた。

「あら久しぶりね。百年ぶりくらいかしら」

「相変わらずにムカつく体してるねあんたは……」

萃香がぺたぺたと自分の絶壁を触り、紫の胸を羨ましそうに見ている。

「あら、そんなじろじろ見られたら恥ずかしいわ」

紫は扇子を口に当て胡散臭い笑みを浮かべる。

「くそー！なんかその余裕がムカつくー！！」

やっぱり宴会は騒がしいな。

「……………飲む？……………」

いつの間にか俺達を案内してきた鬼がすぐ横にいた。

徳利を持っているから酌をしてくれるようだ。

「悪いな。お前名は？」

「……………伊勢……………鬼斗……………」

「四天王か？」

鬼斗はそのくらいの力がある。
てか萃香より強いと思う。

「……………うん……………」

やっぱり四天王か。

「ちなみに……………後は萃香と勇儀と……………紗花……………」

知らない名前が出て来たな。
最後の四天王みたいだけどな。

『オオオオオオオ！！！！』

なんかあっちの方めっちゃ盛り上がってるな。

「やるじゃないか！！人にしてはなかなか飲むね」

「もう飲まなきゃやってらんないんですよ！！！！」

なんか勇儀と妖忌の声が聞こえたがスルー。
てか妖忌自暴自棄になってない？

「いやー、楽しんでるかい？」

楓がなんかフラフラしながらやって来た。
もうかなり飲んでやがるな。

「・・・・・・・・母様・・・・・・・・」

「お、鬼斗もいたのかい？ 仁も隅におけないね！！こんな綺麗な子に酌させてるんだから！！！」

「お前相当酔ってるな」

絡み方がオヤジだ。

「・・・・・・・・母様は・・・・・・・・酔ってる方が素・・・・・・・・」

どんだけだよ。

「まあ、おふざけは置いといて。そろそろ話を聞こうじゃないか」
この状況で？

鬼にとっては宴会こそが最高のもてなしなのか？

青年説明中……

「……話しはわかった」

ひと通り、楓に話をした。

楓はその話を聞いてなんとも言えない表情をしている。
その考えている姿はさっきまでの酔っ払いではなく、鬼の首領としての姿だった。

「別に今すぐ答えを求めている訳ではない。気が向いたら来るような感じで問題ない」

実際、まだ幻想郷は出来てないしな。

「いや、私としては面白そうだし乗り気だけどさ。ただ着いて行くだけじゃつまらないと思ってね」

「・・・何が欲しい？」

なんとなく予想はつくがな。

「仁もわかっているくせに、勿体振っちゃって。鬼が求めるもの、それは・・・」

「闘いだよ」

楓はニヤリと笑いながらそう言った。

四天王と闘い（前書き）

更新遅れてすいません。

まさか自分が救急車で運ばれるようになるとは思いませんでした。

今後の更新も体調しだいになりそうです。
すいません。

四天王と闘い

鬼は基本的に闘いが好きだ。

だから自らに制限をかけてまでも闘いをする。
例えば酒を零さないように闘ったりとかして、少しでも長く闘おう
としたりする。

でも、そんな鬼が制限を掛けずに闘ったらどうなるだろうか？

自らの本能のままに力を振るう。

それはこの世の終わりと言っても過言じゃないかもしれない。

「さあ、兄様相手なら遠慮はいらない！！存分に鬼の力を見せよう
じゃないか！！！」

「・・・・はあ」

ため息も尽きたくなる。

俺の目の前には臨戦体制の鬼の四天王達。

たった一人でも暴れれば国の一大事の連中が四人もいる。

本当、ため息も尽きたくなる。

闘っている理由はもちろん鬼達を幻想郷に連れて行くためだ。

ちなみに楓は意外と闘いを挑んで来なかった。

なんでも闘った事ないどうしの方がいいとかなんとか。

ともかく俺の目の前には鬼の四天王が全員集合している。

「とりあえずわかっていと思うけど、初めての奴もいるから自己紹介！！私は『技』の萃香！！」

「私は『力』の勇儀！！」

「『迅』の紗花です。はじめまして」

「いや、こちらこそはじめまして」

これまた礼儀正しい鬼だな。

やはり金髪で、楓のように露出の多い格好をしている。
てか楓に似ている。
目とかそっくりだ。

親の影響をかなり受けているな。

上の二人については説明する必要はないだろう。
ただいつも腕に付けている鎖がない。

あれは二人の力を抑えるものらしいので今は完全に本気のような。

「……激……鬼斗……」

これで四人の紹介が終わる。
鬼斗に関しても割愛。

ただ全員の共通点はかなりテンションが上がっていることだ。
全力で闘えるのがそれだけうれしいのだろう。

「神道仁だ」

一応俺も名乗っておくか。

・・・どうでもいいけど俺の二つ名ってなんだろ？

「じゃ、紫が結界を張ってくれてるから周りを気にする必要もないし、全力で行くよ！！」

萃香が腕をぶんぶん振り回しながら叫ぶ。

ちなみに紫が張った結界は中の現実と架空の境界を弄り、現実被害を出さないものらしい。

詳しくはよくわからないが、ともかく被害がでないらしい。

ちなみに紫や妖忌、楓や他の鬼達は結界の外からこの闘いを観戦している。

どうせ鬼達は酒のつまみにしているのだろう。

「まず私から行くよ？」

そう言っただけで勇儀が一步前が出る。

これもどうでもいい事だけど、こつやってみると勇儀の角って長くて鬼の中でも立派だな。

「四天王奥義・・・」

・・・いきなり本気？

一歩進めば大地を揺るがし、

二歩進めば天まで響き、

「三歩・・・」

三歩進めば・・・

「必殺!!!!!!」

神すら殺す。

たった三步で間合いを詰めた勇儀が俺の顔面目掛けて拳を放つ。

元々の鬼の力に彼女の『怪力乱心を持つ程度の能力』が加わり、ありえない威力の拳になる。

おそらく純粹に力だけなら鬼の中で最強だろう。

‘力’だけなら。

俺は勇儀の拳を両手を使い挟み込むように止める。

同時に土埃が立ち込めるがすぐに晴れる。

そこには自らの拳を止められ、驚愕した顔の勇儀がいた。

「避けられるとは思ったけどまさか止められるとはね……」

「力だけなら俺と対して差はないぞ？」

だから俺は両手を使った。

そして正面からではなく側面で止めた。

これは技術の差だな。

それでも山くらい粉碎する勢いの衝撃がきたがな。

「……次はこっちから行くぞ？」

俺はそのまま右足を一步下げる。

このまま蹴りを入れるつもりだ。

だが、

「戸隠山投げ！！！」

萃香が大岩を投げてくる。

・・・勇儀を援護するため何だろうが、これ勇儀も潰れね？

つて、なんだ？
岩が爆発した？

・・・じゃあ、こっちは陽動か。

その時後ろから拳がきた。

速いな。

萃香達がいた距離から一気に詰めてきたのか。

俺は勇儀の手から右腕を放し、その右腕で後ろからの拳を防ぐ。

重い・・・

この速さでこの重さか。
流石は鬼だな。

ちなみに殴ってきたのは紗花だった。
‘迅’の鬼なだけの事はあるな。

それで俺は勇儀を紗花の方に投げる。

「うおっ!!」

「え？」

二人とも投げられるのは予想外だったのか勇儀はそのまま投げられ、
紗花も巻き込まれ吹き飛ばされる。

さて、このまま追撃・・・

「・・・鬼の調べ・・・」

「!？」

なんだ!？

この衝撃は？

何もされてないはずなのにダメージがきやがった。
おそらく鬼斗がなんかしたんだろっが、何しやがった？

そう思い鬼斗の方を見ると指を鳴らそうとしていた。

そしてもう一度鬼斗が指を鳴らす。

「く!?!」

また衝撃がきた。

どうやら鬼斗が指を鳴らすと攻撃がくるようだ。

あの岩を爆破したのも鬼斗だな。

なんかマス○ング大佐の炎じゃなくて衝撃波みたいな感じだな。

「まさか鬼が投げられるとはね・・・」

「私の速さにも追いつかれました・・・」

なんか後ろに二人ほど落ち込んでいる人・・・じゃなくて鬼がいるな。

ちなみに今の立ち位置は俺の前に萃香と鬼斗がいて、後ろに勇儀と紗花がいる。

「・・・やっぱりただ者じゃない・・・」

「勇儀の奥義止めた時点でわかってたけどね」

で、これは前のグループの会話。

「それにしてもお前ら厄介な能力持つてるな。鬼斗の方はまだわからないが紗花は自身の重さ変えてるだろ？」

「能力もばれました・・・」

お、当たりみたいだな。

移動時は自身を軽くし速く動けるようにし、攻撃時は自身を重くして攻撃の威力を上げる。
そんな所か。

問題はこれが他の奴、例えば俺や勇儀とかにも影響を及ぼすのかどうかだな。

あと鬼斗の能力。

まだ完全に把握出来ていないから危険だ。

「能力もばれましたし、能力全開でいきます！！！！」
・・・能力の事言わない方がよかったか？

「四天王奥義……」

ちよ、それ洒落になんないって!?

勇儀の時だつて止めるのに結構神経使ったんだから。

そんな事考えていると一瞬で紗花が通り過ぎ、俺と萃香達の間で止まった。

……なるほど、これは恐ろしい技だな。

「三步瞬滅」

紗花がそう宣言すると俺の周りに17発の衝撃がおこる。

この衝撃は紗花がさつき通り過ぎた時の打撃だ。

紗花の速さに衝撃が間に合わずワンテンポ遅れて衝撃がきた。

てか、あの一瞬で17発も打撃を入れるとか凄いな。

しかもその一瞬だけ俺を軽くして防御力を下げるとか。

だがそんな衝撃も俺に届く事はなかった。

発生した衝撃は俺の手前で全て止まった。

「・・・まさか・・・全て防いだのですか・・・？」

ちよつと焦ったが防げないほどではなかった。

「ご明答。ついでに言つと・・・」

その瞬間、紗花の腹に衝撃が走った。

「がつ！？？」

「俺は18発殴れた」

もちろんその衝撃は俺の拳によるものだ。
カウンターだ。

そしてそのまま崩れ落ちる紗花。
速く動くために腕以外の重さを軽くしてたから多分もう動けないだろう。

「さて、まず一人」

いや、鬼は一人じゃないか？

一鬼？

よくわからないな。

「・・・紗花相手に速さで勝つなんてね」

勇儀が驚愕しているがそんな暇はないぞ？

「溢れ出る欲望」

俺から放たれた七つの弾は空中で膨張し、砲撃の雨を降らす。

「い!？」

「・・・」

「やつぱ・・・兄様は規格外だよ」

三人ともばらばらの反応をする。

ま、この程度でやられないのは知っているがな。

そして三人とも降り注ぐ砲撃を避けていく。

てか、萃香は自分の体の密度を薄くして当たらないようにしてるな。

やっぱり『密度を操る程度有能力』に砲撃は効かないな。

それはそうと俺は砲撃を避けている勇儀に近づく。

砲撃は俺が放っているわけではないので俺自身は動き回れる。

「!・・・この砲撃って陽動？」

よほど集中していたのか目の前まで来てやっと俺に気付いた。

「当たりだ。拳砲・連」

「ぐっ!!」

勇儀は成す術なく拳を喰らい吹き飛んだ。

軽く百発くらいやったからもう立ち上がれないだろうな。

そして砲撃の雨が止む。

「これで二人目か」

「な！？勇儀！！！」

「・・・強い・・・」

萃香は驚き、鬼斗は改めて俺の強さを認識したようだ。

「・・・萃香・・・」

そんな中、鬼斗が萃香に話しかける。

「・・・わかった！！」

え？

今ので？

「行くよ！！ミッシングパワー！！！！」

萃香が自分の密度を操り巨大化する。

「そんでもって・・・濛々迷霧！！！！」

な!?

技二つ重ねるのあり?

・・・そつか。スペルカードとかまだないもんな。
それに俺もさつき技重ねたようなもんだしな。

そうこう考えている内に萃香の周りに白い弾幕が集まる。
そして萃香の姿が見えなくなった。

「じゃあ行くよ!!」

そして突撃。

なんて豪快な技だ。

力押しな所がいかにも鬼らしいがな。

ま、近づかずに砲撃が妥当だな。

「神霊砲」

砲撃、もといレーザーを放つ。

30本くらい放ったし、あの巨体だから当たるだろうな。

「うおりゃああああ!!!!!!」

って、普通正面から全部まともに喰らうか？

「やつ！！！」

あれを押し返すか。

やはり鬼は恐ろしいな。

「四天王奥義・・・」

この状態で使われるのはまずい！

俺は一気に近づき、砲撃の用意をする。

「三步壊・・・」

「させるか！！一徹の砲撃！！！」

巨大化している萃香すら飲み込む大きさの砲撃を放つ。

「！」

萃香は声をあげる間もなく砲撃にのまれる。

砲撃が止むとそこには元の大きさに戻り、周りの弾幕も無くなって

いる萃香が倒れていた。

神霊砲のダメージもあつたんだろう。
戦闘不能のようだ。

危ない危ない・・・

こんな状態で奥義使われたらどうなるかわかったもんじゃないからな。

・・・まだ危ないな。

鬼斗の方を見ると彼女は尋常じゃない妖力を溜めていた。

萃香は時間稼ぎか・・・

「・・・一つ教えておく・・・」

「？」

「・・・私の能力は『音を衝撃波に変える程度の能力』・・・」

成る程。

指ばっちんの音を衝撃波に変えてた訳だ。

だが……

「何故教えた？」

「……この技を使うなら教えないとフェアじゃない……」

「……そうか」

なんとも鬼らしい理由だな。
嫌いじゃないけど。

「行く!!」

鬼斗は右足を高く上げ、一気に振り下ろす。

そしてその音によって出来た衝撃波が辺り一帯を破壊していく。

「障壁」

魔力で衝撃波を防ぐが俺の周りの大地を衝撃波がえぐっていく。

今度は左足を右足と同じように振り下ろす。

また衝撃波が発生する。

・・・障壁にひび？

これは凄い威力だ。

二歩目にしてこの破壊力とは。

てか結界がやばいな。

めちゃくちゃバキバキ言ってるし。

これ次で壊れるんじゃない？

そして鬼斗は息を大きく吸い始めた。
つてことは最後は声か。

「ああああ！！！！」

三歩目。

鬼斗ってこんな大声出せたんだな。
じゃなくて、迫り来る衝撃波を見ると障壁では防ぎきれない気がするな。

完全に結界は駄目だな。
もう所々壊れて外が見えてるしな。

とりあえずこの衝撃波は鬼斗の能力のはずだからあいつを倒せば止まるはず。

すぐに止めないと外にも影響ありそうだし。

俺は指一本前に出す。

そして霊力を指先に集中する。

その霊力量はさっきの溢れ出す欲望と同じくらいだ。
つまりところ砲撃700本分を一本に纏めたって事だ。

「直進する野望」

放つ。

太さはさっきの一徹の砲撃と対して変わらないが、威力は桁違いだ。

その砲撃は衝撃波に当たると拮抗することなく衝撃波は消し飛ばされた。

そしてそのまま鬼斗に当たる。

鬼斗は奥義後で動けなかったのか簡単に砲撃にのまれた。

だが砲撃はそこで止まらずまだまだ進んで行く。
そして結界に当たり結界を完全に破壊した。

・・・俺がやった方が被害出かったな。
外は大丈夫か？

「相変わらず仁はぶっ飛んでるね。安心したよ」

「まさか、ここまでやるなんて・・・予想外過ぎよ」

「仁様、もう人間と名乗るの止めてください。人間に失礼です」

「・・・」

この会話は上から楓、紫、妖忌、俺だ。

まず楓。

安心って何？安心って？

俺はぶっ飛んでるのが基本なの？

紫・・・

ゴメン・・・

俺もこれはやり過ぎだと思った。

そして妖忌。

人間に失礼ってどういう事？

でも最近あまり人外を否定出来なくなってきたんだよな。

とりあえず状況がわからないだろうから結論だけ言おう。

山・・・半壊させちゃったよ・・・

最後の砲撃、予想外に威力があつたよ。
ちなみに半壊って文字通りだ。

山が半分消し飛んでる。
片面が断崖絶壁だよ。

「とりあえず山がこんなになつたらあたしらも移動するしかないね」
でも楓達が来てくれるならいいか。

ま、結果オーライ？

「とりあえず予定地には山があるのか？」

鬼達としても山に住みたいだろうしな。

「一応あるわ」

じゃあ平気だな。

「さあ、みんな引越し祝いだ！！飲むよ！！！！」

『イエーイ！！！！！！』

で、鬼達は結局飲むのか。
どんだけ宴会好きなんだよ。

「もう行っちゃうのかい？もっとゆっくりしていけばいいのに」

「いろいろやる事あるしな」

今は朝。

闘いの次の日だ。

結局あの宴会は夜通し続いた。
てかまだ呑んでる奴らもいるしな。

ちなみにやる事とは他の強い妖怪に声をかけることだ。

幽香に冷華、あとルーミアに会えれば誘いたいな。
ともかく宛てなら割とあるしな。

「じゃあ私も行くわ」

そついいながら紫はスキマを開く。
紫はこれから白玉楼を冥界に移動させるらしい。

「悪いね。見送りがあたしだけで。萃香達も来たがつてたんだが」

「いいんですよ。あれだけの怪我では仕方ありませんもの」

ごめんなさい。

四人とも重傷だそうです。

「じゃあ妖忌も頑張ってね」

「はい！頑張ります！！」

ちなみに妖忌はしばらく俺と一緒に行動することになった。
修業のためにな。

それから修業の間の幽々子の世話は冥界の幽霊がやるらしい。
・・・普通の幽霊ってまず物持てたっけ？

まあ映姫が言っただけだし大丈夫か。

「あ、そうだ、紫」

「何かしら？」

スキマに入るギリギリの所で俺が呼び止めた。

「月から刺客来た？俺も命狙われていたはずだが俺の所全く来てないんだよな」

「来たわよ。ほとんど破壊したけど」

今の言いようだとロボットだと知っているんだな。

てか・・・

「ほとんど？」

全部じゃないのか？

「ええ。一体だけ残ってるわ」

意外だな。

紫だったら境界操って一気に破壊しそうだけだな。

また狙われそうだしな。

「大丈夫よ」

すると紫が俺の反応から察したのか扇子を開き、話し始めた。

「いろいろと月で弄ったし、プレゼントも渡したしね」

「プレゼント？」

「会って本人と喋れば分かるわ」

そう言つて扇子を口元に当て、胡散臭い笑みを浮かべる紫。
・・・なんか絶対ろくな事してないだろうな。

「会うならこの近場にいるからついでに会ってみなさい」

「……ああ」

暗殺者に会いに行くターゲット。
なんか変だよな。

「それじゃあご機嫌よう」

そして紫は胡散臭い笑みを浮かべながらスキマに消えて行った。

心と5（前書き）

更新スピードが遅いけど一話あたりが長くなった。

皆さんはどちらのほうがいいんですか？

どちらにしる駄文ですけど。

心と5

「ちょ、本当に待って下さい！！死にます！！！」

「大丈夫だ。加減してある」

「いや、あなたが加減って言うてもそこら辺の妖怪は一撃じゃないですか……」

「神霊砲」

「嘘だ！！これ絶対手加減なんか……あああああ！！！！！」

現在絶賛妖忌の修業中。

え？一方的なイジメに見えた？
気のせい、気のせい。

とにかくこんな感じで一日三回くらい修業をつけている。

紫達と別れて数週間。

妖忌は確実に強くなっている。
主に回避と戦闘センスが。

「ほら妖忌。いつまで寝てるんだ。出発するぞ」

妖忌は今だプスプスと煙りを上げながら倒れている。

「・・・・・・・・」

返事がない。只の屍のようだ。

「・・・まだ屍は半分だけです」

お、妖忌立ち上がった。

てか地の文に突っ込むなよ。

「起きたならさっさと行くぞ」

「待ってくださいよ!」

「それよりこれから会いに行く暗殺者って会って大丈夫なんですか？ 仁さんも命狙われているんですよね？」

歩きながら妖忌が尋ねて来る。

ちなみに呼び方はさん付けにさせた。
なんか様だと落ち着かないんだよな！

「紫も平気な感じで言ってたし……大丈夫？」

「疑問形とか止めてくださいよ……というよりも紫様の話しだから余計に不安なんです」

それは言えてるな。

そして俺らは俺の命を狙ってきた暗殺者の所に向かっていて。
狙われたって言うても一回しか襲撃されてないけど。

ともかくあのロボット軍団の生き残りがいるらしい。
そして紫いわく、何か細工したらしくもう襲ってこないらしい。

ちなみに会いに行く理由は例のナイフの回収だ。
輪廻を破壊するものを放置するのはまずい。

あと・・・出来れば話しがしたい。

不比等の事でとやかく言うつもりはないし、破壊しようって訳でもない。

とりあえず会って見なきゃわからないけどな。

「とりあえずこんな山奥に住んでいる時点で普通じゃないのはわかりますけど・・・そいつの人格は大丈夫なんですか？」

俺らは今山道を歩いている。

紫の話しでは山奥に住んでいるらしい。

たしかに妖怪や妖精がうようよいる山奥に住んでいる時点で普通じゃないな。

「人格ってどういう意味？」

「この前みたいな事はないか、って事です」

「この前？・・・ああ、幽香の事か。大丈夫だろ」

実は少し前に幽香の所に行き、幻想郷に誘っていた。

で、その時何があったかと言うと・・・

くくく回想くくく

『あら、久しぶりね。今日は何の用かしら？』

『話がある』

『とりあえず『イス』に座って』

『ああ』

『って、何でも事も無いように座っているんですか！！どう見ても『イス』じゃなくて『人』じゃないですか！！！』

『・・・自然過ぎて気付かなかったな』

『いや、普通気付きますよ！！！』

『慣れれば楽なものよ』

『慣れたくないですよ！！って仁さんはなんでそんな遠い目をしてるんですか？』

『数百年前に俺もこんな反応してたな、って思ってたな』

『数百年前からこんな状態なんですか?!』

『実際はもつと前からよ』

『ええええええ?!?!?』

回想終わり。

ついでに言うとお香は幻想郷の話を承諾した。
花畑ごと移動するらしい。

「本当に大丈夫ですか?もうあんなぶっ飛んだ人は嫌ですよ・・・」
「

最低でもあんなドSではないから安心しろ。・・・家が見えてきたな」

おそらくあの家に住んでいるのだろう。

それにしても俺の存在に気付いてもいいはずなんだがな。
動きが全くないな。

「・・・よく来た」

「！こ、声が」

やっと出て来たか。

能力で姿隠してるな。
俺には関係ないけど。

でも妖忌はびびってるな。
姿も気配もわからないからひびるのも当たり前だな。
実は目の前にいるけど。

ちなみに暗殺者・・・いい加減なんか名前が欲しいな。
ともかくそいつの姿は変わらずスーツみたいなを着ている。

「その言い方だと俺が来るのがわかってたみたいだな」

「あれだけ霊力を振り撒いといてよく言う・・・」

「えっと、姿見えないし会話に入れないんですけど・・・」

確かにわざと霊力は隠さなかったがな。

あと妖忌はとりあえず剣をしまえ。

それじゃあ誰だって姿見せられない。

「何をしに来た？」

「話した」

「……家に来い」

どうやら招待してくれるようだ。

「行くぞ」

「だから私姿が……って、ドアが勝手に開いた!？」

実際は普通に開けてるだけだが見えない奴からしたらホラーだな。

「ともかく中に入るぞ」

「は、はい」

怖がりすぎじゃね？

そつえば妖夢って怖い話とか苦手なんだよな。
半霊なのに。

もしかして妖忌もか？

見た目も普通の家だが、中は少々違った。
所々ハイテクそうな機械がある。

メンテナンスとかに使うのかもしれない。

「・・・座れ」

そう言ってイスを引いてくれるのは有り難いがこれもホラーだな。

なんか妖忌怖がつてるし。

「まずなんて呼べばいい？NO.5か？」

「・・・何故わかった？」

お、NO.5って当たりみたいだな。
勘だったんだけど。

「勘」

「・・・好きに呼べ」

うーん・・・なんて呼ぶかな。

なんか意味があるのにしたいな。

「じゃあフュンフ・アサシスとでも呼ばせてもらっ」

フュンフはドイツ語で5。

アサシスは暗殺者の意味のアサシンをもじった。

「勝手にしろ。それで何の用だ」

「建前はお前のナイフについて。本音は紫がお前に何をしたか気になったからだ」

ナイフも大事だな。

「ナイフはスキマとの戦闘中に全て無くした。今持っているのは普通のナイフだ」

本当っばいな。

だいちこんな簡単に会えるなら映姫が何かしら手をつってるか。

「そしてスキマがやった事は月で境界を弄られ存在を消された」
つまり初めから存在しない事にされた訳だ。

じゃあ俺らを狙う理由も無くなって当然だな。

もうフュンフは月と関係ないんだから。

「だから姿見えないんですか？」

そんな物理的な意味な訳ないだろ。

「半霊。少し黙ってろ」

ほら怒られた。

とりあえず反論しそうだった妖忌を手で止める。
話し進まなくなりそうだし。

「あと……人の心を植え付けられた」

「心？」

これまた抽象的な物を。

「本当にいらぬ物を植え付けられたものだ……昔は何も考えずにいられたのにな……」

確かに只のロボットに心はいらないからな。

「でも心があるってのは良いことだと思っがな」

「・・・お前は俺が憎くないのか？」

・・・これまた唐突だな。

話しの流れがよくわからないな。

「心が付い今ならわかる。お前があの時NO・23を破壊した時は明らかに怒りがあつた。友を殺されたからな」

「・・・」

確かにそつだ。

あの時は怒りのあまり塵すら残さずに殺した。

「だがお前とあいつは別だろ？」

「我々は感覚を共有している。だから誰が殺しても全員が殺したことになる」

「だとしても、俺はお前を一回殺した。それで充分だ」

俺はもうとやかく言つつもりはない。

怒りや憎しみも数百年近く持ち続けるのは俺には無理だ。

「……変わっているな」

そうか？

「やはり人の心はわからないな……複雑だ」

「そう簡単にわかるものでもないだろう」

「あの……いい加減姿見せてくれませんか？虚構に話しているように怖いんですけど……」

そういえば妖忌いたな。
完全に空気になってたな。

「……」

あ、能力解除したな。
俺には関係ないけど。

「意外と男前ですね。暗殺者って言うくらいだからもっとゴツイメージだったんですけど」

それどんなイメージ？

「褒め言葉として受け取っておこう……」

いや、普通に褒め言葉じゃね？

「……なんかまずい事言いました？」

妖忌も気にしてるな。

「俺は女だ」

は？

「「いやいやいやいや……」」

確かにどっちかと言えば中性的な顔してるが……

胸なんか天子なみの絶壁だし、スーツも完全に男物だし……

「そんなに疑うなら……脱ぐか？」

あれ？

これってマジなやつ？

「ぬ、脱げるものなら脱いでみて下さい！！！」

ちよ、なんでお前はそこで意地になる。

ほ、ほら！！

フュンフ服に脱ぎにかかって……あああああ！！！！！！

「ごめんなさい・・・」

「わかればいい」

妖忌は今土下座している。

まああんな事言えばな。

ちなみにフュンフは女だった。

「にしても、まさか女だったとはな。全員女か？」

全くわからなかった。

「全員だ。そこまでわからないか？」

「当たり前だ。まず顔がわかりにくい」

「そんなの開発者に言え」

「それに失礼だが、胸もない」

「あっても邪魔なだけだ。それにオプションがある」

「胸の？」

暗殺者にそんなオプションいらなくね？

「ああ。あとよくわからないが服もメイド服やら……」

「わかった。それ以上言うな」

開発者の思考がわからない。

暗殺者にメイド服？

意味不明だな。

「それに口調も男っぽいです」

あれ？妖忌いつの間に土下座止めた？

もう立ち上がってる。

「口調はどうしようもできない。それより話しはこれだけか？あまり遅いと日が暮れるぞ」

「最後に一つある」

「なんだ？」

「幻想郷にこないか？」

「彼……じゃなくて彼女も誘うんですか？」

妖忌、いい加減女である事に慣れろ。

「ああ。こいつは強いし、どちらかと言えば人間よりだしな」

人間の味方で強い奴も欲しいんだよな。

「なんだその幻想郷と言うのは？」

「もちろん説明する。ここより東の地に……」

青年説明中……

「……理解した」

一通りの事は説明した。

紫の事も隠さなかったし、人間の味方になってほしいとも言った。

「それでどうする？」

「行こう……ちょうど退屈していたしな……」

お一人様ご招待！

「じゃあ俺はこの辺でおいとまさせてもらう。行くぞ、妖忌」

目的ある程度果たしたし、予想外の収穫もあったしな。

ちなみにフュンフは俺らと来ず、直接幻想郷に向かう事にした。
まだ形も出来てないはずだがな。

「わかりました」

妖忌も俺の後に続いてドアに向かう。

「待て」

だがフュンフに呼び止められた。

「どうした？」

「強い妖怪や人間を求めるならここから北東の方にある命蓮寺に行
ってみろ」

命蓮寺？

何処かで聞いたことがあるような・・・

「あ、私聞いた事があります。たしかめっぼう強い美人の尼がいる

「んですよね」

「妖忌は知っているようだな。」

「表向きはな。裏ではその尼が妖怪の治療などを行っているらしい」

「妖怪の！？」

「それは驚きだな・・・」

「退治する対象の妖怪を治療して何の意味があるんだろっか？」

「しかもそんな事が人間にばれれば袋だたきにされる。」

「リスクがありえない程高い。」

「そんな人間も妖怪も大好きな奴なら幻想郷にピッタリじゃないか？」

「そうだな。情報感謝する」

「行ってみる価値はありそうですね」

「でもなにか忘れてる気がする。」

「そうだな・・・それからフュンフ」

「どうした？」

「俺はお前の事を別に今更どうこうしようとは思わない。だがあいつの娘はどう思っているかはわからない」

妹紅はおそらく蓬萊の薬を飲んでいて、
だとしたらまだ生きてるはずだ。

原作では輝夜に恨みを持っていたようだが、この世界にはもっと直接的に父を殺した対象がいる。

妹紅はそれを憎まずにいられるだろうか？

「……覚えておこう」

「忘れるなよ？ともかくじゃあな。次会う時は幻想郷だな」

「それでは失礼します」

「さらばだ……」

俺と妖忌はフュンフの家を後にした。

それにしても命蓮寺って何処かで聞いた事があるんだよね……
何だっけ？

俺は製造番号NO.5.....いや、今はフュンフ・アサシスだったな.....

名乗る名もないので有り難く使わせてもらおう。

俺はあの後すぐに東に向かった正確な位置はわからないがそのうち見つかるだろう。

.....こんな適当な感じはらしくないな.....
人の心というのは適当なのだろうか？

らしくないと言えば、今日二人に女と思われなかったのは何故かシヨックだった。

しかもあの後胸のオプションを付けてしまっし、スーツもレディー・スのものに変えてしまった。

俺はこんなに他人の目を気にしていただろうか？
本当にらしくない.....

だがこれで少しは女っぽく見えるはずだ。

ともかく俺は東に向かっていて、夜になったので焚火をして野宿をしている。

空は若干雲があり、ちょうど月を隠していた。

「……誰だ。出てこい」

焚火の奥の草むらから人間の気配を感じた。

しかしこれは本当に人間の気配か？

何故こんなに妖力を感じる？

半妖か？

「危害を加える気はないよ。私は只の旅人さ」

子供だと？

俺は闇夜でも目が利くからわかる。

今草むらから出て来た奴は子供だ。
しかも女だ。

「子供が一人で旅をするのか？」

気配はこいつだけだ。

後は人はおるか妖怪の気配すらない。

「お姉さんだつて女の一人旅は危ないと思うよ？それにしてもなかなか変わった格好をしてるね」

よし、女扱いされた。

・・・今はそうじゃなかったな。

「それはお前に言われたくない。それから俺の名はフュンフ・アサシスだ」

そういうこいつもなかなか奇抜な格好をしている。

しかも白髪。

変わり過ぎだろ。

・・・人の事は言えないか。

「お、外国の人？だから服が変なのか。それで何処に向かっている

の？私は東の方に向かっているんだけど」

「俺も東だ」

「お、じゃあ一緒だね！途中まで一緒に行っている？」

「好きにしろ・・・」

「じゃあ好きにさせてもらっようよ。フュンフさん」

・・・仁も変わっていたがこいつも相当変わってるな。

しかも人かどうかもよくわからないしな。

・・・でも連れがいるのも悪くないかもな・・・

「名は・・・」

「ん？」

「お前まだ名乗ってないだろ・・・」

「そっいえばそうだったね。私の名は・・・」

「藤原妹紅」

命蓮寺と妖忌（前書き）

明日から学校だ・・・
どうしょ・・・宿題・・・

修正しました。

命蓮寺と妖忌

「うーん・・・」

「さっきから何を唸っているんですか？」

「命蓮寺ってどっかで聞いた事がある気がするんだよな・・・」

「私みたいに噂を聞いたんじゃないんですか？」

「そんなんじゃないくて、なんか重要な事の気が・・・ああ、もう！！喉に小骨が刺さったような感じが気持ち悪い！！！」

「フュンフさんから命蓮寺の話しを聞いてからずっとそんな調子です。あ、みたらし団子こっちはです」

現在町の茶屋で休憩中。

店の外に置いてある椅子に座り、お茶を飲んでいる。

ちなみに妖忌の半霊と白髪は俺の霊力で隠している。

俺はこういうの専門じゃないからそこそこ力がある奴なら一目でばれるが一般人から隠すには充分だ。

こんくらいの大きさの町ならそこまで強い妖怪退治屋もないだろうしな。

「あんた達命蓮寺に用があるのかい？」

「どうも」

みたらし団子を持って来てくれた茶屋のおばちゃんが話しかけてきた。

こういう人って結構情報持ってるから馬鹿にできないんだよな。真実かどうかは別問題だけど。

「おばちゃ、ムゲツ!!」

「お姉さんは命蓮寺について何か知っているんですか？」

妖忌が禁句を言いそうだったのでみたらし団子を口に突っ込む口をふさぐ。

「いやだわぁ!!おだてたって何もでないわよ？」

「いえいえ。私達は旅の行商なのですが命蓮寺の噂を聞き向かおうとしていたのですが、何か知っていたら寺の特徴や祭っている神など教えてくれませんか？」

こういった情報を聞けば何か思い出すかもしれないな。

（よくもまあここまで出まかせを言えますね・・・）

もぐもぐ・・・

妖忌が押し込まれた団子食いながらなんか言いたそうだがスルー。

「そうねえ・・・私が知っているのは寺が山の上にあって尼様が変わっているってことね」

「変わっている？」

「なんでも年をとらないらしいのよ。この町自体命蓮寺から離れているから私も直接見た事ないけどね」

「ほう・・・」

命蓮寺までまだあと町が二、三個あったからあまりいい情報は期待してなかったがなかなか面白い話を聞けたな。

「他には？」

「悪いね私が知っているのはこれくらいだよ。じゃあ私は仕事があるから戻るよ。商売頑張ってね！」

「はい、ありがとうございます」

そう言っておばちゃんの仕事に戻っていった。

「妖忌。今の話を聞いてどう思う？」

・・・ゴクン。

「どうにも怪しいですね・・・尼が妖怪なのでしょうか？」

「その線もあるな。だが俺はその尼は人間、もしくは元人間だと思う」

「何故です？それに『元』って？」

「もし妖怪なら人間を助ける必要がない。妖怪が化けているなら年をとらないようにしているのは不信心だ」

「だから人間だと？」

「ああ。能力で年がとらないのか、お前みたいな存在なのか、はたまた人間を辞めたのか」

「・・・」

妖忌としても思つところがあるのかもな。

異端は排除される。

きつと妖忌も身に染みているのだろう。

だからもし尼が人間だったらたどる運命がなんとなく分かるのかもな。

「行くか。勘定ここに置いてくよー」

「・・・・はい」

俺らはこの町を後にして、再び命蓮寺を目指し始めた。

「やっと着いたな」

「それにしても凄い人ですね。この人達みんな参拝客なのでしょう
か？」

俺達は命蓮寺がある山のふもとの街に着いた。

あの町を出てから三日。

俺達の足だともものすごく早く着いた。

え？手抜き？

歩いてところなんてつまらないだろ？

「確かに凄い賑わいだな。全員が命蓮寺目当てなら信仰の大きさが
伺えるな」

まだ街の入り口だが活気があるのが充分にわかる。

今まで通って来た町も賑わっていたが、ここまでではなかった。

命蓮寺という存在はそれほど大きいのだろう。

・・・これは幻想郷には来てくれないかな？

いくら妖怪好きの奴でもこんな土地を捨ててでも幻想郷にはこない
だろうな。

まあ会ってみなきゃわからないけどな。

「さて、とりあえず宿を探すぞ」

「あれ？寺には行かないんですか？」

「今行っても人間の対応しかしてないだろ」

「じゃあ夜に行くんですか？開いてないと思いますけど」

「忍び込むから大丈夫だ」

「寺に忍び込む神って……」

そんなのは気にしたら負けだ。

ともかく宿探さないとな。

出来る限り安いやつ。

ちなみに金は別に汚い金じゃないよ。

襲ってきた盗賊やら夜盗やらを返り討ちにして持ってた金品を……

……これも汚い金か？

まあいいや。

「じゃあ妖忌は受付を頼むぞ」

「わかりました」

なかなか安い宿があつてよかった。
命蓮寺から少し離れているが問題はない。

とりあえず妖忌に受付させているから寺の情報を集めるか。

出来れば地元の人に聞きたいな。

特に寺に祭つてある神を知りたい。
これが一番引つ掛かるんだよな。

お、地元の出前みたいな男の人がいた。
聞いてみるか。

「お仕事中すいません。私は旅の行商なのですが命蓮寺の噂を聞き

向かおうと（ry」

「祭つてある神？それは毘沙門天様だよ」

・・・思い出した！！！！

年をとらない尼つて聖か！！聖白蓮か！！！！

そんでもって命蓮寺つて聖が幻想郷に建てた寺と同じ名前だ！！

やっと思い出した。

じゃあ、あの寺つて寅丸星やナズーリンがいるのか？

葉月はいないはずだ。

うる覚えだが星が毘沙門天代行をしていたから本物の毘沙門天はいないはずだ。

「ありがとうございます。とても参考になりました」

「いってことよ！！じゃあな！！！！」

さて、引っ掛かっていた事もわかったし妖忌の所に行くか。

・・・でもたしか聖つて妖怪を助けた事がばれて人間達に封印されているんだよな。

忠告はしておくか。

夜。

今夜は月もなく、忍び込むにはもってこいだ。

とりあえず飛んで空から様子を伺っている。

それにしても結界が強固過ぎだろ。

寺だとしても強すぎる。

これじゃあ何か隠しているって言ってるようなもんだよな。

「やはり夜には結界が張られていますね。どうします?」

「ふむ……」

どうするかな?

壊すだけなら簡単だが、それだと寺の連中に気付かれるんだよな。

うーん……

「・・・穴掘るか」

「穴ですか？」

どうやらこの結界は地面の中までは張られていないようだしな。

「よし、霊力使ってほるぞ」

「どうやってどすか？」

「霊力の形を変える。ともかく下に降りるぞ」

それで降りて寺を囲む塀の側にきた。
位置的には正門の反対側だ。

「やるか」

俺は霊力をドリル状にして穴を掘っていく。

「相変わらずよくそんな形状を霊力で出来ますね・・・」

「年の功だな」

実際俺がこの世界に来てどのくらいたってるんだろうな・・・
もう正確な歳覚えてないな。

お、昔の事を考えていたらもう塀の向こうにいったな。

それから鍬みたいに形を変えてと・・・

「よっ」

「うわっ!!」

一気に引き抜いて、トンネル開通と。

「よし、行くぞ」

「仁さん」

「どうした？」

「こんな靈力使ったら寺の人氣づくんじゃないですか？」

「・・・・・・・・・・行くぞ」

「何ですか?!今の間は!?!もしかしてその可能性・・・・・・・・ちよ、待ってくださいよ!?!」

多分平気だろ。

最低でもいきなりボス級の奴はこないだろ。

「だ、誰だあんたら!?!この穴もあたらの仕業か?!」

・・・・いきなり遭遇です。

しかも村紗。

4面ボスの人、じゃなくて妖怪ですよ。

格好はやはり船乗りみたいな感じ。

てか、この時代にそんな船乗りいるのか?

「・・・・・・・・見つけましたよ?」

「わかつている！」

「なんでそんな堂々としているんですか!?!」

まあまだ一人だし速攻で片付ければ……

「村紗くどうかし……!!」

はい。もう一人来ました。

尼みたいな格好をして、手になんかわっかを持っている雲居一輪さんです。

「……」

で、その後ろに一輪のオマケの無口な見越し入道。名前は忘れた。

……あれ？

一輪があの入道のオマケなんだっけ？

それとも一輪が入道を操ってるんだっけ？

思いだせないな……

「侵入者？」

「ええ。そうみたい」

「・・・やはり姐さんが目的？」

「そうなるな」

幻想郷には来てくれないだろうが話しはしたいし。

「くつ、退治屋がとうとうここまで・・・」

あれ？勘違いされた？

・・・言い方まずかったな。

「とりあえずなんだろうが聖には合わせないよ！・・・」

「雲山！・・・」

「・・・」

おお！！入道が巨大化したぞ！！

でかいな。萃香のミッシングパワー使ったくらいあるか。

てか二人とも戦闘体制に入りましたよ。
もっと平和的に行こうぜ？

「どうするんですか！？結局戦闘になってますよ！！忍び込んだ意味ないじゃないですか！！！」

「ともかく応戦するしかないだろ。行け！！妖忌！！」

「私だけ?!」

「修業の成果を見せてみる」

「いや私毎回ボコられてただけなんですけど・・・」

大丈夫。

お前はやれば出来る子だ。

「何ごちゃごちゃやってる！ファントムシップハーバー！！」

「問答無用の妖怪拳！！」

村紗は一輪がいる方向以外の全方向に船の碇を投げる。

そして一輪……いや雲山は上空から巨大化した拳で殴りかかってきた。

「ほら、妖忌がもたついているから先制攻撃されたぞ」

「私のせいですか？……わかりましたよ……やりますよ……」

そう言つて刀を抜き構える妖忌。

さて、どのくらい成長してるかな？

「ハッ!!」

妖忌は拳や碇を避けながら駆け上がる。

拳や碇の通つた後に弾幕が残っているがそれも安々避けていく。

やはり回避能力はかなり上がったな。

「ここだ!! 現世斬!!」

「くっ……」

「キャア!!」

妖忌はある程度の近さの所で技を使う。

今のは二人には届かなかったが光で目くらましと周りの弾幕を消せれた。

「！奴は何処！？」

「え？」

そして、光が収まる頃には妖忌は二人の後ろをとっていた。

「天人の五衰！！」

「何！！うつ・・・」

「後ろ！？つ・・・」

不意をつかれた二人は妖忌の放つ五色の弾幕を喰らい吹き飛ばされる。

「強い・・・」

まあ上々だな。

回避もしっかりできてたし、間合いの判断も出来てた。

特に技のタイミングもいい感じだな。

「ならこっちから！げんこつスマッシュ！！」

「何！？」

「……………」

妖忌には敵わないとみて俺からいくか。

雲山の拳が俺を挟むように現れ、両方から一気にせまってくる。

この判断は普通は間違いじゃないが、俺に対しては……

「間違いだな」

俺は迫りくる二つの拳をそれぞれ片手で止める。

「……………！」

「へ？」

「な……………」

これには無表情の雲山も驚きが隠せないようだ。

「み、道連れアンカー!!」

今度は村紗が俺目掛けて碇を投げ付けてきた。

「よっ」

俺は今度は片足を上げ止める。

「……」

「な、なにそれ……」再び驚く二人。

村紗なんてポカンと口を開けてなにも喋れてないな。

「よいしょ」

俺は雲山を掴んでいる状態から村紗に投げ付ける。

「う、うわっ!!」

とっさに正気に戻るが村紗そのまま雲山に押し潰された。

妖怪だし生きてるだろうがな。

「雲山！村紗！！・・・っ」

「まだ・・・やりますか？」

「くっ・・・」

それで妖忌が一輪に刀を突き付け終了。

「及第点だな。回避もよく出来てた」

妖忌の方に歩きながら話しかける。

「・・・もしかして、私の修業の成果を見るためにわざとばれるように忍び込んだんですか？」

「さあな」

「・・・」

ゴメン。

そんな事一ミリも考えてなかった。

結果的にはよかったけど。

「……あなた達は一体何物？」

刀を突き付けられながらも尋ねる一輪。

そりゃ見越し入道を力付くで投げる奴がいるなんて思わないよな。

「それには私が答えよう」

「誰だ!!」

「星……」

寺の方を見ると一人の妖怪が立っていた。

あの金髪に寅模様のこしまき。

そしてなんか羽衣っぽい奴。

あいつが毘沙門天代理の寅丸星だろう。

てか一輪が星って言ってたし。

「私はこの寺の・・・イタッ！」

「「「・・・」」」

このタイミングでこけるか？
なんか一輪も呆れてるし。

ん？なんか転がって・・・
あれ宝塔の玉じゃね？
爆発するやつ。

「・・・障壁」

「え？仁さんなん・・・」

ちょうどその時宝塔が爆発した。

妖忌はもちろん一輪や持ち主の星も巻き込まれ、全員地に付している。

俺以外は。

「またこんなオチか・・・」

俺はまた、小さく呟いた。

人と過去（前書き）

軽くアンケートをします。

実はもう一人ぐらい恋姫からキャラを出そうという案があるのですが、皆さんはどう思いますか？

なんか華雄さんの人気がかなり低かった感じなので聞いてみました。

とりあえずまだそのキャラ自体はしばらくでないので気が向いた時に書いて頂ければ幸いです。
ちなみに孫呉からだします。

それからこれの結果で物語は変わったりはしません。

人と過去

「いろいろとすいませんでした……」

さっきの爆発からいち早く目覚めた星が俺に対して土下座をしている。

最近こういう展開多いな……

てか神の代行者がそんな簡単に土下座するなよ。
信仰下がるぞ。

「とりあえず頭あげてくれ。そんな状態じゃ話が進まない」

俺は幽香じゃないからそんな事されても嬉しくない。

「はい……」

やっと頭あげてくれたか。

「とりあえず、さっきの言いようだとお前は俺の事を知っているよ
うだな。葉月から聞いたのか？」

葉月の弟子なら俺の事を聞いていてもおかしくないな。

「はい。あなたの事はお師匠から何回も・・・って、お師匠の真名を知っているんですか！！凄いです！！！」

いや、そんな驚く事か？

・・・実際のところ驚く事だな。

神の真名を知っている奴なんてめったにいないだろうし。

でもそんな尊敬の眼差しを向けられても困るんだけど・・・

「その話しは一回置いといて、お前の事を聞かせてくれ。葉月の代行者であっているか？」

まあ実際知っているが、知っていたら怪しまれるだろうし一応聞いておくか。

「では改めて自己紹介をします。私の名は寅丸星。あなた様の言う通り、未熟な身ですがお師匠の代行をさせてもらっています」

やはりな。

ちなみに代行を立てている理由は葉月が多忙で忙しいからだっただけだ。

「それから私は妖怪ですが、聖・・・この尼の推薦でお師匠の

目に止まり代行をすることになりました」

ぶっちゃけると祭られている星より尼の聖の方が立場が上だよな。聖の方が強いし。

「なるほどね。あの二人は？」

ちなみにあの二人とは一輪と村紗のことだ。

「あの二人も妖怪ですが、妖怪にも人間にも平等に接する聖に心を打たれ聖の護衛をしています。あ、聖とはここの尼の事です」

「平等に接する故に妖怪の治療もしているのか」

「・・・」

これは一概に正しい、悪いとは言えない。全てに平等に接するとは素晴らしい事だ。

だが妖怪達は人間を襲う。

もしかしたら聖が治療した故に失われた命があるかもしれない。

でもそれは一部の妖怪達にとっては仕方がない事だ。

人間も動物を殺し、食べる。

そう考えると善も悪もなくなる。

「……確かに聖は妖怪を助けていますが……」

「別に咎めるつもりはない。ただ俺はその聖に興味があつて、話しをしたいだけだ」

「話し、ですか？」

「そうだ。とりあえず本人に会ってから詳しく話す。会わせてもらえないか？」

「問題ありません。でもひとまず四人を起こしませんか？」

「そうだな。」

「妖忌ものびたままだし、村紗と一輪にも事情を説明しなきゃならないしな。」

「……四人？」

「あと一人誰？」

「……雲山か。」

「あいつは一人でカウントするのか？」

「まあ、どうでもいいけど。」

ともかく妖忌を起こすか。

「ほら、起きろ」

「おぶっ!!」

こついう時は腹に蹴りを入れてたたき起こすのが一番だよな。

・・・あれ？みんな違う？

「な、何故蹴りを・・・」

なんでそんな苦しそうなんだよ。

俺は腹を抱える程強く蹴った覚えはないぞ。

「お前がいつまでも起きないからだ。てか俺そんなに強く蹴ったか？」

「なんですかその理屈は……。それとあなたはもう少し自分の力を認識するべきです……」

そんな事言われても俺の能力のせいで身体能力とかが上がり続けるから手加減しづらいんだよな。

最近伸びる速さは遅くなったけどそれでも直ぐに変わるからやっぱり難しいんだよな。

「まあ善処しよう」

「そう言う人って絶対しませんよね」

「失礼だな。なんでそんな事が言えるんだ」

「幽々子様で身に染みてますから」

「……」

「そこで黙らないでくださいよ」

妖忌が何か言ってるがここはスルーだ。

あつちでは星が村紗達を起こして、いろいろと説明をしているようだ。

ん？

なんで二人ともこちらを向いてガタガタ震えているんだ？

なんか傷つくから止めてほしいな。

「星。説明は終わったか？」

「逃げましたね？」

「……」

「だから黙らないで・・・待ってくださいよ!!」

俺は妖忌にはかまわず三人のところに向かう。

「すいませんでした!!!」

いやそんな開口一番に謝られても・・・
訳も何もわからないんですけど。

ちなみに謝っているのは村紗と一輪だ。

土下座ではないがかなり深く頭を下げている。

「まさか貴方様があの鎮戦大武神様とはいざしらず・・・」

「詳しく話しも聞かず攻撃を仕掛けすいませんでした・・・」

・・・鎮戦大武神って何？

俺の事なの？

なんか名前と言うよりも称号みたいな感じだけど。

「・・・星。俺ってどういう風に世間に知られているんだ？」

なんで名前だけで力が強い妖怪がこんなにもビビるんだよ。

「えっと、昔神々の戦いで一人で500以上の神を薙ぎ倒したり、鬼の頭領に打撃で叩き潰したり、狂った神を力付くで粉碎したりとかです」

めっちゃ物騒じゃん俺！！
でも全部事実だな。

「・・・ちなみに全部本当なんですか？」

一輪が恐る恐る聞く。

そんなにビビらないで欲しいんだけど。

「伝わり方が物騒だが全部事実だな」

「ヒイイ！！！！」

やめてよ、二人してその反応・・・
傷つくよ？

「そんなにビビるな。別にどうもしない」

「ほ、本当ですか？」

「本当だ」

「ほ、本当の本当ですか？」

しつこっ！！

一輪しつこい！

「本当の本当だ」

「「良かった」・・・」

いや、二人して本当にそんな反応しないですよ。

そんな抱き合いながら崩れ落ちなくても・・・

「俺って本当にどんな伝わり方してるんだよ・・・」

「とりあえず最強の神として伝わっています。ちなみに鎮戦とはあなたが戦列に加わればどんな戦いも一瞬でカタが着くからそう言われています」

怖っ！！

俺怖っ！！

「とりあえず私にも状況を説明してくれませんか？私だけおいてけぼりなんですけど」

あ、妖忌忘れてた。

「そういえばこの半人半霊は？」

「魂魄妖忌と言って俺の弟子だ」

「そりゃ強いはずだ・・・」

お前らも弱くはないがな。

お、妖忌が強いと言われて照れてる？

ちよつと顔が赤いな。

良かったな、あの修業が無駄にならなくて。

「少し誤解とはやとちりがあつた。それだけだ」

「そういう事ですか」

「え？今のだけでわかるの？」

「もう慣れましたから……」

そんな遠い目をして言うな。

俺がめっちゃ悪者みたいじゃないか。

幽々子のせいでもあるんだから。

「苦労しているのですね……ならば毘沙門天を信仰……」

「オイ」

さりげなく門徒を増やそうとするな。

「聖は本堂の仏殿にいます。もう準備は出来ていると思いますので、このまま案内します」

今俺達は星に連れられて寺外の廊下を歩いている。

ちなみに村紗達は俺が空けた穴を塞いでいる。

本当は俺がやろうとしたんだが、二人が率先してやってくれた。

それにしても立派な寺だな。

境内に簡単な庭みたいなのがある。

やけにネズミの気配がするがな。

おそらくナズーリンもいるのだろう。

「ここです」

そして星がある扉の前で止まる。

扉の内側からやけに高い魔力と小さめの妖力を感じる。

聖とナズーリンのものだろう。

「よいしょ……あれ？」

「「？」」

なんか星が扉を開けようとして首をかしげた。

「・・・開かないです」

えーということだよ。

「じゃあ私が・・・開かないですね」

妖忌でも駄目かよ。

「それ本当に引き戸？」

「あ、すいません！押して開けるやつでした!!」

いやいや・・・

自分の寺の扉くらい覚えておこつよ。

「どうぞ」

星は真面目な雰囲気になり変わり俺達を本堂に招く。

でも今更そんな堂々としても遅いですよ、星さん。

「失礼する」

「失礼します」

中に入るとまず仏像が目に入った。
やけに勇ましく作られている。

実際は違うがな。

そして部屋の中央には一人の女性が座っている。

ウェーブがかかっている少し紫がかった髪。

服の真ん中は紐のようなものでとめられている。

聖白蓮だな。

そしてその少し後ろにはネズミ耳の少女が座っている。
こっちはナズーリンだな。

「お待ちしておりました、鎮戦大武神様。私がこの寺の尼、聖百蓮です」

「私はナズーリン。毘沙門天様より御主人、寅丸星の補佐として派遣されています」

これはこれはご丁寧な挨拶を。
でも俺固っ苦しいの嫌いなんだよな。

「俺は神道仁。余計な自己紹介は不要だろう。そしてこっちは魂魄妖忌。弟子だ。それから俺の事は仁で構わない」

「よろしいので？」

「構わん」あの名前長くて怠くなる。

「わかりました。．．．それで仁様は私を咎めに來たのですか？」

確かに普通はそう思つかもな。

神で一番強いような奴がわざわざ夜に訪ねてきたんだからな。

「そんなつもりはない。お前のやっている事に興味はあるが別にそれをどうこうはしない。ただに話がある」

「話ですか？」

「ああ。きつとお前も氣に入る。ある妖怪と話し．．．」

青年説明中．．．

「素晴らしいです!!」

凄い気に入ってくれたな。
いきり立ってるし。

「人間と妖怪が共存できる世界・・・まさに私が夢見ていた世界です!!」

「しかし、そのようなものが可能なのですか？」

星は慎重だな。

確かに妖怪側からすればなかなか信じられないだろうな。

「星、確かに空理空論のように聞こえますが粒々辛苦すれば可能だと私は思います。いえ、思いたいです」

うわっ、四字熟語がたくさんでてきた。

国語の先生か、お前は。

空理空論、現実的ではない理論。

粒々辛苦、こつこつと努力を重ねる事。

そんな意味だったはず。

「それでどうする？幻想郷には来るのか？」

「・・・もし私に役目がなかったら直ぐにでも向かっていたでしょう。しかし私はこの寺の尼。離れる訳にはいきません」

だろうな。

流石に寺ごと移動つてのも無理だろうしな。

「・・・そうか。まあ予測はしていたがな。そういえば話しは変わるがナズーリン、お前は探し物が探せるんだよな？」

「はい。探せますが、何か落とし物ですか？」

「いや、ここから東の妖怪を探してほしい」

「妖怪ですか？・・・成る程それで強い妖怪を探すのですね？」

「飲み込みが早くて助かる」

ナズーリンの『探し物を探しあてる程度の能力』は正確な位置まではわからないが方角くらいはわかるはずだ。

「じゃあ探しますね」

そしてナズーリンは懐からダウジングで使う針金のようなものを取り出す。

「・・・国内の大きい妖力の内三つ見つけました。まずは・・・貴方ですね・・・」

俺の存在忘れてたな。

「あと北に二つあります。多分蝦夷地です」

蝦夷・・・東北か。

一つは冷華だとしてもう一つは誰だ？

ともかく行ってみるか。

「助かった。それでは俺達はそろそろ行くか」

「え？もう夜ですよ？泊まる事もできますよ？」

「善は急げだ」

ぶっちゃけると街でとった宿代を無駄にしたいくらいだけだ。

「そう言うなら引き止めませんが・・・」

「妖忌、行くぞ」

「あ、仁さんちょっと待ってください」

「？」

なんだ？

いつになく真面目な表情だな。

「聖さん。先程仁さんは貴女を咎めないと言いましたが、人間達は違います。いくら貴女の人望が厚いとはいえ、只ではすまないと思います」

「……………」

聖は何も言わない。

「私自身普通でないからわかります。人間は異端を嫌います。貴女もこのままでは取り返しがつかなくなりますよ？」

「……………おそらくそうですね」

「そこまでわかっているのなら……………!!」

「それでも私はこの寺の尼です。逃げる訳にはいきません」

聖の言葉には静かながらも力強さがあつた。

「……………」

今度は妖忌が黙る。

「それに・・・私は元々妖怪を助けたのは私の私欲が原因です。『死にたくない』そんな欲。だから私は何をされても因果関係として受けるつもりです」

「・・・そうですか・・・それでは失礼します」

そう言って妖忌は部屋をでていった。

「悪いな。あいつも・・・」

「大丈夫です。彼は私を心配してくれたんですから」

「・・・そうか。俺も失礼する」

「私の一族は代々半人半霊だったんです・・・」

宿に向かう道の途中、妖忌はぽつぽつと語りだした。

「父は半人半霊でしたが、母は人間でした・・・」

「なのにある日人間達は父だけでなく母も殺しました。屈辱的な方法で・・・」

「私は母に屋根裏に隠されたため無事でしたが、全てをこの目で見ました・・・」

「だからもし私が幽々子様の父に拾われなければ、私は人間を憎んでいたかもしれません・・・」

「人間とは残酷です。だから私は彼女を助けたかった。彼女はまだ戻れるのだから・・・」

その時、妖忌は泣いていた。

涙を隠そうともせず、自然に流れているようだった。

後で知った事だが、この二日後に聖白蓮は人間の手によって封印されたらしい。

雪女と龍（前書き）

わかつてはいましたがアンケート全くきませんね。

それからもう直ぐでアクセスが100万いきそうです。

本当にこのような作品を読んでいただいております。

ちなみに100万記念の外伝を書くつもりです。

ルミアか映姫の話を予定しています。

雪女と龍

「北の方は雪が凄いな。寒い」

「そんな事言っても普段と格好変わらないじゃないですか」

「そう言っお前もいつもと変わらないじゃないか」

「私は体温がそこまで高くないので寒さには強いですから。それより仁さんはなんで平気なんですか？」

「俺は地球が凍り付いていた時代から生きてるから寒いのは慣れてる」

「・・・本当に仁さんはスケールが違いますね」

現在俺達は森の上を飛行中。そして雪が降っている。
場所的には日本の相当北よりだ。

ちなみに徒歩ではなく飛んでいるのは雪が降っていて、歩きづらいからだ。

まだ蝦夷地と呼ばれ日本であって日本でないこの土地は道などもあり整備されておらず、雪がつもると本当に歩きづらい。

まあほかの道も整備されていると言ってもお粗末なものだな。

「それで仁さんが探している妖怪は何処にいるんですか？もう三週間ぐらい北に進んでますけど」

「さあ？」

「えー、当てがないんですか？」

「まあな。でもあいつの周りは特に寒いはずだから、寒いところに行けば会えるはずだ」

ちなみに俺達が探している妖怪は、白岩冷華だ。
種族は多分雪女だろうな。

でも白岩ってなんか気になるんだよな。
でも同時にたいしたことじゃない気がするんだよな。

「そっいえば探している妖怪ってどんな妖怪なんですか？」

「雪女だ」

「……また女ですか」

なんだ？その目は？

俺だって男の知り合いとかたくさんいるよ？

隊長とか鎌足とか不比等とか。

・・・藤原多いな。

しかも全体的に弱い。

「ともかくそいつもかなり強いから・・・お、あっちで吹雪起きている。行くぞ」

「ええ！！吹雪の中突っ込むんですか！？」

「・・・流石にこれは寒いです・・・」

吹雪の中に入ったとはいいいけど視界が悪いな。
全然前が見えない。

それに妖忌が辛そうだ。

いくら体温が低めとはいえ吹雪はきついようだ。

「しかたがない。一回降り・・・お！」

「へ？」

なんと吹雪が今の一瞬で止まった。

妖忌も驚いてマヌケな声出してるし。

俺は誰の仕業かあらかた予想はついてるけどな。

そんな時強い風邪が吹き、再び一瞬だけだが視界が塞がれる。

そして視界が戻るとそこには白い着物を着た女性がいた。

「久しぶりだな、冷華。少し太った？」

「いや、仁さん！デリカシーがなさすぎですよ！！びっくりしました」

俺はお前がデリカシーって言葉を使った事に驚きだ。
まだ横文字とか日本に来てないだろ。

でも何故かこう言わなきゃいけない気がしたんだよな。

「久しぶりね、仁。それから太って見えるのは目の錯覚。もしくはあなたの目がおかしくなったか」

「おそらくどちらでもないな」

「一度凍ればその考え変わる？」

「おお、怖い怖い」

冷華は口ではこう言っているが顔は笑っているので怒ってはいないのだろう。

きっと再会を喜んでいると思う。

「そういえばこっちの白髪の子は？なんか周りに幽霊がいるけど・・・」

冷華が妖忌を指差しながら言う。

確かに半人半霊を知らない奴からしたら人間の周りに幽霊がいるのは異質だよな。

「私は半人半霊なんです。魂魄妖忌っています」

「へえー、面白い。私は白岩冷華。雪女よ」

そして二人は握手する。

「冷たっ!!」

やっぱり雪女は冷たいんだな。

妖忌は急いで手を離し、もう片方の手で抑える。

「あら？体温はそこまで低くない？」

「・・・半分は人間ですから」

てか冷華の奴わざとか？

なんか顔がニヤついてるし。

「まあとりあえず自己紹介も済んだし、本題に行くぞ」

「あなたが訪ねて来るなんてびっくりしたけどやっぱり何か理由があったのね」

「そういう事だ。実は東の地に・・・いや、ここからだったら南だな。ともかくその土地に・・・」

青年説明中・・・

「なかなか面白いわね」

とりあえず説明終わり。

冷華も好感触みたいでなかなか良かった。

「私も行ってみるわ」

「でも大丈夫なんですか？夏とか暑いですよ？」

確かにそうだな。

ここは寒いからいいけど・・・
冬しか活動できないパターンか？

・・・ん？

何か思い出しそう・・・

「大丈夫。私の体の表面を冬にすればいいから」

「そんな事できるのか？」

それめっちゃ難しいんじゃないか？

「私には『寒気を発生させる程度の能力』があるからできるわ」

冷華って能力持ちだったんだな。
知らなかった。

「凄い能力ですね。下手をすれば夏も冬に変えられるんですね」
確かにそうだな。

「本気を出せば世界を凍りで包めるわ」

スゲー。氷河期作り出せるんだな。

「……仁さんの知り合いってみんなただ者じゃないですよね」

「そう言われればそうかもな」

紫、幽香、鬼達、穿、神奈子や諏訪子達神、不老不死。

確かにまともじゃない面子だな。

「そういえばこちら辺に他に強い妖怪っているか？」

ナズーリンいわく、この辺りから二つ強い妖力を感じたらしい。

「強い妖怪？・・・妖怪と言えるかどうかかわらないけどいるわ」

やはりいたか。

てか妖怪と言えるかどうかかわらない？

どういう事だ？

「どんな妖怪なんですか？」

「龍よ。しかも龍神。確かに妖力を使うけど厳密には妖怪ではないわ」成る程ね・・・龍か。

やはり強いんだろうな。

「その龍はこの地に住んでいるのか？」

「住んでいると言うよりは拠点にしてる感じ。結構他の地に行ってるみたい」

ほお・・・。

じゃあ拠点移動して貰えないか聞いてみるか。

「龍にも訪ねるんですか？」

「もちろん行く。龍は破壊を行うが創造もする。きっと豊かな土地を創ってくれるはずだ」

「それで普通の人間達を呼び込むんですね？」

「ああ」

実際いくら妖怪を集めても人間が来なければ幻想郷は成り立たない。だが妖怪がたくさんいる地には人間は普通来たがらない。聖みtainな妖怪好きは別だがな。

しかし龍が来て豊かな土地を創れば話しは別だ。

妖怪というリスクを侵してまで住もうと思うだけのリターンがあれば人間も住む。

しかも冷華の話では龍神クラス。

相当期待が出来る。

「行くなら私は止めないけど・・・私はあまりオススメしないわ」

「そんなに強いんですか？」

「それ以前に性格に問題が・・・ハア・・・」

ため息をつくほどののか？

「まあ会ってみればわかるわ。ここから西の海に基本はいるから。あなたなら少し近付けばわかるわよね？」

つまりそれは案内してくれないって事だな？
会いたくもないのか？

「わかった。助かった。それじゃあ幻想郷でな」

「さようなら」

「ええ、さようなら」

俺達は西に向かって飛び立った。

「うわっ、凄い断崖ですね。やはり龍ってこういう所が好きなんですかね？」

冷華の言う通りに西に進むと海に出て、でかい妖力を感じる方に進むと崖だった。

その崖はかなり高くて下は海だ。落ちたら一たまりもないだろう。

「さあな。しかし龍いないな」

「そうですね。本当に妖力はここから感じるんですか？」

それは間違いないんだが……いないな。

しょうがない。

荒業使おう。

「ま、住家荒らされればどんな奴でも出て来るか」

「え、まさか・・・」

「溢れ出す欲望」

「ちょ、危なっ・・・うわああ!!」

軽く妖忌を巻き込んだが放たれた砲撃は崖を崩していき、海を爆破していく。

こんだけ暴れれば流石に出てくるだろう。

「仁さん。絶対何発私を狙いましたよね？」

「全部避けてたから大丈夫だろ」

「いや、そういう問題じゃ・・・!!」

「来るな」

海に渦が起こり、竜巻が発生する。
空はどす黒くなり、雪もやんだ。

『汝、この地が妾の物と知つての狼藉か？』

頭の中にこんな言葉が浮かぶ。
念話みたいだな。

横を見ると妖忌の顔が少し強張っている。
妖忌にも声がいったんだろう。

「それについては悪かった。お前と話しがしたくてやった」

流石にキレるか？
俺だったらキレる。

竜巻が近付いてきたな。
そして徐々に回転が遅くなってるな。

そして俺達の目の前に来る頃には回転が完全に止まる。

そして中から幼女が出て来た。

「そんな理由で妾の地を壊すとは何事じゃ――！――！！！！！！」

これが龍神？

龍神と別れ（前書き）

ちよつと短いですが投稿

龍神と別れ

俺の目の前には幼女がいる。

無地の縄文人が着るような頭から被る感じの服を着て、怒りのこもった視線をこちらに向けてくる。

髪は黒髪は少しくせっ毛で見た目は普通の人間とは変わらない。ただくせっ毛が龍の逆鱗のようなはねかたをしている。

「一体何物じゃ！！名を名乗れ！！！」

いやー、言い方は勇ましいけど見た目的に迫力がないな。

なんか隣の妖忌も軽く呆然としてるし。

「俺は神道仁。それでこっちは魂魄妖忌だ。・・・それでお前は龍神であつてる？」

「うむ！妾は龍崎^{かな}神流！！破壊と創造を司る龍神なり！！！」

そんな腰に手を当てて、胸をはっても威厳はないぞ。胸もないし。

「じゃあ神流。俺達はお前に頼み事が・・・」「断る!」・・・即答か」

内容ぐらい聞いてくれてよくない？

「妾の住家を壊すような奴の頼み事など聞くものか!!べえーだ!」!

ですよー。

流石に暴れすぎたな。

「ほら、やっぱり仁さん暴れすぎですよ」

「今更ぐだぐた言っても仕方がない。じゃあ何をすれば聞いてくれる?」

とりあえず譲歩くらいしてくれないかな？

「そうじゃのう・・・ならば妾の質問に答えて見せよ!!」

クイズか？

「イカとタコ足が多いのは?」

・・・こいつ??

「イカだな」

「イカですね」

「二人とも即答!!お主ら何物じゃ?」

いや、こんなの普通はわかるぞ?
てか、神流驚き過ぎだろ。

「普通わかります」

「ウツ・・・」

「お前意外と?か?」

「ウウ・・・」

「龍神と言っても頭は見た目通りのレベルですね」

「・・・」

妖忌意外と毒舌だな・・・

ほらなんか神流黙っちゃったよ。
ぶるぶる震えているし。

「グスッ・・・」

ほら泣き始めちゃったよ!!

「あゝあ。妖忌泣かした」

「いや、仁さんだって言ってたじゃないですか」

お前程ではない。

「妾は、グスッ、確かにあんまり、グスン、頭よくないけどこれでも、ヒック、頑張って・・・」

さっきまでの勢いはどうした？

やっぱり精神的には見た目通りなのか？

「まあともかく、質問に答えたんだから俺の話を・・・」

「えゝい!!妾はまだ負けてない!!」

逆ギレ!?

え、ちょ、手に光りが集まって・・・

「消し飛んでしまえー!!」

砲撃撃つてきやがった!?!
しかも結構威力があるし!!

「障壁・・・クツ」

重い・・・。

今まで受けてきたどんな砲撃よりも重い。

流石は龍神だ。

見た目や中身はあれでも力は半端ないな。

「ほう・・・よく妾の一撃を防いだな」

障壁は壊れはしなかったが神流も本気じゃないんだろう。
声に余裕が感じられる。

「てかなんで攻撃してきた?」

普通は即死する威力だし。

「フン。妾を馬鹿にするから罰が当たったんじゃ。さあかかってま

いれ!!」

こいつ無理矢理戦闘に持ち込んでさっきのクイズをうやむやにしようとしてない？

「・・・かなりの負けず嫌いですね」

妖忌もその事を悟ったようだ。

「確かにな。こりゃ冷華も嫌がるはずだ・・・」

負けても認めず、最終的には力でねじふせてくる。

しかもその力は半端じゃない。世界で五本の指に入る破壊力だ。

これは面倒だ。

「妾に話があるなら見事妾を敗つてみせい!!」

あ、こいつ完全にクイズをなかった事にしやがった。

「ハア・・・。妖忌さがつてろ。流石にお前がやるには荷が重い」

いくら成長しているとはいえ、無理だ。
相手が悪すぎる。

「わかってます。とりあえず私は全速力で被害を喰らわない場所に避難してます」

そのほうがいいな。

相手も攻撃がかなり広範囲みたいだしな。

「一人で来るのか？まあ構わんがの！鯉の滝登り！！」

神流が崖の下に弾幕を放つ。
嫌な予感がするな・・・

「妖忌、急いで離れ・・・もつけないの、っ！？」

地面下から砲撃が噴き上がってきた。
まるでカンケツ泉だな。

直前で気付いたからいいものも、厄介な攻撃だな。
結構高くまで砲撃がいくので飛んで回避は出来ないな。

「うおっ！！」

しかも次から次へとキリがない。
一体いくつ噴き出すんだ？

「神霊砲」

「よっ」

回避しながら反撃をするが避けられる。

こりゃ接近戦のほうがいいか？

思い立ったら即行動。

地面からの砲撃を避けながら一気に間合いを詰める。

神流が弾幕で狙ってきたがそれも避けていく。

「拳砲」

「ぬっ！？」

ほう。防ぐか。

俺の拳は神流の両腕に防がれる。

「重いの……」

「そりゃどうも。一徹の砲撃」

「何?!ぬわああ!!」

流石に零距离からの砲撃は防げないか。
少しは喰らったか？

「なんの！！画龍点睛！！！」

だが神流は少し吹き飛ばさたが直ぐに体制を整え、反撃してきた。

緑の弾幕が連結して龍の形をかたどる。

そして目に黒い弾幕がないものは途中でくずればらまかれる。

・・・面倒だな。

「溢れ出す欲望」

こちらの技で相殺していく。

何発かは神流に届いたはずだ。

追撃いくか。

「直進する野望」

俺の今の最大クラスの砲撃を放つ。

出来ればこれで仕留めたいな。

「天地創造！！」

だが向こうもただでは終わらない。

おそらく神流の最強の砲撃であろうもの撃ってきた。

お互いの砲撃は最初は拮抗していたが、徐々に神流の砲撃が押され始める。

「ハアアアア！！！」

すると押し切るのは無理と悟ったのか神流は無理矢理砲撃の起動を変え、俺の砲撃を逸らした。

・・・あれを逸らすか。

山を半壊させる破壊力はあったんだがな。

だが、俺の勝ちだ。

今の逸らした一瞬に俺は神流の後ろに回り込み次の攻撃の準備をしていた。

「駆逐する羨望」

「！ 後ろ！？」

今更気付いてももう遅い。

俺は弾幕を一発だけ放つ。

そしてその一発は神流の前で大爆発を起こした。

そして龍神は地に落ちていった。

「何故じゃ！！何故妾がこんな中途半端な奴と一緒に行動しなければならんのじゃ！！！！」

「中途半端ってなんですか！！半人半霊を馬鹿にしないで下さい！！！」

うわー、妖忌と神流って相性悪いかな。

とりあえず神流は幻想郷に来る事を承諾してくれた。

意外とあのは素直に話を聞いてくれた。

ただ妖忌とはめっちゃ言い争ってるけど。

ただ問題なのは神流が案内しろと言ってきた事だ。

俺としてはまだふらふらしてたい・・・じゃなくて妖怪を探したいんだよな。

そこで修業がだいたいすんだ妖忌に行って貰おうと言う事になって最初にいたる。

「妾は妾に勝った仁に案内して貰いたいんじゃないか！！お前みたいな何もかも中途半端な奴ではなく」

「何もかもってなんですか！！それならあなただって全然龍っぽくないですよ！！！」

「強さが妾や仁には及ばん癖に・・・」

「普通及ぶ人の方が少ないです!!」

収集つかないな。

もう俺行つていいかな？

「妖忌。俺もう行つていいか？ループが始まる前に出発したい」

ある意味じゃループが始まっているがな。

「ちょ、本当にこれを私に押し付けるんですか!？」

「これとはなんじゃ。これとは」

「頑張れ」

「もう確定事項なんですか?!」

だって・・・俺はふらふらじゃなくて、強（ry

「そうじゃ仁。強いかどうかはわからんが、誰も近づかん妖怪なら聞いた事があるぞ」

「誰も近づかない?」

強いとかじゃなくて？

「うむ。なんでも人間も妖怪も何にも近づかんらしい。たしか都の北に住んでいるらしい」

遠いな・・・
でも行ってみるか。

「わかった。行ってみる」

「・・・私もわかりました。もつとつこう言いません。修業、ありがとうございました!!」

妖忌も納得してくれたみたいだな。
じゃあ行くか。

「そつじゃあ幻想郷で」

俺は返事も聞かずに飛び立った。

姉妹と眼（前書き）

更新遅れてすいません。

アンケート徐々に来はじめました。
まだ続いています。

姉妹と眼

一人で旅をするのって久しぶりだな。

今まで穿がいたり妖忌がいたりしたからな。

今俺は都から北に行った小さな町にいる。

どっちかと言えば村なのか？

ともかく俺はそこで蕎麦を食っている。

町ゆいつのメシ屋らしいがなかなかうまい。

景色も子供が遊んでいたり大人達が働いていたりとのどかだ。

ちなみに俺がこんな辺境の村に来たのにはもちろん理由がある。
神流が言っていた誰も近付かない妖怪。

なかなかに興味がある。

ただ単に強いのか？

それとも能力が危険なのか？

性格がいかれてるのか？

妖怪すら近付かないんだ。

よほどの奴なんだろう。

それでとりあえずこの町や近くの村で情報を集めてみた。

『やめときな。あいつらには退治屋も近付かないんだ。あんたもやめた方がいい』

『オラは見た事ないんだけどよ、何でも目が三つあるらしいべ』

『見た目は幼子だけど、もう何十年も生きてるらしいわ』

情報を集約すると、妖怪は二人組で見た目は十代くらいの女。まだ百年も生きてない、ヒョッコらしい。

妖怪にしたらまだまだだよな。

特徴的なのは目が三つあるという事。

だが肝心の近付かない理由はわからない。誰もその話しになると口を塞ぐ。

とりあえず居る場所は聞いたから行ってみるか。

俺は蕎麦の丼と金を机に置き、外に出た。

さて、場所はたしかここから北の泉の近くの小屋だったな。

お、あれが泉か？

飛んで10分くらいの所だ。
割と距離があつたな。

それで小屋は・・・見当たらないな。
仕方ない。降りて探すか。

とりあえず泉の近くに降りる。
泉の周りは木で囲まれ、泉の周りだけに木がない。
森の中に穴がぼっかり空いている感じた。

それにしても妖精の気配がしないな。
これだけ自然があるんだから一人や二人ぐらい居ていいはずなんだ
がな。

やはり例の妖怪を恐れていこの泉に近付かないのか？

「それは能力故か、力故か、はたまた性格故か。一体なんだ？妖怪」
そう言うと、俺の目線の草むらがガサガサと揺れた。

気付かれていないと思っていたのか？
あの程度の気配の消し方ではそれなりの強さの人間でも気付くだろうな。

降りてからずっとこちらを見ていたし、視線でも気付いたがな。

それにしてもなかなか出て来ないな。
適当に言っただと思われているのか？

「さっさと出てこい。その茂みの裏にいるのはわかっている」
「・・・」

・・・出て来ないな。
しょうがない。

「五秒以内に出てこい。さもなければ砲撃をする」
俺は右腕の手の平を草むらに向ける。

「五……」

「待つて、待つてください!!」

やっと出て来たな。

そんなに焦るぐらいなら最初から出てくればいいのに。

白っぽい青の髪に、緑の瞳。

ダイヤの形のボタンが付いた黄色い洋服に、襟と同じ緑色のスカート。

見た目的には小学生にもいつていない女の子に見える。

だがその娘の放つ妖力が明らかにただの子供でない事を物語っている。

さらに、その娘の周りには体から生えている青い管があり、普通の人間でも彼女が人間でない事がわかるだろう。

管は二カ所から生え、一本に繋がっている。

そして胸の辺りの管には眼が一つ付いている。

その眼の黒い瞳は、焦ってあたふたしている本人とは逆にずっとこちらを見ている。

まあ、めんどくさく言ったが、つまるところが古明地こいしだ。
ただ小さい。

せいぜい4、5歳くらいしかない。

まだ幻想郷もまともに出来てないから当然と言えば当然か。

そして、何よりおかしいのがこいしの第三の眼が開いている事だ。
たしかこいしの眼は閉じていたはずだ。

ちなみに第三の眼で見られると心を読まれる。

こいしはその能力を嫌い、能力を捨てるために眼を閉じたはず。

……つまり眼を閉じる前って事が。

それにしてもいろいろ繋がったな。

多分もう一人はこいしの姉の古明地さとりだな。

そして誰も近付かないのは二人の『心を読む程度の能力』を嫌っているからだろう。心を読まれてうれしい奴なんていないだろうからな。

こいしは眼を閉じた状態だったら『無意識を操る程度の能力』だったはずだが、眼が開いているのでさとりと一緒の能力だろう。

「それで、なんで俺を見ていた？」

「いや、えつと・・・あの・・・」

落ち着け。慌て過ぎだ。

「心が・・・見えなくて・・・」

「心？」

ああ、能力が効かないって事か。

流石に百年も生きてない奴の能力は意識せずとも効かないな。

「私は覚さと・・・って妖怪で、心が読めるんですけど・・・あの、貴方の心が読めなくて・・・こんなの初めてで・・・」

だからあんなに焦ってたのか。

確かに自分の能力が効かない相手なんてびっくりするよな。

「あの・・・貴方は一体？」

「俺は神道仁。神っぽい人間だ」

一応俺まだ人間のカテゴリに入るんだよな。
だんだん俺も人外を自覚してきたがな。

「私は古明地こいしです」

知ってるけどな。

それにしても神って単語には無反応だな。
知らないのか？

「それから俺の心を読めなかったのはお前と俺に力量差が大きいからだろうな」

「力量差ですか？」

「まだ二桁しか生きていないお前では力不足という事だ」

その内こいしも俺の心を読めるくらい強くなるだろうがその間に俺もさらに強くなっている。
結局は読めないな。

「そうですね・・・」

ん？少し落ち込んだか？

「・・・あ、そうだ家に来ませんか？お姉ちゃんも多分話しをすれ

「は貴方に会いたがると思います」

だが落ち込んだそぶりは一瞬で、元気に話し始めた。

何だったんだ？

とりあえず誘われたなら行くか。

二人を幻想郷に連れて行きたいし。

「お言葉に甘させてもらうよ。それに話があるしな」

「じゃあ案内しま・・・って話し？」

「お前の姉と一緒に話す」

「ここです。ちょっと小さいですけど」

いや、二人暮らしなら充分だと思っぞ？

小屋は泉の湖畔に水車小屋のように立っていた。

そこその大きさがあり、この時代の家にしては大きめだろう。

ただ古いな。

苔とか生えてるし、見た目がぼろい。

そしてこいしは無言でドアを開ける。
ただいまくらい言わないのか？

「さあ入って、入って」

こいしが俺の服の裾を掴んで小屋に引つ張り込む。

小屋に来る途中、いろいろ話してくれて仲良くなった。

さとの話しとか、覚についてとか、さとりってこいしより弱いとか。

・・・さとりばっかりだな。

ともかくいろいろ話して打ち解けた。

家の中は質素な作りで窓が二つあり、片方の下には釜戸がある。
そして家具らしきものもあまり見当たらず、部屋の中央にテーブルと椅子が二脚あるだけだ。

その唯一の家具の椅子に古明地さとりは座っていた。

紫がかった髪でハートの飾りが付いたカチューシャをしている。

そしてこれまたハートのボタンの服を着て、髪と同じ色のスカートをはいている。

こいしと同じように管があり第三の眼があるが、色が黄色や赤だ。

そしてやはり小さく、8、9歳くらいか？

「……成る程。来客には驚きましたが、貴方が来るとはさらに驚愕しましたよ。神道仁」

あれ？何故さとりが俺の名を？

心が読まれてる？

……いや、こいしの心を読んだんだな。

さっきこいしが帰った時に何にも言わなかったのも納得だな。

この姉妹の間じゃ会話はいらない。

ただ心を読み合うだけで充分だ。

「えー！？！？」

急にこいしがこちらを見ながら声を上げる。

きつとさとの心を読んだんだな。

さとりは俺の名前を知っているようだったしな。

「そ、そんな凄い人だったんだ・・・」

「だから私達能力が効かないのも当たり前よ」

そんな事をいいながらさとりは何処からか椅子をもう一脚持ってきた。

「はい。ちょっと待ってて」

そしてこいしは外に言ってしまった。

多分さとりには何か頼まれたのだろうが・・・わからん。

頼むから喋ってくれ・・・

「どうぞお座りください。何か話があるんですね？」

さとりが持つてきた椅子をおきながら言ってくれた。

話しの方はこいしに言ったから分かるのだろう。

「ああ。それでこいしは？」

「茶葉を摘みに行ってもらってます」

成る程ね。

そのままさとりは向かい側の席に座る。

そしてこちらをじっと見る。

・・・何なんだ？

「・・・やはり心が見えないのは不思議なものですな。これが普通なんでしょうが、落ち着かないものですな」

さとりも俺の心が読めないようだ。

まあこいしより歳上だと言ってもたかが知れてるしな。

「こいしも最初はかなり動揺していたぞ？」

「そのようですね。でもこいしはその時とても喜んでいましたよ」

喜ぶ？

能力が効かない事がか？

「こいしはこの『心を読む程度の能力』を嫌っています。この能力のせいで誰からも嫌われ、近付いてきませんから」

確かに。

こいしにとっては能力は邪魔なだけなのかもな。

「貴方と喋ってた時とても楽しんでいました。この能力がある以上、普段は相手の話を聞く必要がありませんから」

こちらが何か言う前に心を読むからな。

「そう言うお前も会話を楽しんでいるようだ。頬が緩んでるぞ？」
表情もだいぶ柔らかくなった。

「覚が心を読まれる日が来るなんて夢にも思いませんでしたよ」
そっついながらも嬉しそうだな。

「ただいま〜！」

ちょうどこいしが帰ってきた。

今回挨拶しているのは中に俺がいるからだろう。

「いいよ、いいよ。お姉ちゃんは・・・でも・・・それ言われると弱いな・・・わかった！じゃあお願いします！！」

こいしは喋ってくれるがさとりは喋ってくれないから困る。
何話してるのかわからない。

ただ、さとりがお茶をいれる事になったようだ。
こいしが取ってきた茶葉をさとりに渡したからわかる。

「今度は仁さんの話を聞かせて？私他の人の話を普通に聞いてみたかったんです！」

今度はこいしが椅子に座り、身を乗り出してきた。

とりあえずその中途半端な敬語は何だ？
統一しろよ。

「じゃあ俺の用件を話す。さとりも茶をいれながらで悪いがいいか？」

「いいて」

なんでこいしが答えるんだよ。
心を読んでもらうけどさ。

「これはある妖怪が考え出した話だ。人間と妖怪が……」

青年説明中……

「そうして考えられたのが幻想郷だ」

いい加減このワンパターンをやめないか？
きつと読者も飽きてる。

あれ？何の話だ？

「概ねわかりました。……しかし、我々のような妖怪がそのような場所に行っているのですか？」

やはりそれが不安だよな。

こいしの方を見ると、不安というか、悲しげな表情をしていた。
さとりから聞いてはいたが、やはり自分の能力を嫌っているんだな。

多分最初の方に会った時も自分の能力が効かない人達が実はいるか

もしないと希望を持っていたんだろうな。

「大丈夫だ。もっと危ない奴らがたくさんいる」

楓とか勇儀とか萃香とか・・・あれ？

鬼ばかりだぞ？

「そういうものの？」

そういうものだ。

「・・・とりあえず、少し考えさせてください。一日だけでいいですから、待つて頂けますか？」

「構わないぞ」

そんな一日くらいどうってことないしな。

「じゃあ仁さん、家に泊まったら？」

「夕食もだしますよ？」

「お言葉に甘えよう」

美少女と一つ屋根の下って凄いい事なんだけど動じなくなったな。

なんか永生き（↑もはや誤字にあらず）してるとそういう事が吹っ切れるんだよな。
何でだろう。

そのまま夕飯まで二人と話しながら過ごした。

夜。

俺は一人湖畔に寝転がって星を見ながら酒を飲んでいた。

なんだか徳利の酒の味の質が落ちてきたな。
酒虫も寿命なのか？

ともかく楓に新しいの貰わないとな。

「・・・それで、こいしはいつまで隠れているつもりだ？」

「ばれちゃってたか」

近くの木陰からこいしが出て来た。

俺から隠れるのは無理だとわかれよ。

「それで何の用だ？」

そっついながらこいしの方に向く。

すると少し驚いた。

こいしの表情はやけに真剣だった。

会ってまだ一日だがこんな表情は初めて見た。

「一つ頼み事があるの・・・」

「私の第三の眼をなくして欲しいの」

古明地と幻想入り（前書き）

連投。

だけどもちやくちや強引です。

そのうちいろいろ修正するかもしれません。

古明地と幻想入り

「うわー！！ここが街か！！人間がたくさんいる！！！」

「こいし。あまり騒がしくしちゃ駄目よ。それより本当に大丈夫で
すか？」

「大丈夫だ。第三の眼は見えていない」

俺は今古明地姉妹と街にいる。

都より東に行った、行商や旅行者が都に行く直前に泊まる街だ。

それで何故二人といるかというと、それがさとの出した幻想郷に
行くための条件だからだ。

結局、幻想郷に行く事は承諾してくれたがさとりは道中を心配して
いた。

覚って妖怪からも嫌われてるからな。

だから幻想郷まで俺が送る事を条件にしてきた。
別にそれくらい構わなかったので俺は了承した。

・・・そろそろ俺も幻想郷に定住しようかな？

行ったらあまり離れたくないな。

「ねえ、お姉ちゃん。あの人……」

「駄目よ。こいし。あれは放送禁止語句よ」

「え？ □□□とか□□……」

「やめろ。周りの奴らが見ている」

こいしもテンションが高いな。

真昼間から第三の眼で心を読んで堂々と恥ずかしい事を言っている。

結局、俺はこいしの眼を無くさなかった。
原作では眼を閉じ、心を閉ざしていたが俺としてはそうなってほしくない。

だから出来ればこいしには自分の能力に自信を持って欲しい。
たしかに恐ろしい奴からしたら恐ろしいが、生れつきの物で自身を
陥れるのは辞めて欲しいものだ。

「お姉ちゃん。あの人は・・・」

「あれはロリコンと言う人種よ。近付いては駄目」

「はい」

ロリコンってこの時代からいたんだな・・・

てかこいし能力嫌ってなくね？

「店がたくさんある！！こんなにたくさん見たの初めて！！！」

商店街らしき所に行くとまたこいしのテンションが上がる。
さとりいわく、こいしはあまり外出した事がないらしい。

そりゃテンションも上がるな。

「ここは都に向かう奴らが最後に立ち寄る街だから、店も自然と多くなるんだ」

「それにしてもなかなか不思議な物も売ってますね」

さとりが興味を示したのは大秦のカラス天狗の羽という商品だ。

てか買う奴いるのか？

ただの黒い羽だぞ？

しかも大秦ってローマだな。

カラス天狗なんているのか？

「微弱ながら妖力を発していますね。本物みたいです」

あゝあ。買った奴可愛そうだな。

偽物ならまだしもこんな中途半端な妖力を放つ羽を持って山道なんて歩いたら、妖怪が寄ってくるな。

「・・・しかも店主の心を読む限りでは本当に大秦から運ばれたようです」

そりゃ凄いな。

よくそんな遠くから来たものだ。

・・・でもこの妖力の感じ知っている気がするな。
何だっけ？

「あれ？こいしは？」

いつの間にかこいしがいなくなっていた。
眼を閉じる前から神出鬼没だったんだな。

「えっと・・・居ました。なんか呉服屋の前で張り付いてます」

あ、本当だ。

本当に品物に張り付いてる。

いや、抱え込んでいるのか？

ともかく店主が嫌な顔してるから早く行くか。

「それで、その帽子が欲しいと」

「うん」

こいしが張り付いていたのは帽子だった。
黒くて黄色いリボンが付いた帽子。

こいしが原作で被っていたものと同じ物だ。

「お前、金ないだろ」

「大丈夫で体で払・・・」

「お前どこでそんなの覚えた」

なんかこいしに帽子を買わないのは危険な気がしてきたな。
直ぐに騙されて本当に体で払いそうだ。

「・・・わかったよ。買ってやるよ」

「わーい！ありがとうございます！」

そっついながらこいしは抱き着いてきた。
もう最初の頃のたどたどしさはすっかりないな。

「さとりも何か欲しいものがあつた買っぞ」

「ありがとうございます。じゃあ選んで来ます」

淡々と言っているがさとりはとても嬉しそうだ。

てか、欲しいものが決まってるな。
迷う事なくとある店に向かっている。

「とりあえず買うものも買ったし宿をとるぞ」

あの後いろいろと必要なものを買った。

ちなみにさとりが欲しかったのは鳥の置物みたいな感じだった。木彫りで割と大きかったがどうしても言うんで買った。結構高かった。

「はい！あれ？お姉ちゃん、あの人……」

「あれはドMのロリコンよ。関わっちゃ駄目」

「はい」

どんだけ変態がいるんだこの街は。

それから数週間飛んで行き、幻想郷の手前まで来た。

え？手抜き？

道中なんて書いてても（ry

それにしてもかなり大きい妖力をいくつも感じるな。

ちよつと妖怪を集めすぎたか？

「ここまでくればもう平気だろう」

「え？一緒に来てくれないの？」

なんかこいしが落胆の声を上げる。

「ちよつと寄る所があるからな」

紫の所に行って幻想郷建設の状態を聞かないとな。

「ぶ~~~~ぶ~~~~!!!!」

機嫌悪いな。

頬を膨らませてる。

「貴女も聞き分けなさい。それに……」

「……わかったよ」

さとりが何を考えているかはわからないが、とりあえず納得してくれたようだ。

「じゃあ、またな。まあ幻想郷にいればまた会えるからな」

「ばいばい」

「さようなら」

さて、紫の所に行くか。

「とりあえず久しぶりね、仁。」

「進行方向にいきなりスキマを創るな、紫。危ない」

「あら？あなたなら開く事くらいわかっていたでしょ？」

それもそうだがな。
ただ心臓に悪い。

ちなみに今の状況は俺が空を飛んでいて、紫が空中のスキマから上半身だけを出して話している。

「それで進み具合はどうだ？」

「妖怪の方は充分ね。充分過ぎて人間が近寄らないくらいよ」

そこでため息をつく紫。
やっぱりやり過ぎたか？

「でも龍神も来てくれて助かったわ。土地がかなり肥沃になったから人間達も集まり始めてるわね」

それは良かった。

「それにかなり酔狂な奴らもいるようだな。大きめな霊力がいくつか固まっている」

多分固まっている場所は人里だろう。
人間の気配も割とするしな。

「ええ。ここなら仕事が無くて困る事がないもの。それに稗田っていう面白い子もいるわよ」

たしかに妖怪がわんさかいるから退治屋にしたら仕事があり余るくらいだろう。

あと稗田？はて稗田？

何処かで聞いた事がある気がするな。

「じゃあ今の所たいした問題はない訳だな」

「今の所は、ね」

紫は強調して言う。

たしかに今の所だ。

完全などこの世にない。

何時か必ず問題が起こる。

まあ全力で阻止をするがな。

「あ、そうだね。あなたに言うておかないといけない事があったわ」

「なんだ？」

紫は胡散臭い笑みでは無く、ニコリと微笑んだ。

「神道仁。ようこそ幻想郷へ。幻想郷は全てを受け入れるわ」

「それはまた残酷な話しだな」

やっつと、ここまで来れたな。

100万PV記念(前書き)

100万突破です。

こんな作品を読んでいただきありがとうございます。

こんなに更新できたのもひとえに読者の皆様のおかげです。

今回の内容は外伝です。

本編とは関係・・・ちよつとある？

でも読まなくても平気なはずです。

これからも『気がつけば異世界』をよろしくお願いします。

100万PV記念

《ルーミアと吸血鬼》

「あなたは食べてもいい人類？」

「お前を殺す人類だ！！喰らえ！！！」

「わはー、凄い威力だー（棒読み）」

「な！？我が弾幕を喰らって無傷だと！？！」

「じゃあいただきます」

「ま、待て！！私はまずい人類だ！！」

「そーなのかー。じゃ、改めていただきます」

「い、言ってる事とやってる事が違・・・ギィヤーー！！！！！」

マズッ・・・

この人間本当にまづかった・・・
うえゝ、口が苦いよゝ。

そういえばまだ名乗ってなかったよね？

私はルーミア。

宵闇の妖怪。

今私は暗い森の中にいる。

この森は昼でも日の光が余り入ってこないから、数百年前から住家
にしている。

森の外の人間達の事はよくわからないけどローマって国とか言ってた気がする。

あれ？今はフランク王国だっけ？

まあどっちでもいいかー。

ともかく今丁度ご飯を食べたけど、口なおしがしたいな。久しぶりに街に行ってみるかー。

そう思い私は背中から漆黒の翼を生やす。
仁と別れてから少しして翼を生やせるようになった。
・・・そういえば仁元気かな？

今度会うまでに勝てるように頑張ろう！！

でも今は口なおしが先。
私は翼を広げ飛び立った。

街が見えてきた!!

石みたいので作った家がたくさん並んでる。

地面にも石をひきつめているみたい。

転んだら痛そう。

おっと、街の手前で降りて妖力を消しとかないとね。
万が一気付かれたら面倒だし。

この前うっかり消し忘れてた人に気付かれて、攻撃されたから反撃したら街一つ消しとばしちゃったんだよね！。

気をつけなきゃ。

私は降りて羽を仕舞う……前に羽を一本抜いておく。

これが意外と高く売れる。

確かに綺麗だけど、妖怪に襲われやすくなるものを高く買うなんて人間って変わってるよね。

そして私は黒い羽を一本持って街に入った。

「売れた、売れた♪」

今回もなかなか高く売れた。
小躍りしながら街を進む。

そういえば売った店の主人が東の異国まで売りに行くとか言ってたんだよね。

あの羽持つて動くの危ないんだけどな。

とりあえず私はお菓子屋に向かう。

クッキーってなかなかおいしいんだよねー。

お、見えてきた。

店のカウンターみたいなのにクッキーがたくさん並んでる♪

「クッキー買えるだけくださいー！」

「お！お嬢ちゃん元気いいね！！ちょっとおまけだ」

「わはー」

ちよつと得した」

このおじさんは森で見つけても食べないようにしよう。

そんな事を考えていると、私の後ろを鎧をつけた人達が15人くらい過ぎて行った。

何だろう？

「何でも街をあげて化け物を狩りに行くらしいぞ？たしか血を喰らう妖怪が出たとかで」

私の不思議そうな顔に気付いたのかお菓子屋のおじさんが教えてくれた。

「しかも宵闇の森に行った退魔師もまだ戻ってこないし、物騒な世の中だよ」

そこでおじさんはため息を付いた。

ちなみに宵闇の森とは私が住んでいる森の事。

そーなのかー。

退魔師が来てたなんて知らなかったなー。

あいつ？

それはないよ。

弱かったし、まずかったし。

それより血を喰らう妖怪ってどんなだろ？

興味があるなー。

ちよつと見に行ってみよ。

「そーなのかー。いろいろ教えてくれてありがとうねー」

「お嬢ちゃんも気をつけなよー！」

私はクツキーを食べながら街を出て行った。

「迷った……」

うー、あの鎧を来た人を追って行ったら見失っちゃったよ……

もうすっかり夜だよ。

夜は元気になって割とハイになるからいいんだけどね。

そこで私は首をかしげた。
異変に気付いたからだ。

「紅い……月？」

月が紅かった。

満月で欠ける事がない状態で紅い。

誰の仕業だろう？

その時私は大きな妖力に気がついた。
かなりでかい。

今の私では敵わないかもしれない。

これが血を喰らう妖怪かな？
とりあえず行ってみよう。

妖力を感じた場所に行ってみると、鎧を付けた男達が一人の女性を囲んでいた。

妖力は女性から出ているみたい。

その女性は紅い髪をしていて、これまた紅いドレスを着ている。ドレスのスカートはふわっと膨らんでいた。

なにか入っているのかな？

女性は手には傘のような物を持っている。
ような物、というのはその傘には布が張ってないからだ。
骨の部分しかない。

そして目には眼鏡をかけていた。
片眼鏡って奴かな？

左目にしかレンズがなくて、鎖みたいのが耳の方に続いている。

体つきもすらつとしていて、誰が見ても美人と答えるだろう。

「さあ、観念しろ化け物！！もう逃げ場はないぞ！！」

男達のリーダー格らしき奴が声を上げる。

「我々は鍛えられた精鋭部隊だ！！勝ち目はない！！！」

確かにみんななかなか強いけどあの女の人に敵わないと思うけどない。

その自信は何処から来るんだろ？
人間って不思議。

「・・・我輩としてはむさい男ではなく、可憐な美少女に囲まれたかった」

我輩？

変わった喋り方だなー。

内容もかなり変わっているけど。

「・・・何言ってるんだ、こいつ？」

流石に男達の一人が突っ込んだ。

「フ、少女のよさがわからないとはな。あのつぶらな瞳、細くて弱々しい手、背の（ry」

これが噂のロリコンだね。
近付かないようにしよう。

「そしてこれは幼い男子にも言える事だが（ry」
ショタコンってのもあるみたい。

「えゝい、話しが長い！やってしまえ！！」

『おう！！』

痺れを切らした男達が女の人に弾幕を打ち始める。

普通、囲んでいる状態で飛び道具を使えば味方も危険だけど、この人達は角度をうまく操って味方に当たらないようにしている。

言うだけはあるみたい。

「……全く、気の早い奴らだ。我輩の話はまだ半分も終わっていないというのに……」

え？あんなに話して？

「誇り高きヴァンパイアであるこのルージュ・スカーレットに逆らった事を後悔しながら死ぬがいい」

そう言つて女の人……ルージュは弾幕を避けていく。
あまつさえ、そのまま男達に向かっている。

凄……..
まるで舞うみたいに弾幕を避けている。

しかもまるで弾の起動がわかるように避けている。
急に起動が変わる弾でも簡単に対処している。

「グハッ!!」

そして近付いたルージュが一人の男の胸を手で貫く。

一撃で心臓に当てたらしく、男は貫かれた状態で手が下にダランとぶら下がり、ぴくりとも動かない。

ルージュが手を抜くと男は地面に倒れこんだ。

「さて、次は誰だ？」

ルージュは自らの手に付いた男の血を舐めながら言った。

普通の人間ならここで恐怖で我を失い、考えもなく突っ込んでいく。
そうならルージュの一人勝ちだ。
人間ごときが妖怪の身体能力に敵うはずがない。

「奴をまた囲め！！陣形を崩すな！！！」

『は、はい！！』

リーダー格の一言により全員が正気を取り戻す。

やっぱり言うだけの事はある。

特にリーダー格っぽい奴は。

でもルージュはそれを既にわかってたような顔をして笑顔を浮かべていた。

その時私は思った。

この人間達は早めに死んでいたほうが幸せだったかもしれないと。

「・・・」

「貴様で最後だ」

リーダー格らしき男がルージュに首を捕まれ宙に浮いている。

ルージュはあの後一人ずつ殺していった。

本気を出せば一瞬で皆殺しにもできたはずなのに。

途中、恐怖に耐え切れず逃げ出した男もいたけど逃げようとしてすぐに殺されてしまった。

それから逃げようとした人もいなくて、どんどん殺させていきとうとう一人になった。

「貴様の統率力に敬意を表し、我輩が直々に血を吸って殺してやろう」

ルージュは自分の口を男の首もとまで持つていく。

そして噛み付く。

でもかなりの量の血をこぼしている。
そしてそれはドレスにかかっていく。

・・・もしかしてあのドレスは血で紅くなったのかな？

ルージュは満足したのか男を離した。
だけど血が止まってない。

あれじゃあ出血多量で死ぬだろうなー。

そしてルージュは何処かに飛んで行ってしまった。

まだあの男も生きているし、そこらに死体の山が出来ている。

私はその場所に近付いて行った。

「あなた達は食べてもいい人類？」

残りものだけどいいよね？

その後街の人の必死の搜索も虚しく、男達は遺体どころか骨の一本すら見つからなかった。

100万PV記念（後書き）

どうしてこうなった？

ルミアが主役の話を書こうとしたのに。
ギャグ的な話にしようとしたのに。

自分の上手くできなさが申し訳ないです。

幻想郷縁起その1（前書き）

タイトル通りです。

今の所幻想入りを確認しているオリキャラのです。

読まなくても本編には影響ありません。

その内2も書きます。

幻想郷縁起その1

冬の具現『白岩冷華』

能力

寒気を発生させる程度の能力

危険度

高

人間友好度

普通（春～秋）

極低（冬）

主な活動場所

不明

彼女は元々蝦夷にいた妖怪だったが、ある人物の依頼により幻想郷に来たらしい。＊1

種族は雪女といい、基本的に冬に活動する妖怪である。

しかし彼女は力が強く冬以外の季節でも普通に活動している。*2

春↪秋にかけては滅多な事では人を襲わないが、冬は危険である。

彼女がいるだけで周りの温度が下がるので冬は見かけるだけで危険。

しかも冬はこの妖怪が一番強い時期のため見かけたら直ぐにその場を離れたほうがいいだろう。

なんでも冬なら世界を凍りで閉ざすこともできるらしい。*3

《目撃報告例》

・春に湖の近くで見た。目があったが挨拶して何処かに行ってしまった。

(匿名)

既に書いたが冬以外は無害である。

だが季節によって友好度が違うため注意はしたほうがよいだろう。

・夏に人里で商売をしていた。かき氷というものらしく、暑い日にちょうど良かった。

(匿名)

なかなか好評である。

私も夏はよくお世話になる。

《対策》

春↪秋にかけては対策はいらない。
こちらから手をださなければ安全である。

ただ、冬は覚悟したほうがよいだろう。

寒さを操るので、彼女と冬戦う場合は寒さとも戦う必要がある。
防寒具を来て戦っても、彼女自身はかなり強いいため苦戦は必至である。

冬は彼女のテンションが上がり情け容赦がないため他の季節とは別の妖怪と考えた方がよいかもしれない。

* 1：誰かは不明

* 2：夏は大人気

* 3：自称

鬼の総大将『楓』

能力

正々堂々と闘わせる程度の能力

危険度

極高

人間友好度

普通

主な活動場所

妖怪の山

言わずとしれた妖怪の山の鬼達のトップである。

酒好きで、嘘を嫌い、基本的にあまり考えない。
絵に書いたような鬼のイメージの模範である。

身体能力では人間を超越する鬼達の頂点にいるため、ありえない程高い。

しかも彼女の『正々堂々と闘わせる程度の能力』がさらにそれを凶悪化させている。

この能力は彼女と同じ条件で相手を闘わせるというものである。
例えば、彼女が地面で闘っているならば相手は飛べないというものである。

つまり彼女が肉弾戦を挑んできた場合、鬼相手に素手だけで闘わなければならぬ訳である。

そうすると、ただの人間には勝ち目がない。

幸いにも、人間友好度は低くない。

こちらから仕掛けて行ったり、目の前で嘘をついたり、酒を盗んだりしなければ大丈夫だろう。

《目撃報告例》

・うちに酒を買いに来た。買った量にも驚いたがそれを全て担いだのにはもつと驚いた。

（酒屋の主人）

人里にはちよくちよく現れる。目的は主に買い物だ。＊1

・夜に山の近くを通ると騒ぎ声が聞こえる。宴会でもしているのだろうか？

（匿名）

鬼は何かと理由を付けて宴会をしたがる。毎日なんかしろの理由で宴会を開いているらしい。

《対策》

彼女自身あまり人間に興味がない。

と、言うよりも弱い奴には興味がない。

だから基本的に人間とは戦闘をしない。

ただ圧倒的力で人をさらって行く。＊2

ちなみにさらって行く人間は彼女が面白いと思った人間のようなのだ。

あと危険なのは彼女に酒が入っている時である。
酒のせいで力加減を忘れてた場合、本人が軽く小突くくらいで人は死ぬ。

そんな間抜けな死に方はゴメンである。

有効な対策は彼女に興味を持たれない為に出来るだけ関わらない事と、酒を飲んでいたら近付かない事である。

万が一、彼女と戦闘になったらどうするか？

普通に闘ってはまず勝てない。先程書いた通り彼女の能力を破らないかぎり肉弾戦になってしまうからだ。*3

だからなぞなぞで勝負するのがよい。

おそらく答えられない。

但し、答えが理にかなっていない場合は怒らせてしまうので注意。

*1：さらう人間を選んでいるとも言われている。

*2：さらわれた人間は何をされるかは不明。
ただ生きて帰ってきたものはいない。

*3：しかし彼女の能力を破る為には彼女以上の妖力をぶつける必

要があるため、妖力がない人間は愚か、神ですら破れない。
現在確認されている破れる者は神道仁、龍崎神流のみである。

妖怪の山の頭脳『速疾紗花』

能力

重さを操る程度の能力

危険度

極高

人間友好度

低

主な活動場所

妖怪の山

鬼の四天王の一人。

見た目は楓にそっくりで、鬼達のまとめ役である。 * 1

鬼にしては珍しく頭が良く、山の天狗や河童達との調整役もしている。

実力も鬼の四天王という事はかなり高く、内外的にも鬼のNO. 2 みたいなポジションにいる。 * 2

そんな彼女は処世術のためか誰にでも丁寧語で話すが、人間を嫌っているようである。

関わりたくもないのか、人をさらったという情報もない。

《目撃報告例》

・楓様が紗花様に正座をさせられていた。
どちらが上なのか一瞬わからなくなった。

（某天狗）

鬼達の仕置き役もやっているようだ。

おそらく彼女は山の中で一番忙しい鬼だろう。

・森の中でばったり会ったけど何もされなかった。ただなんか嫌そうな顔をされた。

（匿名）

彼女は基本的に人間を襲す事すらない。
よほど人間が嫌いなんだろう。

《対策》

まず彼女は人を嫌い近付かない。

そのため襲われるどころか会合う事すら少ないだろう。

そのため、彼女に出会った時は話しかけたりはしないほうがよい。
機嫌が悪かった時はそれだけが理由で襲われてしまう。

あと、鬼の悪口は危険である。

彼女は鬼という種族に誇りを持っているため仲間意識が特に強く、
そういった事を言った事が知られればまず命はないだろう。

★1：楓が適当でまとめないから。

*2：そのためかなり苦労しているらしい。

音激の鬼『伊勢鬼斗』

能力

音を衝撃波に変える程度有能力

危険度

極高

人間友好度

普通

主な活動場所

妖怪の山

鬼の四天王の一人。

特に彼女は四天王最強と言われ、实力だけなら鬼の次点である。

寡黙で余り喋らず、無表情。

なかなか近寄りがたい雰囲気だが実際は気さくである。

人間にかなり興味があるらしく、人里近くでも目撃される。

そのため興味本位で人をさらったりしているが、基本的に全員生きている。

さらわれそうになったら抵抗しないほうが生きられるだろう。

《目撃報告例》

・森の方から畑仕事の様子を眺めていた。

何か面白い事でもあったのだろうか？

（匿名）

彼女いわく人間の生活は見ていて面白いらしい。＊1

・昔さらわれたんじやが、若白髪を眺めてくるだけじゃった。

何がしたかったのかのお？

（菊次郎）

おそらく若白髪が不思議だったのだと思われる。
彼女は変わった人間がいると直ぐにさらうらしい。 * 2

《対策》

彼女はもの凄く人間をさらう代わりに人間をあまり襲わない。
さらわれても生きてる確率が高く、対策らしい対策も必要ないだろう。

ただし、気に入られると里に帰してもらえないかもしれないので注意。

それから彼女にその気がなくとも、鬼の身体能力は人間にとっては危険である。

しかも彼女は手加減が下手らしいので気をつけた方がいいだろう。

* 1 : それだけの理由で大妖怪が里に近付くのはどうかと思う。

* 2 : そのためさらいすぎでよく紗花に怒られているらしい。

幻想の最高神『龍崎神流』

能力

破壊と創造を司る程度の能力

危険度

不明

人間友好度

不明

主な活動場所

不明

幻想郷が肥沃な土地なのは実は彼女が理由である。

彼女が破壊と創造を行うおかげで雨が降り、大地に作物が実る。

但し、空に住んでいるため実際にその姿を見た者は限られている。
おそらくただの人間では一人もいないだろう。

噂では幼女らしい。

《目撃報告例》

・私はあの人苦手です。だってありえないくらい我が儘なんです。
(半人半霊)

話を聞く限りいい性格ではないようだ。

《対策》

彼女は妖怪というよりも神に近い。
まず襲われることはないだろうし、何より人前に姿を見せない。

もし会えたらかなりの幸運だろう。 * 1

*1：もしくは大災害の前兆。

限界なき武神『神道仁』

能力

限界を無くす程度の能力

危険度

極低

人間友好度

普通

主な活動場所

幻想郷全域

幻想郷において最強の存在である。

身体能力では鬼を越え、霊力等も龍神よりも高く、神すら寄せ付けない。

まさに無敵である。

地獄の閻魔王達や天界の天人達ですら彼の動向には気をかけているらしい。

かなり長い時間を生きているらしく、最初の人間が生まれた時には既に生きていたらしい。*1

立場的には人間と妖怪の中立の立場にいるが、彼を見つけた時にいろいろ頼むとやってくれる。

特に護衛を頼むと妖怪が近付いてすらこないと人気である。

あとかなりの酒好きらしく、常に徳利を持っている。*2

《目撃報告例》

・夜桜を見ながら酒を飲んでいた。かなり絵になっていた。
(匿名)

彼はいろんな所で酒を飲んでいる。

特に無縁塚の妖怪桜達を見ながら酒を飲むのが好きらしい。

・この前鬼と花の妖怪と里でお茶していた。
(匿名)

彼の交友関係は半端じゃない。

幻想郷の大妖怪達は殆ど彼の知り合いの上、神や閻魔にも顔見知りが多いらしい。

《対策》

はつきりと言う。

不可能である。

彼とともに闘って人間が勝てる訳がない。

だから彼を怒らせないようにするのが必須である。

しかし長い間生きているため心が広い。

並大抵の事は笑って許してくれる。*3

* 1 : 最低でも現在生きている生物の中でもっとも長寿。

* 2 : 鬼並に飲む。

* 3 : きつと

幻想郷縁起その1（後書き）

やっと誤字訂正の正しいやり方がわかりました。

誤字があつたらガンガン言ってください。

家と天狗（前書き）

更新遅くなりました。
すいません。

家と天狗

突然だが俺は今迷っている事がある。

それは家だ。

幻想郷に来て三日が経つが、俺には住むべき家がない。

基本今まで野宿だったから家無しでもいいんだが、どうせ定住するなら家が欲しい。

別に建てようと思えば直ぐに建てられるんだが問題は場所だ。

これが一番迷っている。

現在第一候補は無縁塚。

無縁塚の妖怪桜とか綺麗だし、あの紫色の花びらが散る時なんか最高だ。

だが危険だ。

俺は問題ないが誰も訪ねてこなそうだ。

何たって妖怪や亡霊達がうようよいる幻想郷で最も危険な場所だからな。

他には人里、妖怪の山等が候補地だ。

でも人里だと拝まれるし、妖怪の山は宴会がうるさい。

どうしたものか……

「仁、どうしたの？なんかボーっとしてるよ？」

そんな事を考えていると、俺の向かいの席に座っているこいしが話しかけてきた。

言い忘れていたが俺達は今人里の酒屋にいる。

夜も遅いので人よりも妖怪のほうが多い。

騒がしいのは変わらないがな。

酒屋には店主のいるカウンターと粗末なテーブルがいくつかあり、俺達はそのうちの一つを占領していた。

ちなみに飲んでいる面子はこいし、さとり、萃香の三人だ。

……幼女しかないな。

こんな顔ぶれになったのも、元々用事があつて萃香と飲んでいた所に偶然にも古明地姉妹に会ったからだ。
決して狙った訳ではない。

「ちよつと考え事をしていただけだ」

そういえばさとり達は魔法の森に住んでいるんだよな。

森の化け物茸の胞子を嫌って誰も近付かないのが丁度いいらしい。

「それにしても覺つてすごいね！。考えている事が全部分かるなんて」

そういったところで萃香はぐびぐびと徳利の酒を飲む。

いつも萃香が持ち歩いている徳利ではなくこの店で出されたものだ。

もうかなり飲んでいるため萃香の足元には空の徳利が転がっていた。

「はい。だから私達には嘘や隠し事はできません・・・ちよ、そんな変な事考えないで下さいよ・・・／＼」

さとりの顔が耳まで真っ赤になる。

一気に赤くなつたため、酔いでないことは明らかだ。

「うわゝ、萃香のエッチゝ。し・・・」

「駄目！！これだけは言っちゃ駄目よ！！」

「モゴモゴ……」

何時もと変わらず自重せず危険な事を言おうとしたこいしをさとりが止める。

てか萃香の奴何考えていたんだ？

さとりが口を押さえてでも止めるなんて見たの初めてだぞ？

「さとりはウブだね」

原因である萃香はそういいながらケラケラ笑っている。

鬼は嘘を嫌う。

そしてあまり考えない。

だから萃香はさとり達的能力を気にしてないのだろう。
だからこんな風にかえらんだろうな。

出来ればこんな能力を気にしない奴らと出会って、こいしに自分の能力に自信を持って欲しいな。

「モゴモゴ……」

当の本人はまだモゴモゴしているがな。

「そ、そういえば仁さんは萃香さんに何か用事があったんじゃないんですか？」

よっぽど恥ずかしかったのか、さとりは顔をまだ赤くしながら話しを変えようと俺に話をふってきた。

「新しい酒虫を貰おうと思って、数に余裕があるか聞こうとしていたんだ」

先日俺の酒虫がお亡くなりになったらしく酒が出なくなってしまうたからな。

ちなみに徳利ごと埋めて供養してやった。

「・・・プハッ、酒虫って何？」

こいしは聞いた事がないらしく、さとりの手を振り払って聞いてきた。

「なんとただの水をうまい酒に変えてくれる鬼みたいに可愛い魔法の虫、それが酒虫だよー！」

萃香が誇らしげに言う。

鬼は酒虫の改良に汗みずを流し、何百年も前から酒虫と付き合ってきた。

だからそれなりに誇りがあるのだろう。

ちなみに見た目は鬼みたいに可愛いと言っていたが実際は山椒魚みたいな感じだ。
まず虫ではない。

「それで酒虫の数は大丈夫か？」

いないと困るなー。

好きな時に酒が飲めないのは辛い。

「数はあまりないけど大丈夫。徳利の裏に酒虫のエキスを塗る新技術が出来たからね。一匹で何人にも使えるんだよね」

鬼は本当酒に関する事には努力を惜しまないな。

「実は私のやつもその技術が使われているのよ。ただ問題は酒虫本体が入ってるわけじゃないから味が落ちちゃうんだよね」

でもまだ完璧じゃないんだな。

味が落ちるのは大問題だな。

だが数がないならしょうがないな。

「わかった。その加工を頼む。明日にでも山に行けばいいか？」

「そうだね。別に準備とかもいらないしね」

「じゃあ明日行こう。……ところでこいしは何をやっているんだ？」

気付いたらなんか他の妖怪達と踊っていた。

流石に酒飲んでいる最中に能力がどうとか言ってくる奴もいなくて割と楽しんでいるようだ。

だが何故ロツクな感じの踊りなんだ？

ちなみに音源は夜雀らしい。中心にいる。

見た目ミステリアではないが少し似ている。

もしかしたら親かもな。

「なんか酒入ってテンション上がっているみたいですよ」

「……まあ楽しければなんでもいいがな」

あいつ本当に自分の能力嫌っているのか？

「アツハツハ!!」

萃香が何故か笑い始めた。

何がツボったんだ？

こうして夜は更けていった。

翌朝・・・というか飲み終わった時と日付は変わらないな。
ともかく昼頃に妖怪の山に登っている。

ちなみに妖怪の山とは鬼達が支配している山でその下に他の妖怪達
が従っている。

今は歩く気分なので歩いて登っている。

まあちゃんとした道はないが、登りながら紅葉を楽しめるからいい
か。

時期的には秋の始まりの頃なので余り色付いていないが、それでも

季節の変わりを感じる。

多分秋姉妹も今頃この変化に喜んで・・・

「ヒヤッホーイ！！秋だ！！！」

「一年間長かったわね！！」

なんか遠くから声が聞こえるな。

無視しよ。

そつえばもう天狗っているのかな？

天狗は山で鬼の次点に位置し、強い力を持っている。

そして仲間意識が強く山に登るとした部外者には攻撃を仕掛けてきたはずだ。

でもいたとしても天狗の上の鬼である萃香に今日来ると伝えてあるから平気か。

天狗は上下関係にも厳格らしいからな。

邪魔してきたら邪魔してきたで叩き潰すから大丈夫だけど。

「その人間！！此処が何処だかわかっているのですか！！直ぐに下山しなさい！！」

はい、後ろから声をかけられました。

明らかに敵意を持っているし、喋り方からして天狗だろう。

天狗は強い者には下手に出て、弱い奴には高圧的な態度をとるからな。

今俺霊力とか押さえているし、少し強めの人間ぐらいにしか見られてないだろうからな。

とりあえず言ってきた奴を確認しようと思えば振り返ると、そこには少女がいた。

白いシャツを着て、黒いスカートをはき、靴はなんか下が一部分だけ伸びていて歩き辛そうだ。

頭には小さい烏帽子みたいな帽子を被り、手には葉っぱの団扇を持っている。

射命丸文だね。うん。

たださとり達と同じく少し幼く見える。

十代前半くらいだな。

あと背中に鴉天狗の象徴ともいえる黒い翼がない。

生まれたその時から生えているものじゃないのか？

「いい加減に返事をしたらどうですか？」

文はいつまでも返事をしない俺にいらついているようだ。
声が少し早い。

「悪いな。少し考え事をしていた。それから山は降りん。楓に用があるからな」

「き、鬼神様に！？・・・しかしそんな報告は受けていません」

文は楓の名にかなり驚いていたが直ぐに平静を取り戻す。
てか萃香の奴伝え忘れてやがるな・・・

「とりあえず報告を受けていないので通せません！！通りたければ力付くでどうぞ！！」

これも天狗達のルールらしい。
なんでも天狗に見つかっても戦いに勝てば山に登れるようにしてく

れるらしい。

それにしても甘く見られているな。

余裕の笑みまで浮かべているし。

まあ今の霊力ぐらいじゃしょうがないがな。

ともかく面倒だが戦うか。

逃げてもそのほうが後で面倒臭そうだし。

「そつちがその気なら構わないがな……後悔はするなよ？」

「っ!？」

霊力を若干解放する。

最大値の一割にも満たないが今の文にとっては充分に脅威だろう。

一瞬で霊力が上昇したのに文が驚くが無視。

「ほら、遅いぞ」

「な?!」

高速で動き文の後ろに回り込む。

やっている事はシンプルだがそう単純な話ではない。
身体能力が人間の何倍もある妖怪、しかもその中でも力が強い天狗だからだ。

「よっ」

「うぐっ!!」

そのまま拳を叩き込み吹き飛ばす。

近くの木に当たるが、その木を折りさらに吹き飛ばす。

だが勢いはやまず文はさらに吹き飛んでいった。

・・・やり過ぎたか？

丘と宴会（前書き）

どうしよう・・・更新スピードがどんどん落ちてる・・・

丘と宴会

妖怪の山に行ってから数日が経った。

文を倒したからか他の天狗に襲われる事はなく、スムーズに鬼達の所に行けた。

ただ徳利の加工が終わるまで時間がかかるらしくそれまで時間を潰している。

主に家の候補地を探しているんだがなかなか見つからない。

何処かにいい場所はないだろうか？

「と、言うわけで何処かにいい場所ないか？天狗ならそういった情報に詳しいんじゃないか？」

「・・・それだけの理由でいきなり山に登ってこないで下さいよ・・・」

再び妖怪の山にやって来ました。

そんでもって文を見つけたので捕まえて聞きたかった事を聞いている。

「別にいいだろ登るくらい」

「貴方はそう気楽でも私達は困ります。貴方が山の麓にいてだけで天狗は警戒体制をとらないといけないんですから」

えー、どんだけ俺嫌われているんだよ。

「山の誰かが貴方に変な事をしないか気が気でないんですから」

そういう事が。

「それは置いといてなんかいい場所ないか？」

いい加減家建てたいんだよな。

このままだとホームレスルートになりそうだし。

「出来れば置いとかないで欲しいんですけど・・・ハア、それでなんで天狗に聞こうと思ったんですか？貴方にはもっと情報を持っている知り合いがいると思うんですけど」

「ほかの奴はまともにアドバイスくれなそうだしな」

紫寝てばかりだし、楓酒ばかり飲んでるし、神流なんか空に住んでいるから家の概念ないし。

幽々子やらさとり達なんかは自分の家勧めてきたし。

「それに天狗は噂好きと聞いたからな」

まだ始まっていないうだが、天狗同士の新聞を始めるぐらい噂好きだからな。

「確かに噂好きですが、山の意外の情報なんて……あ」

なんか思い当たる節があるようだな。

「人里から妖怪の山から反対側に行った所に小高い丘があります」

「丘？そんなものがあつたか？」

まだ幻想郷に来て日は浅いからか、そんなものがあるなんて全く知らなかったな。

「人はおろか妖精も近付きませんから。いるのはせいぜい小妖怪程度です。中腹は毒の花である鈴蘭の花畑があるので頂上まで登れませんから騒ぎ事もないと思います」

ほう……。

なかなかいい場所かもな。

強い奴なら鈴蘭の毒ぐらい平気だと思っし、人里からもあまり離れてないみたいだし訪ねやすいだろしな。

しかし鈴蘭か。

確か鈴蘭に係る妖怪がいた気がするが気のせいかな？

「中腹はともかく頂上なら日当たりもいいですし、風通しも抜群です」

よし決めた。

ここにしよう。

聞く限り有力物件みたいだし。

「やはりお前に相談して正解だったな。ありがとう」

「え、あ、ど、どういたしまして……」

なんだ？

その意外そうな顔は？

俺が礼を言うのがそんなに以外か？

「……何をそんなに動揺している？」

「いえ……強い妖怪や人間って傲慢な方が多いからってきり……」

」・

俺もそうだと思ったと。

まあ実際そういう奴が多いし、天狗なんてその最たるものだしな。自分より強い奴にはへりくだって、弱い奴には強気にでる。

天狗は基本的にそういう性格らしいからな。

「俺はそこまで傲慢じゃない。じゃあとりあえず俺はその丘に行ってみる。礼はまた改めて後日する」

そして俺は丘を目指して飛び立った。

文が何か言っただけだが、何も聞こえなかった。

さて、着いた。

もう丘というよりも低い山みたいな感じの大きさだな。

ただ周りに木が見当たらないな。
頂上は草原みたいな感じだな。

それから文の話では鈴蘭は中腹辺りに生えているという事だったが、頂上付近にも少し生えているな。

少し下ると鈴蘭の花畑があり、そこは日当たりが余り良くないな。

お、花畑の向こうに林が見えるな。

どうやら木があるのは中腹までで、それ以上は鈴蘭と草原だけみたいだな。

なかなかいい感じだな。

よし、家建てるか。

出来たぜ!!

憧れのマイホームか!!

手抜きだって？

家造っているところなんてつまらないじゃん。

造るには数時間かからなかった。
だが頑丈だ。

家の柱や基礎を靈力で補強してあるからな。

間取りは簡単に言えば武家屋敷だ。小さめだが中庭もある。

土間もあり、一応鍛冶場も造った。

まあまだ釜戸やら家具もないからまだ住める状況じゃないがな。

おっと、畳と障子も揃えないとな。

日付が変わり、日が昇って昼頃になった。

流石に家具やら全て人里や他の街でそろえ運び終わった。

やっぱり移動スピードがチートになったな。
本気でいけば人里まで秒もかからない。

ともかくやっと完成したな。

「あら、やっと建ったのね」

完成して居間でくつろいでいるとスキマが開き紫が出てきた。

「お前結構前からみてたろ。しかもなにか企んでるだろ」

わりと前から気配がしてたしな。

こそこそなんかしていたが忙しかったので無視した。

「せっかくお祝いしに来たのにとんだ挨拶ね」

「だったらまずその胡散臭い笑みをやめろ」

この笑い方を紫がしている時は口クな事が起きない気がするんだよな。

「こんな美人に失礼ね。それよりそろそろ皆来るわよ」

「皆?・・・!」

なんか・・・馬鹿でかい妖力が近付いてる。

しかも多数。

「……何人呼んだ？」

「さあ？何人だったかしら？でも大宴会出来るぐらいは来るわね」

「……」

せめて準備する時間くらい考えろよ。

てか鬼の方々も来るのか？

家壊れないよな。

「仁の家が出来た事にカンパイ！！！」

『カンパイ！！！！』

「……」

こいつら……絶対に騒ぎたいだけだろ。

ちなみに来た奴らは、楓、鬼の四天王達、幽々子に妖忌、さとりとこいし、幽香、冷華、神流、あと文もいる。

なんだこの面子は？

強すぎだろ？

こんだけいれば世界征服とか簡単に出来る気がするの俺だけか？

とりあえず宴会場みたいな広いスペースも造つといて良かったな。ここまで早く使う事になるとは思わなかったがな。

「慕われているわね。まさか私もこんなに沢山来るとは思わなかったわ」

紫、張本人が何を言うか？

・・・でも普通に笑っているし、本当に予想外みたいだな。

「それにしても凄い光景だな。幻想郷で名のある奴らは殆どいるんじゃないか？」

「確かにそうね・・・幻想郷もなんとか形になってきたわね」

「・・・・・・」

紫にとって幻想郷は夢だった。

人間と妖怪の共存。

その第一段階の妖怪を集める事は完了した。

次は人間側だ。

人間の妖怪にたいする認識を少しずつずらしていき、最終的には妖怪と仲良くなるとはいかなくてもそれに近付ける必要がある。

だがそれは果てしない時間が必要だろうな。

だけど・・・

「完成させよう」

「え？」

「この世界をさ」

「・・・ええ」

紫はゆっくりと頷いた。

「仁さん！！神流と萃香さんが襖を破壊しました！！」

「あ、なんと言っくんじゃ！！！！」

「それなら幽々子だって障子に穴開けてるじゃないか！！」

「って、幽々子様！？」

「ごめんなさい。手が滑っちゃった」

家……大丈夫かな？

閻魔と会話（前書き）

今回伏線しかありません。

閻魔と会話

「彼岸を渡ったのは初めてだが、意外といい場所だな」

「……彼岸を渡ってそんな事言ったのは多分貴方が初めてだと思いますよ」

今俺は彼岸を渡り、あの世に来ている。

彼岸の川岸にテーブルと椅子があり、そこに俺と映姫が座りお茶を飲んでいる。

ちなみに来た理由は映姫に呼ばれたからだ。

会って話しがしたいが会いに行く時間が無いため来てほしいというものだ。

彼岸は石と彼岸花ばかりのなかなか殺風景だが俺はそこが気に入った。

「それにしてもお前なんか疲れてないか？目の下にクマが出来てるぞ？」

なんか映姫の顔が明らかに疲れている。
流石に痩せこけたりはしていないが疲労が溜まっているのは明らかだ。

「最近かなり忙しいんですよ……。上はミスばかりするし、下はサボってばかりで……」

上はあのアホ（神）だな。

妖精生んだり、堕神創ったりと半端なくミスしてるからな。

それで下は小町か。

映姫の下でサボる奴なんてこいつくらいしかないしな。

「それはもうご愁傷様だな」

まさか彼岸でこの言葉を言う事になるとは。

……。ハッ！！まさか……

「……。まさか俺に仕事を手伝わすために呼んだんじゃないよな？」

まさかねー（笑）

「やはり勘が鋭いですね。その通りです」

……。あ、あれ？

俺今かなり適当に言いましたけど？
当たっ……。ちゃった？

「実は今地獄は深刻な人手不足なんです。しかも財政も厳しくいろいろと手詰まりなんです」

・・・アホ（神）や小町のせいだけではないみたいだな。

「それで俺に白羽の矢がたつたと」

「はい。實力においては現世どころか神においても最強。貴方程の適任はいません。・・・どうか私達に力をお貸し下さい」

そして映姫は頭を下げる。

・・・ここまでやられたら断れないよな。

「じゃあ俺は何をすればいい？」

「手伝って頂けるのですか!!」

映姫はいきよい良く頭を上げる。

「そこまでやられたら断れない」

「ありがとうございます!!それで頼みたい仕事なんですが・・・例のナイフについてです」

「……………」

俺は思わず顔をしかめてしまった。

例のナイフとは月のナイフだろう。

魂を傷付け輪廻を破壊する危険なものだ。

それだけでなく、俺は不比等の事でいろいろと因縁があるがな。

「貴方にとってもこのナイフは因縁深く苦い思い出があるのはわかっています……しかしこれを放置すれば………」

「大丈夫だ。だからこそしっかりとやる」

映姫は俺の事を心配するが俺はそこまで柔じゃない。

俺はフツと笑い顔を浮かべ、映姫に自分の意志を伝える。

「……………」わかりました。それではお願いします。場所の詮索はこちらがやるので連絡がありしだいそこに向かって下さい」

「わかった」

……意外と楽だな。

俺は転移が使えるから事実上面倒な事は殆どないな。

「それから貴方にもう一つ仕事、というよりもお願いがあります」

「お願い？」

今度はわりと軽い内容みたいだな。

映姫の話し方が軽い。

「実は地獄の人手不足の解消のために冥界で転生待ちの有能な魂達を死神として雇う計画があるのです」

そんな事が出来るのか？

死神つてのは生まれつきのものだから普通の魂をいきなり変えるのは無理だと思うが……。「普通の魂を死神に変えられるのか？」

「それは実際不可能ですので死神代行として雇います」

代行ね……

「しかし問題があります。死神でないためには霊力が弱いのです。だから貴方にその対処法を考えてほしいのです」

たしかにな。

流石に霊力の強化はできないからな。

「霊力があるものを雇えばいいんじゃないか？」

魂でも霊力が強い奴はいる。

生前退治屋だったり退魔師の奴とかがこの部類だな。

「その手もありますが、事務仕事が得意な者も雇いたいんです」

「……」

そうなると難しいな……。

霊力の強化がそんな簡単に出来るなら誰も苦労しない。「霊力を上昇させられなくてもせめて簡単な戦闘ができるようにできませんか？」

……それならスペルカードが使えるんじゃないか？

力が弱い奴、例えば妖精とかでもそれなりの力を使えるようになるんだからピッタリだな。

「……それなら一つ案があるが少し待て。まとめてから伝える」

どうにもスペカの原理はわからないがなんとかなるだろう。

最悪紫あたりに聞けばどうにかなりそうだしな。

「我々としては案を出していただければ時間はいくらかかってもうございせん」

そう言ってもらうと助かるな。

案をまとめるのになかなか時間がかかりそうだし。

「・・・それから一つ伝えておかなければならない事があります」

「？ なんだ？」

「実は・・・」

「何だと！？それは本当か？！」

俺は久々に大声を出してしまった。

俺にとってそれくらいの事だった。

「本当です。・・・ただ、初めての事なのでどのようなバグが起こ

るかわかりません。それに時間もかなりかかると思われます」

「……………」

俺は映姫の言葉を聞いていて、だんだんと冷静になっていった。

「……………どのくらいかかる？」

「全くわかりません。ただ百年や二百年ではすまないと思います」

「……………当たり前だな……………」

そんな大それた事直ぐに出来るわけないからな。

「映姫……………」

「はい」

「よろしく頼む……………」

今度は俺が頭を下げる。

こんな風に改まって頭を下げるのは本当に久しぶりだな。

「その期待に応えられるように頑張ります」

頭を下げていて顔はわからないが、映姫の声には覚悟がこもっていた。

顔にも覚悟が出ているだろう。

「映姫様」

その後映姫と雑談をしているといつか会った、のほほんとした死神がやってきた。

「……光明。今客人が来ているのですが」

映姫が批判がましい目を向ける。

「すみません。でも緊急事態なんです」でもそんな口調で言われても……

「あ、あたしは光明って言って主に寿命の管理の仕事をしている死神です」

まあ、死神なのはわかっていたがな。

そういえば死神にもいろんな仕事があるらしい。

小町みたいに三途の川の船頭や光明みたいに事務仕事もあるらしい。

「わかってるだろうが俺は神道仁だ。それより何か大事な事があったんじゃないか？」

「そうでした。実は三途の川を渡って来る魂が少ないと思って此岸に行ってみたら小町さんがいなかったんですよ。どうやら何処かでサボっているみたいです。」ちなみに此岸とは三途の川の現世側だ。

てか小町またサボっているのか。
また映姫が怒……

「フフフ……」

るどころじゃすまないな。

不敵に笑い、とてつもない怒気が出ている。

そのあまりの怒気に映姫の後ろにはごつい化身みたいのが見える。

「……映姫様の後ろに閻魔様が見えます」

光明、目の前に本物の閻魔がいるんだよ。

「・・・それでは今日はいろいろありがとうございました。では・・・私はこれで・・・」

映姫はふらふらと立ち上がり立ったら直ぐに飛び立って行った。

小町終了のお知らせ。

苦悩と仇（前書き）

どうしよう・・・支離滅裂だ・・・

苦悩と仇

私は知りたかった。

お父様が命を落としてでも守った女の事を・・・

私は苦悩した。

お父様の遺品の蓬萊の薬を飲んで・・・

私は願った。

お父様を消した奴をこの手で殺す事を・・・

「うん・・・」

俺は一人家の居間で唸っていた。

映姫に頼まれ、スペルカードの原案を考えているんだがなかなか進まない。

使い方はともかく、作り方が微妙だ。
今の案だと作るのに効率が悪すぎる。

一枚作るのに三枚打てる分の霊力を使う。

ゲームだったらそれでいいが、死神の自衛用に使うならちょっと無理があるな。

……紫や河童達に相談してみるか。河童達はもうかなりの技術力を持っていて、例の徳利の加工も河童達がやっているらしい。

「……ん？」

なんだ？

でかい霊力が家に近づいて来たな。
しかもかなり上手く霊力を隠してやがる。

……この感じは。

「久々だな……。まさかこんな立派な家を構えているとは意外だ」

「俺としてはお前が到着するのがこんなに遅かった事が意外だったぞ？フュンフ・アサシス」

流石はアサシン。

音一つ立てずに俺の家に忍び込んで俺の後ろに立つとは。

まあ気付いてたけど。

「連れがいろいろ回りたいって言ったからな」

「連れ？それはまた意外……。また随分と女らしくなっているじゃないか……」

今のフュンフの格好は昔と違った。

まずスーツがレディースのものになっている。
これだけで大分印象が違うな。

それに胸。

完全な絶壁だったのが膨らみが見れるようになってる。

例のオプションパーツってのを付けたのか？

「……そんなの俺の勝手だ。それよりも……その連れなん
だが……」

なんだ？

フュンフが言っのを渋っている？

「どうした？」

「……藤原妹紅を知っているか？」

「！」

「……やはり奴の娘だったか」

フュンフは軽いため息をつき、壁にもたれかった。

それにしてもフュンフと妹紅が一緒にいたなんて予想外すぎる……。

フュンフは妹紅にとって実の父の仇に当たる。

妹紅が今どう思っているかはわからないが恨んでいたっておかしくない。

「……妹紅はその事を気付いているのか？」

「気付いてないだろうな。もし気付いていたら数年も一緒にいない」

数年も一緒にいたのかよ！！

「それにまず気付きようがない。俺もあいつが蓬莱人だと告白して
もしかと思ったんだ」

確かに俺は妹紅に仇の容姿や武器とか伝えてない。
わかりようがないか。

「……あいつは……これを知ったらどう思うだろうか……」

「・・・・・・・・」

俺はフュンフに何も言えなかった。

妹紅が不比等が死んでそれはもう悲しんだ。
見ていて辛い程に。

その悲しみが全て憎しみに変わってもなんら不思議じゃない。

だとしたら、確実にフュンフを殺しにかかるだろう。
仇を打つために。

それにしてもフュンフがかなり苦悩している。
よほど妹紅との関わりが楽しかったんだろう。

「妹紅とは普段はどうせっしているんだ？」

こつというのは普段の関わりが大事だ。
もし恨んでいても普段が良好な関係ならまだわからない。

「慕ってはくれている・・・と思う。言い方は悪いが戦闘の稽古は付けている。何故か姐御と呼ばれているしな」

・・・それ結構慕われているぞ？

なんだよ姐御って？

完全に姉がわりみたいな感じになってるだろ。

しかもフュンフ。

姐御って時なんか照れ臭そうにしてたろ？

あんな無機質だった奴にどれだけ人の心が馴染んでるんだよ。

「・・・まあ慕われてはいるようだな・・・それで妹紅に言うつもりはあるのか？」

「・・・ああ、あいつが幻想郷に来たら言つつもりだ」

「あいつここに来てないのか？」
フュンフと共に行動してたって言ってたからてっきり幻想郷に来て
いるもんだと思ったんだが。

「あいつは少し寄り道してからこの地に来るらしい」

「何処にだ？」

「探し人の所・・・だ」

フュンフは窓から外を眺めながら言う。

いつの間にか外は夜になっていて、空には満月が浮かんでいる。
フュンフは月を眺めていた。

空には満月が輝いていた。

私、藤原妹紅は一人で月の輝く森の夜道を歩いている。

いつもなら姐御と一緒にいるが今日は一人。

これは私の問題だから姐御は巻き込みたくなかったから。

私の今通っている道はケモノ道とも言えないような感じでどうにも歩きづらい。でも、こういう人がいない所だから『あいつ』がいろいろ。

『あいつ』も人前には出れないからだ。

「ここか……」

私の目の前には木でできたトンネルがある。

それだけでも不自然なのにこの木のトンネルを作っている木は全て周りの木よりも確実に若い。

まるでこの木達だけ時が止まって、成長出来ないでいるかのように。

仁さんから教えてもらった『あいつ』の能力は難しくてよくわからなかったが時を操るという事は理解した。

だから私はこういった場所を都から離れてからずっと探していた。

そしてようやく見つけたんだ。

私はトンネルの中に入って行く。

ちょうど満月が雲に隠れ、中は真っ暗闇になったが関係ない。
私はどんどん進んで行く。

途中結界があつたが簡単に壊せた。
姐御に結界の壊し方を教わつたという良かった。

結界の後トンネルは直ぐに終わり、開けた場所に出た。

そこには小さな家が一軒ある。

玄関先のろうそくの明かりがゆらゆら揺れていた。

「あら、結界を壊したのは貴方？随分可愛い侵入者ね」

家の上には私くらいの女が立っていた。

月明かりがなくて顔はよく見えないが着物を着ているのはわかる。

独特の雰囲気を漂わせ、彼女の周りだけ空気が違う感じがした。

何よりも私と同じ臭いがする。
不死の臭いが。

そして私は確信する。

こいつが『あいつ』だと。

こいつが私が探していた奴だと。

「蓬萊山・・・輝夜・・・!!」

私は小さく、それでいて力強くそいつの名を呟いた。

輝夜と妹紅（前書き）

やっとテストが終わりました。

…とりあえず今までの誤字どうしよう…

多すぎて最初から全部書き直したいって衝動にかられます。
今読み返すと赤面ものの話しとかもあるし。

それからこの話から…をやめて…を使い始めました。

輝夜と妹紅

月にかかっていた雲は既になくなり月の光りが辺りを照らす。
おかげで輝夜の顔もばっちり見えた。

黒くて長い髪。手入れが行き届いているようでとてもサラツとして
いる。

目はパツチリとしていて、女の私が見ても可愛くみえる。

……こりやお父様も惚れるはずだ。

「……私の事を知っているの？」

私の声が聞こえたのか、輝夜は表情を一転させる。

さっきまでどこか余裕がある表情をしていたが、今は怪訝な感じだ。

今まで必死になって隠れてたのに名前が知られているのはいろいろ
と衝撃的だろうな。

「その反応だと当たりみたいだな」

でも私はそんな輝夜の反応を見てつい笑みが出てしまう。

やっと、会えたんだから。

「……月の者かしら？だとしたら私を始末しに来たの？」

輝夜はさらに怪訝な顔をする。

そういえばこいつは迎えに来た月の連中を皆殺しにしてそいつらから逃げてたんだった。

……そしてお父様は月の奴らと輝夜が戦っている時に、こいつの身代わりになって死んだんだ……

「藤原不比等……」

「！？……」

私がお父様の名を呟くと、あいつは驚愕の表情をする。

だけど、その後さつきとはまた違う怪訝な顔になる。敵意ではなく、疑問を含む顔だ。

この様子だと確実に覚えている。もし万が一にも忘れたなんて言ったら問答無用で焼き殺そうかと思ったけどその必要はないみたい。

「その様子だと覚えているよね。自分の身代わりになった男の事

くらい」

「……………」

私は身代わりの部分を強調して言う。
でもそれを聞いて輝夜は何も言わない。

ただ表情は少し悲しそうな感じだ。
何にも感じてない訳ではないみたい。

また月に雲がかかり始めた。

辺りは再び暗くなり、輝夜の顔がよく見えなくなる。

風が吹き、辺りの木々の葉がザワザワと揺れた。
その葉の揺れる音だけが辺りに響いていく。

「貴方は不比等とどういう関係なの？そんな最近の話じゃないはずなんです」

先に沈黙を破ったのは輝夜だった。

でも確かに輝夜からしたら唐突な話だな。
既にあれから数百年は経ってる。

都は平安京に移ったし、今中央では源氏やら後白河法皇やら、少し前まで平氏あたりがうだうだやっている時代。

もはやあの話しは昔話でお伽話になっている時代。

そんな中で今更お父様の話なんてする奴はまずいないだろう。

「私…は娘だ。藤原不比等が娘、藤原妹紅」

でも私は違う。

だって、当事者だから。

あの時に、一杯悲しい思いをしたから。

「まさか！もうあれから300年は……………飲んだのね？」

輝夜は最初こそ馬鹿にしたような口調だったが、どうやら気付いたみたい。

私もまた奴と同じように蓬萊の薬を飲み、不死になった事に。

「ああ。お前がお父様に残したやつを飲ませて貰った。そういえばあの薬、かなりまずかったな。もう少し味をどうにか出来ないのか？」

私は何でもない事のように言う。

あの薬を飲んでから、いろいろと嫌な思いもしたけど後悔はしてない。

それと同じくらい嬉しい思いもしたし、姐御にも会えたから。

「なんて……馬鹿な事を……もう貴方は死ねないわ。永遠という籠に囚われ、生という苦しみをずっと背負っていく事になる……」

輝夜の表情は暗くて見えないが、きっと悲壮なものだろう。

自分がその苦しみを知っているから輝夜にはわかるんだ。
永遠の業が。

そして薬を残した事を後悔しているのかもしれない。

新たな犠牲者を出してしまったから。

「それでも私は…お前に会いたかった。お父様の死の原因をつくったお前に」

「……………」

輝夜は再び黙り込む。

何とも言い表せない感情になっているかも。
私だってそうだし。

「…それで…私に会ってどうするつもり？残念ながら仇は討てないわよ。わかっていると思うけど私だって永遠を背負っているのよ？」

最後の永遠の部分はやや自嘲気味な感じだ。
それに徐々に俯いていって、今は完全に下を向いている。

そして…私がしたかった事は……

「何なんだろう??」

「は？」

俯いていた輝夜は勢いよく顔を上げる。
それほど衝撃的だったんだろう。

まあ自分自身驚きだけど。

「いろいろと言いたい事とかあったんだけどさ、なんか……こう……実際に前にすると言葉が出ない感じ？ともかく何かしたい事が出てこないんだよね」

「……………」

輝夜は黙っている。
呆れてるのかも。

永遠の命を手に入れてでも会ってこんな風になるなんて私も予想だにしてなかった。

あ、今やりたい事思いついた。

「今思いついた。一発殴らせろ」

「……そんな事でいいの？」

「だいたい、お前が直接お父様に手を出した訳じゃないし」

実際に手を出した奴はその場で仁さんに殺されたって聞いている。

だから私の中では仇とか敵とかは完結している。

もしそいつが生きていたら私の中にもつと憎しみが生まれてたかもしれないけど。

「……プツ、アッハッハッハッハッハッハ！！！」

それを聞いた後、輝夜は笑い始めた。手で腹を抑えて大笑いをしている。

ちようど月が雲から顔を出したから表情がよく見えたが、目尻に涙まで浮かべていた。

「……なにがそんなに面白いの？」

「アツハツハ！いえ、フフ。たいした事じゃないわ。それより私を殴りたいんでしょう？それならどうぞ」

輝夜は両腕を広げ、まだ若干にやけた顔で殴ってこいと言う。

……なんかこの状況だとそっち方面の人に見えるな……

まあそんな事はどうだっていいや。
ともかく、

「じゃあ…遠慮なく!!」

今はこいつを一発ぶん殴る!!

私は右手で握りこぶしをつくって走りながら近寄っていく。
もちろん輝夜は抵抗するそぶりを見せない。

「オリヤ!!」

「ッ!!」

私は輝夜をおもいつきりぶん殴った。

でも妖力で強化とかしてないから人間の力とたいして変わらない一撃だ。だから輝夜は軽く吹っ飛ばされて地面に投げ出されただけで済む。

「全く……永遠の命を手にしても、こんな事しかないなんて馬鹿げてるわね。よいしょ」

輝夜が私の手を借りながら立ち上がる。

「よっと。奇遇だな。私もそう思ってたところだ」

私はニヤツと笑いながら言う。
すると輝夜も同じようにニヤツと笑う。

「「アツハツハツハツハツハツハツハツハツハ」」

そして二人で目を合わせながら大笑いした。

「へえー、そんな場所があるんだ」

「なんでも人間やら妖怪やらが沢山集まって面白いらしいよ」
あれからいろいろと話していると、意外と輝夜と話しがあった。

それで今、輝夜を幻想郷に誘っている。

あそこは人外だらけらしいから別に不老不死の奴が一人や二人いたって怪しまれないだろう。

こんな隠れた生活をする必要はなくなる。

「それでどうする？一緒に来る？」

「そうねえ……」

輝夜は指を顎に当て、考え込むように空を見上げる。

月は丁度真上に差し掛かっていて、夜はまだまだ長い。
夜明けまでまだ後数刻はあるだろう。

「とりあえず連れに相談してから決めるわ」

「え？連れがいるの？」

私はかなり驚く。

辺りから他の奴の気配がしないからだ。

「今は出掛けてるけどね。その内帰ってくるわ。あ、それとね妹紅……」

「ん？」

輝夜が意味ありげな間を作る。
一体なんだ？

「私、やられっぱなしってのは気に入らないのよね」

「へ？」

「ブリリアントドラゴンバレッタ！！」

私が間抜けな声を上げるが先か、輝夜が弾幕を展開しそれが私に降り注ぐ。

「うわっ！！」

いきなりの事だったので私は全弾くらった。

痛え……

結構本気でやりやがったな？

身体中から血が出てやがる。

でも私には関係ない。
直ぐにリザレクションをして傷をふさぐ。

「やりやがったな！？くらえ、フェニックスの尾！！！」

「キヤアアアア！！」

お返しとばかりに私も弾幕を打ち出す。
輝夜も重傷をおうが、もちろんリザレクションで回復する。

「やったわね！？ブディストダイヤモンド！！」

「そう何度もくらうか！！正直者の死！！」

「馬鹿め！正直者に使いなさい！！」

「な？！全部避けられた！？！」

「こっちの番よ！！サラマンダーシールド！！」

「チクシヨウ！！徐福時空！！」

「ライフスプリングインヒニティ!!」

「インペリシャブルシューティング!!」

「……………!!」

「……………!!」

結局こんな感じの戦いが夜明けまで続いた。

でも私はこの時こんな戦いが生涯続いていくとは夢にも思わなかった。

輝夜と妹紅（後書き）

正直者の死はその人が嘘つきだと避けられるとかはありません。

あれは普通に輝夜が頑張って避けています。

恨みと殺意（前書き）

本当に……うまく書けない。

恨みと殺意

「ゼエ…ゼエ……なかなかやるじゃない……」

「ハア…ハア……お前こそ……」

今私と輝夜は朝日を浴びながら、地面に大の字に寝転がって息を切らしている。

いくら不死身とはいえ体力は無限じゃない。
リザレクシオンにだって回数制限があるし、あんな戦いをすれば体力が無くなるのは当たり前だ。

「疲れたわ……こんなに長時間運動をしたのは久しぶりね……」

殺ってる最中は気付かなかったけど、確かにかなり長い時間殺し合いをしていたわね。

始まったのが満月が真上に来る深夜から朝日が昇る早朝まで。
ざっと一日の4分の1くらいは殺し合ってたかも。

「……だいたいお前が仕掛けて来るのが悪いんだ」

「だってやられっぱなしじゃ面白くないわ」

「じゃあなんで殴らせたんだよ……」

「暇だったんだもん」

「……………」

なんと言っ……かなあ。

これが一時期都中の噂の大部分を占めたなよ竹の姫だと、にわかには信じられないな……。

暇だから殴らせるって、どんな神経してるんだよ。

「貴女なら分かんと思うけど、永遠ってのは際限なく暇なのよね。今回みたいな刺激があったっていいじゃない」

私が変に思ったのに感づいたのか輝夜が説明を始める。

でも私も同意だな。

「それに私は最近はお家の中に籠りっぱなしだったから軽く運動したかったのよ」

「……その軽い運動が殺し合いつてどうかと思う」

確かに不死身の者通しが出来た特殊な運動ではあるけどね。リザレクションするにも、弾幕を張るにも体力を使うし。

「別にいいじゃない。死ねないんだし。それより妹紅は世の中の流れとか知っているわよね？知っているならそれを話してくれない？」

輝夜は起き上がると草原に座り込む。

「いいけど、なんで？」

それにつられて私も起き上がって草原に座る。

「さっきも言ったけど、私長年引き込もってたから世の中の事あんまり知らないのよ」

そんなに引き込もってたのかよ。

確かにこんな山奥とかじゃ情報なんて入ってこないだろうけどさ。

「じゃあどの辺りから話す？」

「確か……菅原道真が右大臣になったのは聞いたからその辺りからね」

……これちょっと家の中に籠ってたってレベルじゃないな。
菅原道真って軽く百年くらい前の人だし。

「……まあ順を追って話していくか。とりあえずあの後道真は藤原

時平って奴の陰謀で大宰府に左遷されたらしくて……」

「貴女の親戚もえぐいわね」

「殆ど血の繋がりは無いけどな。そして道真が死んだ後都で道真の呪いっぽい事が沢山起こってそれから……」

私はこの百年近くで起こった事を知っている限り話した。

それは藤原兼通と兼家の兄弟争いや藤原道長の栄華、武士の台頭にまでおよんだ。

そしていつの間にかに私の話しに変わっていて、都を出てからの事とかを次々と話した。

私からしたら何て事もない日常の事を話していたけど、輝夜はそれを面白そうに聞いてくれた。

子供みたいに目を輝かせ、時折軽く頷ていく。

けどそんな中で輝夜の顔が若干けわしくなる時があった。

それは姐御がナイフっていう短い刀を使うって言った時の事だ。

その後少し思い悩んだかと思うと、私は喋るのを輝夜に中断された。

「それで何なんだよ。お前が頼んだから話してたのにさ」

私は少しふて腐れながら言う。

こちらからしたら余り人に話せない自分の身の上を話していて上機嫌になっていたから、いきなり輝夜に止められて不満だ。

「……妹紅…これから話す事を落ち着いて聞いてちょうだい」

…やけに真面目な顔だな……。ふざけた内容じゃないみたい。

「でもこれは確定した事じゃないわ。私の推論なだけよ。だから……」

「回りくどいのはいいよ。それで本題は？」

輝夜は違和感を感じるくらいに回りくどい話し方をした。まるで本題に入りたくないみたいに。

「そうね…じゃあ単刀直入に言うわ」

そこで輝夜は一呼吸をおく。

「貴女が姐御と呼ぶ、フュンフ・アサシスは不比等を殺しているかもしれない」

は？

「そのナイフという武器は月の暗殺者の標準装備よ。それに彼女の服装もそれと合致するわ」

「……嫌……でも……仁さんが……その場で殺したって……」

私の身体の各所が震える。

さっきまでなら別に気にする事すらなくこんな言葉なんか聞き流していたかもしれないが、今は違う。

まだ少ししか話していないけど、輝夜はこんな冗談を言う奴じゃないってわかったから。

輝夜の今の表情は真剣そのものだとは理解できるから。

「月の暗殺者は全て機械。だから一体破壊しても他の固体は生きているわ。それに記憶も意識も共有しているから、必然的に彼女も不比等を殺した事になるの」

「……………」

私は何も言えない。

ただ呆然としていて、アホみたいに口をポカンと開けている。

……………でも、確かに姐御は身体が機械だと言ってた。

私が不老不死だと告白した時に姐御も私に教えてくれて、その時は姐御の秘密を知れて嬉しかった。

だけど今は違う。

機械だという事が、輝夜の話しをより堅固な物にってしまうからだ。

私の中でいろんな思いがぐるぐると回る。
そしてそれらは混ざり合いなにか黒い感情が沸き起こる。

「妹紅……さっきも言ったけどこれはあくまで推論であって確定ではないわ」

輝夜が私の中の気持ちに気付いたのか、声をかける。
多分宥めようとしてくれていているんだろうけど、今の私には届かない。

「ゴメン……ちょっと行って来る!!」

「妹紅!?!」

私は立ち上がると駆けて行つた。
幻想郷を目指して。

まずは本人に聞かないと何にも分からない。

もしかしたら輝夜が間違っているかもしれない。

そんな一筋の希望を抱きながら私は走る。

「……………確かに俺が藤原不比等を殺した……………」

「……………ウソ……………」

でも、その僅かな希望も呆気なく砕けた。

わき目も振らずに走って数日。幻想郷に着いた私は真っ先に姐御が待っていると言っていた竹林に行った。

そして姐御に輝夜に聞いた事を聞いてみると、案の定そうだった。

「事実だ。俺もお前があいつの娘だと気付いたのは最近だがな」

姐御の顔は無表情だ。

まるで機械みたいに。

姐御が……………お父様を……………

それを聞いて、私の中にまた黒い感情が沸き上がる。
そしてそれはあつという間に私を飲み込んでしまった。

「ウワアアアアアアア！！！！！！！」

私は雄叫びを上げ、妖力で創った羽を広げる。
本気の戦闘体制だ。

「……………それもいいだろう」

姐御も懷からナイフを取り出して備える。

「蓬莱人形！！！！」

私は弾幕を姐御目掛けて展開する。

そして私は自分を飲み込んだ黒い感情の正体に気が付いた。

それは憎しみだと。

妹紅とフュンフ（前書き）

やばい、テスト直しが終わらない

妹紅とフュンフ

「火の鳥―鳳翼天翔！！」

妹紅は俺に向かって鳥の形をした弾幕を放つ。

火の鳥が通り過ぎた所はかなりの高温に達し、空気が焦げる。

狙いも正確で確実にこちらの動きを捉えている。

「無駄だ」

だが、俺には決して当たらない。

放たれた火の鳥は虚しく後ろの竹林を焼いていく。

そして弾幕を避けながら徐々に妹紅に近付き、俺の射程に入りしだい直ぐさま反撃をする。

「月の刺客」

「クッ！」

上空に放たれた俺の弾幕は無数のナイフの形をとり月の光のように降り注ぐ。

妹紅はそれを後ろに飛び避けていく。

だが、その隙に俺は能力を使って存在を隠し妹紅の懐に入り込む。

「！ ハアアア！！」

姿を隠しながら攻撃を行えないので姿を出すと、俺に気付いた妹紅はカウンターをしようと妖力で強化した拳を繰り出した。

「無駄だと言ったはずだ」

俺はその拳をいとも簡単に掴む。
かなりの速さだったが読めている。

「ウツ！？」

そして妹紅の心臓をナイフで突き刺し、回し蹴りを入れる。
妹紅は真横に吹き飛び、竹を何本も折っていく。

「忘れていないか？お前に戦闘を教えたのは俺だ。お前の動きなど
全てわかる」

妹紅の技は全て知っている。組み手も数えられないぐらいやったから動きもわかる。

俺はそう簡単に読まれる戦い方はしていないから読まれなかったため、あちらからしたらかなり不利な戦だ。

「なら…あんたも忘れてないか……」

妹紅は胸にナイフが刺さったまま竹林の中から出てくる。そして胸のナイフを抜きながら話す。

「私は蓬萊人だ。いくら攻撃を受けても回復する……!」

妹紅がそう叫ぶ時には既に胸の怪我は直っていた。

蓬萊人。

永遠の命を持ち、致命傷を負っても直ぐに傷が塞がる異常な人間。殺し合いをするならこれほど厄介な種族はいないだろう。

「だが回復には限りがある」

「……………」

しかし俺は蓬莱人の弱点を知っている。

それはリザレクション自体は無限ではない事だ。

「殺し続ければお前の体力に限界が来る。そうすればお前はリザレクションが出来なくなる」

「でも私は死なない」

だから蓬莱人は厄介だ。

回復に限界がきても死なない。

限界がきて身体が塵になろうとも少し時間が経って体力が回復すれば身体が再生するという化け物っぷりだ。

しかし俺は元々その蓬莱人を消すために作り出された機械。

一撃で奴らを消せるナイフがなくても充分に戦えるし対策もある。

「わかっている。だからお前に限界が来たら身体をバラバラに切り刻んで深海の底に捨てるつもりだ。そうすれば復活しても水圧で潰されて直ぐにまた死ぬ」

そうすれば妹紅が地上に上がって来る事はない。

ただ、世界の終わりまで暗い海の底で再生と死を繰り返すだけだ。

「……………なら…その前にあんたを壊すだけだ!!」

……………どうしてお前はそんな悲しそうな顔をする？
今見たいな事を言っていて顔はどこか淋しげだ。

……………いや、きっと俺もあんな顔してるんだろうな。

「パゼストバイフェニックス!!!」

妹紅の背中の翼から弾幕が四方八方に放たれる。
数で勝負してきたな。

…それにしても悲しみ…か。
機械の俺が感じる事になるとはな。

「本当に…人の心ってのは……………」

俺は小さく呟いた。

駄目だ!!

パゼストバイフェニックスもパターンが全部読まれてる!!

姐御は余裕たつぷりといった感じで次々と攻撃を避けていく。

……何でこうなったんだろう……

知り合わなければ……こんな気持ちにもならなかったのかな？

「……何処を見ている」

「しまった!？」

まずい!

今の一瞬の隙で姐御に距離を詰められた!!

「闇夜の死角」

「グアツ!!」

姐御のナイフが四方から迫ってきて突き刺さる。
痛え…全身から血がでてやがる……

私は痛みに耐えながら再び姐御と距離をとり、リザレクションをする。

「……激しい戦闘をした後か？リザレクションのペースがもう遅くなっているぞ」

姐御の言う通り、確かに私のリザレクションのペースは遅くなっている。

数日前とはいえ、あれからまともに休まずに幻想郷に来たんだ。
輝夜との戦闘（？）が尾をひいている。

……後何回リザレクションが出来るだろう？

まさかあんなアホな事がこんな場面で影響するなんて思わなかったぜ。

「……ちょっと…新しい友達が出来てね…」

「…そうか」

姐御の顔は相変わらず無表情だ。
でも何処か安心したようにも見えた。

……輝夜で思い出した。

一つ姐御に対抗出来る方法がある。

あいつで思い出したのはなんかムカつくけど。

ふう、と息を吐き、私は神経を集中させる。
これに失敗したらもう私に勝機はない。

「凱風快晴―フジヤマボルケイノ!!!」

「何!？」

姐御は自分の知らない技に声をあげる。
知らないのも当然、これは輝夜との戦いの最中で思い付いて作った技だ。まだ輝夜しか知らない。

私が放っている弾幕とは別に姐御の周りに妖力が集まっていく。
それに危険を感じたのか、姐御は後ろに飛びのく。

そして妖力が爆発した。

いち早く回避行動をとられていたからあまりダメージはない。
だけど…連発なら！

至る所で私の妖力が集まっていく。
もちろん全部爆発するものだ。

「チツ、ファントムハイド」

それに気付いた姐御は短く舌打ちをすると存在をまた隠した。

私は場所が分からないから、あてずっぽうに周りを爆発していく。

多分これじゃあ攻撃は当たらない。でもこれは、私が焦っていると
思わせるブラフ。

そして姐御はきつと私の後ろから切り掛かってくる！！

「…勝ちを急いだな」

予想通り、私の後ろから声が聞こえる。

私が振り向くと眉間にナイフが迫っていた。

しかし私は回避も反撃もしない。
そして私の眉間にナイフが突き刺さる。

だけど私はその状態で姐御の肩を掴み、もう片方の手に妖力を溜める。

首を斬らせて、命を断つ。

まさしく蓬莱人だから出来る芸当だ。

「……」

姐御は無表情だ。

こんな状況でも眉一つ動かさない。

「ウラアアアア!!!」

「っ!?!」

私はそんな姐御に渾身の力で拳を叩き込む。

姐御は妖力で身体を発火させながら吹き飛んでいく。

「……俺の負けだ。さっさと破壊しろ」

姐御が吹き飛んだ場所に行くと、竹に寄り掛かりながら座っていた。

腹には私の拳で貫通した穴があり、バチバチと火花が散っている。
その穴からは人間の臓器ではなくて様々な色のケーブルや機械が顔を覗かせていた。

右腕が動かないようで、地面に向かってだらんと垂れ、左腕で右肩を押さえている。

「……どうした。早くやれ」

顔は相変わらずの無表情だ。

私に催促する声の声色も何時もと変わらない。

私…何がしたいんだろう。

今の姐御の姿を見ると漠然としたそんな気持ちに心が広がる。

最初に私を支配した黒い感情はもう既に何処かに行ってしまった。

「……………」

私は無言でその場を立ち去る。

何だろ…この感じは…。

虚無感ってやつ？

とにかくそんな感情が私の心に一杯だった。

「……………これまたこっぴどくやられたな」

「仁か……………」

妹紅が立ち去ってからしばらくすると仁がどこからともなく現れた。

俺はいまだに身体が動かないため、まだ竹に寄り掛かっている。

……こいつ見てたのか？
だとしたら趣味が悪い…

「…見ていたのか？」

「ああ。最初からな」

「……趣味が悪い……」

「あんな激しい戦いをして気付かない方がおかしい。しかもあんな状況でのこのこ出て行けるわけないだろ」

…それもそうだな。

あそこで第三者が出て来るのは場違いだ。

「…俺より妹紅の所に行った方がいんじゃないか？」

たしかあいつの父親とこいつは友達だったはずだ。

「それなら他の奴が行っている。それより最後のは何だ？」

誰か他にあいつの知り合いなんかいたか？

それにしても最後やつか。
なかなか目ざといな。

「最後？」

「惚けるな。お前は蓬萊人を消すために作られた。そんなお前が蓬萊人が自らの身を犠牲にして攻撃をしてくるぐらい予想できないはずがない」

「……そんなの俺の気まぐれだ」

確かにそういった行動をとるという予想はあったし、あういう攻撃を避けれるように身構えもしていた。

しかし、何故だか俺はあの攻撃を避ける気がしなかった。

何故だか本当に分からない。これも人の心がもたらしたもののなのだろうか？

だとしたら……

「人の心は…本当に面倒だ」

俺は気付かなかったが、俺はこの時笑っていた。

「全く…何をそんなに落ち込んでいるのよ」

「……輝夜？」

姐御の所を去った後、私は一人で小高い丘に座っていた。
そこで何をする訳でもなく、ぼんやりとしてた。

そこに輝夜がやって来た。

いつの間に幻想郷に来たんだ？

そしてなんかイライラしてるのか？

「何よ、そんな死にそうな声をして。さっきまであんなに威勢よく戦ってたじゃない」

「……見てたの？」

「ええ」

「…そう」

全く気付かなかった。

それだけ戦いに集中してたって事かな？

「張り合いが無いわね。話してて暇よ」

「じゃあどっか行けよ……今疲れてるんだ……」

流石にあんな事の後だと余り他人と話したくない。
疲れてるってのももちろんあるけど。

「……蓬萊の樹海!!」

「っ痛ええ!?!」

また輝夜がいきなり弾幕打ってきやがった!?
至近距離だし余り体力残ってないからダメージでかいぞ!!

「チクシヨウ、いきなり何しやがる!!」

「ふん!私がせっかく構ってあげたのにどっか行けなんて言っから
罰よ」

こいつはそんな事で……

あれ?

今の言いようだと……

「……もしかして私を励まそうとしてくれたの?」

「なあ!?!/」

あ、輝夜の顔が赤くなった。

でも構うって言い方だとまるで私を心配してくれたみたいに聞こえる。

痛かったけど、私も元気でてるし。

「ち、違っわよ！！たまたま落ち込んでいるあんたが視界に入ってうざかったからよ！！」

「でも、有り難う。元気出たよ」

「ふん！！／＼そんなの知った事じゃないわ！！／＼」

輝夜はそっぽを向くがまだ顔は赤い。

多分こいつなりの照れ隠しなんだろう。

まさかこいつに励まされるなんて夢にも思わなかったな……。

だけど……。

「輝夜」

「何よ」

「一発は一発だ」

「へ？」

「月のいわかさの呪い！！」

「キャアアア！！！」

輝夜に私の無数の弾幕が輝夜に被弾する。

おし、すつきりした。

確かにやられっぱなしはしゃくだな。

「この…人が心配してあげれば調子に乗って！！蓬萊の玉の枝―夢色の郷！！！」

「はっ！お前だって似たような事やったる！！フェニックス再誕！！！」

この日を境に、幻想郷では竹林で時折爆発が確認されるようになった。

妹紅とフュンフ（後書き）

……あれ？輝夜ってこんなだった？

完成と引越し（前書き）

まず、一ヶ月も放っておいてすいませんでした。

実は自分の中でこの作品を続けるべきか悩んでいました。

ノリと勢いだけで始めてしまったため、設定も穴だらけでキャラも無理矢理な感じが大きかったからです。

でも本日自分の他の作品での感想にこの作品の事が書かれていて、続投を決意しました。

待っていてくれる人がいる以上、書こうと思います。

今までの設定等の甘さゆえに文章がより一層酷くなると思いますが、どうかよろしくお願いいたします。

完成と引越し

「……………疲れたわ……………」

「おいおい、もうダウンか？ お前ともあろうものが情けないな、紫」

「……………お前の体力が異常なんだ。もう五日間も寝ずにやっているんだぞ……………？ ……何故疲労の色がない？」

「てかなんでお前が疲れているんだ、フュンフ？ お前機械だろ？」

「……………機械だって休まずに稼働させれば壊れる。相変わらずお前は化け物だな……………」

「……………妖怪もこんな体力の使う事五日間も休まずに続けらんないわよ……………。本当に貴方は規格外ね」

何この言われよう？

なんか紫とフュンフがぐったりと寝転びながら俺の事化け物扱いし

てくるんだけど？

確かに、二人には映姫に頼まれたスペルカードを完成させるために少し無理をさせてしまったが、ちよつと口悪過ぎない？

俺的にはそんな異常扱いされるの嫌なんだよな。

でも二人の強力のおかげでやっとスペルカードが完成した。

紫の知識にフュンフの知る月の技術、そして最後に俺の無駄という程ある動力源。

これだけあって完成しないわけがない。

「それにしても五日も経っているのか。全く気づかなかったな」

このままだと二人からまだいろんな事言われそうなので話題を変える。

でも実際そんなに時間が経った事には驚きを隠せない。流石に部屋から一步も出ずに作業してれば時間感覚なんかなくなる。

ちなみに今俺達がいるのは家にある部屋の中。
十二畳くらいの小さな部屋に机が一個置いてあるだけの簡素な部屋。
窓は無く、四方全部が襖に囲まれている。

まるで隔離された空間だ。

そして床にはスペルカードの失敗作や難しい図形やらが書かれた紙
が散乱していて異様な雰囲気漂っている。

ちなみに完成した三枚のスペルカードは机の上に置いてあるから失敗作と混ざる事はない。

「……ハア、とりあえず私は帰るわ」

なんか紫に盛大にため息をつき、スキマを開く。

なんに対してのため息かは大体予想はつくが。

「ちょっと休んだらまた来るわ。それまでに宴会の準備しといてよ」
紫がいつものような胡散臭い笑みを浮かべるが少し弱々しい。やっぱり結構疲労しているだな。

それから紫とは手伝って貰う変わりに宴会を開く事になっていた。

要求される見返りがあまりにも小さかったので少し驚いたが、『貴方にはいろいろお世話になったから』と言ってくれた。

でも今はやすうけ合いした事を後悔しているんだろうけど。

「分かってる。酒もいろいろ用意しておこう」

「フフ。期待しているわよ?」

紫は笑みを浮かべながらスキマを閉じた。

「で、お前はどうするんだ? フュンフ?」

「……………」

やっぱり答えられないか。

フンフは何も言わずに黙り込む。

フンフが俺の事を手伝ってくれたのは、妹紅に会いたくないというのが理由なはずだ。

妹紅と殺しあってから一週間。

まだいろいろと気まずいだろう。

だからフンフは俺を手伝って外界から切り離される事でその事を一時的に忘れよとしたんだろうな。

表向きは『仁には破損の修理をして貰ったから』と言っているが嘘なのはバレバレだ。

「……まあ、今すぐ答えを言えってわけじゃない。外を出歩いて『あいつ』と顔を合わすのが気まずいなら好きなだけここに居ればいい」

「すまない……」

俺はあえて誰かは言明しない。

フンフにしてもあんまり触れて欲しく無い部分だろうし。

「でも幻想郷からいなくなるのはやめろ。それは逃げだ」

「覚えておこう」

念のため釘をさしておく。

でもフュンフの反応からして大丈夫だろうな。
即答だったし。

「……………ん？」

あの後フュンフも紫同様に限界だったようで直ぐに眠りについた。
昔からの癖らしく布団ではなく壁によっ掛かりながらの睡眠だが。

そして一人、物が散乱した部屋を片付けていると、こちらに霊力が
接近しているのを感じ取れた。

……………なかなかでかい。
それに純粹に霊力だけって事は妖怪じゃなくて人間……………。

俺はそこで霊力の持ち主に気が付いた。
いくら人間でもここまで純粋な霊力を持つ事は不可能だ。

だが、俺はこの霊力を知っている。

前会った時はあんまり話せなかったし、何百年も昔の話しだ。

でも忘れようがない。

彼女の事だけは。

とうとう霊力の持ち主は俺の家までたどり着いた。
そして玄関をノックする。

俺はノックの音を聞いて立ち上がり、玄関の方にゆっくりと歩いていく。

あらかじめ来る事は分かっていたのに俺は先に動いたりしなかった。

何故かと問われれば上手く答えられない。

しかし何か理論とは別の本能が俺にそうさせていた。

「……………」

俺は玄関にたどり着くと何も喋らないまま静かに扉を開ける。

扉は引き戸だが作り立てのため開ける時に変な音はしない。
スウーッとまるで幽霊が通るかのように扉が開く。

「……………どうした？ 何かようか？」

永琳」

「たいした用じゃないわ。ただ、近くに引つ越して来たからご近所の挨拶に来たのよ」

彼女は数億年前と変わらない笑顔を浮かべ、まるで今まで離れていた時間が無かったかのように話した。

永琳と本音

「へえ……なかなかいい所に住んでいるのね。貴方が自分で作ったの？」

「ま、住居ぐらいこだわりたいからな。それにしてもなんで俺が作ってたって分かったんだ？」

「見れば分かるわ。材木や繋ぎ目が貴方の靈力で強化されてるもの」
「……………」

今俺の目の前には永琳が座っている。

センスが良いんだか悪いんだか分からないような、左右で色が違う服を着て、髪はまるで宝石のように輝く銀髪。

本当に昔から全然変わっていない。

ちなみに今いる場所は俺の家の居間。

ちやぶ台を挟んで向かい合うように座り、ちやぶ台には湯気が立っている湯呑みが二つ置いてある。

限りなく静かだ。

今この家には俺と永琳以外誰もいない。

……正確には後一台いるが、あれは違う。

機械だし、今稼動してないし。

頭数には数えない。

「そついえば輝夜に地上で友達が出来たのよ？ それも貴方も知っている子」

永琳がおもむろに話し始める。

……まあ答えは絞られてくるな。

「妹紅か？」

俺は湯呑みを口に運びながら答える。

熱めだが、俺こんなじゃ火傷しないので冷ます事なく口に入れる。

「ええ、輝夜も喜んでいたわ。気が合う友達が出来たって」

似た者同士だからよく喧嘩してるみたいだね、と付け加え、永琳も湯呑みを口に運ぶ。

「喧嘩する程仲がいいと言うがな。それにお互い不死だからいくらでも無理ができる」

少しくらい危険な遊びも殺し合いも好きなだけ出来る。
すぐにリザレクションできるし。

「……………」

永琳は俺の言葉を聞いて少し顔を曇らせる。
それは、何かを後悔しているような顔だった。

「………… 私達のせいなのよね。あの子があんな風になったのは……………」

永琳はぼそりと呟き、俯く。

確かに俺達が薬を置いて置かなければ妹紅が不死になったりしなかっただろう。

そして元をかえせば、俺達が不比等を守りきれなかったのが原因だ。

そして更に言えば、永琳が蓬莱の薬を創った事に始まる。

俺達は間接的とはいえ、少なからずあいつの人生を捻曲げている。

「……でも俺は気に病む事はないと思うぞ」

俺の言葉に反応して永琳は顔を上げる。

「確かに不老不死ってのは重りだ。実際俺がそうだしな」

俺の場合生きて来た年月の桁が違うが、本質は変わらない。

「でも嫌な事ばかりとは限らない。妹紅だって不老不死だからこそ輝夜と会えたんだし」

当たり前と言えばそれまでだが、人生は嫌な事だけでなく、良い事だって沢山ある。

人間は悲しい事に、嫌な思い出ばかり覚えている傾向が強いが、実際嬉しい事だって楽しい事だってある。

そうやって前向きに考えれば、不老不死もそんな嫌な事じゃないかもな。

自分以外の生物が全部死滅した状態で生き続けるとかは嫌だけど。

「……………そうね」

永琳は少し微笑む。
完全に割り切れた訳ではなさそうだが、一応の納得はしたみたいだ。

「それに実は朗報がある」

「朗報？」

……………これあんまり他人に言ったらマズイけど、永琳なら大丈夫だろう。

フュンフにも言っちゃったし。

「ああ。映姫……………この辺りを担当する閻魔大王から聞いたんだが……………」

「……………驚きね。まさかそんな大事になってたなんて……………」

しかし永琳は口で言っている程驚いているようには見えない。
普通にお茶啜ってるし。

「俺も最初聞いた時はかなり驚いたがな」

俺もお茶を啜る。

……………本当はかなり凄い話しているのになんでこんなに落ち着いてい
るんだろう……………。

これが歳の功か？

「……………でもなかなか吉報じゃない。いくら時間がかかるって言っ
てもね」

なんか最初永琳に軽く睨まれたがスルー。

「まあな。そういえば輝夜はどんな感じだ？」

「とっても元気よ？ 最近箆ってばかりで心配してたけど、友達が出来てからは結構外で遊んでいるわ。主に殺し合いでだけど」

「元気があるのはいい事だ」

「……それ年寄りの発想よ？」

「うるせえ。それから妹紅が………」

こんな感じで二人の話は進んでいく。

しかし何故かお互い自身の話しにはならない。
全部お互いの周りの人物の話しや出来事の話しだ。

決して自らの心情を話したりはしない。

そしてやがて日は沈み月が昇る。

満月は既に過ぎたため、今日は三日月だ。

……実際三日月ではないけど。

ともかく月が昇るのに合わせるように、場所を居間から縁側に移す。そして湯気が立っていた湯呑みも、ずっしり重い徳利と杯に変わる。

「……夜風が涼しいわね」

永琳の銀髪が風になびく。

季節的にはもうすぐ冬。

実際肌寒いぐらいだが、酒を吞んで暖かくなった体にはちょうどいいくらいだ。

家の周りが毒を持つ鈴蘭に囲まれているせいか、虫の声すら聞こえない。

ただ単に寒いという事もあるだろうが。

「そういえば、かなり昔はよく二人で星を見てたな」

「そうね……」

永琳は短く言葉を返す。

なお、今は縁側に二人で並んで座っているから永琳の声が耳元で聞き取れる。

それにしても俺はいきなり何を言い出したのだろうか？
でも何故か言わなければならない気がした。

「……でもこうやって月を見るのも不思議な感じね。私は少し前まであそこからこの星を見ていたのに」

少し前って言うっても俺らの感覚で言うてるから、一般的に見れば全然少しじゃないがな。

「……………お前がこの星を見ている時、俺は月を見ていたよ」

「……………」

「……………」

どちらも何も喋らなくなる。

きっと永琳も思い出しているんだろう。
あの時の事を。

『……………悪いな』

俺が守れなかった数少ない約束の事を。
そしてお互いの安否すら分からなかったあの長い長い月日の事を。

「……………馬鹿……………」

永琳はそれはそれは小さく呟き、俺の肩に頭をもたれる。

もしかしたら、これが永琳が再会してから初めて言った本音なんじゃないだろうか？

言葉にすればたった二文字。

だがこの言葉には何億年という重みと意思が詰まっている。

「……………悪かったな」

俺も、ずっと彼女に言わなければならなかった事を言う。
そして永琳の肩を掴み抱き寄せる。

空には月が輝いている。

永琳と本音（後書き）

おまけ

「……………あいつ俺の事をすっかり忘れてないか？」

俺と永琳の姿を見て、物影で一人そんな事を呟くフュンフの姿があったとか。

スベルと恋姫（前書き）

本当にすみません。

こんなに更新が遅くて。

理由はユーザーページの活動報告にあります。

それから新たに恋姫キャラが出ます。

それからかなり昔やったアンケートは出来る限り全員出そうと思います。

スベルと恋姫

それから、永琳は俺の家に泊まる事になった。

夜も遅いし、永琳に関しては身の心配をする必要もないが、積もる話もある。

輝夜には一日空けると言っているのでそういう面では問題ないよ
うだ。

流石月の頭脳。こうなる事を見越してたな？

それから一応言っておくが何もなかった。

強いて言えば目を覚ましたフヨンフと永琳が互いに勘違いをして
暴れたぐらいだ。

家が半壊したがこんなの何かあったに入らない。

幻想郷の中でも指折りの化け物が集うこの家では半壊するなど日

常茶飯事なのだ！

……あれ？ 目から汗が出て来るぞ？ おかしいな？

「という訳でお前らきちんと直しておけよ？ 壊したら弁償するの
が世の筋だ」

「分かっているわよ。別に逃げたりしないわ」

「……………」

そして二人には家の修理をして貰う事にした。

朝日は今ちょうど昇っているから夕刻までには直るだろう。

普通なら不可能だが何十世紀も先の科学力を持つ月の都で頭脳と
まで言われた永琳ならやってくれるはずだ。

フンフだってそこで生まれたロボットなんだからかなり役に立つだろうし。

……それにしても大工道具を持つ永琳って新鮮だな。
なんかトンカチ持っている姿が凄いいかしく見える。注射器持っているイメージが強いからか？

「じゃあ永琳にフンフ、頼むぞ。俺は少し出て来る」

俺はそう言っただけで家がある丘を降りて行く。

やっと出来たスペルカードを映姫に届けないといけないしな。

「さて、じゃあ始めましょうか。……今はフンフと呼ばばいいのかしら？」

「……………それで構わない。……………しかしどうする？俺は木造建築の作り方など知らないぞ？」

「大丈夫よ。月のやり方で改ぞ——もとい修理をすれば問題ないわ」

「……………まあ直れば問題は無いだろう」

ん？　なんか降り際になんかヤバイ話が聞こえた気がするぞ？

でも大丈夫だ。俺は永琳を信じている。

あいつは人の家に勝手に変なギミックを付けたり、要塞みたいな感じになんかしないはずだ。

……………多分。

一途の不安を抱きながら俺は森の中を歩く。

急ぎという訳でもないのんびりしても良いだろう。

……それにしても最近寒くなつて来たな。
森の紅葉も殆ど落ちたしすっかり冬つて感じた。

地面に落ちた紅葉を見ると季節の移り変わりをを感じる。
でも過ぎ行く秋をしのぶように木にはまだ葉が――。

「よし！ 今年こそあの憎き雪女を打ち倒し、秋を伸ばすわよ！！」

「その意気よ、お姉ちゃん！！ そのために私達は秋力の充電に力を注いだんだもの！！」

――あと秋をしのび過ぎてる神が二人。

ちなみに雪女とは冷華の事で、あの二人は毎年毎年秋を伸ばすために戦いを挑んでいる。

あいつがいるだけで周りが寒くなつて冬が早く訪れる気がするかな。

てか四季の神が四季を乱すような動きをしていいのか？

まああの二人が冷華に勝った事は一度もないから平気なんだろうけど。

そうこうしている内に、三途の川に辿り着いた。

相変わらず霧が深い。

小町も相変わらず川辺でシエスタしているし、全くもって何時もの光景だ。

さて、じゃあ彼岸に渡りますか。

「本当に有り難うございます。これで問題は解決しました」

彼岸に着くと、直ぐさま映姫が出迎えてくれた。

来る事が分かっていたのか、彼岸の河原で待っていていた。

スペルカードを渡すと、映姫は心底安堵したような顔をする。
これで人手が増やせると安心してゐるのだらう。

このスペルカードは靈力の少ない者が使えるようにしてあるため
かなり本家のものと違っている。

まず本人の靈力を使わない充電式。充電さえされていればどんな
人間でも使える。

だから作るのにはかなり時間がかかるし面倒だが、破損さえなけ
れば半永久的に使える。

スペルを放つ度に靈力が多い誰かに充電して貰わないといけない
のが弱点だな。

それでも戦闘が主な仕事でない死神なら充分過ぎる武器だろう。

これで霊力が少ない優秀な者を死神代行として雇う事が出来るだろう。

「どう致しまして。そういえば雇う魂の目星はついているのか？」

死神代行として雇うって話は聞いたけど誰を雇うとかは聞いてないんだよな。

「はい。それなら一人は確定しています。なんなら呼びましょうか？」

「頼む」

俺としては使う奴に興味がある。歴史上の偉人かもしれないし。

俺が頼むと映姫は手に持っていた卒塔婆みたいな板を耳に当てる。

……一体何をしているんだ？

「あ、もしも四季映姫・ヤマザナドゥです。実は――」

え？ その板って携帯だったの？

映姫が何処かに電話（？）をしてから数分後、その人物はやって来た。

死人らしく白い装束を来て、頭には三角の布を着けている。

死人と言えばイメージをするあれだ。

その人物は女性で、立派な長い黒髪をしている。

かなり美貌もあり、街中を歩けばどんな男性でも振り返るだろう。

あと眼鏡をかけていて、彼女のつり目はどこか冷たい印象を与える。

非常に落ち着いた雰囲気も、そんな印象を与えるのに一役買っているのかもしれない。

……それにしてもこの人何処かで見た事があるような……。
本当に遠い昔辺りに……。

「この方が神道仁。スペルカードという貴方の武器を作って下さった方です」

映姫が女性にそうやって説明をすると、女性は俺を見て心底驚いたような顔をする。

しかしその後直ぐに不敵な笑みを浮かべる。

え？ 俺この人に何かしたっけ？

「……成る程、それは有り難うございます。
私は姓は周、名は瑜、字は公謹と申します。生前はある軍で軍師をしていました」

え
？

スベルと恋姫（後書き）

それから作者名をユーザー名に変えました。

軍師と亡霊（前書き）

現在いろいろ迷走中。

着地点どころか、どう書いていいかも分からなくなってきました。

軍師と亡霊

「それにしても赤壁の大軍師が死神か。何とも妙なものだ」

「それならば大陸で護国の神とまで呼ばれている貴方に死んでから会えるとは思いませんでしたよ」

「……………一体いつの間に俺はそんなものになったんだ？ ……
まあ、とりあえずもう一杯飲んどけ」

「恐縮です」

現在赤壁の大軍師こと周瑜と酒盛り中です。

彼岸で会った後に幻想郷を案内する事になり、今は人里の酒場で普通に飲んでいる。

お互い相手の事を噂でしか知らないし、先に交遊を深めようと思っ
てこうなった。長い付き合いになるだろうし。

まだ朝早いから余り酒場に人はいないため、俺や死神がいても対
して問題にはならない。

まあそんな感じで飲んでいるが、やはり周瑜はかなり飲めるな。それこそ鬼にも引けをとらない。

死神って事もあるだろうが、元から酒豪なんだろう。

「――それで仁殿は幻想郷への移民を探す旅に？」

「そういう事だな。結構遠くまで行ったから、なかなかの逸材も集まった」

で、今は俺の昔話をしている。このての話はネタがつきなくて楽だ。

「……そういえば妖忌がそんな話をしていましたな」

「ん？ 妖忌の奴を知っているのか？」

妖忌と言えばその時俺と旅に出た半人半霊の剣士だ。ちなみにまだ生まれていないが妖夢の祖父にあたる。

――懐かしいなあ……。

最近白玉楼にも行っていないから全然会っていない。

「ええ。冥界にいる時はお世話になりましたから」

そういえば死んだ奴は必ず白玉楼がある冥界に行くから基本的にあいつに会ったよな。

「——ハア……。あの頃は毎日雪蓮——孫策が現世に降りようとして本当に迷惑をかけましたよ。今は大分落ち着きましたがね」

周瑜はため息をつくが、孫策に対して嫌な感情を持っている訳ではなさそうだ。仮にも断金の仲だし。

……………ん？

この気配は…………。

「…………噂をすれば何とやら、か」

そう言っつて酒場の入口の方を見ると、なんかボロボロな感じの妖忌が立っていた。

「…………あれは妖忌？ 何故こんな所に？」

周瑜は顔をしかめるが、それもそうだろう。
あいつが単独で冥界を離れる事なんてまずないからな。

「——あ！ 仁さん！ 良かった、やっと見つかりました！！」

そして妖忌は俺の方を見ると安堵したような顔でこちらに来る。
何か会ったのか？

「あ、周瑜さんもいたんですか。それなら話は早いです」

「……まさか雪蓮が何か？」

今度は周瑜を見て、そう漏らすが、その反応から彼女は内容が大体予測ついたようだ。

「そうなんですよ！ 実は孫策さんと黄蓋さんが——」

半人回想中……

『なんで冥琳だけ現世に行っているのよ！ 差別だわ！！』

『そうじゃ！ そうじゃ！ わしらも行かせる！！』

『駄目なもんは駄目です！ いい加減にしないと力ずくでいきますよ！』

『……仕方ない。ならば最終兵器じゃ』

『最終兵器？』

『出番よ！ 幽々子！』

『はいはい』

『って、幽々子様！？ 何でそっちの最終兵器になっているんですか？！！』

『だって黄蓋の料理が美味し……じゃなくて、実は――』

『もういいですよ！！ 食べ物に釣られたって充分過ぎる程分かりましたから！！』

『じゃあ、幽々子！ やってしまいなさい！！』

『行くわよ。スワローテイルバタフライ！ リポトリジオブヒロ
カワ——亡霊！ 完全なる墨染めの桜——春眠！』

『ちよつ、これなんて無理ゲ——ああああああ——！！！！』

「——と、いう感じで突破されてしまいまして……」

妖忌はそう言って力無くうなだれる。

妖忌が妙にボロボロだった理由も分かったが、幽々子の奴何やってるんだよ……。

自らの従者に食べ物に釣られただけでそこまでするか？

……まあ幽々子らしいっちゃらしいけどな。

「……全く申し訳ない。あの馬鹿達が……」

周瑜は目頭を抑え、難しい顔をしている。
まあ身内があんな事をすればな。

「で、妖忌は俺に搜索の手伝いを頼みに来たのか？」

「はい……。それからあわよくば酒場にいないかなと……………」

逃げた二人は酒好きらしいし、確かにいる確率が高いだろう。
今はいないみたいだが。

「分かった。流石に放っておくわけにもいかないからな」

「有り難うございます」

妖忌は礼と一緒に安堵の息を漏らす。

……でもその三人を捜すとなるとちよつと面倒だな。
全員死者だから、気配じゃ上手く捜せないし……。

「とりあえず片っ端からいそうな場所に行くか。周瑜の幻想郷案内も出来て一石二鳥だし」

「しかし何処を？ 彼女達は私と同じで初めて幻想郷に来たのですよ？」

……確かに周瑜の言う通りだよな。

宛てなんか一切ないし、あいつらに知り合いもないし……。

「……この酒場で待ちますか？」

妖忌が少々控えめな感じで言う。

「それも手だが、そんな上手く事が運ぶとは——」

「すみませうん。亡霊三人お願いしま——あ」

「「「あ」」」

呆然と酒場の入口を見る俺達の前には、今ちようと話していた幽々子、孫策、黄蓋が同じように呆然とこちらを見ている姿があった。

……タイミング良すぎね？

「あ、幽々子様！ 貴方はどうして——」

「雪蓮！ 祭殿！ 貴女達はいいい加減に——」

顔を合わせるなりいきなり説教を始める妖忌に周瑜。容赦ないな。

「さ、桜吹雪地獄！！」

って、いきなり弾幕張って来やがった？！
ここ人里の酒場なんですけど！！

……流石に防がないとやばいな。
主に周りが。

「火符『火矢の雨』」

と、思いきや、必要なかったみたいだな。

周瑜がすかさず前に出て、幽々子の桜吹雪のように舞う弾幕を全て自らのスペルで打ち落とす。

矢をかたどった赤い弾は雨のように降り注ぎながらも、確実に幽々子の弾を落としていく。

しっかり威力もあるし、スペルカードを完全に使いこなしているみたいだな。

「『撤収！』」

だがそのうちに三人は逃げ出す。

てか打ち合わせでもしてたのか？
動き合いすぎだろ。

「逃がしませんよ！ 断迷剣！！」

それを逃がさないとばかりに妖忌が剣を振るう。

剣先からレーザーのような弾幕を出し、どんどん枝分かれしていく。これは避けるのはなかなか難しいだろう。

……なんか酒場の壁とかもガンガン破壊してるけど。

「なんの！ 忘我郷——道無き道！！」

「くっ！ 火鎖『連環の計』！」

こりゃ完全にスペル合戦に——って、何で孫策達がスペルカードを？

「虎符『江東の虎』!!」

「偽投『苦肉の計』!」

……こりゃ流石にまずい。

こんだけ暴れたらいくらなんでも酒場が――

「あ! まずいです!! 壁が持ちそうに、あああああああ!!」

――案の定倒壊した。

「……また騒がしくなりそうだなあ……」

瓦礫の山の中、何かと人が集まりつつ途中、俺はぼうつと空を見上げる。

まあ現実逃避だ。

その後、騒ぎを聞き付けて紫がやって来てなんとか場の収集がついた。

ちなみに元凶の三人はそのまま彼女にスキマで映姫の所に送られてしまった。

何があつたかは詳しくは分からないが、三日後に彼女達が帰って来た後はしばらく大人しかったという。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0934q/>

気がつけば異世界

2011年11月11日22時26分発行